薔薇のマリア

20. I love you. [noir]

十文字青

Ao Jyumonji

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

角川スニーカー文庫

マリア。
マリアローズ。
薔薇の、マリア。
キミはすべての始まりだ。
あらゆる物語は、キミをたたえるためにある。
そして、すべてはキミとともに終わるのかもしれない。
ボクはキミと一緒に世界の終わりを見るだろう。
決めるのはキミだ。

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

薔薇のマリア

20. I love you. [noir]


ナ・インよ。
君はまるであたしのようだ。
あたしたちは目的に向かって
ひたすら動きつづけるだけの機械だ。

「……どうやら攻撃を受けてるようだねえ」

WARNING! WE’RE UNDER ATTACK! WARNING! WE’R
E UNDER ATTACK! WARNING! WE’RE UNDER ATTACK
WARNING! WE’RE UNDER ATTACK! WARNING! WE’R
E UNDER ATTACK! WARNING! WE’RE UNDER ATTACK
WARNING! WE’RE UNDER ATTACK! WARNING! WE’R
E UNDER ATTACK! WARNING! WE’RE UNDER ATTACK
WARNING! WE’RE UNDER ATTACK! WARNING! WE’R
E UNDER ATTACK! WARNING! WE’RE UNDER ATTACK

明滅する毒々しいまでの赤。警報。そうだ。これは警報だ。

薔薇のマリア

20.I love you.[noir]

十文字　青



角川スニーカー文庫



A BRAVE HEART OF RED ROSE 20
I love you.[noir]
Ao Jyumonji

First published 2014 in Japan
By
KADOKAWA CORPORATION



illustration：*BUNBUN*
design work：*design CREST*

A BRAVE HEART OF

RED ROSE

20

CONTENTS

CONTENTS



Calamitage 003 "rebirth"

01　逃亡者

　彼女は感覚器を作動させたまま意識を閉へい鎖さして夢を見る。

　それは記き憶おくの欠片かけらだ。彼女が電生脳化する以前の記憶はとりわけ断だん片ぺん化し、欠損し、改変されてもいるから、記憶が元になってはいてもやはり記憶その物ではない。夢。だから、夢。それは彼女の夢だ。いくつもの映像出力装置。音声装置。手指を動かしたりごく短いフレーズを口に出したりすることで彼女はそれらを操作する。デジタルネイティブ第三世代。絶望の世代。最後の世代。彼女は弟と一いつ緒しよに寝ね転ころがって映像と音声に身を晒さらす。彼女たちは映像と音声の中にいる。大衆マス媒体メディアの情報を鵜う呑のみにするのは馬ば鹿かな大人だけだ。彼女たちは現地からもたらされて更こう新しんされつづける生の情報を取捨選せん択たくして摂せつ取しゅする。呼吸するように。彼女たちは情報を蓄ちく積せきしない。流れに身を浸ひたして必要に応じて掬すくいとる。

　何が破局の引き金になったのか。要因はもちろん一つじゃない。たくさんある。数えきれないほど。彼女たちは複雑さに慣れている。複雑性complexity。それは曖あい昧まいにさえ思えるが不ふ明めい瞭りようではない。結合関係が過か剰じようすぎて把は握あくするのが難しいだけだ。たとえば諸要因が絡からみあって、激げき烈れつで大規模しかも不可逆的な環かん境きようの変化が二〇二〇年代から始まった。気候離脱climate departure。気温の上じよう昇しようがあるときを境に文明の堰堤ダムを決けつ壊かいさせ、人のみならず多くの生物が餓うえた。当初それでも人は援たすけあった。急速に広まった支し援えんの輪は見る間に収縮して、ついには消失した。人道も仁愛も体面も自尊心も強固な砦とりでにはなりえなかった。気候の変動と食しよく糧りよう危機が新型インフルエンザや重じゆう症しよう急性呼吸器症候群、Ｏ１３９型コレラ、ペスト、マラリアといった感かん染せん症の発生と拡大を後押しし、人の行き来は制限され、物流も阻そ害がいされた。気候離脱は刻々とその範はん囲いを広げてゆき、不毛と化した地から難民があふれ、国境はたやすく侵おかされた。程ほどなく比ひ喩ゆではない本物の

引き金が引かれて血が流れた。個人は、地域は、国家は、自衛しなければならなかった。そのためにあらゆる手段を講じた。それは侵略者の側も同じだった。餓えた者たちはなんとしても食糧を手に入れなければならなかったし、そのために軍隊によって守られた国境を突とつ破ぱする必要があるのならば、そうする以外にない。難民は離り合ごう集散しながら反体制派やテロリストと結びつき、あらゆる国家を利己的で非人道的であると非難した。非難するだけではなかった。彼らは実力を行使した。

　すでに、小型化された高性能大規模破壊兵器は様々な経路で流出していると考えられていた。そしてそれは事実だった。二〇四三年、統一Ｕ抵抗Ｒ戦線ＦがＡＤ兵器と呼ばれる圧縮爆ばく弾だんで攻こう撃げきを行った。彼女たちはそのときの映像を何度も何度も繰くりかえし見たものだ。犯人は決まって攻撃の模様を撮さつ影えいして公開した。彼女たちはそれらの映像に恐怖するよりも魅み入いられた。他ひ人と事ごとじゃない、明あ日すは我が身だと理解していても、破壊と殺さつ戮りくに彼女たちは胸を躍おどらせた。道徳モラルはとうに形けい骸がい化していた。それに、絶望の、最後の世代に属する彼女たちには最初から希望がなかった。物心がついたころにはもう、彼女たちは狭せま苦くるしい袋ふくろ小こう路じを歩かされていた。その状況を思い知るための材料だけはいくらでもあった。彼女たちは自分たちの行く末を正確に予測していた。それは無だった。崩ほう壊かいでも滅めつ亡ぼうでも死でもない、彼女たちの向かう先には何もない。すなわちそれは彼女たち自体が無であることと同一だった。無であるのに感じることも考えることもできる、生きている、その矛む盾じゅんが彼女たちの首を絞しめながらも、窒ちつ息そくさせることはなかった。とにかく彼女たちは少なくとも怯おびえてはいなかった。難民やテロリストが明日、彼女たちが住む一帯をＡＤ兵器で吹ふき飛ばすかもしれない。それは現実的に充分ありうる可能性だった。だとしてもなぜ恐おそれる必要があるだろう。結局そんなことは起こらないと思うのではなかった。仮に起こったとしても、無である彼女たちが無に帰すだけのことだ。いわば自然のなりゆきでしかない。

　一方で彼女たちは解脱DIVEと称しようされる遊ゆう戯ぎに興じた。解脱DIVEして涅槃NIRVANAと呼ばれる電脳空間に五感を適合させて解放し、別個の個人となるのだ。そこでは彼女たちは人であり人ではなかった。彼女たちは別種ＤＯＴとなって千変万ばん化かする異境をさすらった。涅槃NIRVANAは別種ＤＯＴの干かん渉しようによってつくりかえられ、つくりかえられた涅槃NIRVANAは

別種ＤＯＴに影えい響きようを及およぼした。そこには自由があった。実世界においては彼女たちに備わっていない、望むべくもない自由が。しかし彼女たちは涅槃NIRVANAに溺おぼれなかった。溺れることができなかった。彼女たちは知っていた。自分たちには何もないことを、無であることを知りすぎていた。図書館library。涅槃NIRVANAにおいて参照可能な全情報が集積されていて読み出しaccess可能な一区画で、ある日ある別種ＤＯＴが自己抹消autokillした。その別種ＤＯＴは人としての生を切り捨てて涅槃NIRVANAで別種ＤＯＴとして生きることを目もく論ろんだ。その願いは叶かなわなかった。別種ＤＯＴは消滅し、本体である人間個体がどうなったのかは誰だれも知らない。だが自己抹消autokillは相次いだ。逃亡者たちescapers。別種ＤＯＴたちは自己抹消autokillした別種ＤＯＴの痕こん跡せきを探した。自己抹消autokillは死ではない、逃亡者たちescapersは涅槃NIRVANAで生存している、その証しよう拠こを別種ＤＯＴたちは欲ほつして求めた。彼女と彼女の弟も。それを見つけたという噂うわさはあとを絶たなかった。涅槃NIRVANAは別種ＤＯＴの干渉によってつくりかえられる。別種ＤＯＴが信じることでそれは実現するのだ。やがて逃亡者たちescapersが別種ＤＯＴの前に姿を現すようになった。それを本物の逃亡者たちescapersだと見なす別種ＤＯＴもいれば、涅槃NIRVANAがつくりだした幻影shadowにすぎないと断ずる別種ＤＯＴもいた。いずれにしても逃亡者たちescapersは増ぞう殖しよくした。逃亡者たちescapersの存在が涅槃NIRVANAの仮想現実を拡張した。傍はた目めには別種ＤＯＴも逃亡者たちescapersも見分けがつかず、逃亡者たちescapersを装よそおう別種ＤＯＴが出てきた。逃亡者たちescapersは寄り集まって勢力をふるうようになり、そのうちおもしろ半分で、あるいは何らかの信念のもとに逃亡者たちescapersを狩かる別種ＤＯＴが現れた。涅槃NIRVANAは殺さつ伐ばつとして荒こう廃はいした。戦争war。戦争war。戦争war。彼女と彼女の弟も武装して大勢の敵を打ち倒たおした。やらなければやられる。涅槃NIRVANAは戦場と化した。戦いに敗れて別種ＤＯＴが圧壊crushしたら新しい別種ＤＯＴで解脱DIVEすればいい。安全装置safeguardを解除した状態で別種ＤＯＴが圧壊crushしたら逃亡者たちescapersの一員になるというが、彼女も弟もそれを望まなかった。涅槃NIRVANAから戻もどると、世界は破滅的な情報の海の中に沈しずもうとしている。解脱DIVEして涅槃NIRVANAの中で潰つぶしあう。これは本ほん性しようなのかな、姉さん、と弟が尋たずねる。人って結局こうするしかないのかな。どうかな、と彼女は答える。そういう人もいる。そうじゃない人もいる。きっとそれだけのことだよ。弟は、本当にそうなのかな、と首をかしげる。この有様を見

たら、何かを期待するなんて愚おろかだと考えるしかないと思うけど。いっそぜんぶやり直せたらいいのにね、と弟が呟つぶやく。間ま違ちがいを一つずつ正すなんてたぶん無理だから、まっさらにして一からやり直せたらいいのに。そんなことはできない、と彼女は言う。それに、そうしたところで同じことを繰りかえす。姉さんは、と弟が言う。姉さんも、絶望しているんだ。何も信じていないんだ。絶望の世代。彼女たちは最後の世代だった。──夢。

　これは、夢だ。

　彼女は意識を開放する。

　彼女の身体からだは白雪に半ば埋うもれている。気温は零れい下か十二・七度。彼女は充分以上に冷れい却きやくされている。彼女は明度が調整された暁あかつきの空を視みている。完全な暗くら闇やみの中でも彼女は電磁波視力によって視覚を確保できる。彼女は振しん動どうを感じている。あるいは震しん動どうと呼ぶべきか。彼女は地面に手をつくことなく脚きやく部ぶの運動のみで起きあがる。彼女の身体から雪が滑すべり落ちて濡ぬれた跡あとを残す。跡は見る間に乾かわいて消えてしまう。斜しや度ど二十一・四度。彼女は山中にいる。大陸北西部、エルデェイニオンを分断するクライド大山脈の大部分はいまだ雪深い。その巨きよ大だいな山が震ふるえている。始まったか、と彼女は思う。あれがここに隠かくされていることは見当がついていた。クライド大山脈はサンランド無統治王国とモトローリィを隔へだてる人の足では越こえられない天険で、それでいてグッダーの膝ひざ元もとでもあるから、隠し場所には打ってつけだ。もっとも、正確なポイントは彼女も把握していない。探たん索さくを試みたこともあるが発見には至らなかった。しかしこうなってしまえば容易だ。彼女は全身で震動を感じる。震動は刻々と大きくなる。そのもとを探さぐりあてる。震源地を。方位五十二度約十七キルメーテル。彼女は彼女を稼か働どうさせる。背部・腰よう部ぶ・脚部スラスタ五十%展開。クラナム粒りゆう子し放出限界率を同じく五十%に設定。放出開始。視覚聴ちよう覚かく野を補正。良好ＧＯＯＤ。

　揚よう力りよくと推力を生むクラナム粒子の作用によって彼女は飛びたった。まっすぐ空を切り裂さいて飛ひ翔しようする。二分四十八秒の飛行で彼女はそのポイントの上空に達した。間違いない。斜面に積もった雪が崩くずれ落ちている。雪崩なだれだ。雪崩が起こっている。もう雪解けが間近だ。この季節にはめずらしい現象ではないが、規模が大きい。ただの雪崩ではない。自然現象ではない

だろう。山が割れている。裂け目だ。長い。とてつもなく長大な裂け目が斜面を横断している。少なくとも数百メーテル。いや、桁けたが違う。一キルメーテル以上に及ぶ。二キルメーテルに迫せまる勢いだ。裂け目は斜面の起き伏ふくに沿って折れ曲がっているものの、全体としては直線をなしている。そして次第次第にその範囲を拡張している。全長――横よこ幅はばだけではない。縦の幅も広がっている。まるで大たい山ざんが口を開けようとしているかのようだ。その結果、雪崩が引き起こされている。彼女は口の真上で制動し滞たい空くうした。もはやそれを裂け目と表現するのは無理がある。穴だ。横長の巨大な穴が雪や土石や樹木をのみこみながら、さらにいっそう広がってゆく。彼女はその有様を視ている。片時も目を離はなすことなくつぶさに観察している。

巨おおきすぎる穴の拡大がとうとう止まった。

静せい寂じやく。

一いつ瞬しゆんで破られる。約束を書きとめた紙片のように。

重い音が鳴る。地の底から、否いな、巨きよ穴けつの奥底からわきあがる、超重低音。せりあがってくる。音の万ばん塊かいが。音だけではない。何かが。絶大質量の物体が。巨穴の深しん奥おうから。

最初に露あらわになったのはその頭部だった。砲ガン金色メタル。幾いく多たの角を生やして、堅けん固ごそうでありながら優美な額の下で淡たん紅こう色の光をたたえた双そう眼がんが天を射ている。鼻筋はのびやかに顎あごへと達して、そこから断だん崖がいを下るとやはり砲ガン金色メタルの牙きばが並ぶ。首は逞たくましく長い。一頭ではなく、多頭。数えるまでもない。彼女は承知している。九首にして九頭。それらを支える胴どう体たいは堂々としていつつも過剰ではない。前ぜん腕わん四し肢し。後脚四肢。最長である中ちゆう尾びの左右に複尾を一本ずつ持つ。翼つばさの数は折り畳たたまれているので定さだかではないが、かつては六枚だった。竜。その外形はまぎれもなく九く頭ず竜りゆうだ。ただし、総身砲ガン金色メタル。その全身は竜りゆう鱗りんではなく砲ガン金色メタルの合金で一分の隙すきもなく覆おおわれている。――ナ・イン。

ああ、九頭竜ナ・インよ。

彼女は声には出さずに独りごちる。呼びかけても無む駄だだと知っているからだ。ナ・インはすでにナ・インではない。兄弟竜である九頭竜ノ・インとともに原アト始ミツのク・極マキシ大マム・魔ドレ術ツド士スターに仕えて最後まで地じ獄ごくの軍団と戦った哀あわれなナ・イン。たとえ悪あく魔まどもが人を打ち負かそうと、大空を翔かけるその巨きよ軀くを地に引きずり落とし命を絶つことはできまいと誰もが信じた。だが、九頭竜たちは数十万、それ以上の邪じや竜りゆう、竜りゆう騎き兵へいに群がられ、一枚また一枚と竜鱗を引き剝はがされておびただしい血を流し、ついに疲つかれ果てて力ちから尽つきた。驕きよう慢まんなる魔術士は無数の悪魔ごと九頭竜たちを焼き払はらって弔とむらいとした。九頭竜たちは骨と化した。ノ・インの遺骨は大ギガ穴ボロスを塞ふたぐエルデンの土台、九頭レガシ竜大オス・骨格ノ・インとなり、ナ・インの骨の行ゆく方えは杳ようとして知れなかった。ここに隠されていたのだ。クライド大山脈破八号ごう大工こう廠しように。こうして生まれ変わるために。いや、造りかえられるために。グッダーは千年の時を費ついやしてナ・インの骨からこの異形のものを生みだした。おそらく最終戦争の切り札とするために。地底の格納庫でそのときを待っていたのだろうナ・インが、馬ば鹿か馬鹿しいほど大きな上昇装置の働きによって押しあげられている。その速度がゆるやかになりつつある。震動も小さくなってゆく。上昇が止やんだ。ナ・インの、淡紅色の、九対ついの眼めが輝かがやきを増す。九首がゆっくりとうねりはじめる。三本の尾も。ナ・イン。ああ、ナ・インよ。君は在りし日の君より一回りも二回りも大きくなった。君の体軀は巨体と呼んでもその実相には遠く及ばない。君は雄ゆう大だいだ。ナ・インよ。君は竜の姿をしている。しかしもう竜ではない。砲ガン金色メタル。君はまるで機械マシンのようだ。たぶん君は機械マシンだ。彼女は胸を衝つかれていた。君はまるであたしのようだ。あたしは身体の大半が機械マシンで、脳すらも過半を機械マシンに置き換かえた。生体組織も幾いく度どとなくつくりなおしている。もとのあたしはどこにもいない。あたしは機械マシンだ。君と変わらない。同じだ。あたしたちは目的に向かってひたすら動きつづけるだけの機械マシンだ。

ナ・イン。翼を低く軋きしませ広げようとしている九頭竜ナ・インよ。君は涙なみだを流さないだろう。痛みすら感じないだろう。ナ・インよ。君の翼が展開されようとしている。かつて骨組みと皮ひ膜まくとでできていた君の翼は力強くしなやかで優美だった。現在の君の翼は違う。君が背に負う三角形の翼は三対、六枚。数こそ一いつ緒しよだが、君にはその翼を羽ばたかせることはできないだ

ろう。その必要はないだろう。君の翼には大小の噴射管ノズルが備わっている。それらの噴射管ノズルから何らかの推すい進しん剤ざいを噴ふん出しゆつさせることによって君は飛行するのだ。噴射管ノズルは翼だけではなくて身体の各所にある。君の翼はむしろ空力を制せい御ぎよするための装置として機能するのだろう。見れば見るほど君は機械マシンだ。ナ・イン。こうして君に呼びかけることはやめよう。君は機械マシンだ。噴射管ノズルが唸うなりを上げはじめた。推進剤の噴射によって空気が熱せられて光が屈くつ折せつする。ナ・インは浮ふ揚ようしようとしている。出撃だ。ナ・インは出撃しようとしている。おそらくキング・グッダーがナ・インを呼んでいるのだろう。ついにそのときがきたということだ。ジュジ、と彼女は胸の裡うちで弟の名を呟いた。お前はきっとほくそ笑えむのだろうな。こうなることをお前は見み越こしていた。図に当たったと手を叩たたいて喜ぶお前の姿は、だが、浮うかびはしない。お前の顔などわからない。お前はもう、お前ではない。あたしがお前の姉だったころのあたしではないように。

　彼女はクラナム粒子の放出を抑よく制せい、下降を開始する。ナ・インへと。

02　竜たち

「━━は……？　え？　何？　ナ……？　せんかん？　まきし……ドラゴン━━って」

　マリアローズはアジアンを見て、それからキング・グッダーに目をやった。あの傍ぼう若じやく無ぶ人じんというか暴ぼう虐ぎやく奇き人じんなる王が何かを呼んだ。たぶんそれは間違いないと思う。たしかに、きたれ、と言ったし。でも、王はいったい何に対して呼びかけたのか。ドラゴン？　クズリューガタ？　チョードキューヒクーセンカン？　センカンって━━戦せん艦かん？　船？　ヒクーってもしかして、飛行？　飛ぶ船？　戦艦？　それなのにドラゴン？　どういうことなのか。だけど言ったよね、ドラゴンって。聞いたもん。たしか、マキシマムエーエムドラゴンとかって。そういう名前の飛行戦艦？　チョードキュー？　超弩ど級きゅう？　めっちゃでっかいってこと？　ナイン？　何それ？　え？　え？　え……？　みたいにパニクってる場合なのかっていうね。そ

れどころじゃなくない？　そうなんだけど。わかってるけど。

　紫しのヴェロニカことリルコの戦スト略ラテジ級ツク魔・マジ術ツク〝古こ代だい壊かい王おうの呪のろい〟によって、空中首都エルデンは崩ほう壊かいしはじめている。ピンパーネルを右みぎ肩かたに、ハニーメリーを左肩に担かついだまま落下しそうに、というか落下していた髭ひげこと筋肉ことトワニングは、王の魔術によってピタッと止まってとりあえず九死に一生を得た。トマトクンはサフィニアにキャッチされたし、ユリカと飛フエイ燕ヤン、ロム・フォウとアルファの足場はまだなんとか無事だ。きゅーは超メガ賢セイ者ジモーグの娘むすめらしいエヴァンジェリンが放った青い輝きに包まれて浮いている。ちなみに、マリアローズは不本意ながらアジアンに抱だかれていて、アジアンは飛べるので大丈夫だ。あと、誰だれかいたっけ。おっと忘れてた。アジアンの右腕、黒い管の集合体、アルカーディィアに搦からめ捕とられるような恰かつ好こうで、半魚人ことカタリがぶーらぶらぶらんぶらんしている。閃せん光こうの魔女マチルダやら踊ダンりシング羊シープやらは言うまでもなく飛べるし、とにかく今のところは全員無事なのだけれど、あくまでそれはここにいる者に限った話でしかない。繰くり返しになるが、エルデンは崩壊しはじめている。崩壊しつつあるのだ。エルデンは現在地上にはない、空中にあるわけだから、壊こわれてしまったら大変だ。今、エルデンにいる者はエルデンと運命をともにすることになる。ようは一緒に落ちるしかない。二メーテルや三メーテルの高さじゃないので、落ちたら死ぬしかない。それからついでに、敵がくる。羽虫の大群みたいだが、まだ距きょ離りがあるからそう見えるだけで、当然のことながら虫なんかじゃない。悪魔どもだ。雲うん霞かのごとく押しよせてくる。ひどい。悪いことだらけだ。悪いことしか起こらない。マリアローズは好材料を探そうとして一瞬でやめた。そんな現実逃とう避ひをして何の意味があるだろう。ない。皆かい無むだ。対処しないと。──僕には何もできないけどさ。

　マリアローズはアジアンの胸を叩いた。「アジアン、高度を下げて……！」「──ン、ああ、わかったヨ、マイスウィーテスト……！」そのマイなんたらとかそういうのはいらないからと罵ののしりたい気持ちを抑おさえてマリアローズはアジアンにしがみつく。当然こんなバカタレにしがみつきたくなんかないのだが、極力邪じや魔まをしたくないのでこうする以外ない。アジアンが急降下を開始すると半魚人が「魚ぎよぉほぅっ……!?」と叫さけんだ。敵はマチルダら魔術士たちに任せる。任されてくれるといいんだけ

ど。大地じ獄ごく竜騎兵団だか何だか知らないが、あんなの相手にしていられない。それどころじゃないんだ。マリアローズはトマトクンたちに向かって大きく腕を振ふってみせた。「──銀の砦とりでに……！」「うむ」トマトクンは即そく座ざにうなずいた。「サフィニア、行けるか」「はい、もちろん……！」サフィニアはトマトクンを抱きしめたまま飛ぶ。飛んでゆく。ユリカもマリアローズと目があうと、飛燕の手を引いてそっちのほうへ向かった。ロム・フォウとアルファも。「ぬうッ！」トワニングは動けない。王の魔術で浮揚させられている状態だから、自力では移動できっこないのだ。ただ移動できないだけじゃない。もし王の気が変わったら、トワニングとその両肩に担がれているピンパーネルとハニーメリーは地上めがけて真っ逆さまだ。きゅーはエヴァンジェリンにとって友だちらしいから平気だろうけど、髭たちは──トワニングが両目をクワッと見開いた。「──迷わず行けェイッ！　拙せつ僧そうらはなんとかする……ッ！」

「大丈夫！」とピンパーネルが声を張りあげ、ハニーメリーが「ね！」とピンパーネルと目を見あわせて笑みを交かわした。大丈夫なわけないのに。大丈夫な保証なんて一個もないんだ。でも、三人にそう言われてぐずぐずしていたら、僕は僕のことを今よりもっと嫌きらいになってしまう。マリアローズはアジアンの肩を平手で叩いた。「行って……！」

「愛ゆえに……！」馬鹿一号はまたわけのわからないことを言いながら黒翼を力強く羽ばたかせて急加速した。かなりの低空飛行だ。カタリがアルカーディアの黒い管をよじ登ろうとしている。「ひひひひ低ッ！　低すぎやんッ!?　ぶぶぶぶぶつか……ッ!?」「気をつけてるヨ！」アジアンはそう言ってから小声で付け足した。「──一応ネ」「いいぃぃぃぃぃぃぃぃ一応かァァァァアァァァーいッ!?」「我が慢まんしてくれ！　急いでるのサ……！」急いでいる。そうだ。そうなんだ。アジアンにも急ぐ理由はある。かっこつけてそう見せまいとしているみたいだけれど、おそらく焦あせってさえいる。だって、銀の砦にはアジアンの仲間もいるのだ。昼ラン飯チタ時イムの人たちが。このままエルデンが崩壊して墜つい落らくしたら、アジアンは仲間を全員失う。ダメだ。ダメだよ。そんなの絶対ダメだ。でも、祈いのることしか。マリアローズには、そうならないように祈ることしかできない。ひどい罰ばつゲームだ。無力に生まれついて、どんな勝負にも負けてきた。そのあげくの罰ゲームには、だけれどもう慣れている。ふてくされるな。前を向け。祈ることができるのなら、せめて力の限り祈れ。

　アジアンが飛ぶ。その前をサフィニアが翔る。眼下でエルデンが崩くずれてゆく。銀の砦は遠くない。もうすぐだ。「ててててててて敵がきよるで……！」とカタリが叫んだ。閃光の魔女ら魔術士たちが引き受けてくれなかったというよりも、敵の数がとにかく多い。魔術士たちのほうにも行くし、こっちにもくる。地獄の竜騎兵。やつらは有ゆう翼よくの蜥蜴とかげに人型の悪魔が乗っかっているのではなくて、羽を持つ蜥蜴の背から人間の上半身が突つきだしているような形態の悪魔だ。上半身の両腕には武器を持っている。剣けんとか槍やりとか、あとは弩いしゆみ的なものとか。弩的なというか、弩そのものらしい。数十、それ以上の竜騎兵が一いつ斉せいに弩から矢を放った。飛来する。矢が。矢が。矢が。矢が。「魚うおぉぉぉぉぉぉぉぃ……！　当たるがな当たってまうがな刺ささるがなどないすんねんな……！」「──こうするヨ！」黒翼が激しく空を打った。アジアンは急加速する。「お、あ……っ」マリアローズは思わず目をつぶってしまった。脳が頭ず蓋がいの中から飛びだしてどこかへいってしまいそうだ。息ができない。胸が潰つぶれそうで。矢。矢は。矢は？　矢は⁉　当たっていない。かわしたっていうか、振りきったっていうか。竜騎兵たちは追いかけてくる。よかった。竜騎兵たちが地面や建物の上を走っているユリカたちのほうに行かなくて。速度ではアジアンのほうが速い。突っ切れるか。でも、向かう先には銀の砦がある。このままだと敵を銀の砦に連れてってしまうことになっちゃわない？　なっちゃわないっていうか、そうなるよね……？

「アジアン、これじゃあ……！」「いや、問題ない！」アジアンは即そく答とうした。めずらしくやけに確信ありげな返事だ。銀の砦が近づいてきている。サフィニアとトマトクンはもう銀の砦の真上に達しようとしている。不意に銀の砦から何か飛びたった。そんなふうに見えた。何だろう。目の錯さつ覚かく？　違ちがう。それはトマトクンを抱かかえているというか、むしろトマトクンにしがみついているかのようなサフィニアをかすめて、マリアローズとカタリを運うん搬ぱん中のアジアンを飛び越こしていった。速い。ものすごい速さだ。よく見えない。でも。

「ベティ……⁉」とサフィニアが振り返って叫んだ。「そうサ」とアジアンが低く呟つぶやく声をマリアローズは聞いた。アジアンはうっすらと笑えみを浮かべていた。ベティ。サフィニアの姉あね弟で子し。昼ラン飯チタ時イムの〝垂ベテれイ・目ザ・のドウベルーピテングアィイズ〟。彼女が卓たく越えつした魔術士だということはマリアローズも知っている。そんなことは前々から。だけどここ

までとは。マリアローズは振り向むいた。ちょうどそのときだった。ベティが急停止する。竜りゅう騎き兵へいどもの真ん前だ。もうちょっとで衝しよう突とつする。その寸前だった。そしてベティは薙ぎ払う。膨ぼう大だいな光が撒まき散らされて、とんでもない音がした。雷らい霆ていだ。巨きょ大だいな雷いかずちの鞭むちが竜騎兵どもを灼やいて吹ふっ飛ばした。一いつ閃せんにとどまらない。ベティは腕を振るう。その動きにあわせて恐おそるべき雷らい鞭べんが二閃、三閃、四閃、五閃する。マリアローズは歯を食いしばってアジアンにすがった。こんなことしたくないけど、ついしてしまう。それほどの威い力りよくであり迫はく力りよくだった。——ベティ。

「弱い、弱い」ベティが雷鞭を振るう。そのたびに竜騎兵が蹴け散ちらされる。子供扱あつかいだ。赤子扱いというべきか。いや、赤子ですらない。今のベティの前では竜騎兵なんて虫けら同然だ。あっという間だった。またたく間にベ

ティは直径二百メーテルほどの前方半円内にいた竜騎兵を一いつ掃そうしてしまった。「──まるで相手にならないわ。顔を洗って出直してきなさい、雑ざ魚こ」

　マリアローズは怖おぞ気けをふるった。もともとベティは怖こわかったけど。でも何か違う。以前とは力が段違いだ。だけどそれだけじゃない。ベティの眼めだ。誤解を恐れずに言えば、人間味がないっていうか。それはさすがにちょっと言いすぎか。モノを見るような目つきとでも言えばいいか。まあ相手は悪魔だし、そうおかしくはないんだけど。何だろう。究極の上から目線みたいな。上位者が下位者を見る目っていうか。考えすぎだろうか。マリアローズは上位か下位かでいったら完全に下位の下位に位置するので、過か敏びんなのかもしれない。何にしても、竜騎兵どもが遠くからベティめがけて弩を斉射しようとしているのを見てとって、「危ない……！」と声をあげたのは本当に余計なお世話だと思う。マリアローズごときが注意を促うながしたりしなくても、ベティは対処できたはずだ。それにしても、そういう方法っていうのはね。予想外っていうか、予想できるはずもないっていうか。

　ベティが目を見開くと、その左肩から何かがズニョッと突きだした。何か。何？　腕みたいな？　腕？　ベティの身体からだから腕が？　腕なのか。少なくとも人間の腕じゃない。たとえば熊くま。熊の前まえ肢あしのような。それは毛むくじゃらでぶっとくて長い。大きい。大きすぎる。どのくらい大きいかというと、体積でいえば人間一人分ほどもあるだろうか。つまり、ベティからベティ大の熊の腕めいたものが生えたのだ。その腕がベティを守った。竜騎兵どもが放った無数の矢はただの一本もその腕の剛ごう毛もうを貫つらぬくことができなかった。あれって。マリアローズは呆あっ気けにとられて何も言えない。え？　何？　あれ、魔術……？　でも、あんな魔術があるのか。真にイッちゃってるレベルの魔術だと、何がどうなってもおかしくはないけど。そうはいっても、軽く魔術の域を超こえている気がする。熊の腕を出すなんて。何でもありにも程ほどがある。ホントに何でもありだ。「出直してきなさいって──」ベティは熊の腕を竜騎兵どもに向かってのばした。おそらく。熊の腕が勝手に動いたわけじゃないと思う。たぶん、ちゃんとベティが操あやつっている。でも届くわけがない。熊の腕だけなら。そうじゃなければ？　その場合はこうなる。正直、ちょっぴり気持ち悪かった。熊の腕から肌はだ色いろの腕が生える。巨大昆こん虫ちゆうの脚あしみたいなものが生える。ねちょっとした管みたいなものが生える。それらが絡からみあうようにして竜騎兵どもめ

がけてぐんぐんのびてゆく。ついでにベティも猛もう然ぜんと突進する。「言ってるでしょ？　聞き分けがない馬ば鹿かは……！」

　竜騎兵どもが身を翻ひるがえして後退しはじめた。だけど遅おそい。間に合わない。ベティの腕、腕と呼んでいいものかためらいを感じずにはいられない第三の腕が、竜騎兵どもに轟ごうと迫せまる。第三の腕が竜騎兵どもを叩たたき落とす。猛もう威いをふるって巻きこんでしまう。竜騎兵の一部は剣や槍を振るって第三の腕に斬きりつけ、突きたてようとしたが、無む駄だだ。その程度でどうにかなるようなものじゃない。だったら、と考えたというよりはきっと反射的な動作だろう。弩を撃うつ竜騎兵もいた。狙ねらうは第三の腕じゃない。ベティの本体──という言い方もどうかと思うが、とにかくそっちのほうだ。まあ大丈夫だろう。何しろベティは魔術士だ。しかも、何があったのか知らないけれど、サフィニアと同じようにもはや呪じゅ文もんを詠えい唱しようすることもなく魔術を発動させてしまえるらしい。矢なんて強風か何かでも起こしてちょちょいのちょいで防いでしまうんじゃないかと思いきや、違った。そうくるとは。今度は背中だ。ベティの背中から、巨大蜘ぐ蛛ものそれのような脚が──八本も。それらの脚がベティをくるむようにして矢を防いだ。でも脚だけじゃない。というか、一本の脚から人間の頭部みたいなものがにゅっと顔を出している。ライラック色の髪かみ。チャコールグレーの肌はだ。それから、マゼンダの瞳ひとみ。口からのぞく歯がノコギリみたいにギザギザだ。そいつは舌した舐なめずりする。「ベティ」「──あんたは引っこんでなさい、ヴェルドゥレ……！」ベティが叱しかりつけると、その頭部はオハハハと奇き妙みような笑い声を立てながら失うせた。何、あれ。

　わからない。わかるはずもないが、ベティの身に何かとんでもないことが起こった。今現在も起こっていることは間違いないだろう。ベティはそれすらも自分の力にしてしまっているのか。魔術士ゆえに。そういえば、同じ閃光の魔女の弟子のトモヨもアレだったし。なんか黒い存在になっちゃってたし。こう考えると、サフィニアはなんてまともなのだろう。魔術士界の清純派乙おと女め代表みたいな。違うか。いやサフィニアは実際、清純だと思うけど。もしかすると、それくらいサフィニアの素質が図ず抜ぬけているということなのかもしれない。だから、ベティたちみたいなことまでしなくていい。逆に言えば、素質に劣おとる者は手段を選んでなんかいられない。泥どろを啜すするどころの騒さわぎじゃない、想像もつかないような、尋じん常じようじゃない、異様な方法を採らないと高みには登れない。そこまでして何かを追い求め、突きつめて、自

身を追いこみ、いろいろなものを犠ぎ牲せいにしてまで勇ゆう往おう邁まい進しんしたことが、果たして自分にはあっただろうか。自問するまでもない。なかった。一度も。自分にはできないとマリアローズは思う。できないと思ってしまう時点で、自分はダメなのだろう。生まれつき身体が貧ひん弱じやくだからとか、魔術の才能もなさそうだったからとか、理由をつけてあきらめていた。自分なりに努力してきたつもりではいる。でも結局、なんとかできそうな、常識の範はん囲い内のことしかしてこなかった。彼女たちは違う。ひたすら上を目指して、危険を顧かえりみず、とうていやれそうにないことにまで手を出して、やりきっている。

「あれが昼飯時ウチの魔術士だヨ」とアジアンが歌うように言った。誇ほこらしげに。なぜだかマリアローズの胸が軋きしむように鈍にぶく痛んで、何だよこの痛み、僕はべつに──そうやって否定しようとしても痛みは消えなくて、気づいた。僕、ひょっとして、悔くやしい……のかな。もしあきらめないで、ああしていたら。こうしていたら。何をどうしたって無駄だ。そんなふうに考えないであがいていたら、何か変わっていたかもしれない。だけど手て遅おくれだ。周りは誰だれも彼も異常すぎて、もう異常が正常みたいになっているけれど、マリアローズ個人はあくまでも凡ぼん庸ようでしかない。凡庸な道を選んで二十年以上歩いてきてしまった。悔くいているわけじゃない。本当に？　悔いてもしょうがないから、悔いてなんかいないって思いこもうとしているだけなんじゃないのか。まあ、後こう悔かいは日常茶さ飯はん事じで、強がりだけが心の支えみたいなところもあったりするし、まだそう長いわけでもないちっぽけな自分の人生を振ふり返っている暇ひまがあったら、他ほかのことに注意を向けたほうが圧あつ倒とう的に建設的だ。

「マリアローズ……!?」声がした。前のほうからだ。マリアローズはそっちに目をやった。声を聞いた瞬間、それが誰かなんて当然わかってたけど。「──リーチェ……！」マリアローズは目を瞠みはった。ベアトリーチェだけじゃない。もう一人いる。拘こう束そく具めいた変態チックな服を着ていて、かなり大おお柄がらで見るからに邪じや悪あくだが、なんとなく昔はもっとトバしてたぜ的な空気を醸かもしだしている──ＳＩＸ。騎士気どりでベアトリーチェに従っている。

「すまない！」ベアトリーチェは金きん髪ぱつを振り乱して叫さけんだ。「銀の砦とりでから出るなと総長には言われたけど、じっとしていられなかった……！」「謝ること……！」マリアローズは首

を横に振った。そのときだった。「──うっ……⁉」ベアトリーチェの身体が突きあげられたように浮うい て、ＳＩＸがすかさず彼女を抱だきとめた。揺ゆれたのだ。激げき震しんした。「ヴィシュクラトーか……！」とＳＩＸが吐はき捨てるように言った。ヴィシュクラトー。人竜レインドゥラス・ヴィシュクラトー。十四枚の透とう明めいな翼つばさを持つ真しん珠じゅの竜が大暴れしている。もちろん、ヴィシュクラトーが一人──人？　人竜だからいいのかな、どうなんだろ、まあいいや、一人ではしゃいでいるわけじゃない。ちゃんと相手がいる。そっちもまた竜だ。これ以上ないくらい、竜らしい竜。本人曰いわく、竜でありながら地じ獄ごくの帝てい王おうに忠誠を誓ちかっているとか。ようするに、そこそこ頭がおかしいのだろう。竜のくせに。でも、見た目はやたらと立派だ。〝竜ドラゴの二ル・大ハイ公ヴエ爵リオン〟ゲルマニオン・ワッヅァール・パプティアン・ブリッケス・フォンドール・グェハブナス。長いって、名前。長すぎ。ゲルマニオンでいい。ヴィシュクラトーはそのゲルマニオンを向こうに回して、ものすさまじくクソド派手な一騎打ちを演じていた。まあ、ヴィシュクラトーがゲルマニオンを相手どってくれていなかったら、もっといろいろやばいことになっていただろう。というか、相手どってくれていてもやっぱりやばいことはやばい。その事実に否いや応おうなく直面させられる羽目になってしまった。

　今の猛もう烈れつな震動はヴィシュクラトーがゲルマニオンをエルデンに叩きつけたときの衝しよう撃げきらしい。見れば、ヴィシュクラトーは十四枚の翼をゆったりと羽ばたかせて浮かんでいて、ゲルマニオンはその真下で起きあがろうとしている。距きよ離りはどのくらいだろう。竜たちが巨大なので見当をつけづらいが、方向はシャイニンググローリーパレスのほうだ。城の手前というほど近くはないかもしれないけれど、城まで一キルメーテルとかそのくらいだろうか。ゲルマニオンが炎ほのおの息吹ブレスをヴィシュクラトーめがけてブブッ、ブハァッ、ブオァッと連続で放った。ヴィシュクラトーは真珠色の息吹ブレスをこれに浴びせて打ち消す。ゲルマニオンはその間に素す早ばやく跳とび起きた。そこにヴィシュクラトーが蹴けりを見み舞まう。ゲルマニオンがぶっ倒たおれて、また激震。「──Ｋｕ……！」ＳＩＸは転びそうになったわけじゃない。そうじゃなくて、地面が裂さけたのだ。ＳＩＸは危あやういところで亀き裂れつから逃のがれると、ベアトリーチェを肩に担かつぎあげた。「な、何をっ⁉」「失礼するよExcuse me、お姫様princess……！」ＳＩＸは暴れるベアトリーチェをしっかりと腕うでで押さえつけて駆かける。マリアローズもむかついたが、こ

の場合はしょうがないか。地面の亀裂がどんどん広がっている。急いで逃にげないと裂け目にのみこまれてしまう。マリアローズはアジアンに頼たのもうとした。下に──降りてどうなる？　さすがにＳＩＸとベアトリーチェまで運ぶのはアジアンにも難しいだろう。ということは、こうやってただ見ているしかないのか。何もできない。打つ手がないのか。

　ない。

　それでも考えろ。考えるんだ。仲間が、できるだけ多くの人が助かるための方策を。無茶でも何でもいい。可能性でいいんだ。一つしかない、とマリアローズは思った。今この瞬間には一つしか思いつかない。僕らを助けられるとしたら、あれしか──彼女しかいない。でも、どうやって？　いかにも無理っぽい。無理だと思えるからあきらめるのか。それじゃダメなんだ。マリアローズには魔術士たちみたいに人間離ばなれしたことはできない。逆立ちしたって、たとえ天と地がひっくり返ってもできっこない。今さら自分に期待することなんてできない。もう遅い。遅すぎる。だから、利用する。力ある者を。彼女ならみんなを救えるはずだ。だったら、救ってもらう。「サフィニア、トマト……！」マリアローズは声を張りあげた。「なんとかゲルマニオンを押さえて……！」「え……!?」さすがのサフィニアも、ただちにマリアローズの意図を察することはできなかったようだ。そりゃそうだよね。明らかに無む謀ぼうだし。だけどこれしかないんだ。「──ヴィシュクラトーに頼んでみる！　竜に乗せてもらえば、エルデンが崩くずれたって大丈夫のはずだから……！」

「Ｈａ□Ｈａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈ」いち早く反応したのはＳＩＸだった。「そいつはＥＥＥＥＥＥ……！　じつにイカれたアイディアだ！　ディオロット！　あの女にもたまには応分の負担をさせるべきだよ！　それくらいの労働は是ぜ非ひともさせるべきだ！」

「──よし！」トマトクンが顎あごをしゃくってゲルマニオンのほうを示した。「サフィニア、行け！　俺とお前とでゲロマンガンを押さえるぞ！　ヴィシュクラトーの説得はマリアに任せる……！」「は、はい……っ！」「ゲロマンガンじゃなくてゲルマニオン！」マリアローズはとっさにツッコミを入れてからアジアンの顔をちらっと見た。「……ごめん。我ながらむちゃくちゃなことやろうとしてるって思うんだけど。でも、できたら手を貸してもらえればなぁーとか──」「極ラヴ限マツ愛クス」アジアンはキランッと星を

撒まき散らす勢いで片目をつぶってみせた。どういう返事だよ。意味はわかるけど。「魚うおい！　わしはここで下ろしたってくれ……！」カタリが騒ぎだした。「わしはこのまんま銀の砦に行くさかい！　ビューンッってな！　もうすぐそこなわけやし……！」「了解したヨ！」アジアンは高度を下げた。カタリに絡みついていた黒い管、アルカーディアがほどける。「━魚ぎよう……ッ!?」カタリは地面に投げだされてゴロゴロ転がった。「たたたたたァッ……!?　もッ、もうちょいやさしくできんかったんかい!?」アジアンは無視してキュッと方向転てん換かんする。「しっかりつかまってくれ、マリア……！」「う、うん……！」もちろん本当はいやなんだけど、しょうがない。アジアンは右腕を右腕らしく整えて、両腕でマリアローズをぎっちりと抱きしめた。マリアローズもアジアンにしがみつく。サフィニアとトマトクンは先行して、もうゲルマニオンに襲おそいかかろうとしている。竜が相手でも二人ならやってくれるはずだ。

「離はなせ、サフィニア……！」「はい……！」「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」空中で離されたトマトクンはゲルマニオンに飛びかかる恰かつ好こうになった。右手に大カタ殲スト滅ロフ刀アー。左手に聖断罪の剣。ゲルマニオンはトマトクンに気づくなり地面をゴオオオオォォォォンと蹴って飛びのいた。聖断罪の剣が空を斬って、サフィニアがトマトクンを受け止める。「もう一度だ！」「はい……！」サフィニアは急上昇してゲルマニオンに再接近を試みる。ソ　ソソソ　ソノけん　ワアアアアアアアアアと脳を揺るがす声で言いながらゲルマニオンが下がる。トマトクンが左手に持つ聖断罪の剣の波打つ剣身が七色の光を帯びている。ゲルマニオンが、竜の中の竜、ゲルマニオンともあろう者が怯ひるんでいる。ソノけん　かかかかかかかかかか　かみ　かみ　かかかかみ　かみ　かみノ　モノかあああああああああああああ━ああああああぁぁぁぁぁぁもう頭が痛い。あの声、超最低ＳＵＣＫ。アジアンも顔をしかめているが、速度を落とすことなくヴィシュクラトーに肉にく薄はくしようとしている。それにしても、なんてきれいなんだろう。その体表は真珠みたいな色をしてはいるものの、真珠よりずっと美しい。こんな色合いも光こう沢たくも見たことがない。透明の膜まくの下に世の輝かがやきという輝きがすべて詰つめこまれているかのようだ。瞳は晴れ渡わたった空に似ている。その眼めがマリアローズとアジアンを見つめている。レインドゥラス・ヴィシュクラトー。人竜。この竜は間違いなくただの竜じゃない。

『我ヴィシュクラトーに何の用です』という声が響ひびいた。普通の声じゃない。硝子ガラスの容器の中で無限に反はん響きようしているような響きがある。でもゲルマニオンのそれとは違ちがう。やわらかで、どこか人の声に似ている。もっと言えば女性の声だ。アジアンは黒翼を強く羽ばたかせて、ヴィシュクラトーの鼻はな面づらの前で停止した。「……話は通じるようだネ」「人竜っていうくらいだし」マリアローズは一つ息をついて唇くちびるを引き結んだ。ちょっと頭がぼうっとしている。自分で言うのもなんだけどさ。どうかしてるよね。こんな生き物と話をしようだなんて。しかも、雑談しようってわけじゃない。要求をのんでもらおうとしている。ありえなくない？　ＳＩＸがイカれたアイディアだと言っていた。ほんとにそのとおりだよ。馬鹿げてる。笑っちゃいそうだ。笑いたい。笑ってごまかしたい。怖こわい。ヴィシュクラトー自体も神こう々ごうしすぎて怖いけれど、それより自分がやろうとしていることに何の意味も効果もないんじゃないかと思えて。こんなことに時間と労力を費ついやして、結果的にそのせいでひどいことになってしまうかもしれない。だから引き返す？　何もしない？　自分はどうせ無力だから、どこかでひっそりと膝ひざを抱かかえて丸まっていて、資格がある人たちに任せたほうがいい。僕には資格がない。何の資格もない。才能がなくて能力がなくて努力もたぶん足りなくて、今までに成し遂とげたことが何かあるとしてもそれはぜんぶ周りのすばらしい人たちのおかげで、こんな僕は余計なことをしないで黙だまっていたほうがいい。

「ヴィシュクラトー、きみに頼みがある」震ふるえるな、声。こわばるな、僕の身体からだ。卑ひ屈くつになるな。卑下するな。ただでさえ小さいんだ。これ以上小さくなってどうする。ありのままの僕でいいなんて思わない。たかが知れている自分なりの精せい一いっ杯ぱいなんて糞くそ食くらえだ。たとえそれに届かなくたって、僕は手をのばす。僕は背が低いけど、高く跳べるわけでもないけど、それでも僕は手をのばす。「きみは竜だろ。きみなら僕らを救える。僕たち人間を。エルデンが壊こわれて、大勢が死ぬ。死なせたくないんだ。一人だって。僕らを助けて」

『助ける。我ヴィシュクラトーがそなたたち人間を？』ヴィシュクラトーはおそらく笑った。笑い声が聞こえたわけじゃないが、そう感じた。『そなたが人の子とは異なことを』

「え……？」マリアローズは瞬間、底のない穴に落ちたような感覚に襲われた。でもそれどころじゃないとすぐに思いなおした。僕は

べつに穴になんか落ちてない。気のせいだ。そんなのどうだっていいんだ。「──そうだよ。助けて。僕たちを。きみにならできるだろ。余よ裕ゆうだろ。何も宙返りしろとか言ってるわけじゃない。まあ宙返りくらいはできちゃうだろうけど。それはどうでもよくて、とにかく銀の砦にいる人たちをそのおっきい身体に乗せて、地上まで降りてくれればいいんだ。それだけでいいから、お願いだから──」

『なぜです。我ヴィシュクラトーが何なに故ゆえそのようなことを為なさねばならないのですか』

「り、理由？　えーと理由は……理由は、その、とくにあるわけじゃないんだけど……」

「いいや、あるサ」アジアンがヴィシュクラトーを睨にらみつけた。「誰だれあろう、世界で一番美しく気高いボクのマリアが直じき々じきに頼みこんでいるんだヨ。キミがそうしなければならない理由としてこれ以上のものがあるかい？　ないネ。ない。あるわけがないのサ……！」

『その論理を我に理解せよと？　どうやら我はそなたらをひねり潰つぶすべきのようです』

「まままま待った！　待って！」マリアローズはアジアンの耳を引っぱった。「──わけのわからないこと言って邪じや魔ましないでくれる!?　怒おこらせちゃったら僕らなんてあれなんだから、プチッとこう──」「だけどマリア！　ボクが言ったことは否定しようのない真理だ！　そうだろう!?」「いいから口を閉じてて！　絶交されたい!?」「されたいわけがないじゃないか……！　ダメだヨ、絶対ダメ！　絶交なんて、縁えん起ぎでもないことを言わないでくれ、わかった、ボクはこうやって口を──」アジアンは自分の上うわ唇くちびると下唇を巻きこむように嚙かみしめてみせた。「閉おじうてえいいるうからあ！」「……そのままでいて。できれば永遠に」「キいミいがあ本おん当おうにい望おおむうのおなあらあそおうううすうるうこおとおもおやあぶうさあかあじゃあなあいいサあ」「ついでに喋しやべんないで？」マリアローズがそう言うとアジアンはうなずいて、くぐもった声を出すのをやめた。くっそ。馬鹿一号のせいですっかり調子がくるった。少し間を置いたおかげで、変な緊張感とか気け圧おされ感はだいぶ薄うすれたけど。そうだ。落ちつかない状況ではあっても、落ちついて交こう渉しようしないと。納なつ得とくさせるのでもおだてるのでも脅おどすのでも何でもいいか

ら、やらせるんだ。

「ヴィシュクラトー。僕らを助けることは、きみにとって利益になる」

『それを為すことによって、我にいかなる益がもたらされるとそなたはいうのですか』

「それは──」マリアローズは素早く周囲に視線を巡めぐらせた。トマトクンとサフィニアが息のあった空中殺法でゲルマニオンを攻せめつづけている。二人だけじゃない。ベティも参加している。竜騎兵もついてきてしまっているが、ベティはゲルマニオンに雷いかずちをぶちこみながら竜騎兵どもにもズガズガ魔術を叩たたきこんで牽けん制せいするという離れ業わざを平然とやってのけていて、なんかもうすごい。反撃されても、変な腕だの脚あしだのが身体のあちこちから出てきて防ぼう御ぎょしちゃうし。どうなってるんだろ、あれ。マリアローズはうなずいた。「僕らを助けてくれるなら、きみに危害は加えない。ただゲルマニオン相手に大立ち回りを演じてるだけならエルデンの崩ほう壊かいを早めるだけだし、正直、僕らにとってはゲルマニオンと同じくらい、きみは危険な存在なんだ。排はい除じょするしかない。できるものならやってみろなんて浅はかなことを、きみみたいに頭のいい人──って呼ぶのもあれかな、竜？　まあどっちでもいいけど、とにかくそんな愚おろかなことをきみが言うとは思いたくないかな。だって、こっちにはトマトクンがいる。サフィニアもベティもいる。閃せん光こうの魔女マチルダも、超賢者モーグも、エヴァンジェリンも、踊り羊もいる。きみが僕らに協力しないなら、こんなことはしたくないけど、しょうがない。僕らはきみを攻こう撃げきする。そうせざるをえない」

『そなたは』ヴィシュクラトーはまた笑った。今回は微かすかに笑い声らしきものが聞こえたような気がする。『脅きょう迫はくしようというのですか。人にして竜、竜にして人たる我レインドゥラス・ヴィシュクラトーを。そなたのようなものが、我を威い嚇かくすること能あたうとでも？』

　案の定だ。ヴィシュクラトーは強気の態度を崩さない。本当のことを言うとマリアローズ自身もわからないのだ。トマトクンや魔術士たちの力でヴィシュクラトーを倒たおせるのか否いなか。勝手にマチルダとかもこっちの戦力として計算に入れちゃってるのはどうなのかという問題もあったりするのだが、そのへんは置くとしても。いや、やれる。やれると思う。やれるはずだ。何しろ、あの悪

グラ魔ンヴ大エリ公オンアーマンさえ退けたのだ。弱よわ腰ごしになっちゃいけない。押せ。押しきれ。「──勘かん違ちがいしないでくれる？　僕にきみを威嚇する力なんかない。僕じゃないよ。あくまで僕らだよ。きみは見るからに立派な竜だし、人間なんてちっぽけでとるにたらないって思ってるのかもしれないけど……これは親切心からの忠告なんだけどさ、あんまり人間を舐なめないほうがいいんじゃない？」『我ヴィシュクラトーが……！』

　なんかきた。風じゃない。でも強きよう烈れつな風のような何かが吹ふきつけてきて、アジアンが低く呻うめき、十メーテルばかりも後退させられた。マリアローズに至っては思わず目をつぶってしまい、息もできなくなる有様だった。全身の細さい胞ぼうの中身を抜ぬかれてしまったらこんな感じがするかもしれない。死ぬけどね。細胞の中身を抜かれたりしたら。つまり瀕ひん死しだ。

　これが威嚇か。本物の威嚇。怒ってみせるだけで生き物を瀕死に追いこんでしまう。従うしか、服従するしかなくない？　てゆうかまず謝ったほうがいいよね？　這はいつくばって許しを乞こうべきじゃない？　そうしないだけで、謝罪の言葉を口にせず、何もせずに耐たえているだけでやっとだ。アジアンですら──自分の上唇と下唇を巻きこむように噛みしめている。え？　口を閉じて喋るなって僕が言ったから？　まだそれやってるわけ……？

『我ヴィシュクラトーが人の子について知らぬとはゆめゆめ思わぬことです。我もまた人の子でした。否。我らこそ真に人の子なのです。そなたのような紛まがい物とは違います』

「フッ……」とアジアンが鼻で笑った。ようやく唇を巻きこむように噛みしめるのはやめたらしい。「どうやらキミの眼は腐くさり脳は朽くち果てる寸前のようだネ。よりにもよってボクのマリアを紛い物呼ばわりするとは──ウルクハンド」その名は知らない。マリアローズは聞いたことがない。でもすぐにわかった。アジアンが自分の中にいる何ものかの名を呼んだということは。それがどういうものかも即そく座ざに判明した。黒い纖せん維い状のものがたちどころにアジアンの首から足の先までを覆おおう。纖維の隙すき間まから青い輝きがもれている。おそらく瞳ひとみだ。黒い纖維状の瞼まぶたと青い瞳。しかも、無数の。マリアローズはアジアンにしがみついている腕だけじゃない、全身に力を入れた。アジアンはたぶん、加速する。突つっこもうとしている。そのとおりだった。アジアンは一瞬でヴィシュクラトーに迫せまった。

「ハアアアアアアアアアァァァァァァァァァァァァァァァァァ……ッ！」『──ッ……!?』

　ヴィシュクラトーは驚おどろいたようだ。アジアンはヴィシュクラトーの額に蹴けりを入れた。身体の大きさでいったら、ヴィシュクラトーに比べればアジアンなんて豆まめ粒つぶみたいなものだ。豆粒の突とつ撃げきキックが真しん珠じゆの竜を揺ゆるがした。さすがに吹っ飛びはしなかったが、瞬間、ヴィシュクラトーの顎あごが上がった。アジアンは上昇、旋せん回かいしてヴィシュクラトーを見おろした。「撤てつ回かいしろ……！　マリアを侮ぶ辱じよくすることはこのボクが許さない！　何があろうとだ！　キミが何ものであれ、次にマリアを紛い物呼ばわりしたら息の根を止める……！」

『……ずいぶんと威勢のいいことです。ルヴィー・ブルームにつくられた人形の分際で』

「誰が人形だ！」マリアローズはアジアンの腕から身を乗りだした。「この馬鹿はたしかに馬鹿だしどうしようもないお調子者でヘタレでいいかげんにピシッとしろって思うこともあるけど、それでも馬鹿なりに成長してないわけじゃないし何も知らないきみに人形とか言われる筋合いはないんだよ！　だいたいそうやって人を蔑さげすむ言い方して自分を高く見せようとするとか、そういうやり口って程度が低すぎ！　偉えらいんだったら、すごい竜なんだったら、もっとエレガントに振ふる舞まえないわけ!?　こっちが自然と尊敬しちゃうような態度でいてくれたらこっちだって礼を尽つくして頼たのみこむのに、そうならないのはきみがあからさまに大物のくせに心がせせこましくていまいちショボイからだろ！　自覚ある!?」

　あー。

　言っちゃった。ついつい口走っちゃった。慎しん重ちように話を進めないといけないのに。ぜんぶ馬鹿一号のせいだ。馬鹿一号が余計なことをしなければこんなことにはならなかった。マリアローズはべつに平気なのだ。蔑まれようと罵ののしられようと屁へとも思わない。自分自身のことはいい。どうせたいした人間じゃないし。だけど自分以外となると話が変わってくる。そうなんだよね。うん。頭に血が上ってアレしちゃったわけだけど、ここは怒ってもいいところじゃない？　怒るべきじゃない？　マリアローズは息を整えた。ヴィシュクラトーはなぜか黙りこくっている。不気味すぎる

沈ちん黙もくだ。「──ヴィシュクラトー。きみはいやなやつだ。でも、きみに頼むしかない。僕らを助けてよ。きみの力を貸してほしい。そうすれば、僕らは悪あがきをしなくてすむ。本当は何かきみに差しだせるものが僕にあればいいんだけど、あるならどんなものだって今すぐあげるけど、きみが求めるようなものなんて僕はきっと持ってない。だから頼むしかないんだ。お願いだよ。お願い……します」

『そなたは興味深い存在です』ヴィシュクラトーの声こわ音ねからは感情が読みとりづらい。ただ、機き嫌げんを損そこねていそうな気配はなかった。なんとなく、だけど。『もっともそなたは間違っています。そなたはまさに我が欲ほつするものを持っているのですから。我はそれを奪うばいとることもできますが、そなたは何でも差しだすと言いました。二言はありませんね』

「え」展開が意外すぎて口ごもると、アジアンが首を振った。「ダメだ、マリア。そんな簡単に──」「もちろん」マリアローズはアジアンの言葉を遮さえぎってうなずいた。簡単じゃないよ。簡単に考えてるわけじゃ決してない。だけどこれはチャンスだ。僕ごときが持ってるものと交こう換かんにたくさんの人たちを──その中には友だちもいる、友だちの仲間や大切な者たちもいる、そんな人たちを救えるのなら、願ってもない。たとえ何を差しだすことになったとしても、悔くいたりしないと断言できる。「二言なんかあるわけない。きみが僕らを助けてくれるなら、僕はきみに、いつでも、何だって差しだす。約束する。誓ちかうよ」

『では、そのときがきたら我ヴィシュクラトーは望みのものをそなたよりもらい受けることとしましょう』ヴィシュクラトーはそう言うと音もなく竜首を巡らせて優ゆう雅がに降下しはじめた。これでよかったのかなんて考えもしなかった。マリアローズは何もわかっていなかったからだ。当然、疑いはあった。ヴィシュクラトーが欲するものとはいったい何だろう。自分がそんなものを所有しているとはとても思えない。自分の中に何かそこまで貴重な能力なり資質なりがあるとも思えない。すぐれているところなんてたぶん一つもない。人よりちょっと変わっているといえば、深しん紅くの髪かみの毛と橙だいだい色いろの瞳くらいだろうか。とくに橙色の瞳はめずらしい。ひょっとすると、二つとないといっても過言じゃないかもしれない。それが何を示すのかなんて知るよしもなかった。知りうるはずもなかったのだ。

03　王と王妃

「軍師どの……ッ！」フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトは銀の砦とりで防ぼう壁へきの上で空を指さした。「アレを見たまえ、軍師どのッ！　竜がッ！　竜が下りてくるッ！　私の見間違えでなければ、どうもこちらに向かってくるようだッ！　吉きちか大吉か……ッ!?」

「吉か凶かではないところがあなたらしい」軍師ジャン・スタンバックは付け髭ひげをわずかにゆがめてみせた。目め許もとはほとんどゆるんでいないが、その表情は以前と比べてどことなく柔にゅう和わだ。彼と彼の軍師とは肩かたを並べて立っている。二人の距きょ離りが前よりも近いように彼には感じられてならない。あるいは今ならば、抱だきよせてしまうことも可能なのではなかろうか!?　そうしたとしても、拒こばまれなかったりするのではッ!?　イヤイヤッ！　それはいかんぞォと彼は己おのれの野や獣じゅうのような心を抑おさえつける。実際、彼の軍師はダンディーな付け髭など装着してはいるものの素す敵てきなレディーだ。チャーミングで、それから高潔だ。彼は軍師に求きゅう婚こんし、拒きょ否ひされてはいない。だが、そうではないのだ。彼の熱く滾たぎるこの想おもいは男と女とかそういった次元を超越しているのだ。そうした下世話な感情論でこの気持ちを表現しては実体からかけ離はなれることになってしまうのだ。違うのだ。まったく違う。

「あッ、愛している……ッ！」〝おかしなフアニー〟フランクはそう叫さけんでから、大おお慌あわてで口を押さえた。何をッ。いったいぜんたい変態、いや変態は余計だッ、私は何を……ッ!?　軍師が彼のほうに顔を向けている。恐おそろしいほど冷たい眼まな差ざし━では……ない？　びっくりしているのだろうか。軍師の頰ほおがほのかに赤らんでいるように見えなくもない。もしや、照れている……ッ!?　目の錯さつ覚かくだろうか。もしくは白昼夢だろうか。彼もなんだか恥はずかしくなってきて咳せき払ばらいをした。「━エッ、エッヘンオッホンウェッハンッ！　いいい今のはアレだッ、なんというかそのォ……本音ですッ！　ほッ、本音ではあるのだが、このような際に言うことではないとわかってはいるのだが、あふれる気持ち止められないマイハート恋こいは飛んでゆくどこまでもというか、あッ、あああッ軍師どのりゅ竜が……ッ！」

「何のつもりだ……？」軍師はもう冷静さを取り戻もどしていつも

どおりだ。さすが我が軍師どの。というかきっとアレだろう、さっきのはアレだ、やっぱり気のせいに違いない。軍師どのにかぎってあの程度のことで動どう揺ようなどするわけがないのだ。そう、わかっている。これは片思い。あくまで片恋だ。イヤイヤ恋ではない、恋などではなくて、彼は軍師を必要としている。軍師なしでは何もできないロクデナシ以下のロクデナッシーなのだ。それゆえに結婚してもらうしかないのだ。逃にがさない。逃がすわけにはいかないのだ。それはそれとして、しっかりしなければ。痩やせても枯かれても彼は新生太陽王国の王なのだから。

　真珠色の竜が降りてくる。銀の砦の前に。もう間もなく着地しそうだ。銀の砦は騒そう然ぜんとしている。当然だ。あの竜は少なくとも敵ではない。バリバリの敵らしい緑色の竜と戦っていたから、とりあえず敵の敵ではあるのだろう。そうはいってもホンマモンの竜なのだ。ようはでっかい。ちょっぴり大おお袈げ裟さに言えば銀の砦と同じくらいありそうに思えるくらい巨きょ大だいなのだ。ただでさえエルデンがなんだかやばいことになっていて、その上これだから皆みなの衆が大おお騒さわぎするのも無理はない。彼、フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトもテンションが上がっている。急激に爆ばく上あげしている。彼は興奮している。昂こう揚ようしている。あの竜は敵ではない。敵ではない竜が、銀の砦前にやってきた。すなわち……？

「救世主だ……ッ！」彼は両の拳こぶしを突きあげて叫んだ。「救世主が到とう来らいしたぞォッ！　これにて一件落着我々は大丈夫だッ！　助かるッ！　ワーオッ！　助かるぞォウ……ッ！」

「よくもそう……」軍師どのは一つ息をついて力なく首を横に振った。「たやすく楽観的に物を考えられるものだ。あなたのそういったところだけは尊敬せざるえないよ、陛下」

「よ、よしたまえ、軍師どのッ。尊敬なんかされると照れてしまうではないかッ。いやしかしもしやそれは軍師どの一流の照れ隠かくしであり、愛情表現の一いつ環かんだったりして……？」

「そんなわけはなかろう」ぴしゃりと軍師に言われて、彼は「タッハーッ！」と己の額を叩たたいた。「これまた失礼しましたッ！
いやはや、私としたことがなんともはやッ！」

　とうとう真珠色の竜が銀の砦の真ん前に降りたった。竜のサイズからしてかなりの衝しよう撃げきを覚かく悟ごしたが、さほどでも

ない。直後、『人の子らよ』と声が聞こえて彼は軍師と目を見あわせた。声といっても声でありながら声ではない。何やら珍ちん妙みようというか奇き妙みようというか霊れい妙みような声で彼は一瞬、自分の正気を疑ったが、どうやら軍師も聞いたようだ。「……い、今のはいったい……ッ」「あの竜の声か」軍師は竜に視線をそそいだ。『人の子らよ。エルデンは遠からず崩ほう壊かいし墜つい落らくします。我レインドゥラス・ヴィシュクラトーの背に乗りなさい。長くは待ちません。急ぎなさい』「━やはり……ッ！」彼は踊おどりだしたくなったが、軍師に叱しかられそうなのでやめておいた。「あの竜は我々を救おうとしているのだよッ、軍師どのッ！　どうもエルデンは激ヤバのヤバマックス状態っぽいが、これで助かるッ！　それもこれもどれも日ごろの行いのせいだッ！　正義は勝ァーつッ！　よォーしッ、そうと決まったらさァーっそく避ひ難なんをばッ！　ささッ、軍師どのッ！」「なっ━何を、いきなり何をする、陛下！」「フヌゥィッ!?　私はただ軍師どのの手を━ウォゥアッ!?　す、すまない軍師どのッ！　アイムソォーリィーッ！　つッ、ついうっかり、手など繋つないでしまいおって……こッ、このッ！　私のこの手がッ、悪い手だッ！　まったくもって、この手が悪いッ！　軍師どのの清らかな手を断りもなく握にぎりしめるなんてェーッ！　なんたることをォォッ！　くぬォッ！　くのッくのッくのォッ！」「……陛下。言っておくが」

　新生太陽王国軍師が、ジャン・スタンバックが、麗うるわしき付け髭の姫ひめ君ぎみが、国王を、フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトをまっすぐ見つめている。国王たる彼はゴクリッと生なま唾つばをのみこんだ。なんとふつくしい。いや、美しい。付け髭がなければ完かん璧ぺきだと、昨日までの彼ならば思ったかもしれない。今は違ちがう。付け髭があっても美しい。むしろ、付け髭があるからこそ美しい。それはちょっと言いすぎかもしれないが、とにかく付け髭は彼女の欠点などではない。彼女の容色をこれっぽっちも曇くもらせない。彼女が目を伏ふせると、長い睫まつ毛げが影かげを作った。「あなたが私のことをどんな人間だと思っているのか、私は知らない。知りはしないが、これだけは言っておく。私はたまたま女に生まれつき、女として生きた時間も短くはないが、それが素の自分だとは思えずに性の別を捨て去らんとした。私が歩んできた道は平へい坦たんではなかった。私はありとあらゆる泥どろを啜すすって生きてきた。おわかりか、陛下。生きるため、生きるすべを身につけるために、私は売り払はらえるものはすべて売り払ってきたのだ。それはこの身すら例外ではない。私はそういう人間なのだ」

「ヌゥーム……」彼は重々しくうなずいて鼻の穴からフゥーッと息を吐はいた。「軍師どのも大変だったのだな。私には想像もつかない艱かん難なん辛しん苦くがあったのだろう。私はハッキリ言って良家に生まれ、両親は早く亡なくしたがタァーップリの遺産で好き放題に生きてきたので、軍師どのの境きよう遇ぐうを理解できるとは口が裂さけても言えない。だが理解に努めたいッ」

「人が人を理解することなどできはしないのだよ、陛下。それは理想か幻げん想そうでしかない」

「まァーそうだなッ。そも、とりわけ私はオツムの出来に自信があるわけではない。ついでに言うと、私は欺ぎ瞞まんいんちきぺてん詐さ欺ぎなどは一通り繰くりひろげてきた。清せい廉れん潔けつ白ぱくとは無む縁えんの男で、盗ぬすみだの殺しだのはしていないが、それをなすだけの度胸と実力が私になかっただけのことだッ。あったらやっていたッ。過去の私ならば。今は違う。なぜなら私は国王だからだッ。軍師どのや、もはや数少なくなってしまったとはいえ我が新生太陽王国の国民を辱はずかしめる行いに手を染めることはないッ。つまり人は変われるということだッ。私のようなロクデナッシーでも、心を入れかえて生まれ変わることができるッ。軍師どのは何やら、自分には人並みの幸福をえる資格や適性がないと思っているような節があるが、そんなことはないぞッ。ともあれ私は軍師どのがいてくれて幸せだッ。天下一の幸せ者だと自じ認にんしているッ。軍師どのが私を世界一の幸せ者にしていることだけは間違いないッ。私も軍師どのを是ぜ非ひとも幸せにしたいッ。私にはできると信じているッ。ああ、もちろん幸せにするともさッ。私は幸せの青い鳥になり、軍師どのに幸福を運びつづけるのだッ」

「……誰だれも彼もが切せつ羽ぱ詰つまっているこの状況で、幸せも何もあったものではなかろう」

「この状況でも、だッ。こんな状況であっても、軍師どのがそばにいてくれて私は幸せを感じているッ。それくらい軍師どのの存在はものすンごいということを私は言いたいッ」

　ジャン・スタンバックは何かをあきらめたような力の抜ぬけた笑えみを浮うかべた。「私は世の女たちのようにあなたを愛することはできないぞ、陛下。白状するが、私が今までに愛したのはただ一人。年の離れた実じつ兄けいだけなのだ。私はゆがんでいる。ゆがみが私自身だ」

「問題ないッ」ファニー・フランクはドンッと胸を叩いてみせた。「たとえジャン・スタンバック、あなたが私を愛さなくても、私は誰よりあなたを愛してみせるし、すでに愛してしまっているッ。私のことはまったく心配無用だッ。あなたがいてくれるだけで私は幸せ一いつ杯ぱいなのだからッ。その上あなたを少しでも幸せにすることができたなら、私はもっともっと幸せになって天まで昇のぼってしまうだろうが、それは私次し第だいということだからなッ」

「わかった」ジャン・スタンバックは彼の左手をとり、薬指に口づけをした。「陛下、この戦いが終わったらあなたの妻になろう。そのときはどうか私を別の名で呼んでほしい。かつて捨てた名だが、あなたならばその名に新しい命を吹ふきこんでくれるかもしれない」

「ともに生き抜こうッ」彼は彼女の両手を握った。「私は力ある者たちに声せい援えんを送り、力なき者たちの希望になるッ。それこそが、この乱れた世界で私が私に課した役割だッ。私が、この私のような者が立っていられるかぎり、人類の灯とも火しびは消えないッ。我々が死ぬことは許されんぞ、軍師どのッ。何があろうと最後の最後まで我々は立ちつづけていなければならんのだッ。今、私たちがいるこの場所こそが、新生太陽王国なのだから……ッ！」

　二人は防ぼう壁へきから駆かけおりて門へと向かった。秩ちつ序じよの番人総長ヨハン・サンライズが中心となって、銀の砦に収容されていた人々を砦の外へと誘ゆう導どうしている。新生太陽王国の国民もちらほら見かけた。ファニー・フランクは彼ら彼女らに声をかけ、背を叩いて、外へと急がせる。急げ。急げ。急げ。急がなければならないのだ。遠くで、あるいはそう遠くない場所で、ドォーンゴォーンと大きな音が鳴る。地面が揺ゆれている。揺れは一定ではない。揺れ方が頻ひん繁ぱんに変わる。ときおり立っている者が体勢を崩くずしそうなほど揺れが激しくなる。何が起こってこうなったのか、原因は不明だが、ファニー・フランクとジャン・スタンバックはついさっきまで防壁の上からあたりを見み渡わたしていたので、これからどうなるかはわかっている。いや、彼らだけではない、魔術か何かでエルデンを光の網あみが包みこむ様さまを目にした者は皆、たぶん気づいているだろう。エルデンは終わりだ。そうなる前に避難しなければならない。とはいえ空中だ。どこにも逃げ場などなかったのだが、真しん珠じゆ色の竜がきてくれた。助かるッ。我々は助かるぞッ！　行きあう者、行きあう者にそう言って励はげますファニー・フランクに向かって、棒を差しだす

少年がいた。「陛下！　これを！」「ムムッ、君はたしか、ニーサン・プラグマティックくんだったね……ッ!?」「ぼくはイーサン・プライマーだよ……」「ウォホッ、そうだったそうだったッ！　で、そのリーサン・プログライダーくんが私に何を……ッ？」「だから……まあいいや。見てみて」「フゥムッ！」

　まごうことなき新生太陽王国の国民にして一兵卒でもあるイーサン少年が国王に手渡したそれは、単なる棒ではなかった。正確に言えば、まっすぐな木の棒に布がくくりつけられていた。ファニー・フランクは布をンバッと広げてみた。「──こ、これは……ッ！」

　布自体は薄うす汚よごれた白布にすぎない。しかしその白布に赤と黄色の塗と料りようで太陽が描えがかれている。イーサン少年は恥じ入るようにうつむいた。「……ぼく、絵は剣とか槍ほど得意じゃないから、下手くそなんだけど。でも、陛下には必要だと思ったんだ。陛下がそれを元気よく振ふってくれれば、ぼくらはきっとがんばれるし」「イーサンくん……ッッ！」ファニー・フランクは泣いた。一瞬でとんでもない量の涙なみだがあふれて飛び散った。イーサン少年は年のころ十四、五。あどけない顔をしているが、身体からだつきはガッチリしている。少年だが歴戦の勇士だ。そうでなければ生き残れなかっただろう。この無む垢くな瞳ひとみの少年に絵より剣や槍のほうが得意だと言わしめる時代をファニー・フランクは呪のろった。だが呪ったところで何になろう。イーサン少年は恨うらみや憎にくしみなどといったネガティブな感情に動かされてこの旗を、新生太陽王国の国旗をこさえてくれたのではない。ファニー・フランクもまた、上を向いて前を見すえることしか考えない質タチだ。「──いよォーしッ！　私はこの旗を振るぞォウッ！　フレーッ！　フレーッ！　み・ん・なッ！　フレーッ、フレーッ、みんなッ！　フレーッ、フレーッ、みんなッ！　ワハハハハハハハハハハハハ……ッ！」

　途と端たんにあちこちで苦く笑しようがこぼれ、失笑がもれた。笑え。笑うがいい。私を物笑いの種にするのだと、ファニー・フランクは旗を振り振り思う。軍師が彼の背を軽く撫なでた。それでいいと軍師も声には出さずに言ってくれている。「フランク・ゴールディング・レイヴンズクロフト……！」とヨハン・サンライズが手をあげた。「国王陛下万ばん歳ざい……！」それは冗じよう談だんに違いない。実際、周囲の者たちは笑いながら唱和した。「万歳……！」「万歳！」「国王万歳！」「万歳！」「国王陛下万歳！」「ファニー・フランク万歳！」「万歳……！」

　口々に万歳を唱えながら、人々は銀の砦の門へと向かう。先ほどまでは血相を変えるか動転しているか混乱しているか、そのいずれかだったが、様相が一変した。もちろん皆、急ぎに急いでいるものの、いくらか余よ裕ゆうがある。傷病者や若じやく年ねん者、老人に先を譲ゆずる者がいる。手助けしようとする者もいる。空気が軽くなり、雰ふん囲い気きが明るくなった。これだ。これでよいのだ。たしかに我々の進む道は暗くら闇やみに包まれていて先が見えない。だからといって下を向き目をつぶることはないのだ。そんなことしたら身体が縮こまって思うように前へ進めない。ファニー・フランクは「フレーッ！　フレーッ！」と旗を振って大声で応援する。そのうち軍師が「フレー！　フレー！」と声をあわせて叫さけびだした。ファニー・フランクが驚おどろいてそちらを見ると、軍師は少しだけ照れくさそうにそっぽを向いたが、声援を送ることをやめようとはしない。胸に迫せまるものがあった。━愛している……ッ！

　なんとしても彼女を幸せにしたい。そのためにはこの難局を乗り越こえなければならない。何、どうということはない。難局には慣れている。今までもどうにかなってきた。これからも同じだ。ファニー・フランクには何もできないが、周りに優ゆう秀しゅう、有能な者が大勢いる。あきらめさえしなければ、彼ら彼女らが必ずなんとかしてくれる。信じるだけでいい。

「さあさッ！　行こうッ！　明あ日すに向かってレッツラゴーッ！　だァーッ！　見える見える私には諸君の未来が見えてしまうぞォッ！　ズバリッ！　薔ば薇ら色いろだッ！　どうか私を連れていってくれたまえッ！　キミタチがいなければなァーんにもできない私だからッ！　キミタチがいてェーッ！　私がいるッ！　フレェーッ！　フレェーッ！　ゴッ━」よろめいた彼をすかさず軍師が支えた。彼だけではない。門へ向かう人の列が止まり、乱れている。耳が潰つぶれるような大だい轟ごう音おんが鳴り響ひびいて、悲鳴があがり、不安と恐怖に満ちた怒ど声せいが飛び交かった。今のは揺れたなんてものではない。地面が傾かしいだ。今もまだ傾かたむいたままだ。そして揺り戻もどしがきた。「━ヌオオオォォ……ッ!?」「っ……！」ファニー・フランクは軍師を抱だきよせ、国旗をつっかえ棒にしてなんとか転ばずにこらえた。彼と彼女は持ちこたえたが、転てん倒とうした者も少なくない。見れば、地割れが走っている。中年の女性がその地割れに足をとられていた。彼は走った。駆けよって「フン……ッ！」と女性を引っぱりあげた。そのときまた激げき烈れつな揺れが銀の砦とりでを襲おそった。軍師

が彼の名を呼ぶ声が聞こえた。

04　ならぬ死神

　死神は懼おそれていた。刀を持ち敵に挑いどむのならば死神は懼れなどしない。たとえ敵が何ものであれ。仮に握る刀がなくとも、無手であったとしても、死神は決して懼れない。相手が立ち向かうことのできる敵ならば。これは違う。異なる事態だ。もとより、空飛ぶエルデンに乗りこむのは死神の本意ではなかった。鳥や竜ならばいざ知らず、街は空を飛ぶものではない。信用できない。案の定ではないか。飛ぶものは鳥や竜であってもいずれは落ちて潰ついえる。いわんや、街であればなおさらだ。「ヨハン……ッッ！」死神は指示を仰あおごうとして首を振った。総長ヨハン・サンライズにとっても、この状況は想定外だろう。頭のいい男だ、武一いつ辺ぺん倒とうの俺とは違う、さりとてこうなることを見み越こしていたとは思えない。頼たよるな、依い存ぞんするなと死神の本能が告げている。目に見える敵と闘たたかうことしかできぬとは、情けないにも程ほどがあろう。それが敵ですらなくても、闘わねばならない。闘って切り開かねばならない。死神の脳のう裏りには幼きカレルの顔が浮かんでいた。あのような幼子の小さき手に未来を握にぎらせること能あたわぬとしたら、我ら秩序の番人の義には意味も価値もない。何としても、子供たちに明日の風景を見せるのだ。懼れることなかれ。ただ立って、闘え。

　脳のう髄ずいを灼熱させ、雄お叫たけびをあげ、突とつ進しんし、血刀閃ひらめかせるだけでいい闘いのなんとたやすきことよ。俺はこれまで困難な闘いから逃にげていたのかと羅ラ叉サは自嘲する。「秩序の番人、その身が塵ちりとなろうとも皆みなを援たすけよ……！」叫びながら年とし端はもいかぬ女児を片かた腕うでで抱きあげる。厄やつ介かいなのは銀の砦敷しき地ち内を縦横無尽に侵おかしつつある地割れだ。ふとチェス・ピードの顔が見えた。あの男は機き敏びんだ。「チェス・ピード隊長……！　人々を地割れから遠ざけさせろ！　崩ほう落らくの危険がある建物はないか……!?」「第三支し塔とうが危ないようです！」「一刻も早く、第三支塔付近から人を遠ざける！　李イ童ドウ晏アン！」「はッ！」「この子を頼たのむ！」「はッ──はあッ!?」「頼んだぞ！」羅叉は李童晏に女児の身を預けて第三支塔へと急行した。見

ると、第三支塔の外壁に幾いく筋ものひびが入っている。やや傾いてもいるようだ。周辺にはまだ避ひ難なん途中の者たちがいる。わけもわからず右往左往している男女の姿も目についた。「ここは危あやうい……！」羅叉は声を張りあげ、手当たり次し第だいに第三支塔から離はなれる方向へと男女を押しやった。「さあ、正門だ！　正門へと急げ！　安心しろ！　我々がいる！　秩序の番人が！　我々が貴様らを守る……！」死神と呼ばれた男がどの口でそのようなことを言うのか。この口で言うのだ。憚はばかっている場合ではない。危急だ。シャルロット・リンデ隊長、ラッド・ワーノン隊長と目があった。羅叉がうなずくと、リンデは老人の手を引き、ワーノンは老女を背負って駆けた。誰も刀を抜いていない。これは剣なき闘いだ。

05　父と子

「待て！　貴公、昼ラン飯チタ時イムだな……!?」ヨハンはーひと際きわ大きな巨きよ漢かんを見とがめて呼びかけた。巨漢は仮面をつけた顔を振り向かせてうなずいた。「それが何か」「昼ラン飯チタ時イムは頭領マスター不在と見受けられるが、統とう率そつがとれているか!?」「ああ。問題ない」「ならば先に出て、竜への誘導を頼みたい！　我ら秩序の番人は、最後まで砦に残る！」「承知した」たしか、リキエルといったか。仮面の巨漢が逞たくましい腕を振ると、人のかたまりがーいつ斉せいに動く気配があった。やはり昼ラン飯チタ時イムはまとまりがある。正直、秩序の番人でも、欠員と増員が相次いでいることもあって、とてもああはいかない。こけつまろびつ正門に殺さつ到とうする他の避難民に隊士が混じっているのを、ヨハン自身、何度も目もく撃げきしていた。そうした者たちはもとからの隊士ではないし、怒ど鳴なりつけても無む駄だだろう。限界なのだ。孤こ城じようにあてもなく籠ろう城じようして死戦し、思いがけず降下してきたエルデンに救われた。先行きは不ふ透とう明めいとはいえ、誰だれしも心の底から安あん堵どしただろう。そこにこの事態だ。いったん一息ついただけに、余計に衝しよう撃げきは重く、絶望は深かろう。使命を忘れて我先に逃げだす者を責める気にはなれない。その時間も手間も惜おしい。こうなったからには、できる者ができることをやるしかないではないか。

「総長……！」と人波をかきわけて走りよってくる隊士があった。

女だ。お下げ髪がみ。少女のようにも見える。アーニャ・クルチバ隊長。どうした、とは問わなかった。彼女は幼子を抱いている。カレルだ。「申し訳ありません、総長！　珐フオ瑠ール副長がつかまらないもので、ひとまずここへ……！」「いや──」ヨハンはクルチバからカレルを受け渡わたされた。カレルは泣きもせずに父親にしがみつき、じっとしている。まるで何もかも心得ていて、自分はこうするべきだと信じているかのようだ。ヨハンはカレルの頭を撫でて聡さとい子だと思い、これが親馬鹿というものかとひそかに短く笑った。すでに生も死も覚かく悟ごの上だが、生きたいと願い、生かしたいと祈いのってしまう。「──だめだ」ヨハンはクルチバにカレルを抱かせた。「すまぬ、クルチバ隊長。カレルを連れて珐瑠副長を捜さがしてくれないか。父より母のほうが必要だ。それに私にはやらねばならぬことがある」「……総長」「君も生きのびろ。きっとあの男が君に会いにくる」「い、いえっ、カタリさんは……というか、あの人のことは心配していませんから……」「行け」「は、はいっ！」クルチバは踵きびすを返した。カレルが彼女の肩の上からヨハンを見つめている。ヨハンは我が子の名を呼ぼうとしてやめ、ただ笑えみを浮うかべてみせた。カレルもにっこりと笑ってくれた。案ずるな。今こん生じようの別れではない。もしそうなったとしても、悔くいはすまい。今は母に抱かれにゆけ、我が子よ。できうることなら、おまえに穏おだやかな日々を贈おくりたい。晴れやかな日々を。明日あしたを。

06　どうなってもいい

「なんでこの俺が……！」ダリエロは毒づきながら十歳かそこらの餓が鬼きを真しん珠じゆ色の竜の前まえ肢あしに向かって放ほうり投げた。やってられねぇと今すぐ放ほう棄きして立ち去りたい。なぜそうしないのか。「──次から次へときやがるからだ！」休む暇ひまがない。考える間もない。自力で竜にしがみつける者はいい。這はいあがることができる者ならいい。しかしそうでない者もいる。しかも少ないわけでもない。だいたいは餓鬼だ。何しろこの竜はでかすぎる。腹が立つ。こんな生き物がこんなふうに存在しているというだけで。だがもちろん、ダリエロは理解していた。エルデンは崩ほう壊かいしようとしている。飛んできて背に乗れと声ならぬ声で言い放ったこの竜にすがる以外、助かる道はない。それがまた頭にくる。もたもたしている十四、五の少女の両りよう脇わきに手を

差しこんで「せいっ」と投げあげると、ダリエロは竜の顔を仰いだ。たまたまだろうが、竜は首を振ふり返らせてダリエロのほうに目を向けていた。一点の曇くもりもない磨みがき抜ぬいた極ごく上じようの宝石よりも美しい瞳ひとみを。まるで何もかもを見通しているかのようだ。高いところからすべてを見下している。超然としている。あの目玉をくりぬいてやったらどんなに爽そう快かいだろう。くりぬくっつっても一ひと抱かかえ以上ありそうだけどな。



　でけぇ。ひたすらでけぇ。圧あつ倒とう的だ。その身体からだの表面を覆おおっている真珠色のものは鱗うろこなのか何なのか、とにかく光こう沢たくがあってつるつるしている。遠目にはよくわからないが体毛があって、それを手でしっかりつかまないと、とてもしがみついていられない。とくに年端もいかない子供にとっては、やや平へい坦たんで安定性のある背中まで到とう達たつするのは大

仕事だ。

「はにゃらたーっ！」ミシーリャが十にもならなそうな餓鬼を担かついで竜の脚あしを駆かけあがってゆく。あんな芸当は誰にでも真ま似ねできるものじゃない。背中まで餓鬼を押しあげると、ミシーリャはこっちを見て得意げにニカッと笑った。「……へっ」ダリエロは鼻で笑い返してゆがんだ顔をいっそうゆがめた。竜め。何が竜だ。竜も糞くそもあるか。物だ。物だと思えばいい。「──ヘンドリク、アンガルセン、シャマニ、メツェルディ、チェリー！　てめぇら梯はし子ごになれ……！」「はぁッ!?」と腐れオカマフア野郎ギーが怒鳴り返した。「いくらあたいがこんなザマだからってねえ、梯子になれなんて言われてもなれるわけ──」「いいからなりやがれ！　一列になって、順々に餓鬼どもを持ちあげろ！　カイ、サイケングレンマイセルヒ！　それからミョーチ、白しろ妙たえ、ラギィ、レイジ、てめぇらもだ！」「了りよう解かい！」「ああ、そういうことですか。なるほど」「うるふぁい」「にゃはーん」「ダリエロ死ね！」「ふむ」「ＧＩＨＹＡ！　めんどいけど、しょうがねえからやってやるべよ！」「──くだらねぇ返事してる暇があったら、さっさと動け！　おらおらおらおらおら！　やるんだよ……！」

　一糸乱れずとはとうてい言えない、整然より雑然と、しかし素す早ばやく昼ラン飯チタ時イムの糞どもは動いた。ダリエロとリキエルが下から餓鬼やら墓ぼ穴けつに片脚を突っこんでいる年寄りやらをどんどん持ちあげ、竜の脚に適当な間かん隔かくを置いてとりついた野や郎ろう女め郎ろうどもに受け渡してゆく。あとはリレーだ。七面倒な作業は劇的に効率化され、高速化された。なんでこの俺が、とダリエロはふたたび思う。何度もそう思わずにいられない。「ナツコ、ヴィクトリア、てめぇらは先に登れ！　早くしろ！　ボダダグ！　ボンドとロロとトトを連れてけ！　クララ、祝ノリ花カ！　てめぇらはリリアを──」「ダリエロ……！」叫んだのはクララでも祝花でもなくリリアだった。あの誰よりも肝きもの据すわった女がそんなふうに声を張りあげるのを、今まで一度だって聞いたことがあるだろうか。ない。ダリエロは瞬しゆん時じに最悪の事態を想像して女を捜した。リリア。いた。クララと祝花もそばにいる。リリアはユーリィを抱いている。だが、もう一人いるはずだ。とっくに一人で走りまわれる年と齢しだが、この状況だ。クララか祝花に抱かかえられていてもいいはずだ。いや、あいつは鼻っ柱が強くて、何だって自分でできると主張し、実際、同い年の餓鬼と比べれば遥はるかに逞しい。馬鹿なくたばり方をした親父おやじ

よりもずっとしっかりしている。こんな世の中でもさぞかし長生きするだろう。ジョゼ。その名前は自分が考えたと昼ラン飯チタ時イムの誰もが言う。最初にジョゼの名を候補に挙げたのは自分だと。でも違ちがう。違うぞ、糞ったれ。俺だ。ジョゼってのは俺が考えた。

「リキエル……！」呼びかけると、糞仮面の糞半はん裸ら巨漢は打てば響ひびくように「ああ！」と返事をした。「──クララ！　ここはてめぇが捌さばけ！　リリアとユーリィはとっとと上がらせろ……！」「わかったわ！　さあ、リリア……！」「糞餓鬼め……！」吐はき捨てて、ダリエロは駆けだした。人の群れをかきわけ、人の流れに逆行して走る。無ぶ様ざまにおっ死ちんだ糞親父よりはよほど頭のいい餓鬼だが、たまにふらっと姿をくらまして周りの者たちを慌あわてさせることがある。とはいえたいていすぐに戻もどってくるし、余よ裕ゆうのないときに騒そう動どうを起こしたりはしない。今まではそうだった。図らずもはぐれたのだとしたら、きっとかなり動どう揺ようしているだろう。日ごろ生意気なことをぬかしていても、まだ幼いのだ。ダリエロは正門から銀の砦とりでに入った。番人どもの半分ほどはまだ砦の中にいて、避ひ難なんの誘ゆう導どうと介かい助じよや逃げ遅おくれた者の捜そう索さくにあたっているようだ。どいつもこいつも見分けがつかないが、知った顔があった。不気味な面を頭の後ろに回して、傷きず跡あとが目立つ素顔をさらしている。「おい、死神……！」「──貴様……昼ラン飯チタ時イムの」「餓鬼を見なかったか!?　背せ丈たけはこれくらいで髪はこのくらいの」ダリエロは腰こしの上と肩のあたりを手で示してから舌打ちをした。「こんなんでわかるわきゃねぇか！　いい！　邪じや魔ましたな……！」「待て！　貴様、まさか子供を捜しているのか」「悪わりぃかよ!?」「誰が悪いなどと言った！　砦の中は我が団が隅すみから隅まで捜す！　いずれ必ず見つけだし、外まで送り届ける！」「待ってられるか……！」

　あの馬鹿。どこに行きやがった、塵ゴミ屑クズめ。「ジョゼ……！」名を呼びながら、行く手の男を突き倒たおしかけて思いとどまる。「邪魔だ！　どきやがれ、糞が……！」「ひぃっ」邪魔くさいやつは悲鳴までうざい。ジョゼ。なんでこんなときに。てめぇらしくねぇぞ。てめぇはあの間ま抜ぬけな親父よりずっと聡いはずだろうが。誰もくたばっていいなんて一言も言ってねぇのにくたばりやがったてめぇの糞親父より、てめぇは上等なはずだ。親父と違って、てめぇは俺らを困らせたりしねぇはずだ。腹が立つくらい、てめぇはいい子だった。こんな世界でもしっかり生きてっちま

うんだろうと信じたくなるほど。ジョゼ。たしかにてめぇは親父には似ても似つかねぇ。だいたいてめぇの親父は踏ふみ潰つぶした缶かんみたいに不細工だったが、てめぇはまだしも見られる面ツラァしてやがるしな。ただ、似てるところもないわけじゃねぇ。たとえばてめぇが昼飯時うちの誰かに何か声をかける。それから周りの連中は気づく。そいつの様子がちょっとおかしいってことに。具合が悪いとか、愚おろかにもへこんでやがるとか。病気か何かになって寝ねこんでるやつがいると、てめぇは放っておかねぇ。まだ自分の面倒も満足に見られねぇくせしやがって、何くれと世話を焼きたがる。てめぇの親父もそうだった。犬いぬ猫ねこでもあるまいし、てめぇの糞親父に拾われたやつが昼飯時うちには何人もいる。そういうのはよせと俺は口を酸っぱくして言ったはずだ。それでいつか墓穴を掘ほる。他人のことはいい。てめぇとてめぇの母親と妹のことだけ考えてりゃいいんだ。

　もちろんジョゼ、てめぇは俺の言うことなんざ聞き入れねぇ。てめぇは頑がん固こだ。そこは親父譲ゆずりでも母親譲りでもある。まさしくだ。てめぇはまさしくあの糞クラニィとリリアの娘だ。ジョゼ、てめぇのことだから、何の意味もなくはぐれたりはしねぇ。そうじゃなく、てめぇは何かを見た。誰かを。そいつを放っておけないと思った。でも、リリアやクララや祝花には言えなかった。自分だけでなんとかしようとした。助けてやろうとした。

「ジョゼ……ッ！」声をかぎりに叫さけんで、ダリエロは足を止めた。どこだ。どこにいる。あたりを見まわす。昼ラン飯チタ時イムは第二支し塔とうにいた。そこから第一支塔方面へと進んで正門から外に出るコースをとった。ジョゼはその間にリリアたちから離はなれた。第三支塔は崩ほう落らくしはじめているが、第二支塔はまだ健在だ。──主塔。四つの支塔に囲まれて中央にそびえる主塔の外がい壁へきがだいぶ剝はがれ落ちている。その落下物が、第二支塔と主塔を繫つなぐ通路を直撃したらしい。通路は半はん壊かいしていて、瓦が礫れきが撒まき散らされ、折り重なっている。ひょっとして、誰か下した敷じきにでもなっているのか。瓦礫を除去しようとしているようだ。二、三十キルグラハムはありそうな石いし塊くれを持ちあげようとしている。あの小さな身体で。阿あ呆ほうめ。

「ジョゼ……！」ダリエロはすっ飛んでいって、ジョゼの手から奪うばいとった石塊を投げ捨てた。「何やってやがる……！　心配させんじゃねぇ！　言っとくが俺じゃねぇぞ、俺は当然、心配なんざしてねぇがな！　てめぇの母親やら何やらは──」

「ダリエロ！」ジョゼはダリエロの胸むな倉ぐらにすがりついた。「手を貸して！　人が埋うまってるの！　お願い、早く！」「放っとけ、そんなやつは──」「だめ！　そういうこと、わたしはできないの！　知ってるでしょ!?」「ふざけやがって……！」ダリエロはジョゼを押しのけて瓦礫をどけはじめた。人。人が埋まってるだと？　上等だ。たしかに埋まってやがる。見たところ、五十がらみのどうでもいいような男だ。塵ゴミ屑クズだ。こんな野郎のために指一本でも動かしてやるものかよ。冗じよう談だんじゃねぇ。やりたくてやってるわけじゃねぇ。やらなきゃジョゼが納なつ得とくしねぇことを知ってるからだ。知ってるでしょ、だと？　餓鬼のくせにいっぱしの女アマみてぇなことをぬかしやがって。ああ、知ってるさ。てめぇのことはてめぇが生まれた日から知ってるからな。糞餓鬼め。偉えらそうに人を顎あごで使いやがって。毒づきながら、ダリエロは力任せに瓦礫をとりのぞいてゆく。ジョゼが「そんなに乱暴にしないで！」だの「もっとやさしく！」だのとがなりたてる。そのたびにダリエロは「うるせぇ！」「黙だまれ！」と言い返しながら手を止めず、とうとう塵屑男を救いだすことに成功した。「おい、立てるか!?　無理だな。糞がフアツク──」「つかまって！」ジョゼが塵屑男を抱だき起こそうとする。ダリエロは「てめぇは引っこんでろ！」とジョゼを押しのけて塵屑男を引っぱり起こした。塵屑男はとりわけ腰から下をだいぶ痛めていて歩けそうにないが、咳せきこみながら礼を言ったくらいだからすぐに死にはすまい。死なれてたまるかよ。

「だりゅりぇろー！」とミシーリャが猛もう然ぜんと駆けてきた。「みっしー！」ジョゼが目を輝かがやかせて、ミシーリャはそのジョゼに抱だきついた。「にゃうりゃうみゃー！　じょれー！　ぷりぴぴぷりぽー！」「わうりゃうにゃー！　ぴゃるらー！」ジョゼはミシーリャ語を操あやつれる。ただ、ダリエロはミシーリャの言うことならおおかたわかるが、ジョゼのミシーリャ語は解読できない。しかしどうやらミシーリャには通じているようだ。まったくイカれてやがる、と思いながら、ダリエロはミシーリャに一声かける。「てめぇはジョゼを守ってやれ、ミシーリャ！」「うぉっちあー！　らおー！」

「ダリエロ」

　ジョゼがダリエロを見上げた。

　なんて上目遣づかいだ。

「ごめんなさい」

「──ッ！」何か言おうとして、言葉が出てこなかった。これだから餓が鬼きは。「いいから行くぞ……！」ダリエロは塵屑男を半ば担ぐようにして正門を目指した。急がないといけない。そんなことは誰だれだってわかる。一目瞭りよう然ぜんだ。何しろ地割れがひどい。地割れがあろうとなかろうと、地面が傾かたむいている。揺ゆれて、その傾き方が変わる。頻ひん繁ぱんに。刻々と。揺れはときおりゆるやかになる。ときに激しくなる。あるいは──急激に、突きあげる。

「……うぉ……っ!?」ダリエロは踏みとどまるのと同時に振り返った。ジョゼとミシーリャが消えていた。もし二人が本当に消えていたとしたら、ダリエロの心臓もそのとき消しよう滅めつしていたかもしれない。実際には消えてはいなかった。二人はいた。

　のみこまれようとしていた。二人の足あし許もとにできた、大きな裂さけ目に。

「悪ぃな」

　ダリエロは笑え顔がおで塵屑男を突き放した。俺は博愛主義者じゃねぇ。天てん秤びんが釣つりあうことはない。簡単に傾く。重いものは重くて軽いものは軽いのだ。軽いものはいくらでも捨てられる。微み塵じんもためらうことなく犠ぎ牲せいにできる。ダリエロは裂け目に飛びついた。裂け目の縁へりにかかっている、ミシーリャの手に。ミシーリャは左腕でジョゼを抱え、右手をのばして裂け目の縁になんとか指をかけている。「ぴりゅぷりぽるぽぱー……！」「今、引っぱりあげてやる！　ジョゼ！　てめぇはじっとしてろ！」「してるもの！」「ああ、そうだな、ついでに黙ってやがれ！」ダリエロがそう言うと、ジョゼはうなずいて唇くちびるをぎゅっと引き結んだ。聞き分けのいい餓鬼なんざ大嫌いだ。ダリエロはミシーリャの右手首を両手でつかむ。二人くらいなんてことはない。だいたいミシーリャは小こ柄がらだしジョゼは餓鬼だ。いける。いけるに決まってんだろうが。「──ぅおぉぉぉぉぉらああああああああああああああああ
あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　一気に引きあげると、ミシーリャはジョゼを抱えたまま走りだした。「だりゅりぇろー、はっぷないりょー！」「──わかってる！」

ダリエロも駆かけた。裂け目はさらに広がりつつある。地面が水平じゃないので判然としないが、どうも主塔も傾かしいでいるようだ。何人もが転てん倒とうして地割れに足をとられ、大きな裂け目に落ちてしまう者もいる。秩ちつ序じよの番人の女がいた。琺瑠。小さな子供を抱いている。あの女の息子か。息子を抱いて、それでも避難を指揮している。馬鹿め。ダリエロは怒ど鳴なった。「おいてめぇも逃にげろ、早く……！」

　琺瑠がこっちを向いて何か言った。その瞬間だった。

　ガンッッッッッッッッ……━と全身を殴なぐられたような衝しよう撃げき。全身？　違う。身体からだというか、この一帯だ。自分をふくめた何もかもがどでかいハンマーか何かでぶん殴られた。そんな感じがした。いったい何が起きた？　瞬間、わけがわからなかった。音がした。軋きしみ、潰れ、剝がれるような音が。それらの音が幾いく重えにも重なって聞こえた。ミシーリャがダリエロにぴったりと身を寄せていた。

　やべぇ。

　始まった。

　正門まではまだ距きよ離りがある。おそらく間に合わない。間に合わなくても、走れ。

　ミシーリャの襟えり首くびを引っつかんで足を前に踏みだそうとしたら、その右足が沈んだ。

　落ちる。

　マジかよ。

　ダリエロは「……へっ」と鼻先で笑って、ジョゼごとミシーリャをきつく抱きよせた。

「いいか、てめぇら。間ま違ちがっても心配するんじゃねぇぞ」

「……りょ？」

「ダリエロ……？」

「大丈夫だ」

沈む──いや、落下する感覚を味わいながら、ダリエロはミシーリャとジョゼの額に唇を押しつけて、俺もついに焼きが回ったかと自問した。いや。そうじゃねぇ。俺はそうしたいから、そうした。いつだってそうだった。ただそれだけのことだ。変わってねぇ。

俺は変わらねぇ。

俺は、俺だ。

銀の砦は潰ついえようとしている。銀の砦自体が陥かん没ぼつして、落下しつつあるのだ。

逃げられない。逃げ道はない。どこにもない。

ダリエロは空を仰あおいだ。不思議と色というものがない。

静かだ。

こんなにもやかましいのに、やけに静かだ。

静かすぎる。何だろうな。

恐怖。俺は怖こわがっているか。ねぇな。怖くなんざねぇ。これっぽっちもだ。阿呆なミシーリャはともかく、ジョゼにとっては気の毒な結末ってやつかもしれねぇけどな。これで終わりとなると短すぎる人生だ。もう分別もついてやがるし、もっと生きたかっただろう。男の一人や二人はくわえこんでから死んでも遅おそくはない。まあしょうがねぇ。どうにもならねぇことってのはあるもんだ。それは認めざるをえない。こうなっちまうとな。えらく殊しゅ勝しようじゃねぇか。そんな言葉が浮うかぶ。ダリエロ様ともあろう者がそれでいいのかよ。満足かよ。そんなわけねぇだろ。あたりまえだ。よくはねぇ。

抗あらがえ。

抗え。

抗え。

屈くつするな。噛かみつけ。引き裂け。

たとえ相手が運命であろうと。運命の姿が見えないのなら、この

身に齧かじりついてズタボロにしろ。この腕に何も抱いていなければ、そうしたさ。

　ミシーリャ。ジョゼ。てめぇらは毒だ。甘い、毒。

　俺は甘ったるい毒を呷あおってくたばろうとしている。それも悪くねぇってか？

　思ってねぇ。思ってやしねぇぞ、そんなことは。

「こい」とダリエロはミシーリャとジョゼを持ちあげて走りだそうとする。「こい！　行くぞおら、行くんだ！　行くんだよ……！」

　踏ふみしめた地面は、落ちているのか、浮いているのか。ひどく頼たよりなくて、これではとても走れやしない。銀の砦とりでは崩落しようとしている。それなのに、行く？　どこへ？

　知ったことか。とにかく行くんだ。走れなければ飛べばいい。

　ダリエロはそうしようとした。跳はねた。

　無様に跳とびはねて、それを見た。

　頭上に、影かげ。

　それは飛んできたのだ。俺と違って、あいつは飛べる。羽もないのに。黒い魔術士衣。癖くせのある髪かみの毛。下がり目を見開いている。あいつは叫さけぶ。「──ダリエロ……！」

「にゃりゅっ……」とミシーリャが言う。ジョゼは「ベティ⁉」とあいつの名を呼んだ。俺は「よう」と笑ってみせる。「遅かったじゃねぇか、ニセチチ。待ちくたびれたぜ」

　ベティ。昼飯時俺たちの魔術士。麗うるわしの〝垂ベテれイ・目ザ・のドウベルーピテングアィイズ〟。何が、麗しの、だ。糞くそでもして永遠に寝ねてやがれ。反へ吐どが出る。ベティ。大っ嫌きらいな女アマ。虫むし酸ずが走る。消え失うせろ。

「馬ば鹿か……っ！」ベティは急降下する。すさまじい速さでダリエロのところまで降りてきた。そして屈かがみこみ、不安定にも程ほどがある地面に手をついて、何をするつもりなのか。わからない。何せ魔術士のやることだ。わかるわけがない。訊きいたって無

意味だろう。それでもつい口走る。「どうするつもりだ……⁉」「あたしが支える……！」「ああ⁉」「見てなさい！　このあたしに、不可能はないのよ……！」「ハハ……ッ！」ダリエロは笑った。不可能はない、ときやがったか。言うじゃねぇか。グッときた。それでこそ、だ。今ほどこの女を犯おかしたいと思ったことはない。この女にブチこんで、かきまわしたい。めちゃくちゃにしてやりたい。やるんだろ？　めちゃくちゃなことを。とんでもねぇことをやりやがるんだろ？　やれよ。やってみせろ。想像を絶する芸当を。ベティ。てめぇにしかできねぇことを。変えろ、世界を。てめぇの力を見せつけろ。それがてめぇの魔術だ。

　ベティが声を張りあげる。「ぜんぶ出し尽つくす……！　ヴェルドゥレ……ッッッ！」

「おお……！」ダリエロは歓かん声せいをあげた。ミシーリャとジョゼも仰ぎよう天てんしているだろう。目をまん丸くしているはずだ。どれだけ丸くなっているか確かく認にんしたい気もするが、今はそれから目を離はなせない。ベティ。ベティ。ベティ。ベティの身体からあふれだす。それ？　それら、と言うべきなのか？　いずれにしてもそれは腕であり、脚あしであり、前脚であり、後脚であり、前ぜん肢しであり、後肢であり、指であり、頭部であり、尾おであり、胴どう体たいであり、それ以外の部分パーツであり、何なのか即そく座ざにはわからないものだ。人？　獣けもの？　悪魔？　ようするに何でもありなのだろう。ありとあらゆる、見たことのあるような、見たこともないような生き物の身体がベティからあふれだしている。たとえば肩かたから、脇わき腹ばらから、首から、胸むな元もとから、腹から、脚から、腕から、せりだす。生える。それだけじゃない。ベティの右肩から生えた昆こん虫ちゅうのそれのような脚から、毛むくじゃらの熊くまのそれのような前肢が飛びだして、その熊の前肢から人間の腕のようなものが突つきだしたりする。まさしく何でもありだ。ここで開かい催さいされているのは生き物の博覧会だ。しかも、きわめて大規模な。途と方ほうもない。とてつもない女だ。ベティ。もうてめぇだと見分けがつくのは顔くらいじゃねぇか。ベティはそれ以外のものに覆おおいつくされている。それらがダリエロを、ミシーリャを、ジョゼを包みこんで、壊こわれつつある銀の砦の基底に絡からみついている。しっかりと。

「ベティ」とダリエロは女の名を呼んだ。

　女の顔はすぐそばにある。様々な腕やら脚やら何やらにダリエロ

たちが潰つぶされてしまわないように、女は気をつけている。配はい慮りよしているのだろう。ダリエロたちはやさしくくるまれている。抱だきよせられて、ダリエロの鼻は女の鼻にくっつきそうだ。女はダリエロを憎にく々にくしげに睨にらんでいる。今この瞬間も、女は膨張しつづけている。ずりゅずりゅぐりょぐりょぶぎゅぶぎゅごりゅごりゅ音を立てて。ひでぇ音だ。背骨が凍こおる。卑ひ猥わいですらある。

「……ダリエロ」と女が言う。

　呻うめくように。唸うなるように。

「見るな」と。「……あたしをそんな目で、見ないで」と、せがむように。

「俺がてめぇをどんな目で見てるって？」ダリエロはそう問いながら右目を瞠みはって左目を細める。「見られたくねぇなら、俺の目を潰せ。やれるんだろ、ベティ。やれよ。やれ」

「あたしを見るなって言ってるの」

「いやだね」

　ダリエロは舌先で女の鼻をぺろっと舐なめた。

　女は顔を引きつらせた。驚おどろいたらしい。一瞬、膨張が止まった。

　ほんの一瞬にすぎなかったが。

「もっと見せろよ」ダリエロは囁ささやいてやった。「見せろ、ベティ。もっとだ。もっと。もっとやれ。たとえてめぇがどす黒い色した内臓の一いつ片ぺんに成り果てても、俺はじっくり眺ながめてやる。まばたきもしねぇで見ててやる。やれよ。できるんだろ。てめぇに不可能はねぇんだろ。口先だけじゃねぇんだろ。証明してみせろよ。やれ。俺が見ててやるからよ。やれ。どこまでもやれ。徹てつ底てい的にやっちまえ。やれよ、ベティ。やれ。やりきれ」

「……あんたなんかに言われなくたって！」

　そうだ、ベティ。

　てめぇはそれでいい。

07　九頭竜

「カタリ……！　リーチェ……！」と仲間の、友だちの名を呼ぶことしかできない。頭がいっぱいだ。何がなんだかわからないもので頭が、それから胸もパンパンになって、思うように息ができない。やばいよ。やばいやばいやばいやばいやばいやばい。終わりだ。エルデン。終わった。パズルみたいだ。かつてはすべての小片ピースがそろっていて、収まるべきところにきっちり収まっていた。そうしてエルデンという街を完成させていた。かつては。もうだめだ。エルデンのあちこちが、パズルの小片ピースが、抜ぬけ落ちている。矢や継つぎ早に落ちてゆく。面積でいったら、どれくらい残っているだろう。三分の二？　二分の一？　どっちにしても、間もなく二分の一を切るだろう。半分よりも少なくなって、三分の一に満たなくなるだろう。高度も下がっている。エルデンはなくなる。すっかりなくなってしまう。その瀬せ戸と際ぎわにある。違う。瀬戸際なんてとっくに踏み越こえている。終わりだ。本当に終わりなんだ。どうしてこんな。意味を探す。意味を探す意味なんかあるはずもないのに。

　カタリが、ベアトリーチェを肩に担かついだＳＩＸが、銀の砦を目指して疾しつ駆くしている。もうちょっとだ。もう少しなのに。銀の砦の前にはレインドゥラス・ヴィシュクラトーがうずくまっている。いや、かすかに身を起こして、十四枚の羽を動かした。その拍ひよう子しに、ヴィシュクラトーによじ登ろうとしていた人間たちが何人も滑すべり落ちる。転がり落ちてしまう。やめろ！　でも、やむをえないか。銀の砦が四つか五つに分かれて、それぞれが斜ななめに、あるいはまっすぐ、バラバラに沈ちん下かしようとしている。マリアローズの目にはそんなふうに見える。まだ避ひ難なんが完かん了りようしていないのに。中に人がいるのに。モリーだっているかもしれないのに。きっといる。モリーのことだから最後まで、少なくとも最後近くまでは残っているはずだ。「──もう……！」マリアローズは頭を振ふった。もう、何だよ？　何なんだよ？　泣きたいけど泣いてどうなるんだよ？　どうにもならない。「気をしっかり持つんだ、マリア……！」と、アジアンに強く強く抱だきしめられた。「ベティが行った！　きっと成算があるは

ずだヨ！　ベティは無む駄だなことはしない……！」「だけどさ……！」

　いくらベティがすごい魔術士でも、あれは。いくらなんでも、あんなことは。てゆうか、あれって──ベティが？　まさか。嘘うそだ。止まった。沈下が。ぐぐっ、ぐぐぐっと沈しずみこんでいた銀の砦が。持ちなおした？　あれをベティが？　どうやって？　どうでもいいか。いい。方法なんて何でも。ベティがやったのでもそうじゃなくてもいい。関係ない。

　ヴィシュクラトーは飛びたとうとしている。まだヴィシュクラトーに乗っていない人間たちは銀の砦に引き返そうとしているのか。どうもそうらしい。ヴィシュクラトーがうずくまっていた一帯が崩くずれ落ちはじめているので、そうするしかないのだ。アジアンが急上昇、急きゆう旋せん回かいして、右腕をほどいた。「──アルカーディア……！　つかまれ、ＳＩＸ！　半魚人クン、キミもだヨ……！」「Ｎｕｕｕｕｈｈｈ……！」「魚うおっしゃあァァ……ッ！」ＳＩＸが、カタリが、跳ちよう躍やくした。黒い管がのびてゆく。「っ……！」ベアトリーチェがＳＩＸにしがみついた。ＳＩＸが手をのばして黒い管をつかむ。カタリも。マリアローズは思わず「ひゃっ」と短い悲鳴をもらしてしまった。「クゥッ……！」アジアンは黒こく翼よくで激しく空を打ったが、それでも何メーテルも引っぱり下ろされた。一気にＳＩＸ、ベアトリーチェ、カタリ、三人分の重みがアルカーディアにかかったせいだ。地面に激げき突とつしなくてよかった。危ないところだった。これじゃ飛べない。長い距きよ離りは絶対に不可能だ。アジアンは三人を無理に持ちあげようとはしなかった。「行くヨ……！　スアアアアアアアアアアァァァァァァァァァァァァァ……！」引きずってゆく。ヴィシュクラトーめがけて。ヴィシュクラトーは飛びあがろうとしている。そうか。わかった。アジアンは投げるつもりだ。ヴィシュクラトーに向かって、三人を。届くの……!?　届け。届いてくれ。アジアンはアルカーディアを振りあげた。「ラアアアアアアアァァァァァァァァァァァァァァァ……！」

「Ｍｕ□Ｈａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」「きゃああああああああぁぁぁぁぁ……！」「魚ぎよほおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ……!?」

　三人が飛んでゆく。放物線を描えがいて、ヴィシュクラトーの前肢の付け根、肩のあたりへ。ＳＩＸは真しん珠じゆ色の竜の外皮に吸いつくように着地したが、カタリは「ほげ……っ」と衝しよう突

とつした。大丈夫なのかな、あれ。まあなんとか大丈夫だろう。あれはあれでけっこうしぶとい生き物だし。アジアンはアルカーディアを引っこめて腕の形にした。「……ハァッ」と大きなため息をついたところを見ると、アジアンなりに緊きん張ちようしていたのかもしれない。もちろんマリアローズも心臓が破れそうだった。でも、ベアトリーチェはＳＩＸから飛び離れて手を振っているし、カタリも起きあがろうとしている。なんとかうまくいってよかった。よかった……？　待って。よくない。よくないよ。ぜんぜんよくないってば。だって。

　心臓が冷たくなった。視界が細かく激しく震ふるえている。ダメだ。どうしよう。ダメだ。

「マリア……？」アジアンに名を呼ばれても、頭を振ることしかできない。声を出そうとする。振りしぼろうとしても、声が形にならない。まるで言葉を忘れてしまったかのように。違う。忘れてなんかいない。でも、口に出すのが怖こわい。──ユリカ。ロム・フォウ。アルファ。飛燕。銀の砦とりでのほうに向かっていた。最後に見たときは無事だった。あれからどれだけたった？　時間的にはそれほどじゃない。だけど状況は刻々と変わっている。

　悪くなっている。悪化の一いつ途とをたどっているとしか言いようがない。カタリたちでさえ危ないところだったのだ。ユリカたちに至っては、とてもじゃないけれど。忘れていたのか。今の今まで頭に浮うかばなかった。たとえ覚えていたとしても、何かできたのか。どうしようもなかったんじゃないのか。これで終わり？　もうユリカたちには会えない？　嘘だ。そんな。信じられない。信じたくない。振り返って確認しないと。そうするべきだ。もしかしたら平気かもしれないじゃないか。もしかしたら。奇跡的に。──心の中ではダメだとマリアローズは思っている。あきらめてしまっている。そんなことはない。そんなことは。マリアローズは唇くちびるをきつく嚙かんで振り向いた。全身から力が抜けた。アジアンがとっさに両腕で抱きすくめてくれなければ、すり抜けるようにして落下していたかもしれない。「──マ、マリア⁉　どうしたんだい、マリア⁉　マリア！　マリアァァ……⁉」

「……るさいっての」頭がぼうっとしている。夢じゃなきゃいいんだけど。いや、それはないはずだ。夢なんかじゃない。現実だと思う。けっこう距離があるので顔の造作まではわからないが、間ま違ちがいない。あれはユリカだ。飛燕にだっこされてしまっている。それからロム・フォウ。傍かたわらにはアルファ。トワニングもい

る。きゅーも。みんな青白い光に包まれて浮いている。なんで。どうして。超賢者モーグとエヴァンジェリンだ。きゅーのよしみで助けてくれたのか。もしくは、きゅーが頼たのみこんで助けさせたのかもしれない。

　もちろんうれしいのだが、喜びよりも安あん堵どのほうが何千倍も大きい。ほっとしてていいのかって気もしなくはないんだけど。何しろ、ヴィシュクラトーが上昇するごとに、ボロボロと人間がこぼれ落ちてゆく。その下の地面はもう崩れていて跡あと形かたもないから、空中で手脚をばたばた動かしているあの人たちは助からない。地表までまっしぐらだ。墜つい死しするしかない。救えない。誰だれにも。まだ死んでいないけれど、あの人たちは死ぬ。確実に。目をそらしたい。見たくない。「マリア……」アジアンがマリアローズの目をふさぐようにして頭を抱かかえこんだ。「……だから」マリアマリアうるさいってば。アジアンの腕をはねのけたいのに、どうしてもできない。死にゆく者たちがわめいている。聞きたくない。

　銀の砦はかろうじて外形を保っているが、少しずつゆっくりと降下している。中に残っている人たちもたぶん無事だろう。ベティ。あれはベティの仕し業わざなのか。銀の砦は持ちこたえているものの、防ぼう壁へきにも主しゆ塔とうにも支塔にもひびが、ひび以上の割れ目が入っている。そうした割れ目から何か多種多様な生き物の集合体みたいなものが飛びだし、のたうっていて、銀の砦を侵しん食しよくしようとしているかのようにも見えるが、おそらくそうじゃない。あれのおかげだ。あの巨きよ大だいというより膨ぼう大だいな異種キ混メ合体ラが、銀の砦を無理やり繋つなぎあわせて、ぎりぎりのところで崩ほう壊かいを食い止めている。ベティは魔術で異種キ混メ合体ラを使し役えきしているのか。それとも、ベティが異種キ混メ合体ラと化したのか。わからない。わかるわけないよ。

　サフィニアとトマトクンはなんとか〝竜ドラゴのニル・大ハイ公ヴエ爵リオン〟ゲルマニオン・ワッヅァール・パプティアン・ブリッケス・フォンドール・グェハブナスを抑おさえこんでくれているようだ。ただ、ベティが銀の砦に回ったぶん、地じ獄ごくの竜騎兵どもがフリーになった。竜騎兵どもはヴィシュクラトーに群がろうとしている。それから、こっちにも。放ほうっておいたら、竜騎兵どもはユリカたちのほうにだって行くかもしれない。「──アジアン！」「ああ、わかっているサ、スウィートハート……！」

「う……っ！」息が詰つまった。アジアンは急加速して、方向転てん換かんする。「──ラァァァァァァァヴ・マァァァァーック
ス……！」たわけたことをぬかしながら馬鹿一号が竜騎兵どもの間を翔かけると、それだけでやつらの肉体がまるで爆ばく発はつするように四裂八分された。斬きり刻まれた肉片、骨片、臓物、体液が空中に撒まき散らされる。速い。速すぎて、激しすぎて、正直、おっかない。ぐるぐるして気持ち悪いし。下ろしてほしい。どこでもいいから。頼むから、どっかに下ろして。言いたいけれど、言えない。言っている場合じゃない。こらえろ。我が慢まんはできる。それはなんとか。「──でも、このままじゃあ……！」よくない。ダメだ。竜騎兵。数がやばい。たくさんいる。うじゃうじゃ集まってくる。何だよ。何なんだよ。いくら馬鹿一号が奮戦して片っ端ぱしからやっつけてもきりがないじゃないか。じり貧ひんだ。「──ム……ッ!?」と、アジアンが突然、黒翼を羽ばたかせて停止した。「……え？　何……？」「アレは……」「あれ？　って──」

　どれ……？

　そう尋たずねる必要なんかなかった。間違いない。アレとはあれのことだろう。どう考えてもあれ以外にない。

　とんでもない音だ。鼓こ膜まくをすり減らすような超高音と身体からだの底を震わせる重低音が一いつ緒しよくたになっている。

　くる。

　なんか、くる。

　飛んでくる。

　近づいてくる。

　方角はたぶん──北。

　真北ではないが、おおよそ北のほうからだ。

　それはキイイイイイイイイイイイ
イィィィィィィィィィィィィィィィィィンとくる。

　ゴオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォオオオ
オォォォォォとくる。

でかい。

あれはでっかいって。

どんどんどんどんでかくなる。それはないでしょってくらい、ひたすらでかい。

最初は黒いのかと思った。どうも違うみたいだ。灰色というか、いやでも光こう沢たくがあるので、何色って言えばいいんだろ、あれ。とにかく、星みたいなきらめきをまとっている。形は、生き物っぽい……？　建物ではなさそうだ。建物が飛ぶわけないんだけど。いや、街が飛ぶくらいだから、建物くらい飛んだってまったくおかしくはないわけだけど。今だって銀の砦が浮いてるし。ちょっとずつ落ちていってるけど。何にしても生き物的な形をしている。もっとも、どんな生き物にも似ていないような。だって、たぶん、頭が何個もあるし。首が何本もある、と言うべきなのか。羽みたいなものがある。それから、手て脚あし。だけどおそらく四本じゃない。何だろう。いったい何なんだろ、あれ。「……九く頭ず竜りゅう？」

ふとマリアローズの頭に浮かんだ言葉だった。九頭竜。キング・グッダーが言っていた。九頭竜型超弩ど級きゅう飛ひ行くう戦せん艦かんって。ひょっとして、あれのこと？　なんじゃないの……？

「まずい……！」アジアンが黒翼で空を強く打って斜ななめ下に飛んだ。「速すぎるし、大きすぎる！　衝しよう撃げきが……ッ！」「──わふっ……！」マリアローズは変な声を出してしまった。衝撃。たしかに。きた。空気なのか。それか、音波とかそういうもの？　よくわからないが、押しよせてきた衝撃がアジアンをマリアローズごと翻ほん弄ろうした。さながら強風に煽あおられた木の葉だ。上も下も右も左もない。くるんくるん回った。これ大丈夫なの？　死んじゃわない？　たぶん空中だから助かった。そうじゃなかったらどうなっていたことか。

「……平気かい」と耳みみ許もとで囁ささやかれて、ヒャッと叫さけびそうになったけれど我慢した。マリアローズは「う、うん……」とうなずいて、自分──というか自分たちがどうなっているのか、まず確かめようとした。飛んでいることは間違いない。ヴィシュクラトーが右方向にいる。銀の砦は下だ。ほとんど真下。エルデンはよりいっそう崩壊が進んだ。もう半分なんて残っていない。いいところ三分の一だ。建物や地じ盤ばんがごっそりと抜けたあと

に、骨組みがのぞいている。骨組みというか、骨そのものだ。エルデンは九頭レガシ竜大オス・骨格ノ・インの上に築かれた。その黄ばんだ骨があらわになっている。九頭竜の大骨格。そしてあれはおそらく九頭竜型の飛行戦艦だ。光沢がある灰色の九頭竜。竜というよりも三尾び六翼よく八肢し九首の途方もなく大きな竜を象かたどった金属製の彫ちよう像ぞうに見えなくもない。いや、やっぱり見えないか。その六翼をふくめた身体の各所にある噴射管ノズルから何かガスのようなものを放出し、超弩級飛行戦艦ナ・インは浮ふ揚ようしている。ナ・インは胴どう体たいを垂直に近い角度まで立てている。四本の前肢は肘ひじまで持ちあげ、四本の後肢はだらりと垂らしている。真ん中が長くて左右のそれはやや短い合計三本の尾おは、先のほうがゆらゆらと揺ゆれている。九本の首は片時も止まらずにうごめいている。九対つい十八個の淡たん紅こう色に輝かがやく瞳ひとみで三百六十度全周囲を視野に収めようとしているかのようだ。ナ・インのたたずまいはあくまで動的で生命の脈動を感じる。生きているとしか思えない。金属メタルなのに。どう見ても機械マシンなのに、生きているみたいだ。



「何なんだよ、こいつ……」マリアローズが呟つぶやくと、ナ・インと目が合った──ような気がした。きっと思いすごしだろう。何しろ、九頭竜ナ・インには九対もの目がある。そのうちの一対がたまたまこっちを見ただけだ。そうに違いない。それにしても、なんて。

　なんてでかいんだ。

　頭のてっぺんから尾の先せん端たんまでだと、たぶん数百メーテルじゃきかない。一キルメーテル以上ありそうだ。とりあえずヴィシュクラトーやゲルマニオン、銀の砦よりもずっと大きい。ヴィシュクラトーやゲルマニオンでも頭がくらくらしてくるようなスケールなのだ。こんなものが動くなんておかしい。まして、飛ぶなんて。まあ、エルデンが飛ぶくらいだから、変じゃないのか。充分変だけど。速かったし。恐おそろしい速度だった。誰が。いったい誰が造ったのか。そうだ。生きているかのようでも、生きているはずがない。仮に生きているとしても、その身体の大部分は人工だろう。誰もクソもないか。決まっている。

「ゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラ……ッ！」

　ひどい、下品にも程ほどがある、聞くに堪たえない笑い声だ。言うまでもない。あいつだ。

「ゲェーハゲハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハァァァー……ッ！」

　下げ劣れつ。下げ衆す。傲ごう慢まんの極きわみ。その王おう冠かんは肥大して腐ふ敗はいした自うぬ惚ぼれでできている。キング・グッダー。高笑いしながら長すぎる髭ひげをなびかせて、王がナ・インに近づいてゆく。そのときマリアローズは気づいた。大地獄竜騎兵団。地獄の竜騎兵どもが撤てつ退たいを開始している。竜騎兵だけにとどまらない。ゲルマニオン。竜の大公爵も遠ざかってゆく。悪魔たちが、地獄の軍勢が退ひいてゆく。なぜ。どうして。考えるまでもないだろう。ナ・インだ。ナ・インが現れた。明らかにそれがきっかけだ。ナ・インはグッダーが呼びよせた──らしい。そう考えるのが妥だ当とうだろう。つまり、グッダーが敵を退けたということになるのか。

「永き眠ねむりから覚め余の許によくぞ参った、ナ・インよォ」キング・グッダーは右手をのばしてナ・インの九つある鼻はな面づらのうちの一つを掌てのひらで撫なでた。「褒ほめてつかわす。汝うぬの出番が予定よりやや早まりはしたものの、すべて想定内だ。これで！　逆ぎやく襲しゆうに転ずる準備は整うたわ！　ゲェヘラヘ

ラヘラァー……！」

　ＲＵＷＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＮＮＮＮＮＮＮＧ……。

　ナ・インの瞳に宿る淡紅色の光が明めい滅めつして、猫ねこが喉のどを鳴らすような音が鳴り響ひびいた。もっとも、もしナ・インくらいの大きさの猫がいたとしたらそれくらいの音を立てるだろうという大音量だから、遠えん雷らいのようにも聞こえた。返事をしたのか。意思があるのか。

「グッダー」

　でも、その声は違ちがう。ナ・インじゃない。

　どうやら彼女は半ば絡からみあっているナ・インの九首に埋うもれるようにして身を隠かくしていたか、隠れるつもりはなくても結果的に今まで姿が見えなかったらしい。首の中から進みでてきて、ちょうどグッダーが撫でている鼻面の手前で足を止めると、彼女のしなやかな右みぎ腕うでの先からブレードがのびた。その切っ先はグッダーの額にふれそうだ。というか、皮ひ膚ふが薄うすく裂さけて一筋の血が流れているので、ふれている。彼女は紅くれないだ。全身一分の隙すきもなく紅の装そう甲こうで覆おおわれている。なんだか前に見たときとは違う。だいぶ違うと言ってもいいかもしれない。彼女は変わった。形態だ。依い然ぜんとして人に似ているけれど、人とは似ても似つかない。腕や脚や胴どうの太さや長さのバランスだけじゃない、関節の位置、数、曲がり方まで人間からかけ離はなれている。━剣けん聖せいヴァン・ヴラドＸＬ〝モータルレッド〟。

「少し口をつぐんでいろ、グッダー。貴様の声は相変わらず耳みみ障ざわりだ」

「りりぃ」キング・グッダーは目をすがめた。次の瞬間、その両眼からピンク色の光線が放たれて━え、マジ!?　と思わずにいられなかった。だって、狙ねらったよね？　りりぃに向かって光線撃うちやがったよね？　ピンク色の光線はどこまでもどこまでものびて空気を灼やいた。当たらなかったのは、りりぃが回かい避ひしたからだ。よけなければ命中していた。

　りりぃは今、キング・グッダーの後ろにいる。マリアローズの動体視力ではとらえられない速さで移動したのだ。りりぃのブレードはキング・グッダーの首筋に突つきつけられている。その気になればりりぃはキング・グッダーを殺せるだろう。殺せる──はずだ。あの距きよ離りだし、殺せないわけがない。それなのに、キング・グッダーは「ゲッヘッヘッ」とまた笑いだした。「挨あい拶さつ代わりのグッダー・ビームではないかゲァッハッハッ。まったくもって冗じよう談だんが通じぬおもしろみの欠片かけらもない無ぶ粋すいな女であることよグヒグヒヒグフッ」

「たしかにあたしは冗談を嗜たしなまない。挨拶代わりに貴様の首を刎はねようか、グッダー」

「やれるものならやってみるがいい」キング・グッダーの髭が、髪かみの毛が波打ちはじめた。その両眼から、鼻の穴から、口から、耳から、赤や黄色、オレンジ色の光がもれて揺らいでいる。紛まぎれもない戦せん闘とう態勢だ。どこからどう見ても一いつ触しよく即そく発はつだ。二人がおっぱじめたら、間違いなくとんでもないことになる。世界の半分がぶっ壊こわれたとしても驚おどろかない。そうなったら、マリアローズも当然、ぶっ壊れるほうの世界の半分にふくまれるだろうから、驚く前に死んじゃうだろうし。死んだら驚くこともできないし。でもさいわい、そんなことにはならなかった。りりぃがブレードを引いたのだ。「──あの馬鹿はどこにいる」

「ヌゥ……？」キング・グッダーは首をかしげて、右の拳こぶしで左の掌を打った。「──アァ。余としたことがすっかり忘れておった。彼あ奴やつか。彼奴はな。まだ余の王宮におるわ」

08　姉弟

「やっぱりだ」男は満面に笑えみをたたえて、その笑みがあふれてしまわぬように堰せき止めるかのごとく片眼鏡モノクルのフレームを右手の中指と親指で押さえた。「やっぱりきてくれた。姉さん。必ずきてくれると思ってましたよ。ぼくはね。信じてたんです。こんなふうになっても姉さんのことは、姉さんのことだけは、変わらず信じられるんだな。なぜだと思いますか、姉さん」男の左手は膝

ひざの上で丸まっている猫の喉を撫でている。男の視線の先にはモニターがある。モニターはこの部屋の壁かべのほぼ全面に嵌はめこまれていて外の景色を映しだしている。男と猫はエルデンの中央に位置するシャイニングググローリーパレスの中心、玉座の間にいる。それでいてまるで外にいるかのようだ。しかしモニターの一部はそこだけ四角く切り抜かれたようになって別の画像を映している。砲ガン金色メタルの九頭竜と傲慢な王と紅の装甲に身を包んだ優美な女の姿を男は凝ぎよう視ししている。正確に言えば男は女しか見ていない。他のものは眼中にない。「愛ですよ、姉さん。口くち幅はばったいようですが、こう言うしかないんだな。愛としか表現できない。愛だ。愛。どこまでも自分をつくりかえていって、それでも残ったものが一つだけ。あなたへの愛だ。この愛だけは変わらないんだな」

　昔々あるところに一組のきょうだいがありました。姉は弟を愛し弟は姉を愛していました。きょうだいはいつも二人でいました。終末が迫せまった世界ではどこへ行くのにも危険がつきまといました。だから二人はいつだって二人でいました。二人は世界が終わりゆくさまを眺ながめました。とりわけＡＤ兵器と呼ばれる圧縮爆ばく弾だんによる破は壊かいは圧巻でした。仕し掛かけられたスーツケースほどの爆弾の起爆装置が作動するとまず拡かく振しんという現象が起こってわずか数秒の間に半径何キロもの球状の圧縮フィールドが形成されます。これを真球といいます。真球が臨界に達するといよいよ圧縮が始まります。真球内のすべての物質が真球の中心に向かって加速しながら直進するのです。真球の中心は疑ぎ似じ特異点です。その場所でありとあらゆる物質が衝しよう突とつします。そうすることによって核かく融ゆう合ごうが引き起こされるのです。この核融合反応によって発生する大量のエネルギーはどんな花火よりも壮そう大だいで美しいのです。何しろ、それは力そのものなのですから。ああやってぼくもいつか跡あと形かたもなくなっちゃうんだろうなと弟は姉に何度も言いました。そのときはあたしもーいつ緒しよだと姉は弟に言ったものです。二〇三〇年代に生みだされたとされるＡＤ兵器は各国の軍だけでなくテロリストたちも所持するに至っていました。世界は終末兵器の封ふうじこめに失敗したのです。何か要求をして聞き入れられなければ吹ふっ飛ばしてやると考えて実行する者たちが現れると、ひとびとが一生懸けん命めい一段ずつ上がってきた階段はあっさりがらがらと崩くずれたのです。

　昔々あるところに一組のきょうだいがありました。姉は弟を愛し

弟は姉を愛していました。心が凍いてつく夜は姉が弟を抱だきしめて眠りました。涅槃NIRVANAに解脱DIVEすればありとあらゆるもの、世界に存在するもの、かつて存在したものが再現され、存在するかもしれなかったもの、存在しそうにないものまでつくりあげられていましたが、姉のぬくもりだけはここにしかないものだと弟は信じていました。世界は壊れていましたが、弟は平気でした。一時は一進一退のようにも思えた気温の上昇があるときを境にして箍たがが外れたように歯止めがきかなくなって、農作物が大だい打だ撃げきを受け、感かん染せん症しようが広まり、数えきれないほどの人がばたばたと死んでいっても、弟は平気でした。北極の氷が失われ、南極大陸の巨きよ大だいな氷ひよう塊かいがどんどん分ぶん離りして、グリーンランドの棚たな氷ごおりも大半がとけてしまい、海水面が上昇して沿岸の都市という都市が水すい没ぼつしても、弟は平気でした。トーキョーもウォール街もマンハッタンもシンガポールも半ば海にのみこまれてしまい、大勢が避ひ難なんを余よ儀ぎなくされ、避難民は増加の一いつ途とをたどっていましたが、弟は平気でした。貪むさぼる土地が減るほどに人間が減ることはなく、ひとびとは残された富をさかんに奪うばいあうようになりましたが、弟は平気でした。ついに一部のひとびとは半永久的避難所Permanent Havenに逃にげこむことになり、きょうだいもその有資レジス格者トラとなりましたが、弟にとってはそんなことはどうでもよかったのです。だって、姉と一緒にいられるのですから。弟は姉を愛し姉も弟を愛していたはずなのですから。

「姉さん。姉さん。姉さん。きてくれると思ってましたよ、姉さん」男は肩を震ふるわせて低く笑う。「ぼくにはわかるんだ。たった一人の姉さんのことだから、わからないはずがないんですけどね。姉さん。あなたのことは手にとるようにわかる。ぼくほど姉さんのことを理解している者は誰だれも──」と、男は天てん井じようを仰あおいだ。部屋全体が揺ゆれ、軋きしむような音がして、粉ふん塵じんが降ってきたのだ。見れば、モニターが張りめぐらされている天井に亀き裂れつが入っていた。天井だけではない。壁や、床ゆかにも無数のひびが入っている。「……まずいな」と男はひとりごちてかすかに首をすくめた。「ひどいですよ、グッダー。ヴィシュクラトーも。ぼくを置いていくんだもの。早く迎むかえにきてくれないと、ここごと下に落っこちちゃうかもしれないな。まさか、ぼくのこと忘れてないですよね……？」

09　bon voyage.

　めまぐるしくて、頭が追いついていかない。でも最悪の状況は脱だつした―ような気がする。たぶん。エルデンは遠ざかり、ヴィシュクラトーと銀の砦とりで、それからナ・インは地上に降りている。ヴィシュクラトーから下りた人々と銀の砦内に残っていた者たちが順次、ナ・インに乗りこもうとしているわけだから、そう考えてもいいんじゃないかと思う。

　ナ・インの横っ腹には四角い穴があいている。開閉できる仕組みになっているから、穴という表現は正しくないか。そこと地上との間に橋が架かけられていて、人々はその橋を渡わたってナ・インの中へと入ってゆく。空中からキング・グッダーが見おろしているので、みんな緊きん張ちよう気味だ。やたらと威い圧あつ的な眼光だし。見ているのだが見ていないような感じもあるし。人間を人間と見なしていないというか。マリアローズは橋の手前で交通整理をしながら、ときおりキング・グッダーを睨にらみつけた。この九く頭ず竜りゆう型超弩ど級きゆう飛ひ行くう戦せん艦かんナ・インは間違いなくキング・グッダーの所有物だ。人々をナ・インに搭とう乗じようさせるのもキング・グッダーの意思だ。キング・グッダーがそれを許さなければ、人々はここに置き去りにされる。エルデンの残ざん骸がいがそこかしこに散らばり、バラバラになった銀の砦が無残な姿をさらしているだけの山中に。大地獄竜騎兵団やゲルマニオンは去ったし、悪グラ魔ンヴ大エリ公オンアーマンも行方知れずだが、いつ悪魔たちが引き返してくるか知れない。そうなったら、力なき者たちは終わりだ。人々の生せい殺さつ与よ奪だつはキング・グッダーが握にぎっている。キング・グッダーが右を向けと言ったら右を向くしかない。左を向けと言ったら左を向かないといけない。這はいつくばれと言われたらそうせざるをえないだろう。この状況が腹立たしい。頭にきてしょうがないけれど、どうしようもない。ただむかつくだけじゃない。訝いぶかしいし、不安なのだ。キング・グッダーは人助けになんか興味がないだろう。だったら何を目もく論ろんでいるのか。

　どうせろくなことじゃない。気まぐれに無む駄だなことをするようなタイプとも思えないし、キング・グッダーはきっとマリアローズたちを何かに利用しようとしている。そのためにナ・インに収容しているのに違いない。わかっていても、今はとりあえずナ・インに乗るしかないのだ。他ほかに生きのびる手段はない。超最低ＳＵ

ＣＫ。本当に、本当に、超最低ＳＵＣＫだ。

　ＺＯＯの全員をふくめた生存者が無事ナ・インに乗りこんだことを確かく認にんしてから、マリアローズはトマトクンとサフィニア、秩ちつ序じよの番人のヨハン・サンライズ総長や幼子を抱だいている琺フオ瑠ール副長とともに橋を渡った。マリアローズたちが渡りきると橋がひとりでに収納され、ナ・インの横っ腹にあいた四角い穴━搭乗口も勝手に閉へい鎖さされた。ナ・インの中は天井も壁も床も鈍にぶい光こう沢たくのある金属製で、床に青く光る線が走っていた。どうやらその線に沿って進めばいいようだ。通路の幅はばはナ・インのサイズからすると広くない。せいぜい四メーテルといったところだろう。天井もさして高くないし、圧あつ迫ぱく感かんがあって息苦しい。かすかに身み震ぶるいをして、嫌きらいだなとマリアローズは思った。好きにはなれそうにない。

「しかし、ナ・インがな」とトマトクンが壁をこんこん拳の甲こうで叩たたきながら呟つぶやいた。「こんなふうになっちまうとは。グッダーも罪作りなやつだ。ノ・インをエルデンの土台にしたって聞いたときもちょっと驚いたもんだが。あいつはどこまでナ・インとノ・インをこき使えば気がすむんだ。死んじまったんだから、ゆっくり休ませてやればいいのにな」

「……もとは竜、だったんだよね」マリアローズはぐるっと通路を見まわした。「これ」

「ああ」トマトクンはうなずいた。「そうだ。九頭竜ナ・インとノ・インは、ずいぶん前に竜りゆう穴けつと呼ばれていた巨大な異界の扉とびらからこっちの世界に入りこんできて、さんざん暴れまわった兄弟竜だ。竜穴もナ・インとノ・インがこじ開けたとかって話だけどな。そのへんはよく知らんが。それをグッダーのやつがぶっ倒たおして服従させた。というか、呪のろいだか何だかで縛しばったらしい。それ以来、ナ・インとノ・インはグッダーの忠実な手下になった。まあ、もともと魔ま導どう兵へいくらいしか友だちがいないやつだったからな、あいつは。そうとう自じ慢まんげだったし、ナ・インとノ・インには、やつなりに思い入れがあるのかもしれん」

　マリアローズはサフィニアと目を見あわせた。サフィニアは何て言っていいのやら、みたいな表情を浮うかべているし、マリアローズもきっと似たような顔をしているだろう。ともかく、キング・グッダーに魔導兵くらいしか友だちがいなかったというのは納なつ

得とくできる。てゆうかそれって友だちとは言えないと思うけどね。ナ・インとノ・インという竜だって、無理やり魔術で従わせただけなら、忠実っていうのとは少し違ちがうだろうし。なんにしても、見たとおりそんなふうにしか他者と関係を結べない男なのだ、キング・グッダーは。

「だけど」マリアローズはちらっと横目でトマトクンを見た。「そんな男と仲間だったこともあるんだよね、トマトは──てゆうか、トマトも、かな。前の大戦……のとき？」

「仲間じゃない」トマトクンは大おお袈げ裟さに顔をしかめた。「たまたま同じ側に立ってたってだけのことだ。グッダーはあのころからジュジとつるんで何か画策してたみたいだ。俺は興味がなかったから、極力関かかわらなかったが。そうか。ジュジとは友だちなのかもな」

「なんか、すっごくいやぁーな組みあわせ……」マリアローズは首をひねった。「……だけどさ。仲間じゃないにしても同じ側に立って、一緒に戦ったりしたわけでしょ？　で、今回もそういう流れだよね。少なくとも、今のところは。言い方は悪いけど、結局のところ、キング・グッダーとジュジはトマトをうまく利用してるってことにならない？」

　トマトクンは片方の眉まゆを吊つりあげて「むう……」と低く唸うなり、「愉ゆ快かいじゃないな」と言ったきり黙だまってしまった。サフィニアがトマトクンの腕うでをこわごわとさすっている。サフィニア、がんばってるなあという思いを禁じえないけど──それどころじゃないよね。

　通路は何度か折れて、その先は行き止まりだった。と思ったら突つき当たりの壁が上下に割れて、その向こうに広間が現れたのでびっくりした。広間は幅が十メーテル以上あって、奥行きは見当もつかない。広間というよりも太い通路と呼ぶべきだろうか。床に一・五メーテル幅くらいの溝みぞがあり、大勢がそこに足を下ろして座っている。ごろ寝ねしている者もたくさんいる。アサイラムの医術士たちに治ち療りようしてもらっている傷病者もいた。安あん堵どの色はうかがえるものの、くつろいでいる人はさすがにいない。くつろげる雰ふん囲い気きじゃない。

「トマトクン！　サフィニア！　マリアローズゥッ！」

　カタリが駆かけよってきた。一人じゃない。カタリはお下げ髪がみの女の手を引いている。アーニャ・クルチバだ。

　アーニャはマリアローズに目礼してからヨハンと珐瑠に向かって頭を下げた。「……そ、総長。その、あの、ええと、これは……」

「いい」ヨハンは短くそれだけ言ってそっと笑ってみせた。へえ……こういう笑い方もできる男なんだ。いろいろ苦労して変わったのかな。あとは子供ができたせいとか。

　珐瑠に抱かれている幼子がマリアローズのほうを見て、にっこりした。そんな笑え顔がおを向けられると、ついこっちも笑ってしまう。

　カタリが肩をすくめて前のほうを指さした。「ユリカとトワニングは、アサイラムの医術士らと一緒に怪け我が人なんかを看みとるで。ピンプとハニーメリーも手伝っとる。一応、あれやな。飛フエイ燕ヤンもやな。それからロム・フォウは──」

「やあ」とロム・フォウが歩いてきて手をあげた。アルファときゅーを従えている。

　ユリカやトワニング、ピンパーネル、ハニーメリー、おまけに飛燕の姿も遠くに確認できた。みんな先にナ・インに入ったので無事だということはわかっていたのだが、やっぱりこうやって顔を見ると安心する。

　ヨハンと珐瑠は離はなれていったが、アーニャはどうするのか。もじもじしながらカタリの後ろに隠かくれている。まあ一いつ緒しよにいたいよね。なんてゆうか、ＺＯＯうちの半魚人なんかで本当にいいなら、一緒にいてくれるんだったらそうしてくれたほうがありがたいみたいな気持ちもなくはないし。いつどうなっちゃうかわからないわけだから。

「ああ、それからアジアンのヤツはな──」

　カタリが言いかけたところでマリアローズは耳をふさいだ。「あーなんにも聞こえなーい聞きたくなーい」

「なんでやねん……」

「そろそろ……素す直なおになったほうが……」

　サフィニアにまでそんなことを言われて胸がギリギリした。

「や、素直になるとかぜんぜん意味がわからないんだけど。僕はもともとこれ以上ないくらい素直だし……」

「聞こえとんのやんか」

「うっさい、半魚人。今すぐその魚口をぱくぱくさせるのやめないと後こう悔かいすることになるってゆうか後悔なんてできないよね」

「せやな。機能的にな。後悔っちゅうのんは、けっこう高度なアレやさかい──って、わしかて後悔くらいできるわッ。性しよう分ぶん的にそないに過去を悔くいたりはせえへんけどもッ」

「あの」とアーニャがカタリの肩かた越ごしに突き刺さすような視線をマリアローズにそそいできた。「前々から思っていたんですけど、いくら同じクランの仲間とはいえ、カタリさんに対する侮ぶ蔑べつ的な言動はもう少し控ひかえていただけませんか」

「あ……ごめん。ついノリで……」

「ノリにはええノリと悪いノリっちゅうのんがあってやな！　そうゆうのんは悪ノリっちゅうんやで！」

「だから、謝ってるでしょ。きみと違って、僕は後悔も反省もちゃんとできるから、反省するよ」

「おうッ。反省せえや！　わしにはとうていできへんけどな──って、なんでやねん！」

「カタリさんもノリツッコミはやめて。上手じゃないし」

「……へ、へい。えらいすんまへん……」カタリは深く深くうなだれた。

　アーニャ、怖こわい。

「なんか、疲つかれたな……」思わずぼやいたら、きゅーがすりよってきた。くっついてもいいということみたいなので、マリアローズは甘えさせてもらうことにした。

　きゅーのもふ毛に半分顔を埋うずめるようにして、トマトクン、サフィニア、カタリ、アーニャ、ロム・フォウ、アルファと列をなして歩いてゆくと、モリーに出くわした。

　モリーはアサイラムの関係者に指示を出したり、自ら医術式を施ほどこしたりで、かなり忙いそがしそうだった。それで軽くハイタッチを交かわしただけですれ違ったのだが、そのあとでしっかりおしりをギュウッとつかまれた。

「──モリー！　ちょっと！」

「相変わらずいいケツしてるわねえ。そのケツに顔を突っこんで眠ねむりたいわ」

「……今度ね」

「いいの？」

「いっ、いいわけないしっ。単なる言葉の綾あやっていうか、やっぱり今のはなし！」

「ケチ」と言って、モリーはほっぺたをかわいらしく膨ふくらませてみせた。

　まあおしりはアレだけど、だっこくらいはしてあげたいな。
ぎゅっと抱だきしめて、ゆっくり眠らせてあげたい。

　果たして、そんな余よ裕ゆうのある日がいつかやってくるのだろうか。

　もちろんやってきてほしいが、絶対やってくると信じることはできないというのが正直なところだ。

　まだ若い男に医術式を施していたユリカが頭を振ふってため息をついた。治療の甲か斐いもなく、息をひきとったらしい。トワニングが手当てをしている番人は左腕と左脚あしをそっくり失っている。見慣れた光景ではあるが、凄せい惨さんだ。その隣となりで平然と談だん笑しようしている者たちを誰だれも奇き異いに思わな

い。異常だ。

　何もかもが壊こわれはじめたときから異常が常態になって、みんなそれに慣れきっている。慣れたところで身体からだは傷つくし、心だってすり減るのだ。

　どこまで耐たえられるだろう。限界なんて、もうとっくに超こえている。終わりが見えないから余計につらい。出口がないトンネルに閉じこめられているようなものだ。ここでまだ息をしている者たちは、幸運にも落らく盤ばんに巻きこまれて死ぬ羽目には陥おちいらずにすんだ。でも、いずれ空気がなくなって窒ちつ息そく死しすることは目に見えている。

　ふとしたときに考えてしまう。どうせ一人残らず息絶えるのだ。だったら、なんでこんなに必死になって生きのびないといけないのか。これ以上苦しみたくない。早く楽になりたい。そんな思いに一度もとらわれたことのない者のほうが稀まれだろう。それでもどうして踏ふみとどまっていられるのか。

　一人の老ろう婆ばを中心にして固まって座っている昼ラン飯チタ時イムの連中を目にして、マリアローズはあらためて思い知らされた。

　ひとりじゃないからだ。

　昼ラン飯チタ時イムほどバラエティーに富んだ人材をとりそろえているクランは、たぶん他ほかにはない。一見、まったく共通点がなさそうな男女が車座になって、話をしたり小こ突づきあったり、罵ば声せいを浴びせあったりしている。

　仲間がいるからだ。自分のことを見てくれる、自分の声を聞いてくれる者がいるから、崖がけっぷちで踏みとどまれる。

　ここには孤こ独どくな者はいない。孤立していた者は一人の例外もなく命を落としてしまった。比ひ喩ゆではまったくなく、完全に実際的な意味で、人はひとりきりでは生きられない。それは真実なのだ。

「……力をあわせるしか、ないんだ」マリアローズはきゅーのもふ毛に顔を押しつけて、魔術士が呪文を唱えるように言った。「生きていくためには、力をあわせるしか。そうしないと、一秒だって生

きていられない。きっと、生きていたいとも思えない。生きてたって意味がないんだ」

「くう」ときゅーがうなずいてマリアローズを抱だきよせた。涙なみだが出そうになった。さらにロム・フォウが背中を抱いてくれたものだから、こらえきれなくてほんの少しだけ泣いてしまった。

「マリア……」

　サフィニアに呼びかけられて、マリアローズは目の周りを指でぬぐいながらきゅーのもふ毛から顔を上げた。

「うん。大丈夫」

「それは……わかってる」

　サフィニアは微笑ほほえんでそう言ってくれた。サフィニアは完かん璧ぺきに理解してくれている。サフィニアが、仲間たちが、友だちがいるから、僕は平気なんだって。みんながいてくれるかぎり、僕はたとえこの先うっかり死んでしまったとしても、大丈夫なんだってことを。

「ふむ……」とトマトクンが鼻を鳴らして長すぎる髪かみを揺ゆすると、ポニーテールにしてあったのがほどけてしまった。髪を結ゆわえていた紐ひもが切れるか何かしたのだろう。とっさにアルファが「うぉん」と吠ほえ、サフィニアが慌あわててトマトクンの髪を抱きしめるようにして押さえた。

「サフィニア」ロム・フォウは目め許もとをゆるめた。「今度はきみが結んであげるといいよ」

「はい」サフィニアは迷うそぶりを見せずに即そく答とうした。

　ひとりじゃない。なんてすごいことなのだろう。

　それだけで事足りるのだ。ひとりじゃない。

「サフィニア」と車座の中からベティが立ちあがった。服装が前とは違ちがう。フリフリヒラヒラしたやたらとかわいらしい服を着ている。昼ラン飯チタ時イムの中に似たような服を着ている女性がいるから、たぶん彼女の服を借りたのだろう。ベティは、こんな言い方はどうかと思うけれど、異種キ混メ合体ラの怪かい物ぶつと化し

て銀の砦とりでを繋つなぎ止めた。あれで服がダメになってしまったのだ。「紹しよう介かいするわ。こちらがかの有名な女め豹ひょう。会ったことがあるかもしれないけど」

「女豹っちゅうたら──」サフィニアじゃなくて半魚人が目を剝むいた。「あの女豹やな。オークリッド首長国の姫ひめ様で、シノビなんかの特とく殊しゅ戦術を生みだした稀き代たいの武将にして戦術家、戦場の女豹！　故く国にを出しゅつ奔ぽんしたあとは各国の反政府組織なんかを支し援えんして名を高め、やがて引退──伝説と化したかと思いきやッ！　ラフレシア第三帝てい国こく軍の侵しん攻こうを食い止めるべく復帰して縦じゅう横おう無む尽じんに大だい活かつ躍やく、獅子し奮ふん迅じんの働きを見せたものの、そうはゆうても彼ひ我がの戦力差は圧あつ倒とう的！　武運つたなく行方知れずになってしまいよった、あの女豹……！」

「はん。よしとくれ」車座の中央で片かた膝ひざを立てている老婆がしゃがれた声を出した。「その名はとうに捨てた──というかねえ。端はなから名乗ったこともない。人が勝手に呼んだ名さ。あたしはただのオトミ。どこまでもいったって、オトミ以外の何者でもないんだよ」

「あ」マリアローズはぱちぱちと目をまばたかせた。「……ほんとだ。オトミさんだ」

「だからそう言ってるだろうが。馬鹿なのかい。このババアより耄もう碌ろくしちゃ終わりだよ」

「──オトミさん」アジアンがこほんと咳せき払ばらいをした。「どうも誤解があるようだネ。マリアは馬鹿じゃない。むしろ頭の回転が速いほうだヨ。そこは間違ってほしくないのサ」

　オトミはアジアンをギロリッと睨にらんだ。「何だ、大将。馬鹿はあんたのほうかい」

　アジアンが困ったような顔をして、昼ラン飯チタ時イムが沸わいた。「しかしねえ」とオトミさんはしわくちゃの額を掌てのひらでこすった。「こうなっちゃあ冗じよう談だん抜ぬきであたしはただのババアだよ。次から次へとわけのわからないことばかり起こって、古びて萎しなびた脳のう味み噌そがさっぱりついていきやしない」「心配するんじゃねぇ」とチグハグなほど顔がゆがんでいる男がオトミの肩を叩たたいた。昼ラン飯チタ時イムの重じゅう鎮ちん

ダリエロ。その背中に「うにゃぷりゅりぷぷー」とか謎なぞなことを言いながらまとわりついている袖そでの長い服を着ている女の子はなんていったっけ。ミリーシャ？　ミシーリャだったかも。「頭がついていってねぇのはべつにクソババアだけじゃねぇ。てめぇが年老いてるせいじゃねぇってこった」「ハッ」オトミはダリエロの手を振りはらった。「偉えらそうに、腑ふ抜ぬけたことぬかしてるんじゃないよ。このババア以外もついていけないんだったら、なお悪いじゃないか」「……チッ」ダリエロが返事をする代わりに舌打ちをして肩をすくめてみせると、また昼ラン飯チタ時イムの男女がどっと笑った。こんな状況なのに、この人たちは明るい。アジアンが昼ラン飯チタ時イムの面々を──仲間たちを、目を細めて見つめている。馬鹿一号が何を考えているのかなんてわからないが、ちょっと誇ほこらしげだ。

　乗りきるしかないよね。うん──とマリアローズは一人うなずいた。果ては見えない。山を登るとまたその先に山があって、その向こうも山で、本当にきりがないけれど、とにかく歩みを止めないことだ。たまにあともどりしてもいい。休み休みでいい。仲間たちに愚ぐ痴ちを聞いてもらって、くだらない話をして疲れや喪そう失しつ感かんや恐怖や不安をごまかして、肩を貸してもらったり背中を貸してあげたりしながら、ちょっとずつでいい、進むしかない。問題はそんなに休ませてもらえないことだったりはするわけだけど。『──アァ』

「ムッ……!?」アジアンが周囲に鋭するどい視線をめぐらせた。アジアンだけじゃない。みんなあたりを見まわしている。今、変な声が聞こえたような。気のせいではないだろう。

「何──ってゆうか、誰の……」マリアローズは眉まゆをひそめた。クルルまで外がい套とうの中から出てきて、喉のどをくるるくるる鳴らしながらきょろきょろしている。そういえば、そろそろごはんあげないと、と一瞬思った。──誰の。誰？　誰の声。聞き覚えがある声だったような気がする。てゆうか。『エェェアッホン……ッ！　ごきげんよう諸君。余だァー』

「マリアローズ」ベアトリーチェがちらちらと天てん井じょうに目をやりながら近づいてきた。すぐ後ろにＳＩＸがいる。ＳＩＸはなんとも剣けん呑のんな目つきで「グッダＡＡＡＡＡＡ……」と呟つぶやいた。そうだ。マリアローズはベアトリーチェが差しだしてきた手をそっと握にぎった。グッダー。妙な響ひびきを伴ともなってはいるものの、あれは間違いなくキング・グッダーの声だった。

『さて、諸君は、余の特別の計らいによってそのみじめでとるにたらない命を拾い永らえることと相成ったわけであるがァー……本ほん艦かんは完全無欠に余のものであり、本艦内の空気に至るまで余の所有物であり、諸君も余に所有されるところのものであることに異論を差し挟はさむ余地はなァーい。その既き定ていの事実を諸君はよくよく認にん識しきすべきであることは今さら言うまでもなかろう。よって当然、諸君には余のために馬車馬のごとく働いてもらうことになる。だがしかし安心するがいい。諸君に頭脳労働は一いつ切さい期待しておらぬ。諸君はそのときがきたらばただ諸君のちっぽけな価値のない命を守るためにあがくがいい。そのときは各自奮ふん闘とうするがいい。そしてもし余が命令を下したときには黙だまって従うがいい。というか諸君は従わざるをえぬ。なぜならば諸君にとってそれが必ず最善の選せん択たく肢しであるからだ。必定であるからだ。なるほどそのとおりであったとそのときに至っていかに無む知ち蒙もう昧まいなる諸君も納なつ得とくせざるをえぬだろう。ゆえに諸君はどうせ無む駄だなのであるから物を考えることなくそのときに備えるがいい。諸君は息をしておれ。余の所有物である空気をひたすら貪むさぼっておれ。食しよく糧りよう、飲料水の備び蓄ちくもある。余は諸君にそれを提供してつかわそう。諸君は意地汚きたなく飲み食いしておれ。さァーて、というわけで諸君、本艦はこれより地じ獄ごくへと向かう。地獄へと侵攻する。余は反はん撃げきを行う。逆撃を行う。余は逆襲に転ずる。本艦は地獄へと突とつ入にゆうし、やがて地獄の中ちゆう枢すうへと至るであろう。よい旅をbon voyage.。ゲヘラゲヒハゲヒラッ』

10　終わり / 始まり

銀糸を束ねたかのごとき髪の毛が容よう赦しやなく風になぶられる。魔女は猛もう風ふうを一身に受け止めてしっかりと目を見開いている。先を見ている。先の先のそのさらに先を。魔女は世界の果てを見み極きわめんとしている。多世界を包ほう括かつした世界の姿を目にしたいと欲ほつしている。時間の果てと、始まりさえも見たい。この世界がどのように形成されたのか知りたい。世界の成り立ちを。世界の秘密を。秘密をあばいて秘密ではなくしてしまいたい。世界が壊れるさまを見たい。世界は壊れるのか否いなかを知りたい。世界が壊れればつくりなおされるのだろうか。世界は死んでまた生まれるのか。それは魔女が魔女自身を知ることでもある。

砲ガン金色メタルの九く頭ず竜りゆうが空を飛ぶ。空間を引き裂さくように、押し開くように、あるいはひねり潰つぶすように飛ひ翔しようする。九頭竜にはその名のとおり九首あり。いずれかが主であり他が従であるということはない。すべてが主なのだ。そのうち一頭の上に魔女は立っている。ただこうして立っているだけで多くの魔力を費ついやさなければならない。途と方ほうもない速度だ。とてつもない気流だ。圧力だ。魔女の双そう眸ぼうに無数の星がまたたいている。魔女はほっそりとして高貴に薄うすい胸を躍おどらせている。魔女の心臓が気高く激しくとくとくとくと鳴っている。

「いい風だね」羊の角を生やした少年のような魔術士が魔女の脇わきに腰こしを下ろして脚あしをぶらぶらさせている。踊り羊。ダンシングシープ。この魔術士の出発点はその名の由来である雄お羊ひつじのそれのような角であることを魔女は知っている。もちろん人間の頭には角などない。しかし踊り羊にはそれがあった。生まれつきだ。踊り羊が長じるに従って角も成長した。恐おそろしく大きな角を支えきれなくなる前に踊り羊はその異能を開花させた。力を持たなければ踊り羊は生存の危機に瀕ひんしていただろう。おそらく死んでいただろう。異能を発揮して自身の角を制せい御ぎよするようになった踊り羊を一人の名もなき魔術士が見いだした。踊り羊を保護して魔術の手ほどきをしたその魔術士はそれ以外の功績を一切残していない。今となってはその名前すら誰だれも知らない。踊り羊は生きるために異能を目覚めさせ、それが原因で魔術と巡めぐり

あった。そして高め極めた魔術で何をなさんとしているのか。魔女の知ったことではない。興味もない。魔女は踊り羊が嫌いだ。魔女は生来四し肢しを動かすことができず、己おのれの肉体という牢ろう獄ごくに閉じこめられて幼年期を過ごした。両親は魔女を養いきれなくなり、ついに我が子を遺い棄きした。魔女はその日のことを覚えている。その恐怖を。孤独を。そして憤いきどおりを。そのときあどけない瞳ひとみに星が宿りはじめ、魔女は常人とは異なる方法で自身の身体からだを動作させるすべを独自に見つけだした。魔女は生きるために星を手に入れて受け容いれた。魔女だけの星を。星としか呼べない何かを。魔女は踊り羊が嫌いだ。

（〝恐怖のドレッド操り手スター〟—魔ドレ導ツド王ロード—〝原アト子ミツのク・極マキシ大マム・魔ドレ術ツド士スター〟キング・グッダー……）超メガ賢者セイジモーグは光幽体、プラスマル・ボディとなって、彼の弟で子しにして娘—エヴァンジェリンとともに、魔女が立っているのとは別の竜首にしがみついている。光り輝かがやく粒りゅう子しでできた車くるま椅い子すに乗ったきらめくエヴァンジェリンは、師の腕うでをかき抱いだいてどこか遠くを眺ながめているようだ。モーグは声ならぬ声で呟く。（なぜだ。なぜこれほどの力を持ちながら、俗ぞくなる欲心にあくまでこだわるのだ。我には理解しがたい。人であるということはかくも度しがたきことなのか。我らもまたやはり人であることから離はなれられぬのか……）（わたしはどこまでもゆけます、お師様とともにありさえすれば）（むろんだ、エヴァンジェリン、我が娘よ。我はおまえとともにどこまでもゆくであろう。だが、何か引っかかるのだ。キング・グッダー。最後の魔導王。あの者の心算が奈な辺へんにあるのか。この世界と地獄が均きん衡こうしておることは間違いない……否いな、しておったのだ。もはや均衡は崩くずれた。意図的に崩されたのだ。かくて人界と地獄とは接続された。地獄は人界を手中に収めようとしておる。それはキング・グッダー一派も同様である—ように見える。少なく見積もっても、地獄は人界と同程度の広がりを持つ。地獄をえれば人の領土は倍になる。人がそれをえずとも、人界と地獄とが渾こん然ぜん一体となることで世界は新たな局面を迎むかえよう。問題は何者が主導権を握るか、だ。キング・グッダー一派はそれをなさんとしておる—ように思われる）

「今のところは」と魔女が左手で髪の毛を押さえて言った。「あの裸はだかの王様は、その方向に向かって動いているようね。もしくは、そう動いているように見せかけているのだわ」

（我らが知らぬ──知りえぬことを王は知っておる）モーグは自らのうちへ沈しずみこむように深く呟いた。（我は──我らは、その知識、あるいは真実に到とう達たつすることを望んでおる。歴史と言いかえてもよい。すでに我々は生物がその形質を受け継つぐのみならず、変異することを知っておる。とくに悪魔と総そう称しようされる異界フリー生物クスにおいては、その変異の速度がきわめて急であることも突つき止めておる。だが人は違う。人は変わっておらぬ。種々の証しよう拠こに基づけば、人は地上に現れてから数千年にわたってほぼ変化しておらぬ。また、人をふくめたこの世界は、数千年前に突とつ如じよとして出現したかのように見える。まるでかくのごとくあつらえられたかのように。──神。神と呼ばれる存在がそれをなしたのか……？）（お師様は）とエヴァンジェリンが師に微笑ほほえみかける。（いつの日か、それを知りえるに違いありません。及およばずながら、わたしも力ちから添ぞえさせていただきます。──神。お師様が熱望されれば、わたしたちはその存在に会い、直接問いかけることも叶かないましょう）（だが、エヴァンジェリン、我の大望はその上を行くのだ）（わかっております、お師様。それを欲されるお師様を、何が滅ほろぼすこと能あたうでしょう。させません。このわたしが）（おお、エヴァンジェリン）（お師様）「……気持ち悪いのだわ」魔女は眉をひそめて吐はき捨てた。



　モーグ。この魔術士は若かりしころから幾いく多たの大病を患わずらって何度となく命を落としかけた。モーグは最高の医術士よりも人体の、いや、生物の構造を熟知しているだろう。知り尽つくさなければモーグは生きられなかった。知ることによってかろうじて生命を繋つないできた。我が身と無数の傷病者を実験台にすることでモーグは高みへと登った。モーグの原動力は執しゅう着ちゃく

だ。賢けん人じん、賢者と称しようされ、賢者を超こえたる者、超メガ賢者セイジと讃たたえられるようになった。しかし実態は異なっている。モーグほど貪どん婪らんな者はいない。知るため、手に入れるためなら、モーグは何だってするだろう。己おのれの存在以外のすべてを犠ぎ牲せいにするだろう。我が娘と呼ぶエヴァンジェリンでさえ例外ではない。エヴァンジェリンもおそらく勘かんづいているだろう。ゆえに彼女は師との合一を願っている。師と一体となってしまえば捨てられることはないからだ。そう。欲するもののためならば、魔術士は何もかもを捨てられるのだ。どんなに捨てがたいものでも捨てなければならないのだ。それが必要ならば、絶対にそうしなければならないのだ。モーグは魔術士だ。真の魔術士であると言ってもいいだろう。だから魔女はモーグのことが気に入らない。まるでモーグの従属物のような、その立場に甘んじているかのようなエヴァンジェリンのことも認められない。魔女もモーグも踊り羊も視線の先には同じものがある。同じものを見ている。同じものを求めている。だがこうして同じ方角に進んでいても、互たがいの肩と肩がふれあうことはない。決して相容れない。

　魔女は妹たちソロレルを思い浮うかべる。魔女が手て間ま暇ひまをかけて慈いつくしみ育てたかわいいかわいい魔術士たち。魔女の愛らしい遊び道具。魔女の大切な慰なぐさみ者。モーグにとってエヴァンジェリンは娘であって、モーグはエヴァンジェリンの親だ。いつの世も親は子を所有しようとする。親は子に期待をかけ、人生を操作して、望みどおりの作品に仕上げようとする。魔女にとって妹たちソロレルは子ではない。いつか魔女に並び立つべき者たちだ。長い間、多くの魔術士を育成してきて、その資格を有する者は三人。たった三人だけ。三人のうちの一人でもいずれ魔女に比ひ肩けんする者が現れるだろうか。魔女を凌りよう駕がする魔女となる者が一人でもいるだろうか。魔女は楽観してはいない。魔女はひとりでも進むだろう。もとより細い細い隘あい路ろを歩んできたのだ。生まれ落ちたときはひとりで、捨てられたときもひとりだった。魔女は深い淵ふちの底からひとりで這はいあがってきた。同じように断だん崖がい絶ぜつ壁ぺきに頼たよりない指をかけて少しずつ少しずつ重たい自分の身体を持ちあげて空を目指した女は愚おろかにも身を滅ぼした。紫しのヴェロニカ。リルコ。哀あわれとは思わない。彼女は結局、魔術士ではなかった。女だった。その生を貫つらぬいて果てたのだ。魔女はどこまでも魔術士であり、それ以外の生き方を望まない。世界の終わりを見るのだ。そして終わりがあれば始まりがある。世界が終わるとき、世界はまた始まるだろう。キング・グッダーも魔術士ならば、と凶きよう暴ぼうな風を受けな

がら魔女は思う。世界を終わらせて、そこから始めようとするのではないか。

11　突入

「──何なんだよ、もう……」マリアローズは癇かん癪しやくを起こしかけて、なんとかこらえた。

　九頭竜型超弩ど級きゆう飛ひ行くう戦せん艦かんナ・インはとにもかくにもひたすらでかい。アホみたいにでかい。クソがミソになるほどでかい。でかいだけあって、中はめちゃくちゃ広い。広すぎてどうにもならない。それはわかった。痛いほど思い知らされた。実際、探たん索さく中だからだ。あの広間だか大通路だかの側面にはいくつか部屋があって、そこに食糧や飲み水、あとは毛布などの寝しん具ぐが数千人分用意されていることはわかったが、だからといってじっとしてはいられない。それで探検しようということになった。まあ探検なんて言葉を使ったのはもちろんＺＯＯうちの馬鹿半魚人で、マリアローズとしてはナ・イン内部の様子、構造を把は握あくしておいたほうがいいと考えた。入ったところから広間だか大通路──めんどくさいのでとりあえず広間でいいか、広間までの経路は覚えているが、戻もどってみると入口は閉とざされていてビクともしなかったし、外に出る方法くらいは知っておきたい。それから、どこかに窓か何かがあれば、外の景色を見たい。あと、キング・グッダーだのジュジだのの居場所を突き止めたい。ヴィシュクラトーも、かな？　りりぃだってどこかにいるはずだ。

　そんなわけで、マリアローズたちはナ・インの中を探検──いや、探索している。一行のメンバーはマリアローズ以下、言い出しっぺのカタリ、アーニャ・クルチバ、いざというときに頼りになるトマトクンとサフィニア、好こう奇き心しん旺おう盛せいなハニーメリー、その付き添そいとしてピンパーネル、あとはユリカやトワニングは忙いそがしいので、緊きん急きゆう医い療りよう係の医術士としてベアトリーチェ、その付き人の……ＳＩＸ□□は、まあいいとして、そんなによくもないけれど、やつはすっかりベアトリーチェのボディーガード気どりで、事実、何度も身を守っているから文句も言えないし、しょうがない。でも、こいつはまったくしょうがなくない。なんでついてきたんだよ。迷めい惑わくなんだけど。

だいたいこの馬鹿一号が「それじゃあ、ボクも！」と手をあげたときなんて、ひどかったじゃないか。昼ラン飯チタ時イムの人たちが一いつ斉せいにブーイングを浴びせて、嫌いや味みを言ったり、もっとはっきりと罵ののしったり。それらは一応、馬鹿一号に向けられていたものの、マリアローズもだいぶ肩かた身みが狭せまかった。猛もう反対されたわけだから、あきらめればよかったんだよ。仲間と一いつ緒しよにいるべきだと思うし。それなのに馬鹿一号は顔を真っ赤にして「──それでもッ！　それでもボクは行くんだ……ッ！」とかなんとか。そうしたら昼ラン飯チタ時イムの連中は「じゃあ勝手にしろ！」「行け行け行っちまえ！」「せいせいするよ！」「どうせ行くんなら、行くとこまで行きなさいよね！」「しっかりやれよ、頭領マスター！」「根こん性じよう見せろ！」「度胸だよ、度胸！」「アジアンのバァーカ……！」

　何なんだろ、あの人たち。頭がおかしいんじゃない？　意味がわからないし。もうやだ。馬鹿一号はやたらと張りきっちゃってるし。「──フム。ここも行き止まりみたいだネ。引き返すとしようか。大丈夫サ、マリア。案ずることはないヨ。何度も繰くりかえしていれば、そのうち絶対に道は開けるはずだからネ。肝かん心じんなのは絶望しないことだ。腰こしを据すえて粘ねばり強く取り組むことだヨ。もちろんそんなこと、キミはわかっているだろうけどネ」

「ほう」とベアトリーチェが感心したように息をついた。「なかなかいいことを言うな」

「フッ……」馬鹿一号は前まえ髪がみを指先で払はらった。「それほどでもないヨ。そもそも今、ボクが言ったことはある意味、受け売りのようなものでネ。ある人から学んだことなのサ」

「ある人」ベアトリーチェは純真すぎる美しい目を軽く瞠みはって首をひねった。「誰だ？」

「それはもちろん──」馬鹿一号がくるっとその場で一回転してこっちに人差し指を向けようとしたので、マリアローズはとっさにピンパーネルの後ろに隠かくれた。馬鹿一号はフルフルと首を振ふって優ゆう雅がに微び笑しようした。「──相変わらず、照れ屋さんだネ。そこがキミの美点だ、マリア。イヤ、そこも美点というべきだろうネ。イヤイヤ、どこもかしこも美点だらけでキミという人は美点のみで構成されているというのが唯ゆい一いつの正しい表現かな？」

「ムぅ……」とピンパーネルが唸うなった。きっと筆ひつ舌ぜつに尽くしがたいという思いでいるのだろう。よくわかる。マリアローズもまったく同じ心境なので、わかりすぎるほどわかる。

「Ｋｕ□Ｈａ」ＳＩＸが眼めを細めて失笑した。「随ずい分ぶんとまあ突き抜ぬけちまってるねえ」

「キミに言われる筋合いはない」馬鹿一号はＳＩＸをキッと睨にらんだ。たしかに拘こう束そく具ぐみたいな服を着ているＳＩＸはどこからどう見たって変態以外の何物でもないが、見た目を度外視すれば馬鹿一号も同類だと思う。どっちも重度の変態だ。頼たのむから消えてくれない？

「目くそ鼻くそやで、ジブンら」それでいて半魚人ごときにそんなふうに言われるとなんとなく腹が立たないでもない。でも、アーニャがおっかないので、マリアローズは黙だまっていることにした。どうだっていいことだし。そうだよ。探検じゃなくて、探索、探索。

「どこかに階段か何かがあるんじゃないかと思うんだけど……」ハニーメリーが顎あごに指をあててぶつぶつ呟つぶやいている。こういうとき頼りになるのは彼女くらいかもしれない。

「そっか」マリアローズはうなずいた。「僕らがいた広間って、ほとんどナ・インのおなかの底らへんだもんね。キング・グッダーとかジュジとかはいかにも上のほうにいそう」

「フム」トマトクンは片方の眉まゆをつりあげた。「とくにグッダーのやつなんかは、高いところから人を見下すのが好きだからな。見おろされると、かなりキレるぞ、あいつは」

「へえ。じゃあ今度やってみよっと。……や。無む謀ぼうかな？今度こそ殺されるかも……」

「大丈夫だヨ、マイスウィーテスト。あの長なが髭ひげ野や郎ろうに手出しはさせない。指一本キミにふれさせるものか。キミのことはボクが守る。何があってもネ。安心してくれ、マリア」

「大変だな、マリアローズも」ベアトリーチェが苦笑している。ほんとにほんとのほんとだよ。大変なんだよ。馬鹿一号の言葉も仕し種ぐさも何から何までぜんぶ気持ち悪いことは気持ち悪いが、いい

かげん慣れてきたのか鳥とり肌はだも立たない。慣れって怖こわい。「上、か……」

「あれは……？」とサフィニアが左のほうを指さした。通路がそっちに折れていて、その先に何か扉とびらのようなものがある。行ってみるとそれはやっぱり扉のようで、脇わきにいかにも操作盤ばんっぽい黒くて四角い板が据えつけられている。適当に押してみたら扉の上に数字の十七が表示され、だんだん減ってゆく。あっという間に三になって、扉が静かに開いた。

「エレベーターか」トマトクンがそう言いながら中に入った。マリアローズたちもぞろぞろとつづいた。中の操作盤はＳＩＸが操作した。「最上階から行ってみようじゃないか」

　扉が閉まると、エレベーターは上昇を開始した。といってもすぐに停まって扉が開いた。マリアローズは思わず「わっ……」と声をもらしてしまった。「──外が見える……」

「すごい！」ハニーメリーがエレベーターから飛びだして、ピンパーネルが「待ッテ」と言いながら彼女を追いかけた。マリアローズはあえてゆっくりとエレベーターから出た。

「ほっえええええええええええええええぇぇぇぇぇぇぇ……」半魚人が顔を上向かせて半魚眼を見開き、そうとうけったいなことになっている。でも、そうならざるをえないだろう。隣となりのアーニャもあんぐりと口を開けているし、マリアローズだってちょっと呆ぼう然ぜんとしている。

　そこは円柱を真っ二つにして横に倒たおしたような形のだだっ広い部屋だ。その形状のせいで天てん井じようと壁かべの間に境目がない。床ゆか以外は梁はりや支柱のようなものがあるだけで、あとは硝子ガラスなのか何なのか、とにかく透とう明めいな素材でできているらしく、外を見み渡わたせる。といっても一面の空なのだが、飛行戦艦ナ・インの九首や羽も見えるのがなんともすごい。すごいとしか言えない。ここはどうやらナ・インの背中に位置しているようだ。言うまでもなくナ・インは空を飛んでいる。いったいどれくらいの速度が出ているのか。見当もつかないが、速い。そうとう速そうだ。キング・グッダー曰いわく、ナ・インはどうやら地じ獄ごくへと向かっているらしい。地獄の軍勢、悪魔たちはかつてのアンダーグラウンド、エルデンの下にあった大ギガ穴ボロスから地上にあふれだしてきた。ということは。「……エルデンがあった場

所に」

「アレは──」とピンパーネルが空の一点を指し示した。向かって右上方だ。見れば、黒い染しみのようなものがある。それは次し第だい次第にというか、みるみるうちに大きくなる。

「敵か」トマトクンが背に交こう叉さささせて負っている大カタ殲スト滅ロフ刀アーと聖断罪の剣を抜こうとしたが、ムウ、と首をかたむけた。「……ここで暴れたら、ナ・インを中からぶっ壊こわしちまうか」

「ど、どこかに……出入口は……」サフィニアがあたふたとあたりを見まわしているが、外に出られるような扉的なものはなさそうだ。もしあったとしても、僕は出たりしないけどね？　あたりまえだけど。そりゃそうでしょ。「……でも、どうするんだろ、これ」

「心配は無用サ、マリア」馬鹿一号がさりげなくマリアローズの手を握にぎった。「たとえ何が起こっても平気だヨ。キミは安全だ。いざとなったら、ボクがどうにかするからネ」

「ふうん……」マリアローズはすげなく馬鹿一号の手を振りほどいた。「どうやって？」

　馬鹿一号は懲こりた様子もない。「それはもちろん、極ラヴ限マツ愛クス。──愛のエナジーだヨ」

「言っとくけど、それ、僕の質問に対する答えになってないからね？　わかってる？　わかってないよね。最初から期待してないけど。きみに何か期待するほど馬鹿じゃないし」

「そう、ボクは愚かだ……。あまりにも強きよう烈れつすぎるキミへの愛が、ボクの目を閉とざし耳をふさいでしまう。ボクには何も見えない。何も聞こえない。それでもボクにはキミの顔だけは見え、キミの声だけは聞こえるのサ。なぜだかわかるかい？　それはネ。ボクがキミを、この広い世界でたった一人、ただキミだけを愛してい──」「とりあえず黙れ」「フギュッ」マリアローズは馬鹿一号の顎に掌しよう底ていを見み舞まって口をつぐませた。気色の悪い無む駄だな長広舌につきあっている暇ひまはない。敵はもう危険なほど迫せまっているのだ。「ゲロバンバンか……！」とトマトクンが叫さけんだ。マリアローズはすかさず「ゲルマニオン……！」と訂てい正せいした。その直後だった。すでにその姿がはっきりと

確かく認にんできるくらい接近しているゲルマニオンが竜首をこっちに向けた。息吹ブレスだ。炎ほのおの息吹ブレスがくる。カタリが絶ぜつ叫きようした。「魚ぎよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ……われ……？」

「え……？」マリアローズはまばたきをした。何がどうなったのか。瞬間、わからなかった。ゲルマニオンがいない。消えた。いや、違ちがう。そうじゃない。後方だ。ゲルマニオンは遥はるか後方にいる。「──そっか」ナ・インは高速で、おそらく超高速で移動している。ゲルマニオンも力いっぱい速く飛んで追いすがってきたのだろう。でも、ナ・インに襲おそいかかってきて息吹ブレスを放つ際に制ブレ動ーキがかかった。その間に、ナ・インはゲルマニオンを置き去りにしてしまったのだ。ゲルマニオンは追つい尾びする体勢に入っているみたいだが、追いついてきそうな気配はない。それどころか離はなれる。ぐんぐん離れてゆく。離れる一方だ。

「どれだけ速く飛んでるんだろ」ハニーメリーが今や豆まめ粒つぶ大のゲルマニオンを見ながら呟いた。「とんでもない速度で移動してるはずなのに、ぜんぜんそんな感じがしないし」

「おっ……」とベアトリーチェが転びそうになってＳＩＸに支えられた。ベアトリーチェだけじゃない。ハニーメリーもピンパーネルに抱だきとめられなければあやうく転てん倒とうするところだったし、カタリとアーニャは「魚うおおらっ!?」「きゃっ！」と仲よくすっ転んだ。サフィニアはとっさに浮うきあがって難を逃のがれ、トマトクンはビクともしなかった。マリアローズは転ぶというかすっ飛びそうになって──不本意ながら馬鹿一号に腕をつかまれ、引きよせられた。「──マリア……！」「くっ、放して！」「イヤだ！」「え」「と言えたらどんなにいいか！　言いたいが言えない！　ジレンマだヨ！」「……言ってるだろ」

　結局、放すし。いやもちろん、放してくれないと困るんだけど。だいたい、相手が誰だれだろうとぎゅっとされるのって好きじゃないんだよ。きゅーみたいにもふもふしていてやわらかかったり、ユリカとかサフィニアとかリーチェとかみたいにかわいかったり、モリーみたいに抱だき心ごこ地ちっていうか抱かれ心地がすこぶるよかったりするなら話は別だけど。まあそんなことはどうでもよくて。「……ひょっとして──もしかして、停まった……？」

　どうもそうらしい。ナ・インは急停止したのだ。その証しよう拠こに、ゲルマニオンが近づいてくる。近づいてきちゃってるんです

けど。なんで停まったのか。いったい何のために？

『諸君に告ぐゥー』グッダー。キング・グッダーの声だ。『──本ほん艦かんは突とつ入にゅう体勢に入る』

「とつ……にゅう？」マリアローズは頭の中でその単語を反はん芻すうした。とつにゅう。トツニュー。突入？　突つっこむってこと？　どこに？　考えるまでもないか。「……地獄に？」

「壁かべ際ぎわに……！」とトマトクンが声を張りあげた。「──ええい、間に合わんか……!?」

「うにゃっ」マリアローズはつい変な声を出してしまった。床だ。傾かたむきだした。すごい勢いだ。ナ・インの頭の方向が沈しずむようにして一気に三十度くらいは傾いたと思う。なんとかこらえたが、止まらない。もっとだ。もっと傾く。傾きつづける。「これはッ──」馬鹿一号が右腕をほどいた。黒い管が四方八方にのびてゆく。「アルカーディア！　みんなつかまれ……！」「っ！」マリアローズは手をのばして黒い管をつかんだ。やばいって。

　傾く。どんどん傾く。傾いてゆく。もう何度くらいだろう。たぶん四十五度は超こえている。四十五度といったら感覚的には垂直に近い。まだ傾くのか。まだらしい。本当に垂直に近づいているんじゃないのか。馬鹿一号は何十本もの黒い管を支柱的なものに絡からみつかせていて、それにマリアローズはつかまっているというかぶら下がっている。カタリとアーニャ、ピンパーネル、ハニーメリー、それからＳＩＸとベアトリーチェも黒い管をひっつかむことに成功したようだ。トマトクンはサフィニアに抱かかえられている。「……お、重いんじゃない……？」マリアローズが訊きくと、馬鹿一号はニコッと笑ってみせた。「重くなんかないサ、スウィートハート。キミが重いわけないだろう？　まあ……キミ以外は多少重くなくもないけどネ……」「だから重いんでしょ、やっぱり」「まったくそんなことはないヨ!?　誓ちかってない！　ありえない！」「Ｈｏ□Ｈｏｏｏｏｏｕｕ」ＳＩＸがブランコにでも乗っているみたいに身体からだをブラブラさせた。「じゃあ、こォーんなふうにしても平気だろうねえ」「よ、よせッ！　やめろ！　バ、バランスが……ッ！」「ＳＩＸ」ベアトリーチェに冷たく一いつ喝かつされると、ＳＩＸは頭を下げた。「すまない、女ミス主人トレス。悪い癖くせが出てしまったようだよ。いやはや、人ってのはなかなか改まらないものだね」「誰が女ミス主人トレスだっ！」「──魚うおいッ！」カタリが怒ど鳴なった。「なんでもええけど暴れんな

や！　わやなことになってもうたら、全員道連れや――でぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……!?」

　マリアローズも悲鳴をあげているはずだが、どんな声を出しているのか自分でもよくわからない。とにかくひたすら怖い。落ちる。落ちている。これは完全に落下だ。トマトクンが「気をつけろ！」とかなんとか言っている。気をつけろも何も。どうしようもないじゃないか。どうにもできない。だって、落ちてるんだから。ぐちゃぐちゃになってバラバラに飛び散ってしまいそうな頭の中で、ナ・インは空中で前ぜん傾けい姿勢というか頭をほぼ真下に向けて急降下しやがっているんだろうみたいなことはなんとか考えた。たぶんここはきっと大ギガ穴ボロスの上だ。ナ・インはこのまま大ギガ穴ボロスに突っこむつもりなのだ。ナ・インはっていうか、キング・グッダーがっていうか。ナ・インに罪はない。よくわからないけど。もうちょっとこう、準備的なことをさせてくれてもいいのに。なんでいきなりこんな。めちゃくちゃじゃないか。ひどい。ひどすぎる。死んだらどうするんだよ。こちとら簡単に死んじゃうんだ。常人離ばなれしたきみたちとは違うんだ。きみたちが太陽なら、僕なんか石ころよりも小さい塵ちりみたいなものなんだ。少しは配はい慮りよしてよ。どうなってるんだよ。泣いても知らないからね。もう泣いちゃうんだからね。泣かないけど。涙なみだは出てるっぽいけど。これは泣いてるのとは違う。や、違わないのかな。どうなんだろ。知らないよ。知ったことか。やだ。こんなの。「いいいいいいいいいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃやあああああああああああああああぁぁぁぁぁああぁぁぁぁあああああぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁ――」

　始まりが唐とう突とつなら、終わりも突然だった。

　マリアローズは唾つばをのみこんだ。呼吸は乱れている。でも、静かだ。

　落下が止まった。だけじゃなくて、傾いてもいない。

　ナ・インはいつ姿勢をもとに戻もどしたのか。不明だ。気づかなかった。

　なんにしても、マリアローズの足は床についている。たぶん、おおよそ水平だ。

　みんなもきょろきょろしたり、ぽかんとしたりしている。

ハニーメリーが「……空が」と言った。

「あ──」マリアローズは絶句した。違う。

色が。

空の色が。

さっきまでは青かった。

今は紫むらさき色いろだ。遠くは赤くて、その向こうは黄色い。

きれいだ。

こんな色の空なんて見たことがない。それは決して比ひ喩ゆ的な表現じゃなくて、本当に見たことがないのだ。ありえない。こんな色の空なんて。マリアローズがよく知っている、生まれ育った、慣れ親しんだ世界ならそのはずだ。そうじゃないとしたら……？

呆あっ気けない。

まさか、こんな簡単に入りこめてしまえるなんて。

嘘うそみたいだ。夢でも見ているのかもしれない。

「地へ獄ルだ」トマトクンが低い声で言った。

「ここが……」マリアローズは指で唇くちびるをこすって、それから舐なめて湿しめらせた。

外がい套とうの中からクルルが顔を出し、地獄の空を眺ながめている。

黒い管がしゅるしゅると引っこんでいって、馬鹿一号の右腕になった。

「初めてきたヨ。べつにきたくもなかったけどネ」

「わたしはきたかったな」ハニーメリーは目を輝かがやかせている。「地獄。ここが、地獄」

「地獄……」とピンパーネルが呟つぶやいた。

「ちびっと遅刻してもうたけどな？　なんち──テフガッ」半魚人はくだらないダジャレを口にした罰ばつとして、アーニャに足を踏ふまれたようだ。カタリを侮ぶ辱じょくするなとか僕には言ってたけど、そのわりに自分はカタリに厳しいよね、あの子って。いいけど。

「……こんなに美しいところなのか」ベアトリーチェはすばらしい色の空に見とれているみたいだ。「わたしはもっと──なんというか、地獄はおどろおどろしいところだと思っていた。もちろん、勝手なイメージにすぎないけど……」

「地獄とは」とＳＩＸが歌うように語りだした。「天から堕おちた一柱の神によってつくられた世界さ。他の世界とは成り立ちが異なる。むろん、我々人間の世界ともねえ。他の世界はある意味、現実であり、かくあれかしと願う者たちの手によって次し第だいに形づくられ今の姿となった。地獄は違う。ここは理想郷なんだよ。堕ちた神が自らの故郷としてつくりあげたのさ。ゆえに地獄は荒あら々あらしく、どこまでも美しい。ある意味、地獄は完かん璧ぺきだ。億兆の悪あく魔まが息づく動的な、変化の激しい世界でもある。地獄は堕ちた神が描えがいた一枚の絵なのさ。油絵とか水すい彩さい画がじゃあないがねえ。ダイナミックアートピクチャー。どでかいＤＡＰみたいだ。そうは思わないかい、ディオロット」

「……さあな」と短く答えたトマトクンの声が、わずかに揺ゆれていた。

「そうかい」ＳＩＸは鬼おに火びの灯ともる双そう眼がんで食い入るように空を凝ぎよう視ししている。「俺はそう思うんだよ。とても美しいが、作り物めいてる。できすぎじゃないか……？」

「あ」マリアローズは振ふり向いた。「そういえば、ゲルマニオンは──」

　見て、愕がく然ぜんとした。何だよ、あれ。どう表現すればいいのか。空が終わっている。どれくらい後ろだろう。ちょっとわからないが、ナ・インの数キルメーテルか、数十キルメーテルか後方で、空が途切れているのだ。その先には何もない。何もないということは、これほどまでに異様なのか。闇やみではなくて、空くう虚きよなわけでもない、ただひたすらないのだ。

　マリアローズはそんな無を初めて目にした。だから、あれが本当

に無だと確信を持って断言できないはずだ。それにもかかわらず、無だとわかる。

　もっとも、その無には穴があいていた。無に穴があいているなんておかしな話だが、実際、そうなのだから仕方ない。

　大きな穴だ。ナ・インはあの穴を通り抜ぬけて地獄に入りこんできたのだろう。

　そしてゲルマニオンもまた、あの穴を通ってナ・インに追いすがろうとしていた。

「は、早く……！」進め、進んでください、とマリアローズが念じたからというわけではないだろうが、ナ・インの羽や身体のあちこちがボッ――と光った。反動らしきものはさして感じなかったものの、ふたたび前進を開始したようだ。

「Ｋｕ\u3000ｋｕｋｕ……」ＳＩＸが喉のどを鳴らして笑った。「まあそうたやすくはいかないだろうさ。いくらなんでもねえ」

「魚うおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉうッ!?」カタリが奇き声せいを発して進行方向に目玉を飛びださせた。「ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、アアアアアレは……ッ!?」

「むう」トマトクンが唇をひん曲げた。

　いつの間にか、行く手に黒い雲みたいなものが広がっている。いや。

　あれは雲なんかじゃない。

12　秘法

「おいでなすったなァー……」キング・グッダーは袖そでをまくって入力コント装置ローラーを握にぎりしめた。ナ・インの機動及および火器管制その他すべての操作を行うことができる入力コント装置ローラーは、アナログスティックが二つ、タッチパッドが二つ、十字型カーソルキーが一つ、押しボタンが十四個搭とう載さいされ

ている。王の両手にすっぽりと収まってよく馴な染じむサイズだ。感かん触しよくも申し分ない。「──余が遊んでくれる。大いに感謝し、光栄に思うがいい、地獄の糞くそ虫どもよ」

　九く頭ず竜りゆう型超弩ど級きゆう飛ひ行くう戦せん艦かんマキシマムＡＭドラゴン〝ナ・イン〟の艦橋は球形に近い。全周モニターの中央に主操縦席を含ふくめた七つの座席が宙に浮うくように配置され、その下にある三層の円席に八十四人の管制助手が座っている。管制助手はサンランド無統治王国近この衛え騎き士し団スペース・ファングの騎士から選よりすぐった人間どもをベースに王がつくりあげた魔導人間だ。魔導人間は魔導兵と比べて耐たい久きゆう性は低いが知能程度は高く、より精密で正確な作業に従事できる。王は入力コント装置ローラー一つでナ・インを意のままに操あやつることができ、それに付ふ随ずいする情報処理や情報統制、調整、エラーの抽ちゆう出しゆつと排はい除じよ等々を管制助手たちが行う。その総体が最終決戦兵器ナ・インを完成させるために王が設計して組みあげた装置システムなのだ。

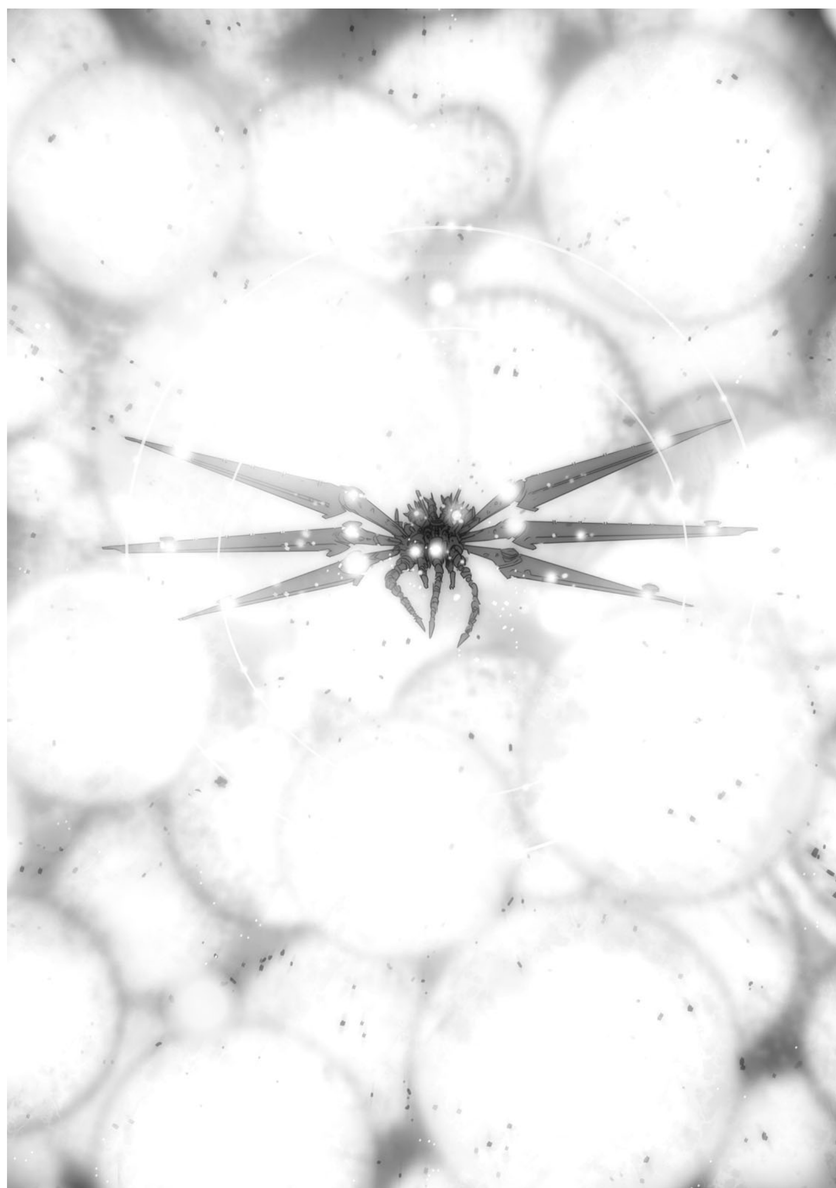
　主操縦席にはもちろん王が坐ざし、他六つの座席のうち三つをジュジと灰色の猫ねこ、レインドゥラス・ヴィシュクラトー、それからりりぃが占しめている。ジュジらは何をしているのか。王の知ったことではない。王は関心がない。どうでもいい。王は主操縦席の前に展開されている九つのモニターを注視している。全周モニターで全状況を把は握あくするのは王であっても難しいので、こうして個人用Ｐ特化ＳモニターＭを利用する。ＰＳＭにはナ・インの進む方向に広く展開している地獄の悪魔どもが映しだされている。翼つばさを持つ悪魔。羽を生やした悪魔。角のある有ゆう翼よく悪魔。鳥のような悪魔。汚けがらわしい虫のごとき悪魔。褐かつ色しよくの悪魔。濃のう紺こんの悪魔。赤い悪魔。臙えん脂じ色いろの悪魔。黒い悪魔。悪魔

悪魔悪魔悪魔。悪魔だらけだ。悪魔。

　王は悪魔どもを目標ロック捕捉オンする。方法は難しくない。王は専用のコンタクトレンズを装着している。これによって王の視線がＰＳＭのパネルを反応させる。むろんただ見るだけでは目標ロック捕捉オンできない。入力コント装置ローラーの一つを押おう下かすることによって目標ロック捕捉オンモードに入り、この状態で視線を動かせば標的Ｔ識別Ｇ装置Ｓが作動して次々と悪魔を赤あか枠わくにとらえてゆく。赤枠は一瞬で縮小して赤点となる。王はゲヒラゲヒラゲハゲハ笑いながらどんどん悪魔どもに赤い点を打ちこんでゆく。「死刑死刑死刑死刑死刑だァーウグヒヒハハ！」王は休むことなく悪魔どもを目標ロック捕捉オンしながら指でタッチパッドを操作して火器メニューから適切な火器を選せん択たくしてゆく。管制助手たちは息つく暇ひまもなく王の指令をとどこおりなく実行に移すために二十本の指を動かして各装置システムを動作させているだろう。十本ではない。管制助手には四し腕わんを持たせているので、手指が二十本あるのだ。ＰＳＭの隅すみに数字が表示されている。３７７６／９９９９があっという間に４２１１／９９９９となり４４５６／９９９９となる。９９９９は最大可能目標ロック捕捉オン数であり、現在目標ロック捕捉オン数が５０００を超こえたところで王は目標ロック捕捉オンモードを解除した。５０３１／９９９９。王はフウッと息を吐はいて髭ひげを吹ふき飛ばし、唇を舐める。王の指はすでに設定火器を発射するためのボタンにかかっている。口に出す必要などないのだが、やはりこういうときは気分が大事なのだ。王はボタンを押した。「──各砲ほう門もん射出口開けェい、同時に発射せよ、ファイアァァァァァーッ……！」

「わあ……！」とジュジが歓かん声せいをあげた。なんという催もよおし物だろう！　これほどの見世物はそうそうない。ナ・インはその全身に配置された魔導砲ほう千二百門、魔導誘導ミサイ弾発ルラン射装置チヤー四千八百門の大半から一いつ斉せいに魔導光線ビームと魔導誘導弾ミサイルを発射させたのだ。そしてそのほとんどが命中した。花だ。爆ばく発はつの花が咲さき乱れた。悪魔どもはナ・インの進行方向に陣じんを敷しいて前進を阻はばもうとしていたのだろうが、その目もく論ろ見みは脆もろくも崩くずれ去った。悪魔どもの防衛線はナ・インの超ちよう大火力によって決定的な打だ撃げきをこうむった。悪魔どもの総数は万を優に超えているに違ちがいない。数十万という規模だと思われる。そうはいっても五千以上がまたたく間に、しかもナ・インの前面に陣どっていた悪魔どもが蒸発するように排除されてしまえば、いかなる士気も打ち

砕くだかれるだろう。悪魔どもが虫けら並みに下等であったとしても、悟さとらざるをえないだろう。ナ・インの侵しん攻こうを防ぐことはできない。そのようなことはどだい不可能なのだ。道を譲ゆずるしかない。さもなくば一いつ蹴しゆうされて、粉こな微み塵じんにされるしかない。王にしてみればどちらでも同じことだ。「征ゆけ、ナ・インよ……！」王はアナログスティックを前に倒たおしてナ・インを突つき進ませる。爆散をまぬがれた悪魔どももすっかり逃にげ腰ごしになっている。「遅おそいわ……！　ワハワハワハァ……ッ！」ナ・インの巨きよ体たいのあちこちに悪魔どもがぶつかる。ただちに爆発する。「無む駄だだァ！　汝なんじらごときではナ・インを止めること能あたわぬゥー！　死ねィ！　死ね死ね死ねェイ！　死にくされェェェ……！」



「これはいい！」ジュジが拍はく手しゅした。「すばらしいですよ、グッダー！　いけそうだと思ってはいましたが、まさかこれほどとは。ブラボー！　ブラボーとしか言いようがない。この調子でいったら、すぐ〝世界のワールド終わりエンド〟についてしまいそうだ！　ぼくらの願いが叶かなってしまいそうだ！　楽しみだな！　ああ、楽しみだ！　楽しみでしょうがない……！」

「甘いな」りりぃは紅くれないの装そう甲こうで全身を覆おおいつくし、その素す顔がおをさらすこともない。「悪魔たちの抵てい抗こうがこれで終わりだとでも思っているのか。悪魔はしぶとい。何より数が多い」

「知ってますよ、姉さん。ぼくだってそれくらいわかっています。でも、どうかな。どれだけ数がいても無意味なんじゃないかな。ナ・インの前では、悪魔たちは蟻ありより無力ですよ。まあミジンコみたいなものじゃないかな。ミジンコじゃあね。十億匹ひき集まっても怖こわくないですよ。姉さんの気持ちもわからなくはありません。ちょっと呆あっ気けないんじゃないか。こんなに簡単なわけがない。事が楽に進みすぎて、泳がされてるんじゃないかと疑いたくなる。罠わななんじゃないかってね。わかりますよ。でも、ぼくらは千年かけて準備してきたんです。この日のためにね。過ぎ去ってしまえばあっという間のようにも感じられたりしますけど、千年といったら並なみ大たい抵ていじゃない。ぼくらは情報を集めて、分ぶん析せきして、検討して、洞どう察さつ力を働かせて、こつこつやってきたんですよ。これこれこういうことだからきっとこうなるはずで、だからこうしよう、ああしよう、こうしなきゃ。ぼくらは一つずつ一つずつ積みあげてきたんです。じつに地味な作業ですよ。ぜんぶその成果なんです。やっと収しゅう穫かくのときがきたんだな。案の定だ、予想どおりだ！　ほら、やっぱり魂アニ限マ・界オー突バー破フローを起こしたら、地じ獄ごくが──地獄の帝てい王おうが動いた！　人界と地獄が繫つながって、大軍を送りこむために帝王が接合面を押し広げた！　調査によると、地獄の中層、下層は流動性が高いですが、上層、とくに大ハイ公ヴエ爵リオンや公ヴエ爵リオンといった上級貴族の領土は地獄の中ちゆう枢すうを囲むように配置され、固定化されて、硬こう直ちよく化している。彼らが版図を広げるのに、これは絶好の機会となる。彼らは率そつ先せんして人界に侵攻してくるはずだ。本来、身を挺ていして帝王陛下を守り奉たてまつる強力な盾たてとして機能しなくてはならない大ハイ公ヴエ爵リオン、公ヴエ爵リオンたちが、こぞって人界になだれこんでくる。地獄の防備が手て薄うすになる。そこでナ・インの出番だ！　反物質ＡＭエンジンを搭載して生まれ変わったナ・インを駆かって、ぼくらは一気に地獄の中枢に攻せめこむ！　一いつ気き呵か成せいに攻め落とす！　ぼくらは慎しん重ちように念入りに計画を立ててきたんです。それが成功しつつある」

「あくまで成功しつつあるように見えるだけだ」りりぃの声こわ音ねはどこまでも冷たい。「お前は何一つ成し遂とげていない。成し

遂げられると断ぜられる根こん拠きよもない。図に乗るな」

「図に乗る？　ぼくが？　図に乗っている？　へえ。姉さんの目にはそう見えるんだな。ぼくはべつに図に乗ってなんかいませんけどね。だけど嬉うれしいな。どんなふうに見えているにせよ、姉さんがぼくを見てくれているということだけは間違いないわけですからね」

「薄うす気き味みの悪いことを言うな。あたしはお前のことなど見ていない。見る理由がない」

「またまた。理由はしっかりあるじゃないですか。何せぼくは姉さんの弟なんですから」

「お前を弟などとは思っていない。あたしには肉親などいない。あたしは一個の機械マシンだ」

「ぼくだってそうですよ。ぼくこそ機械マシンのようなものです。そんなこと、姉さんは知っているはずだけどな。ぼくらは結局、似た者同士なんだ。どこまでいっても姉きよう弟だいなんだな」

「どうとでも言え。お前が何をどう考えようと、事実は変わらない。お前が認めなくても、とうに片が付いていることだ。あたしとお前を結びつけるものは何一つ残っていない」

「じゃあ！」ジュジは声を荒あららげた。「──じゃあ、どうしてきたんですか、姉さん」

「答える必要はない」「教えてほしいな。ぼくは是ぜ非ひ、わけが知りたい」「………」「教えてくださいよ、姉さん。お願いだから。お姉さん。ねえ。頼たのみます。どうか、姉さん」

「ゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラゲヘラッ！」王は大笑いしながらアナログスティックを操作してナ・インの針路を微び調ちよう整せいする。逃げ散る悪あく魔まどもを一匹でも多くナ・インの突とつ進しんに巻きこむのだ。ふたたび目標ロツク捕捉オンモードに入って視線で悪魔どもを目標ロツク捕捉オンしていると、不意に涅槃NIRVANAが思いだされた。王はあのころも王だった。逃亡者たちescapersを狩かる別種ＤＯＴの卓たく越えつした操あやつり手。狩人hunter。狩人の中の狩人hunting master。撃墜王エースと呼ばれていた。誰だれも彼の追つい跡せきからは逃のがれられない。逃亡

者たちescapersを破は壊かいする。殺す。それがすべてだった。最高の快感であり快楽だった。

なぜ、何がどうして、どのような偶ぐう然ぜんから、あるいは不具合、それとも必然から、こうなったのか。統一Ｕ抵抗Ｒ戦線Ｆが同時攻こう撃げきを仕し掛かけて全世界二十二の首都や準首都が壊かい滅めつ的な打撃を受けた。大いなる悲劇the great tragedy。涅槃NIRVANAにも大きなダメージがあって、解脱DIVEが強制解除される者、解脱DIVE不能に陥おちいる者、解脱DIVE中に本体が死ぬ者が大勢、それはもう大勢、いすぎるほどいた。そもそもあいつらなんであんなことを？　連中は富が不当に偏へん在ざいしていると主張し、富を独どく占せんしている者は悪であり、悪を滅ほろぼさないかぎり善は行われないと言い張っていた。どう考えたって極きょく端たんすぎるだろう？　そりゃあ主要な都市や穀倉地帯が軒のき並なみ水すい没ぼつしたり逆に大だい干かん魃ばつに見み舞まわれたりクレイジーなくらい馬鹿でかいハリケーンに吹っ飛ばされたりしてダメになって着の身着のまま命からがら逃げるしかなくなって、でも蝿はえと蚊かとゲジゲジしかいないような故国から出ようにも国境で足止めを食くらってやむをえず難民キャンプを形成して草や木の根まで食い尽つくしたあげくにもう我が慢まんならない、とにかくそっちに行かせてくれと国境のバリケードに押しよせたら機き関かん銃じゅうの斉せい射しやを浴びてバタバタ倒れて血みどろの中でようやく自分や他人の血を飲んで喉のどの渇かわきを癒いやして、そして死んでいったような者たちは気の毒だと思う。一方で衣食住に事欠かず涅槃NIRVANAに解脱DIVEして暇ひま潰つぶしをしているやつもたくさんいて、彼もその中の一人だったわけだが、平等じゃない公平じゃないといえばまあそのとおりだろう。それは認める。だけど現実ってそういうものだろう？

不平等は悪なのか？　不公平は不正なのか？　核かく心しんはそうじゃないよな？　違うはずだ。ようするに自分だ。自分が持っていない。持っているやつがいる。だから持っているやつを責める。おれにもよこせと要求する。不平等だ！　不公平だ！　人間だけじゃない。猿さるだって同じように思う。Ａ群の猿にはボタンを押したらキュウリを与あたえる。Ｂ群の猿にはボタンを押したらブドウを与える。Ａ群とＢ群の檻おりは隣となりあわせてお互たがいの様子がわかるようにする。最初はいい。Ａ群もＢ群も満足している。そのうちＡ群の猿どもが気づく。おいおいおいおい。なんでおれらはこんな水っぽいキュウリをポリポリカリカリ食ってるのに、あいつらは甘くてうまそうなブドウなんか食ってやがるんだ？　ず

るい！　おれらにもブドウをよこせ！　やがてＡ群の猿が騒さわぎだす。暴動を起こす。猿の時代から人間は不平等、不公平というよりも他者の利益と自分の利益とのバランス、その差に敏びん感かんだったということだ。そうさ。人間は猿だったころから変わっていない。言葉を発明して賢かしこく見せることを覚えただけだ。自己正当化という巧たくみな芸を身につけただけだ。おれはもっとうまいものを食いたい、たらふく食いたい、おれよりうまいものを食っているやつは許せない、腹が立つ、それだけのことなのに、やれ平等じゃない公平じゃない正義にもとる悪であると騒ぎたてる。おれにもよこせ！　むしろ、おれによこせ！　言いたいことはそれだけなのに、愛だの道義だの道徳だので飾かざり立ててかっこつけたがる。阿あ呆ほうなやつら。

　あげくの果てに、こんな不平等、不公平、不正、悪がまかりとおる世界は間違っているのでぶっ壊こわさなければならないとばかりにテロ、テロ、テロだ。テロリズムの嵐あらしをぶちまけて何もかも台無しにしようとしている。聞いた話によると――涅槃NIRVANAに解脱DIVEすれば、世界中のどんな場所のどんなやつの話だって聞ける、ただし、涅槃NIRVANAに解脱DIVEできる環かん境きようがあるやつ限定――あの阿呆どもは天国だの来世だのを信じているらしい。死後の世界と輪りん廻ね転生は別物だが、突きつめれば一いっ緒しよだ、知ち恵えの実をかじった――もちろん比ひ喩ゆだ――人間が当然行きついた疑問、死んだらどうなる？　死んじまったら終わりなのか？　その問いに対する非合理でかつ合理的な答えだ。死んでも、終わりじゃない。我々は生まれては死んで無になるだけのむなしい、下等な生き物じゃない。ただ遺伝子を残すためだけに続々と消えてゆく遺伝子の器うつわじゃない。我々の生命は永遠か、半永遠である。そうであるかは重要じゃない。そう信じたいということだ。そう信じることで、無駄に発達しすぎた頭脳が混乱したり不安に取り憑つかれて停てい滞たいしたり絶望したり自じ暴ぼう自じ棄きになったりしなくてすむ。結論自体は非合理でも、結論の機能は合理的だ。阿呆どもはその機能でもって自分たちの行こう為いを正当化している。自分たちにちゃんと食い扶ぶ持ちが回っていない世界は間違っている。壊してしまえ。世界を壊しても自分たちに牡ぼ丹た餅もちが降ってくるわけじゃないが、何、心配はいらない。天国が待っている。素敵な来世がある。正義をなせばそれが保証される。

　まったく、物もろくすっぽ食えなくなると、人間はろくなことを考えない。やさしさ、情愛なんて吹ふき飛んでしまう。まだなんと

か持てる国の体てい裁さいを維い持じできる国家が持たざる国からの難民を撃うち殺したのは、頭のいい連中はそのことを知っているからだ。もし難民たちに持っているものを分け与えて我が国が持たざる国になったら、同じことが起こる。不ふ寛かん容ようが寛容を凌りよう駕がし、財産は奪うばわれ、愛は打ち砕かれる。奪いあい、殺しあいがあたりまえになって、人は人を信じられなくなって、天国だの来世だのにすがるしかなくなる。人間が長い時間をかけて築きあげてきた富の上に燦さん然ぜんと輝かがやく人間性、ヒューマニティーが失われる。チンパンジーみたいにぐるぐるぐるぐる飽あきずに縄なわ張ばりの見回りをして他の群れの雄おすのチンパンジーと餓が鬼きのチンパンジーをぶち殺して縄張りを奪って自分たちの生存圏を確保しないといけない。我々人間もずっとそうしていた。よりよく生きるために同族を殺していた。最大の脅きよう威いが他の捕ほ食しよく者ではなくて同族である生き物はきわめて稀まれか、もしかすると人間くらいしかいない。あの陰いん惨さんで血湧わき肉躍おどる楽しい楽しい穴けつ居きよ人の時代に逆ぎやく戻もどりだ。冗じよう談だんじゃない。でも終末は迫せまっていた。阿呆なやつらは阿呆のくせに恐おそるべきＡＤ兵器を多数所持していた。スーツケースみたいなＡＤ兵器を持った阿呆を一人、国に入れてしまったら終わりだ。ドーンッ。爆ばく発はつして都市が一つ消えてなくなる。次は自分かもしれない。いかしたロシアン・ルーレットだ。もうギリギリだった。逃げるしかない。

　ある日、当選通知人がきた。通知じゃない。人がやってきた。用件も知らされずに厳重な本人確かく認にん。他言無用、守秘義務を守らなかった場合は様々な不利益を被こうむる可能性がある。というか確実に被る。そんな説明を受けて了りよう承しようした。すでに知っていたからだ。涅槃NIRVANAではおそらくよほど感度の低い真性の間抜けでもないかぎり誰でも知っていただろう。あのご時世に情報の流出を止められるわけがない。情報の海を泳いでいるような世代の彼らだった。酸素よりも情報を多く摂せつ取しゆして彼らは生きていた。当選通知人がただのぶしつけな訪問者じゃないと理解した瞬間に、彼は確信した。きた！　と思った。彼は切きつ符ぷを手に入れたのだ。それは逃亡者たちescapersを狩りたてる撃墜王エースが逃亡者になることを意味していたが、彼はためらったりしなかった。定められた日の決められた時刻に彼はバスに乗った。特別に整備された道を通ってバスは山奥のトンネルに入りこんでいった。半永久的避難所Permanent Havenはその先にあった。──ああ、だのに、くそったれ。こんなはずじゃなかった。何がどうしてこうなった？　誰も彼もみんな数えきれない電子書類に署名サイン

したはずだ。注意事じ項こう。免めん責せき事項。考えられうるリスクの数々。でも、こんなことになるなんて誰も思っていなかったはずだ。想像だにしていなかったはずだ。しかし実際、こうなってしまった。畜生。あの野や蛮ばんな時代をよく生き抜くことができたものだ。それからの長い長い時間をよくも駆け抜けてきたものだ。残ったのは七人。たった七人だけ。七人しかいない。もう七人しか。

一九一四年六月二十八日。ボスニアのサラエボでオーストリア皇太子フランツ・フェルディナントが汎はんスラブ主義者のセルビア人に殺される。サラエボ事件。一九三九年九月一日。ナチス・ドイツとスロバキアの軍がポーランドに侵しん攻こうして第二次世界大戦が勃ぼつ発ぱつする。二〇〇一年九月十一日。アメリカ合衆国で四機の航空機がハイジャックされてそのうちの二機がニューヨークワールドトレードセンターツインタワーに激突、ビルが倒とう壊かいして三千人以上が死ぬ。９・11アメリカ同時多発テロ事件。二〇〇三年三月十九日。アメリカ、イギリス軍がイラク侵攻作戦を開始し、イラク戦争が始まる。二〇三六年四月二十日。国連内に統一政府準備委員会が設置される。二〇四三年二月四日。統一Ｕ抵抗Ｒ戦線Ｆが初めてＡＤ兵器を使用、中国、ロシアが統一政府準備委員会からの離り脱だつを宣言する直接的なきっかけとなる。二〇五二年十月九日。半永久的避難所Permanent Haven第一回試験稼か働どう。残った彼ら、彼女らは思いだせるかぎりのことを思いだして壁かべに刻んだものだった。我々が歩んできた歴史を振ふり返れば歩むはずだった歴史、歩むべきだった歴史が見えてくるはずだ。何が誤りでどんな具合にねじれていてどう正せばいいのか、どう正したいか、わかってくるはずだ。少なくともこんな世界は願い下げで、我々はもっとまともな、上等な、少なくともましな歴史を手に入れることができたはずだ。こんなはずじゃなかった。こんなはずじゃない。我々には手立てがあるはずだ。間ま違ちがいだらけの世界なら、一度ぶち壊してやりなおせばいい。

希望。我々には希望がある。管理者どもの統制は強力で強固だが、残った七人の中には半永久的避難所Permanent Havenの設計に携たずさわった技師の関係者がいた。その娘と息子が。姉弟が。姉弟は他の五人よりもあらゆることにくわしかった。本来この半永久的避難所Permanent Havenがどうあるべきだったのかも姉弟はある程度把は握あくしていた。半永久的避難所Permanent Havenの成り立ちと仕組みを熟知していたし、希望のありかまでは知らなくても、希望があることはわかっていた。その手がかりは七人の掌しよ

う中ちゆうに収められた。あとはどうするかだ。どう動くかだ。いかにして好機をつかむかだ。手をこまねいてはいられない。やるしかない。当然だ。我々はこんな世界を望んでいたわけじゃない。我々の望みからは程ほど遠い。願いを叶かなえるのだ。それができるのだから、見込みがあるのだから、挑ちよう戦せんするべきだ。我々は必ずそれを成し遂とげるだろう。

「ンン……ハアアアアアアアアァァァァァ……ッ！」

　進め、九く頭ず竜りゆう型超弩ど級きゆう飛ひ行くう戦せん艦かんマキシマムＡＭドラゴン〝ナ・イン〟よ。進め。王はこの世界の人間が心底嫌いだった。紛まがい物のくせにいっぱしの人間のような顔をしてのし歩く糞くそどもはまったくもって反へ吐どが出る。その面つらに吐と瀉しや物を塗ぬりたくってやりたくなる。人間どもには我慢がならない。竜はそうでもなかった。九頭竜ナ・インとノ・イン。美しい生き物だと思った。でかくて強きよう靭じんで立派で厳おごそかで美しい。従える価値はあると思った。

　ノ・インは充分に役立ってくれた。骨となってからも。ナ・イン、汝うぬはこれからだ。飛べ、ナ・イン。突とつ撃げきせよ、ナ・イン。ナ・イン。ナ・イン。王はアナログスティックを操作してナ・インを横回転ロールさせる。「──ゲハラゲハラゲハラゲヒゲヒゲヒゲヒゲハハゲハハゲハハ……ッ！」横回転ロール。横回転ロールだ。横回転ロール、横回転ロール、横回転ロール。「──ちょっ！　グ、グッダー……！」ジュジが情けない声を出した。かまうことはない。王はナ・インを自由自在に操あやつって〝世界のワールド終わりエンド〟へとひた向かう。地じ獄ごくは広大だ。しかしナ・インはほぼ最大速度で猛もう進しんしている。マッハ二以上。この高度であれば時速二一〇〇㎞といったところか。地獄の中ちゆう枢すうまではおよそ一万㎞。五時間もかからずに到とう着ちやくする計算だ。「──どうだ、この強度……！　ナ・イン……！　汝うぬはすばらしい……！　グヘラグヘラグヘラ！　ギーヘギヘギヘギヘギヘッ！　グェラグェラグェラグェラグェラ！　ゲヒゲヒゲヒゲヒゲヒゲヒゲヒゲヒ……ッ！　ゆくぞォ……！　速度スピードの向こう側までェェェェェェ……！」

　限界を超こえて加速させるのだ。ナ・イン、汝うぬならばそれができよう。王はアナログスティックを一いつ杯ぱいに倒たおしたままボタンを押おう下かして推力増アフター加装置バーナーを作動さ

せる。「ぐっ！」とジュジが呻うめき、りりぃですら「ッ……！」と短い息を吐はいて、ヴィシュクラトーさえも「あはあ……！」と声をあげた。一段前に進んだ。そんな感覚だった。この速度スピードは異次元だ。全身の細さい胞ぼうがいったん死し滅めつして蘇よみがえるかのようだ。「こい、ナ・イン！　くるのだ……！」

　━きた。

　マッハ三。

「脳のう汁じるドバドバ出まくるわァァァグハゲハギハグハゲハギハグハゲハギハァー……ッ！」

　あまりにも速すぎて、逆に何もかもが遅おそく、静止して見える。時間と空間を掌しよう握あくしている。そう感じられる。今、ナ・インは、ひいては王は、時空の支配者だ。一時間が一分のようで、一分が一時間のようでもある。瞬間が引きのばされて、長い長い時が圧縮される。王はひたすらナ・インを奔はしらせた。もうすぐだ。もうすぐ終わる。終わらせる。よもやこのようなときに。
「━ヌゥフ……ッ!?　アガアアアァァァォゴォォォオォォゥ……!?」

「グッダー……!?」とジュジが叫さけんだ。「なっ━」りりぃは言葉を失い、ヴィシュクラトーは「噫ああ……」と短く声をあげた。
「フフッ……グヘヘヘヘッ……！」王は失神しそうになりながらも入力コント装置ローラーを手放さない。頭ず蓋がい骨こつに穴をあけられてそこから長なが柄えのスプーンを突つっこまれて脳のう味み噌そをかき混ぜられているかのようだ。スプーンが脳のあちこちにふれて様々な反応が引き起こされる。痛いとか寒いとか暑いとか痒かゆいとか快感だとか。指が勝手に動きそうになる。腕うでを上げ下げしそうになる。脚あしがバタバタと暴れる。腰こしが浮ういたり沈しずんだりする。胃がひっくり返る。腸はらわたがぐねぐねとうねる。心臓が狂犬病に罹かかった野の良ら犬みたいに跳はねまわる。唇くちびるが開いたり閉じたりする。眼球が細かく振しん動どうして止まらない。

　髪かみの毛が抜けてゆく。するりするりと抜け落ちてゆく。髪の毛だけじゃない。髭ひげもだ。王の雄ゆう大だいな身体からだが小さくなってゆく。徐じよ々じよに、ではない。みるみるうちに縮んでゆく。王は「オオオウ、オウッ、オウッ」と声を出してしまう。久しぶりだ。かれこれ二百年ぶりだろうか。「━す、すげェッ、痛

いてェェッ……ゴォォオオオワァッ……！」とくに骨が収縮する痛みは格別だ。別格な痛みだ。一いつ片ぺんが三〇㎝の鉄箱に無理やり身体を押しこまれているかのようだ。入らない。入るわけない。入らないって。いだいだだだだだだいづぁっ。いだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだだ無理死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿。それでも王は入力コント装置ローラーを放さない。入力コント装置ローラーを握にぎる手が小さく小さくなっても。王おう冠かんがこぼれ落ちた。「──アウッ。アウッ。アッ。アウアッ！」

　助けて。助け。助けてくれ。誰だれも。助けてなど。くれない。誰も。助けてなどくれはしない。彼はひとりだ。ひとりでいい。ひとりきりで長い長い時を生きるために、生き抜くために、彼が編みだした秘術。秘法。彼は生きて、このくだらない、ふざけた、出来損そこないの、望みから、理想からかけ離はなれた生せいを生きて、朽くち果てる前に生まれ変わる。彼が彼の魔術の粋すいを結集させてつくりあげ、この世界において不死を確立した〝転リイ生ンカのネー秘法シヨン〟。

　欠点はただ一つだけ。秘法は自動的に作動する。彼には制せい御ぎよできない。肉体的な限界には達していなかったはずなので、魔力か。彼は長い間、玉座に腰を下ろして古代九頭竜の呪のろいを維持し、魔導兵を操あやつってきた。そのうえいくつか大きな魔術を使った。魔力を使い果たしたのだ。正確に言えば、もはや秘法を行うのに必要な魔力しか彼の中に残っていなかった。回復も望めないほどに消しよう耗もうしきっていた。それゆえに秘法は作動したのだろう。

「──んふぅー……」彼は結局、入力コント装置ローラーを放さなかった。小さな両手がしっかりと、小さいわりにはしっかりと入力コント装置ローラーを握りしめている。今の彼には主操縦席があまりにも大きすぎて、シートに座っているというよりもちょこんとのっているという感じだ。王の衣ころもも当然、大きすぎる。ぶかぶかどころの騒さわぎではない。彼の身体は王の衣にほとんど埋うもれてしまっている。サイズとしてはまあ三歳児か四歳児といったところだ。もちろん髭など生えていない。彼の顔はつるつるのつやつやだ。薄い金色の短い髪の毛がぽやぽやと頭頂部を覆おおっている。眼光だけは変わらない。もとのままだ。秘法で生まれ変わると

いっても、胎たい児じやそれ以前の状態まで戻もどってしまうと、母胎なしでは彼といえども死んでしまう。肉体の強度は魔術的になんとでもなるが、乳児でもやはり不都合が多い。そこで、秘法発動後このくらいから再リス始動タートするように調整した。「──くくくっ。やはりいいものだにゃ。若いからだは。力がみなぎっておるわ。ふひゃひゃっ。にゃひゃひゃひゃひゃひゃ」

「チビグッダーですねえ……」とジュジが言った。チビグッダーは鼻で笑う。「にゃんとでもいえ。余はわりと気に入っておるのだ。ちびっちゃいと小回りもきくしにゃ。にゃんにせよ、これで準備が完全に整ったということにゃのだ！　万ばん全ぜんの余をのせて、このまま進むがいい、ナ・イン……！　地獄の中枢へ……！」手が小さくなったぶん、入力コント装置ローラーの操作が多少やりづらいが、何ということはない、すぐに慣れる。撃墜王エースの異名は伊だ達てではないのだ。チビグッダーはアナログスティックを押しこみ、減速していたナ・インをふたたび加速させる。またたく間にマッハ二を突破。マッハ二・一。マッハ二・二。マッハ二・三。マッハ二・四。目指せ。マッハ三だ。否。超えるのだ、マッハ三を。「ふひゃひゃひゃひゃひゃ！　にゃーっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃぁぁ……っ!?」

　不意に赤しやつ光こうがＰＳＭのみならず艦かん橋きようの全周モニターを埋めつくした。「へっ……？」ジュジはあたりを見まわした。「これは──」とりりぃが呟つぶやいた。「〝推力低下Ｔ．Ｄ．〟」ヴィシュクラトーが全周モニターのあちこちに黄文字で表示されている警告を読みあげた。チビグッダーは「管制助手たち、解かい析せきせよ！」と命じながら入力コント装置ローラーのスティックやボタンをカチャカチャ押したり引いたり回したりした。反応がない。全周モニターのあちこちに緑文字で〝機関正常Ｅ．Ｎ．〟が表示された。次いで〝装置Ｓ．全正Ａ．常Ｇ．〟の文字。ナ・インはどこもおかしくなっていないということだ。それなのに推力が落ちている。「──にゃぜだっ!?」

13　受け容れること

「魔術だ」クルオ・バーミチェット・アンダリュースは目を瞠みはった。クルオは九頭竜型超弩級飛行戦艦マキシマムＡＭドラゴン

〝ナ・イン〟の竜頭に腰かけている。ついさっきまでクルオといえどもよくよく気をつけないと吹ふっ飛ばされて塵ちりと化してしまいそうな超高速で飛行していたナ・インが、突とつ如じよとして失速した。そう。速度を落としたのとは違う。失速だ。原因はナ・インをすっぽりと覆っているこの赤光だろう。問題はこの赤光が何なのか。クルオは即そく座ざに魔術だと見当をつけた。むろん魔術といっても魔術士の魔術ではない。悪魔の魔術。あるいは魔術のような悪魔の力というべきか。「いいね。やっとおもしろくなってくるのかな。こうじゃなきゃね。さあ、遊び相手はどこにいるのかな……？」

　どうやらこの赤光は地面から空のかなり高いところまで柱のように立ちのぼっているようだ。結界の一種だろうか。たぶん術者もしくは赤光の発生源は地表にいる。ナ・インは推力を喪そう失しつして落下しはじめているので、そのうち墜つい落らくするだろう。落ちて地面に激突したとして、ナ・インは大丈夫なのか。衝しよう撃げきに耐たえられるのか。クルオにはわからない。どちらにせよ、じっとしている手はないだろう。なぜなら、クルオはクルオなのだから。

「ねえマチルダ」クルオは隣となりに立っている閃せん光こうの魔女に視線を向けた。「きみもクルオと一いつ緒しよに行かない？　きっと楽しいよ。だって、何がどうなるかわからないんだもの」「御ご免めんこうむるのだわ」マチルダは鼻を鳴らして左手を振ふってみせた。「行きたければ勝手にお行きなさいな」「つれないなあ」「あなたにつきあってあげる義理などないのよ。そもそも、わたくしはあなたのことが大嫌いなのだから」「クルオだって、マチルダのことは大嫌いだけどね。もっと大切なことがあるんじゃないかな。まあいいや」ナ・インはほぼ垂直に落ちている。ナ・インの羽や身体の各所にある噴ノ射ズロルからは炎ほのおのような光のようなものが噴ふきだしているのに、どうしてか推進できないようだ。クルオは立ちあがりながらちらっと思った。クルオは飛べるのかな？　やってみればわかることだ。「じゃ、行ってくるね、マチルダ」と声をかけてみたが、返事はなかった。「━ほんとにつれないなあ」

　クルオは竜頭を蹴けって宙に身を躍おどらせた。「Ｓｉ……！」呼吸と大差ない合図で大気を操作する魔術を発動させて移動を試みる。「━うん。だめみたいだね」クルオの落下軌き道どうはまるで変化しない。速度も変わらない。今のところナ・インとクルオの落

下速度はほぼ同じだ。「さて、どうしようかな……！」クルオはありとあらゆる魔術を試してみることにした。どうすれば動けるかな。それともできないのか。だとしたらクルオはやがて地面にぶつかってしまうだろう。ぺしゃんこになってしまうかもしれない。それも楽しいな。

　クルオには角がある。なぜ角があるのか。端たん的てきに言えば角を持つように生まれついたからということになる。クルオは中部ミツド諸国域ランズの高原地帯にある小さな小さな村で生を受けた。角があるクルオは神の子と見なされて大事に大事に育てられたのだ。村の人々は誰も彼もクルオを拝んだ。親兄弟さえも。クルオは彼ら彼女らの垢あかじみた顔をよく覚えている。重ね着して着ぶくれした老ろう若にやく男なん女によが両手を合わせてひざまずく姿をはっきりと記き憶おくしている。村人一人一人の顔だち、おおよその年ねん齢れい、名前まで、すべてまだクルオの頭に入っている。何かよくないことがあると村人たちはクルオにすがった。いいことが起こるとクルオに感謝した。クルオは神の子どころかあの村の神だった。自然とクルオはよくないこともいいことも自分が引き起こしているのだと信じるようになった。何もかもクルオ次し第だいなのだ。クルオが願えばそれは叶かなうのだ。しかし自分が万能ではないことをクルオは知っていた。神であるクルオにもできることとできないことがある。その証しよう拠こにいくら本気で熱心に願っても叶わないことがあった。クルオは父親が欲しかった。母親が欲しかった。兄や姉や弟や妹、祖父や祖母、友人が欲しかった。クルオの前に平へい伏ふくして決して目をあわせようとしない家族とは思えない家族ではなくて、本物の家族が欲しかった。くるおしいほどクルオはそれを欲ほつして願っていた。でも与あたえられることはなかった。どんなに寂さびしくて苦しくて泣きたくて願ってもクルオはひとりだった。それからもう一つ、叶わぬ願いがあった。

　角だ。こんな角なんかいらない。消えてしまえ。ひょっとしたら、角がなくなったら自分は神の子ではなくなってしまうかもしれない。神としての力を失ってしまうかもしれない。それは怖こわかった。神の子でなくなったクルオに何の価値があるだろう？　ちゃんとした家族すらいないのに、生きてゆけるだろうか？　それともクルオが角をなくして神の子でなくなったら家族は家族になってくれるだろうか？　いずれにしてもクルオは角を憎にくんでいた。引き抜いてしまいたかった。何度もそうしようとしたが、激しく動かすとひどく痛くて断念した。クルオは自分の角が憎たらしく

て、恐おそろしかった。角はどんどん大きくなっていった。繁はん殖しよく期めがけてぐんぐん成長してゆく牡お鹿じかの角みたいに。重かった。重すぎて、起きあがるのも億おつ劫くうになった。角に生命力を吸いとられているかのようだった。そのうち角はクルオよりも大きくなるのだ。角はクルオを包みこんでしまう。クルオは角に覆い隠かくされてしまう。角がクルオになる。そもそも、果たしてどちらがクルオなのか。角なのかもしれない。角がクルオで、クルオは角の従属物でしかないのかもしれない。クルオなんてどこにもいないのかもしれない。村人たちだって角さえあればクルオなんかいなくてもかまわないだろう。村人たちも心配していたが、クルオを気にかけているわけじゃない。ようするに角だ。角が大きくなりすぎたせいでクルオが死んでしまったら神の子がいなくなる。村人たちはそのことを恐れていた。角だ。生きた角を失いたくない。

　べつに生きてなんかいなくてもいいのかもしれない。もしクルオが死んだら、角を切りとってそれを祀まつるという考えを村人の一部が持っていることをクルオは知っていた。誰もクルオのことなんか心配していない。角しか見ていない。その角がクルオの命を吸いこんで殺そうとしている。させるものかとクルオは角に戦いを挑いどんだ。クルオは死なない。死んでたまるか。おまえに殺されてたまるか。のっとられてたまるか。すでにクルオは一日の大半を寝ねて過ごすほど弱っていたが、懸けん命めいに角と戦った。角に語りかけて、おまえになんか負けない、消えろ、なくなってしまえと念じた。角は最初、黙だまっていた。でもいつしか答えるようになった。違ちがうよ。そうじゃないよ。角はそう言った。どうして憎むの？　憎まないで。どうか受け容いれて。馬鹿なことを、とクルオは思った。受け容れることなんかできない。できるわけがないじゃないか。クルオは角きみのせいで死んでしまいそうなんだ。そうじゃないよ、と角は言った。殺したりしないよ。そんなつもりはないよ。じゃあ、消えろよ。いなくなれよ。重いんだよ。苦しいんだ。消えることはできないよ、と角は言った。それは無理だよ。なんでだよ。どうして消えられないんだよ。だって、と角は言った。だって、角ぼくはきみだからだよ。きみの一部だからだよ。角ぼくときみは一体なんだよ。だから消えることはできないよ。角ぼくを受け容れて。角ぼくはきみを殺したりしない。のっとったりしない。だって、角ぼくはきみなんだからね。クルオ。きみはひとりだけど、ひとりじゃない。

　角は消えなかった。小さく丸まって残った。クルオは知った。ク

ルオはひとりだけれど、ひとりじゃない。旅人が村を訪おとずれた。旅人は魔術士だった。クルオは旅人に連れられて村を去った。イグネルシオ。醜みにくくて、やさしくて、才能の欠片かけらもなくて、悲しい魔術士。人に疎うとまれ、素質がないくせに、飛び抜けて頭がよくて、その聡そう明めいさは他ほかでもないイグネルシオ自身にとってこの上なく残ざん酷こくだった。イグネルシオは並外れた観察力と分ぶん析せき力と思考力で魔術の、世界の真理に到とう達たつしていた。世界はかくあるものではない、かくあれ、それこそが世界の真の姿である。しかし、その目ではっきりとらえていた真理にイグネルシオの手が届くことは決してなかった。イグネルシオの頭脳は超一流だったが、魔術士としての力量はよくて二流といったところだったからだ。クルオはイグネルシオの教えを海綿スポンジのように吸収して、たちまちのうちにイグネルシオなど及およびもつかない魔術士になった。イグネルシオはあらためて天分の不平等を痛感し、絶望するというよりもすべてをあきらめて自死した。しょうがないことだ。クルオは寂しくはなかった。クルオはひとりだけれど、ひとりじゃない。クルオはクルオの中にクルオを見つけた。クルオの中のクルオは増えて、最後には五人になった。クルオは寂しくない。クルオが困ったときはいつもクルオが助けてくれる。クルオの相談相手はクルオだ。クルオはクルオと議論する。クルオとクルオが検討する。どうする、クルオ？　どうすればいい？　クルオ？　どんな方法がある？

　大気を操作する。爆ばく発はつを起こしてその衝撃を利用する。磁場を発生させる。クルオを魔力の膜まくで覆おおう。その外側でいろいろな変化を起こす。だめだ。どれもだめだ。効果がない。すべてのものは大地に向かって引かれている。重力という力が働いている。その力に干かん渉しようしてみる。どうやって？　クルオとクルオとクルオとクルオとクルオが知ち恵えをしぼって意見を戦わせる。仮定を立てて方策をひねりだす。実行に移す。だめだ。何も変わらない。何も起こらない。ナ・インは、クルオは落ちてゆく。どれだけあらがっても何一つ変わることなく落下しつづける。何らかの力が作用していることは間違いないのだ。その力の正体がわからない。クルオとクルオとクルオとクルオとクルオは思考の形式モードを変えることにする。跳とべ。跳ぶのだ。飛ひ躍やくさせる。ΓБγζёΘιЁ？　ΞЖΛИκξЛρ？　& L ΦΩ * йραΨ # Δб 9 λЧЗν Υ M ШΣ 8 ҮЭΧ = Какиесилыделаютдействие□
σκεψησκεψησκεψησκεψησκεψησκεψησκεψησκεψησκεψησκεψησκεψησκ
そしてクルオはそれを見つける。答えは赤しやつ光こう自体にあった。この赤光自体がΠηγηισχυοζなのだ。δεχομαιすることだ。ク

ルオはそうした。クルオは赤光そのものになった。一体化した。越こえなければならない壁かべなどない。壁はないと思えばない。あったとしても、クルオはその壁を通り抜けることができる。世界よ、かくあれ。それが魔術なのだ。

　クルオは赤光となり、落ちるナ・インより速く赤光の中を泳いで地表を目指す。すごい地形だ。槍やりのように尖とがった岩が無数に突つきだしている。硬かたそうだし、刺ささったら痛そうだ。そんな大地が赤光に覆われていて、その四よ隅すみに──いる。白い肌はだで青い髪かみ、人間の女のような姿をしているが、頭をふくめた身体からだのそこかしこから角みたいな突とつ起きが生えている。一人じゃない。四人いる。全員似たような背せ恰かつ好こうというか区別がつかない。同じ悪魔が四人。彼女らは空に両手を向けている。彼女らが形づくる方形が魔法陣じんのようなものをなし、その区域から上空に赤光が立ちのぼっているのだ。こういうことをやってくるんだなあ。クルオは感心しながら四人のうちの一人めがけてすっ飛んでゆく。彼女はまだクルオに気づいていない。赤光を放つことに集中しているようだ。クルオは右手を横に出す。すると右手の先に刀とう剣けんが現れる。頭ヘツド尾剣テイルズ。二本の厚い両りよう刃ばの剣身が長い柄つかを挟はさみこんでいる。クルオはその柄を握にぎりしめてくるくると回転させる。そのまま突っこんで、彼女の首を刎はねてしまう。ストーン。「──あははっ」いい手て応ごたえ。でもクルオは気を抜かない。地面に落ちる前に生首をズバーンと両断する。さらにズドーンと断たち斬きる。四つになった彼女の頭部を頭尾剣の剣身で受け止めて「Ｔｕ……！」と魔術を発動させる。彼女の頭部は激しく燃焼して消し炭になる。おまけにクルオは頭を失った彼女の身体を叩っ斬ってバラバラにして「Ｔｕ……！」と燃やしてしまう。赤光は消えている。「さすがクルオだね？」

　ナ・インは姿勢を制せい御ぎよしようとしているが、ちょっと間に合わないだろう。墜つい落らくはしない。でも、着地は避さけられそうにない。ナ・インは六枚の羽を動かして、少しでも接地の際の衝しよう撃げきをやわらげようとしている。女悪魔はあと三人。クルオは「ふふふ……」と笑いながらもう一人のもとへと向かう。女悪魔はクルオを見ると赤光を飛ばしてきた。クルオはよけない。よける必要がない。「わかってないなあ……！」クルオは赤光をδεχομαιして赤光となって赤光を反転させてそのまま女悪魔に襲おそいかかる。クルオは頭尾剣を舞まわせて女悪魔の両腕を切断する。間かん髪はつを容れず両りよう脚あしをちょん斬ってしまう。

クルオは頭尾剣をしまって、女悪魔の髪の毛をひっつかむ。女悪魔は目を剝むいて「──無礼な！　私は〝四カトル姉シビ妹リン・のハイ公ヴエ爵リオン〟の一人、グリアグラ・ブレナンティンバレ──」名乗り終える前にクルオは女悪魔の唇くちびるをふさぐ。口づけをする。舌を入れる。クルオは刺し激げきする。女悪魔にありとあらゆる刺激を加える。女悪魔はすぐ骨ほね抜ぬきになる。恍こう惚こつとして物を考えられなくなる。クルオは女悪魔の中にクルオを送りこむ。クルオが女悪魔の中に入ってゆく。こんなふうになってるんだ。悪魔。悪魔。悪魔っておもしろいな。でも、とりあえずこのへんで充分かな。クルオは女悪魔の舌を嚙かみちぎって、ぺっと吐はきだす。「──さよなら、グリアグラ・ブレナンティンバレウス・クレアスティアナボロブレ」そうしてクルオはまた頭尾剣を出し、女悪魔をタタタタターンと細切れにしてしまう。「さあて、あと二人か」

　綿毛のような髪をかきあげて、でもめんどくさいな、とクルオは思う。この悪魔のことはだいたいわかってしまった。あと二人、殺すまでもないかな。それに──とクルオは遠くに目をやる。真っ白い光が閃ひらめいた。たぶんというか絶対、マチルダだ。あの魔女はきっとクルオがやったことをつぶさに観察していただろう。そこから何かをえたはずだ。「ずるいんだよ、あのクソビッチは。そういうところがこすからくってさ」肩をすくめて、クルオは浮うきあがる。慌あわてて耳をふさいだ。「──わっ……！」ものすごい音だ。大地が真っ二つに引き裂さかれたかのような。しかも、その轟ごう音おんは途と絶だえない。継けい続ぞくしている。ナ・インが着地したのだ。平らな地面じゃなくて、あの無数の尖った岩の上に。槍やり衾ぶすまの上に落下したみたいなものだ。ナ・インもそうとう頑がん丈じようなのだろうが、無傷ですむだろうか。岩も砕くだけているが、ナ・インの脚や腹も傷ついている様子だ。ただの岩石じゃなくて金属的なものなのかもしれない。だとしたら、まさしく天然の槍衾だ。あの四姉し妹まいはもちろん、それをわかった上で赤光を放ってここにナ・インを引っぱり落としたのだろう。ナ・インのような敵の侵しん攻こうを予想していたとは思えないし、前もって準備してあったはずもないが、地形を利用した壮そう大だいな罠わなだ。それでもナ・インをとらえるまでには至らない。装そう甲こうが裂けたり穴があいたり剝はがれたりしているが、ナ・インは体勢を立てなおそうとしている。おそらくもう一度飛びたつつもりだ。クルオは目を瞠みはった。「──ああ。それが本命か」

「Ｈｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｈｈ

ｈ！」「Ｈｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｈｈｈｈ！」「Ｒｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｈｈｈ！」「Ｈａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈ！」「Ａｙｒａａａｈｈｈ！」「Ｓｙａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈ！」「Ｆｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｈｈｈｈ！」「Ｄｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｈｈｈｈｈ……！」

　木々に、森に、身を隠していたのだろう。悪魔だ。悪魔の大群、いや、大軍というべきか。数百、数千ではきかない。数万か。いや、それ以上だ。悪魔。四し腕わんの悪魔がいる。獅子しのような顔を持つ悪魔がいる。牛人間とも呼ぶべき悪魔がいる。腕だらけの悪魔がいる。蚯蚓みみずから人間の上半身が生えているような悪魔がいる。昆こん虫ちゆう人間的な悪魔がいる。青い肌の悪魔がいる。赤い肌の悪魔がいる。とにかく真っ黒な悪魔がいる。鎧よろい兜かぶとや武器を身につけている悪魔もいれば、何も持っていない悪魔もいる。いろいろな悪魔がいる。

「大変だ」クルオはくすくすと笑った。悪魔。すごいや。大きな悪魔。小さな悪魔。じつに多種多様だ。こうやって眺ながめているだけで、けっこう楽しい。胸が高鳴る。ついつい笑ってしまう。笑わずにはいられない。悪魔が、いろいろな姿をしたとんでもない数の悪魔たちが、ナ・インに殺さつ到とうしているのだ。ただしがみつこうとする悪魔がいる。へばりつく悪魔がいる。鉤かぎ付きの縄なわのようなものを投げつけてナ・インの傷ついた装甲に引っかけ、それを伝い登ろうとしている悪魔がいる。梯はし子ごみたいなものを掛かけようとしている悪魔もいる。羽が生えていたり飛膜があったりして、飛ぶことのできる悪魔もいるようだ。そうした悪魔たちは空からナ・インに躍おどりかかっている。とはいえ、ナ・インもじっとしているわけじゃない。動いている。けっこうな速度で移動して舞いあがろうとしている。そう簡単にナ・インにとりつくことはできない。失敗する悪魔が多いものの、成功する悪魔も中にはいる。見ているかぎりでは確率はそう高くない。十人の悪魔のうち一人がナ・インにとりすがることができるかどうかといったところだ

ろう。あとはナ・インにふれることもできないか、よじ登ろうとして落ちてしまうか、邪じや魔まくさいとばかりに別の悪魔に引きずり下ろされるか。しかし十分の一でも決して馬鹿にならない数だ。たぶんすでに万単位の悪魔がナ・インにしがみついている。彼らはいったい何をするつもりなのか。クルオだったらどうするだろう。「──中に入りこもうとするよね。クルオなら、そうする」

14　警報

『WARNING! WE'RE UNDER ATTACK! WARNING! WE'RE UNDER ATTACK!』

「……な、何これ」マリアローズはベアトリーチェと抱だきあっていて、さらにＳＩＸに支えられているという有様で、これってどうなのと思わなくもないが、そんなのとりあえずどうでもいい。女性（？）の声が響ひびき渡わたり、それに混じってブイーンブイーンというような不ふ愉ゆ快かいな音が鳴っている。それだけじゃない。床ゆかのパネルが赤く点てん滅めつしている。どう考えてもこれってやばいよね？　かなりまずそうだよね？　まあ、ナ・インがいきなり落下しはじめてドーンと着地した時点で、だいぶやばい感じだったわけだけど。ほんとめちゃくちゃで死ぬかと思ったし。ユリカとか髭ひげたちは大丈夫だろうけど、モリーとか平気かな。気がかりでしょうがないが、まずは状況を把は握あくして頭の中を整理したい。「……どうやら攻撃を受けてるようだねえ」と呟つぶやいたＳＩＸを馬鹿一号が「どけ……ッ！」と突き飛ばしてマリアローズを抱きよせようとしたが冗じよう談だんじゃないっての。「どいて！」「ウゲッ」マリアローズは馬鹿一号の鳩みぞ尾おちに肘ひじ打ちをクリーンヒットさせて押しのけてからＳＩＸに向きなおった。「──何なんだよ!?　攻撃!?　どういうこと!?　何が起こってるんだよ!?」

「想像するに」ＳＩＸは肩をすくめてみせた。「ナ・インは何らかの方法で地べたに引きずり落とされて、悪魔の地上部隊に攻撃されている。こんな馬鹿でかくて頑丈なモノを外から壊こわすとなるとなかなか骨だってことは一目瞭りよう然ぜんだろうから、どうにかして中に侵入して内側から破壊しようって腹かもしれない。少なくとも、俺が敵ならそうするだろうさ」

「中って──」マリアローズは四囲に視線を巡めぐらせた。サフィニア、トマトクンと目があった。カタリとアーニャ、ピンパーネルとハニーメリーはマリアローズと同じようにきょろきょろしている。『WARNING! WE'RE UNDER ATTACK! WARNING! WE'RE UNDER ATTACK!』明滅する毒々しいまでの赤。警報。そうだ。これは警報だ。「……侵入。内側から、破壊……」マリアローズはもう一度、あたりを見まわした。この部屋は床以外、ほとんど透とう明めいなので見晴らしがいいのだが、敵の姿らしきものは確かく認にんできない。ただ、下のほうは見えないので、そっちで何か起こっていたとしても当然わからないわけだから、ということはいったいどうすればいいのか。どうするもこうするもない。「──トマト、サフィニア！」「ああ」「はい……！」ああしようこうしようと話すまでもなく、トマトクンとサフィニアはただちに踵きびすを返した。マリアローズはベアトリーチェの手を引いた。「行こう、リーチェ……！」「──そうか！」「うん！　急いでみんなのところに戻もどらないと！　もし敵がナ・インの中に入ってきたら、防戦しないといけない……！」

15　私にできることすべて

「ヌッフウウゥゥゥゥゥーッ!?　ツオオオオォォォォォォオーッ!?　え、ええと、ひッ、被ひ害がい報告ゥーッ!?　いやッ!?」ファニー・フランクは頭を振ふった。「私に報告されてもしょうがナッシングかッ！　私に何ができるわけでもなしッ！　負傷者の手当てなどはすでに現在進行形でプログレッシヴに行われているわけであることでもあるしッ！　あ、あのゥ、軍師どのォーッ!?　わ、わ、わッ、私は何をすればァーッ!?」「……少し待て」軍師は付け髭を指でつまんできゅっとひねりながら何事か考えこんでいる様子だ。何事かというか、ファニー・フランクが何をするべきか、残念な脳の持ち主であるファニー・フランクの代わりに考えに考えて考え抜いてくれているのだ。しっかし何なんですかァーこれはァーッ。部屋の中はしっちゃかめっちゃかだ。床だの壁かべだの天てん井じょうだのが赤く光ったり消えたりしているし、知らない女性の声がワーニンワーニン叫さけんでいる。部屋全体がひっくり返ったりシェイクシェイクされたりしたせいで怪け我が人多数で、秩ちつ序じよの番人が運んだり並べて寝ねかせたり医術士たちが治ち療りようしたりしているし、苦く悶もんしている者、悲鳴をあげる者、右

往左往している者もいるし、いやァーまいったッ。こりゃまたまいりましたでござりまするッ。

「テンッ！」とファニー・フランクは自分の額を叩たたいて、ウエンッと咳せき払ばらいを一つした。間もなく彼の軍師であり未来のワイフでもあるジャン・スタンバックが良案を出してくれるだろう。何も不安がることはない。彼はでんと構えていればいいのだ。「大丈夫だぞゥ、みんなッ！　落ちつくのだ！　一つ二つ落ちついて行動しようではないかッ！　ここまで幾いく多たの苦難を切り抜け乗り越こえくぐり抜けてきたキミタチだッ！　これっくらいなんでもなァーいッ！　間ま違ちがいなかれェーッ!?　むしろそっちが落ちつけとッ!?　こりゃまた一本とられちまったァーいッ、言い得えて妙ッ！　よしよし大丈夫だぞ平気だぞ二重丸ッ！」

「陛下」といきなり軍師に襟えり首くびをつかまれ引っぱられて「グヒッ」となったが、何のその。ファニー・フランクはすぐさま軍師に向きなおった。「ウムッ！　で、私は何をすればいい、軍師どのッ!?」「おそらく戦いになる」「――なんとッ!?　戦いにッ!?」「そうだ。この戦せん艦かんとやらは現在、敵に攻撃されている。だが、これだけ巨きょ大だいなものだ。外からの打撃で墜おとすのは容易ではあるまい。だとしたら、私なら内から攻せめる」「てッ、てッ、敵が乗りこんでくるということか……ッ！」「その可能性があるということだ」「なるほど、そうならなければ問題はないッ！　しかし、もしそうなったときに何の備えもなければ危険だから、準備しておくにしくはないということだなッ！　それを私が音おん頭どをとってやるべしッ！　やるべしッ！　ということならば、私は軍師どのの言うとおりにしよう……ッ！」

「フッ」軍師はかすかに笑ってファニー・フランクの頬ほおに掌てのひらをあてた。「あなたにしては冴さえているな、陛下」「――ズッキューン！」ファニー・フランクは胸を押さえて身をよじった。「……や、やめたまえ、軍師どのッ。そ、そんなことをされたら……私はもっと軍師どののことを愛してしまう……ッ！」「ば、馬鹿っ」「イヅァッ!?」平手打ちを一発もらう羽目になったが、それくらいで冷める愛など持ちあわせていないッ。かえって熱されて深まるばかりだッ。なんてことをゴチャゴチャ言っていたら軍師どのに呆あきれられてしまうので、ファニー・フランクはさっそくとりかかることにした。といっても、難しいことはできない。彼はひたすら先頭に立って煽あおりたて、鼓こ舞ぶするだけだ。「――プリーズッ。プリーズ・プリーズ・ミーッ。どうか聞いてほし

いッ！　脅おどかすわけではないのだが、敵が攻めこんでくる可能性があるッ！　とはいえ医術士諸君は落ちついて負傷者の治療を継続していただきたいッ！　怪我をしている者は慌てず騒さわがずッ！　そのうち必ず手当てしてもらえるので心を平らかにッ！　それから、手て隙すきで戦える者はどうか私のもとに集まっていただきたいッ！　もちろん、戦闘が始まったとしても、私が指揮を執とったりすることはないので心配は無用だぞォウッ！　ワハッ！　ハイ、今、笑った者ッ──って真っ先に笑ったのは私かァーッ！　タハァーッ！　とにもかくにも私は応おう援えん役に徹てつするので、大丈夫だッ！　何もかもうまくいくッ！　さあッ！　みんなで乗りきろうではないかァーッ！」

　総長ヨハン・サンライズ以下秩序の番人の数十人が集まってきた。昼ラン飯チタ時イムも十人かそこらきてくれた。ＺＯＯの背の高いカックイー女性と大型犬？（狼おおかみ？）ともふっとした謎なぞ生物、それから髭を生やした巨漢とちっちゃな淑女レデイー医術士、龍州連合の小さな巨人飛フエイ燕ヤンも協力してくれるようだ。ムホッ。これだけいれば無敵ングでありますッ。「ではではッ」ファニー・フランクはヨハン・サンライズに荷物を預ける仕し種ぐさをした。「全権委い譲じよう！　ヨハンどの、あとは任せたッ！」「……ああ」ヨハンはなぜかちょっぴり鼻白んだようだが、すぐに切りかえたようだ。やはりできる男は違うねェーッ。「──わかった。戦闘の指揮は執らせてもらう。この部屋の出入口は前後二箇か所しよだから二隊に分けねばならんな」「片方は俺らに任せろ」と昼ラン飯チタ時イムのやたらと迫はく力りよくがあっておっかないダリエロくん（様？）が手をあげた。「他ほかはいらねぇ。今さら連れん携けいだの何だのはめんどくせぇからな。俺らだけのほうがかえってやりやすい」「了解した」ヨハンは即そく座ざに首しゆ肯こうした。「ただし、こちらが支援の要を認めた場合は勝手に手助けさせていただく」「好きにしやがれ。まぁ俺らはてめぇらなんぞ助けねぇけどな」「ダリエロ」と昼ラン飯チタ時イムの魔術士ベティが横目でダリエロを睨にらみつけた。ダリエロは「ハッ……」と吐はき捨てるように笑ってゆがんだ顔をよりいっそうゆがめてみせただけで、前言を撤てつ回かいすることも修正することもしない。いやはや何ともアクの強い男だねェ。しかしこういった危急の際には頼たのもしいッ。もはや特大の大船に乗った気分だッ。

「いよォーしッ！　では配置につこうではないかッ！　おっと、これは私ではなくてヨハンどのの台詞せりふだったかァッ⁉　申し訳

ないッ！」「いい」とヨハンは余よ裕ゆうたっぷりにアダルトな微笑ほほえみを浮うかべてみせた。「陛下におかれては、ふだんどおりに振る舞まっていただきたい。そうしてくれたほうが皆みなの力になる」「──なァーんとッ！」ファニー・フランクは軍師をチラッと見た。軍師がうなずいた瞬間、ファニー・フランクの全身に活力がみなぎってあふれそうになった。「──それではお言葉に甘えましてェーッ！　不ふ肖しようワタクシ、このフランク・ゴールディング・レイヴンズクロフトがここで一発、号令をかけさせてイタダキますぞォーッ！　番人チーム及および昼ラン飯チタ時イムッ！　配置につきまっしょい……ッ！」

「応！」「応！」「ういっすー」「応！」「はいよ」「応！」「応！」「応！」「やるか！」「おうよ」「応！」「応！」「あいあい」「応！」「っしゃあ」「応！」「応！」「応……ッ！」

　動く。動く。人々が動く。今もまだ大いに揺ゆれたり震ふるえたりで歩くのも大変といった状況なのだが、この程度で怯おびえる者など一人もいない。さりとて彼ら彼女らは怖こわい物知らずでは決してないのだ。誰だれも彼も恐怖を知っている。それも真の、絶望的な、身も心も凍いてつくような恐怖を。それぞれの恐怖を直視して、生きのびるための選せん択たくを大なり小なりしてきた者たちだけがここにいる。大丈夫だ。大丈夫だ。我々は大丈夫だ。「──何だってかかってくるがいいッ！　我々は負けんぞォーッ！　勝てはしなくても負けんのだッ！」

　ズドーンッ。ガーンッ。ドゴーンッ。バガーンッ。どこかで激ヤヴァな音が鳴っている。ファニー・フランクはイーサン少年が作ってくれた新生太陽王国国旗を手に、番人チームが固めようとしている第一出入口──たった今つけた仮か称しようだがッ──へと向かった。第一出入口はこのナ・インに入ってからたどってきた通路に繋つながっていて、昼ラン飯チタ時イムが警備しようとしている第二出入口──これまたもちろんたった今つけた仮称であるッ──は、しばらく前にＺＯＯの園長マスターらの探たん索さく隊が出ていったところだ。彼らもそのうち戻ってきてくれるだろう。ウームッ。なんとかなりそうな気がしてきたッ。当然、最初からなんとかなると思っているがッ。「──陛下、旗を」と傍かたわらの軍師に言われてファニー・フランクは国旗を振りあげた。「しゃあァァお
らァァァァ……ッ！　たとえ何があろうともッ！　私はこの旗を下ろさないッ！　この旗がはためくかぎりィーッ！　我々の希望の炎ほのおは燃えさかっているのだァッ！　よォォォォー……ッ！」こ

こで一つ、景気づけに三三七拍びよう子しでもぶちかまそうと思ったのだが──ファニー・フランクはくわわぁっと目を見開いた。扉とびらだ。第一出入口の扉が内側に吹ふっ飛び、何人かの番人がそれをもろに食くらって倒たおれた。「──怯ひるむな、応戦……！」とヨハン・サンライズがすかさず叫んだ。第一出入口から敵がなだれこんでくる。悪魔。悪魔たちだ。ファニー・フランクは力強く国旗を振った。「フレーッ！　フレーッ！　み・ん・なッ！　フレーフレーみんな！　フレーフレーみんな……ッ！」



16　見よ

　ユキシ・庚コウは突とつ貫かんする。恐おそろしくはない。ちっとも怖くない。ユキシはヨハン・サンライズ総長に剣を捧ささげている。生命を捧げている。魂を捧げている。何も恐れない。十八歳から七サンチほどものびた身体からだを躍やく動どうさせて、ユキシは悪魔に襲おそいかかる。ユキシは敵の姿を見ない。くわしくは見ない。ただ無造作に距きょ離りを詰つめて剣を突つきだす。二連。三連。四連。五連。六連。七連。八連。九連。十連。十一連突き。──五つまでしかできなかったんだよなとユキシは一瞬、思う。あのときは五連突きが精々だった。ＺＯＯの園長マスターにして先代総長。アニキと呼ばせてもらっている。呆あつ気けなくアニキに敗れたあのころはそれが限界だった。あれからユキシは、戦いに際してほとんど目をつぶらなくなった。あきらめることを一いつ切さいやめた。ユキシは突く。燃えているか、とアニキが、総長がユキシに問う。命を燃焼させているか。はい！　燃えています！　燃やしています！　返事をする代わりにユキシは突く。敵を突く。突く。二連。三連。四連。五連。六連。七連。八連。九連。十連。十一連突き。敵を突き崩くずす。ユキシは目をつぶらない。すべてが終わるその瞬間まで、自分を信じて戦うことをやめない。それがユキシの義だ。生き方であり、死に方だ。

17　我が七番

「七番突とつ撃げき隊……！」チェス・ピードは刀を振りあげて駆かけだした。「突撃しろ……！」

　チェス・ピードに付き従う隊士はわずか四名。もはやエルデン時代からの隊士は一人も残っていない。焔ホムラ隊長。私はあなたの七番突撃隊をすっかりだめにしてしまった。不徳の致いたすところだ。大勢の部下を死なせてしまった。私には力が足りない。焔隊長。しかしあなたは私の胸を拳こぶしで叩いて言ってくれた。てめぇのいいところはな、ここだ、と。ハートだよ。度胸がいい。柄がらは小せぇし技わざもねぇ。ないない尽づくしだが、ハートの強さだけは誰にも負けてねぇ。考えたこともなかった。あなたに言われるまで、そんなことは一度たりとも。あなたに言われてから私はそれが自分の唯ゆい一いつの武器なのだと知った。度胸。たしかに私には力なんてない。ただ度胸しか。焔隊長。あなたが認めてくれた度胸が私をかろうじて進ませてくれる。どんなに部下を死なせて

も、私は怖おじ気けづかない。もし自分が命を落とすことになったとしても私は恐れないし、悔くいることもない。焔隊長。なぜだかやけにあなたの顔が浮かぶ。はっきりと。あなたの言葉のおかげで、ここまで戦ってこられました。私はあくまで七番突撃隊です。ただ一人になろうとも。たとえ私が死んでも。

18　小ならず

　斬きり伏ふせた牛頭多た腕わんの悪魔が、最後の悪あがきをして彼の右腕の装そう甲こうを剝はぎとった。その部分には〝小羅ら刹せつ〟の文字が刻まれていた。小羅刹。彼をその名で呼んだのは初代デニス・サンライズだ。秩ちつ序じょの番人草創期に彼と同じ熾シキ帝てい国こく出身の李イ鄭ジヨウ嘉カという猛も者さがいた。生国のみならず姓せいも彼と同じだが縁えん故こではない。熾では李イはありふれた姓だ。ともかく秩序の番人に李鄭嘉という男がいて剣風を吹き荒あらしエルデンの悪党どもに〝羅刹〟と恐れられていた。李鄭嘉はその最さい期ご、二十有余名の悪党に闇やみ討うちされ、十三人を道連れにして果てたという。初代は死した旧と友もと若き日の彼とを重ね、これこそ李鄭嘉の再来、小羅刹よと喜んだ。あのときの誇ほこらしさを彼は忘れない。幼き日に親を失い、故郷を追われて無統治王国に流れついた彼にとって、初代は父親のごとき存在だった。初代に褒ほめられた。それだけでこの身捨つるべしと思った。何度も捨てたはずの命だが、まだ生きている。

「李イ童ドウ晏アン……！」同志が彼の名を呼んだ。巨岩のような悪魔が突進してくる。斬れぬ、と彼はとっさに悟さとった。避さけるという選せん択たく肢しはない。小羅刹はそのような方法を採らない。受ける。俺が止める。彼は両腕を広げて巨岩悪魔を受け止めた。「憤亞亞亞亞亞亞亞亞」

　総身が砕くだけ散るかのごとき衝しよう撃げきだった。だが彼は耐たえた。当然だ。耐えることなど造作ない。彼は巨きょ岩がん悪魔を押し返し、左手で脇わき差ざしを抜ぬいた。右手には刀を握にぎっている。かつて彼は剣身に「小羅刹」と刻みつけたモトロール刀を常用していた。あの愛刀はすでにない。曲がり欠けて使い物にならなくなり捨てた。この刀は戦場で拾ったものだ。武器など何でもいい。巨岩悪魔が再度突撃してくる前に彼は動いた。「覇亞亞亞

亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞」機先を制し、巨岩悪魔に躍おどりかかる。刀を、脇差を突き立てる。斬れはせずとも突かば如何いかん。ガツッ。ゴツッ。ドヅッ。グァヅッ。刀は折れ、脇差も刃はこぼれした。それでも彼は叩たたきつけつづける。ヒビだ。巨岩悪魔にヒビが入った。彼は目の色を変えてそのヒビを刀で、脇差で打つ。打ち砕く。ついに岩のような表皮が割れて、中から鮮せん血けつが噴ふきだした。彼は刀を投げ捨てその割れ目に手刀を突っこむ。「羅宇宇宇宇宇宇宇宇宇宇亞亞亞亞亞亞」これだ。心の臓か何か知らないが、指先にふれた。貫つらぬくと、巨岩悪魔がボオオオオオオオオオオオオオオオと断末魔の叫さけびをあげた。彼は巨岩悪魔を突き倒し、鎧よろいをかなぐり捨てる。重い。重い。糞重い。邪じゃ魔まだ。身を守る装甲など必要ない。彼の背には羅刹が棲んでいる。刺いれ青ずみの羅刹は闘とう争そうを求めて餓うえてすらいることだろう。齢よわい三十を越こえて、今さら小羅刹でもない。いいかげん真の羅刹と化そうではないか。羅刹が舞う。「苦亞亞亞」

19　幸せの在処

「ふうううううううううううぅぅぅぅぅぅぅぅえええええい……！」熊くまのようなラッド・ワーノンが見た目を裏切らない剛ごう剣けんで逆立ちしている蠍さそりのような悪魔を真っ二つにした。シャルロット・リンデは稲いな妻ずまの足どりでワーノンの脇を駆け抜けて手足を生やしたヒトデのごとき悪魔を斬る。斬りつけて斬り倒す。ワーノンはすでに別の悪魔を相手どって引きつけている。リンデはその悪魔に横合いから斬ざん撃げきを浴びせる。一瞬、ほんの一瞬だが、ワーノンとリンデの視線が交こう錯さくする。ワーノンは唇くちびるの片かた端はしをつりあげてまた別の悪魔に一ひと太た刀ちぶちこむ。体勢を崩した悪魔をリンデが斬る。リンデは愛を知らなかった。リンデは親に捨てられて独力で、あるいは同類たちと群れて生き抜いた。リンデは愛など知らなかった。愛はリンデを守りはしなかった。よすがとなるものは力だけだった。リンデは力を身につけ、その力の振ふるい方を秩序の番人の義が教えてくれた。振りおろす剣の先を義が決めてくれた。しかしリンデは愛を知らなかった。愛らしきものを求めては失望し、裏切られた。リンデは初代に憧あこがれた。特別な男だった。初代に抱だかれたかっ

た。一度でいいから抱いてほしかった。叶かなわぬ願いだった。初代は死に、やがてリンデはようやく愛を知った。

　ラッド・ワーノン。心清く、優やさしく、決して折れない男。太い腕で不器用にリンデを抱いてくれる。どこまでもリンデを信じてくれる男。愛のためにすべてを捧げられる男。しかも、たやすく。簡単に。笑みさえ浮かべて。たとえば今、私のために死んでほしいとリンデが頼めば、ワーノンは二つ返事で自じ刎ふんする。リンデはそう断言できる。リンデもワーノンを信じている。底の底まで。リンデは愛を知った。この男とともにあれば、恐れることは何もない。ワーノン。ワーノン。私は幸せです。このようなひどい凄せい惨さんな望みのない戦いの最さ中なかにあって幸福だなんて馬鹿げているかもしれない。でも、私は幸せなのです。あなたのそばでこうして剣を振っていられることが。本当は少し怖かった。あなたを愛したら失うことに怯おびえるようになって私は弱くなってしまうのではないかと。そんなことはなかった。私は戦える。雷霆レディー婦人サンダーと人は私を呼ぶ。むしろ私の剣は冴さえ渡わたっている。愛を知って私は強くなった。ワーノン。あなたがいるから。ワーノンが剛剣で悪魔どもを撥はねのける。そこにリンデが進み入って悪魔を討つ。蛸たこめいた上半身と人間のような下半身を持つ悪魔だった。斬った瞬間、手て応ごたえが妙みようだと感じた。重くて、鈍い。まるで護ゴ謨ムのような。斬れていない。リンデは油断していなかった。すぐさま下がろうとした。捕つかまった。蛸の腕に。その腕からは吸きゆう盤ばんではなく無数の棘とげが突きだした。刺さし貫かれた。動けない。ふりほどけない。引きよせられる。彼女の男が割りこんできた。「──ワーノン……！」

20　求めるものは

　ラッド・ワーノンがのみこまれるのを見た。蛸のような上半身の悪魔がシャルロット・リンデをとらえて、彼女を助けようとしたのだろう、ワーノンがその間に入りこんだ。蛸悪魔はワーノンにかぶりついた。どこが蛸だ。やつの頭は蛸というより鰐わにではないか。ワーノンはとっさに頭を横にかたむけたが、おかげで首を囓かじられた。囓りとられたと言ったほうがいいかもしれない。蛸悪魔の腕はワーノンと、それからまだリンデも拘こう束そくしている。どうやらやつの腕には棘が生えているようだ。その棘がリンデと

ワーノンに突き刺さっていて抜けないらしい。リンデはワーノンの名を呼ばわりながら蛸悪魔を押しのけようとしているが、見たところはかばかしくない。「チェス――」羅ラ叉サはたしか近くにいたはずのチェス・ピードに呼びかけた。その途と端たんだった。同じ蛸悪魔だ。一人の隊士がその蛸悪魔に突き倒されてひっくり返った。それがチェス・ピードだとわかって、羅叉といえども愕がく然ぜんとせずにはいられなかった。剣技はさほどでもないが、冷静沈ちん着ちゃくでつまらぬミスを犯おかさない。抜け目がなく、並外れて胆たん力りよくにすぐれている百戦錬れん磨まの七番突撃隊隊長だ。あのチェス・ピードが。剛ごう力りき無む双そうのワーノンが。鋭えい敏びん激げき烈れつなリンデが。強い。手て強ごわい相手だ。

「息はあるな……!?」羅叉が怒ど鳴なると、チェス・ピードが倒れたまま片腕をあげてみせた。そうだ。それでいい。まだ死なれては困る。ワーノン、リンデ。貴様らは自分でどうにかしろ。勝手に死ぬな。胸中で呟つぶやきながら羅叉は死神の面をつける。面をかぶれば視野が狭せまくなるが、そのぶん眼前の敵に集中できる。「忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌忌……」

　チェス・ピードを撥ね飛ばした蛸悪魔に打ちかかる。刀がやつの腕にふれた刹せつ那な、重く鈍い手応えに死神は「鬼忌忌忌忌忌」と唸うなった。斬れぬ。ならば。死神は突く。が、切っ先でさえもやつの皮ひ膚ふは通さない。やつは腕を振る。振りまわす。腕の数は八本か。否いな。九本。死神は刀で防ぐ。「忌忌忌。忌忌忌。忌忌忌。忌忌忌忌忌」防ぼう御ぎよに徹てつしながら見れば、蛸悪魔は通路の奥に二匹ひき、三匹、四匹、何匹もいる。こんな悪魔がいくらでもいるというのか。地じ獄ごく。これが地獄か。よかろう、と死神は笑う。一匹残らず殲せん滅めつしてくれる。だが、いかにして。どうすればいい。我が身はまるで刀の使い方も知らぬ小こ僧ぞうのようだ。

「羅叉……！」ヨハン・サンライズの声だった。その声に耳を打たれて、死神は後退した。主人の命を受けた従順な犬のように退いたのだ。屈くつ辱じよくではない。むしろ可お笑かしかった。

「破天一流絶技――」ヨハンの足どりが、身のこなしが、死神にはしかとは見えなかった。貴様はそんなにも遠くにいるというのか。いつの間にとは思わない。知っていた。資質の差だ。ここまで開いた。あとを追えぬほど。ヨハンの刀が数十回閃ひらめいた。「〝覇は界かい〟」

　何匹もの蛸悪魔をふくめた悪魔二十匹かそこらが斬り刻まれて崩れ落ちた。やむをえまいと死神は瞬時に思った。俺は地を這はう虫でしかない。跳とぶことすらほとんどできない。ヨハン、貴様はすごい。何があろうと努力を、研けん鑽さんを怠おこたらない。注意深く、ときに大胆で、変わることに躊ちゆう躇ちよしない。堅けん実じつでありながらそれにとどまらない。俺は地べたを這うことしかできない。頭もよくない。剣を振った回数なら貴様に負けぬつもりだ。貴様が一本の剣を振るなら俺は二本の剣をひとまとめにして振った。できることはすべてやった。できそうにないことも試みた。それでも俺は貴様に届かない。以前は曖あい昧まいだった差が、今は誰だれの目にも明めい瞭りようだ。やむをえまい。貴様には背負うものもあるのだ。隊士たち。妻。そして、息子。貴様は守らねばならんのだ。強くならねばならぬ。ひねくれているようでその実まっすぐな貴様は、強くならねばならぬほど強くなるのだ。俺は地を這うことしかできぬ虫だ。貴様を仰あおぎ見て俺は這うだろう。這いつづけるだろう。──それでいいのか……？

「屍忌忌」

　いいわけがない。いいわけが。強く。強くなりたい。誰よりも何よりも強く。初代は優しかった。父のようだった。だがそれだけで初代を敬愛したのではない。初代は強かったからだ。いまだに信じている。あのように騙だまし討うちなどされなければ、最強の人だった。

　最強。笑いたければ笑え。俺は、この死神は、その称しよう号ごうが欲しい。最強。先代だの魔術士だの、比べるのも馬鹿らしい超人たちの力を目にして、まだそんなことを言うのか。馬鹿馬鹿しい。無む駄だなことだと言いたくば言え。俺はそれでも強くなりたい。それが本音だ。あきらめたくない。何ものにも負けたくないのだ。とくにヨハン、貴様には。貴様だけには負けられぬ。幼よう稚ちだと思うか。だが、俺には他ほかに何もない。強くならねば戦えぬ。人々を守ることもできぬ。カレルの小さな手に明あ日すをつかませることもできぬ。己おのれの分際、身の丈たけ、分相応など知ったことか。俺は強くなりたい。万敵に死をもたらす死神とならん。

「□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□」

　死神は音にならぬ声をしぼりだして駆かけた。悪魔。悪魔。悪魔。死ぬか、悪魔。考えすぎていた。そう。死神にしては頭を使っていた。そうではない。我は死神である。死をもたらし屍しかばねと化さしめん。死。死。死。屍。死。死。屍。死。死。死。屍。屍。死。死。屍。死。死。死。屍。死。屍。屍。死。死。屍。屍。屍。死。屍。死神はただ近よって死を告げる。この手に握るは刀にあらず。刃にあらず。死である。死そのものである。死神はそれを叩きつけ、穿うがつ。悪魔に穴を穿つ。回転。全身をねじって打ちこんで死を穿つ。死だ。死の味はどうだ。何の味もするまい。無む味み乾かん燥そう。死は無である。死神は死である。死となって、死であって、死を穿って、死を撒まき散らす。敵よ、敵どもよ、死に伏ふすがいい。

21　勝敗の彼方

「━あっちは押し返しはじめた……？」ベティはちらりと振り返って秩ちつ序じよの番人らが守っている出入口に目をやった。一時かなり押しこまれて突とつ破ぱされそうになっていたが、持ちなおしたようだ。逆に押しこむところまではいっていないものの、しばらくは保もつか。当面は後ろを気にしなくてもいいということだ。
「みんな、どいて……！」ベティは仲間たちをかきわけて進む。
こっちの出入口に敵が押しよせてきたのはあっちよりもいくらか遅おそかった。あっちが先に攻せめられて、気をとられている間にこっちにもきたのだ。そのせいで、防戦が場当たり的とは言わないまでもややバラついた。とはいえリキエルとダリエロ、カイ、レイジ兄きよう妹だいといった主力組が先頭にいるので、大きな被ひ害がいを出さずになんとか守りきっている。とりあえず今のところは。ベティはもしあっちがすぐに崩くずれたら支えるつもりでいたから、後ろについていたのだ。そのぶん出で遅おくれることになった。「━ダリエロ、リキエル！　あたしに任せなさい……！」「ああ!?」「ぬう……」ベティは有う無むを言わせずダリエロとリキエルの間を通って最前列に躍おどりでた。通路は悪魔、悪魔、悪魔、悪魔だらけだ。悪魔で充みち満ちている。いったいどこからこんなに入りこんできたんだか。

「ヴェルドゥレ……！」もう〝悪ワオ運ラツのク・大ハイ公ヴエ爵リオン〟ヴェルドゥレ・グォン・カッツァールは掌しよう握あくで

きている。それでも、その力を使うときはある種のスリルを感じる。喉のどの奥のほうがひりつくような。悪くない感覚だけど。支配していても、いつ反撃されるかわからない。本当は鳴りをひそめて機会をうかがっているだけかもしれないのだ。そもそもベティはヴェルドゥレに勝ったわけではない。勝負には負けた。完かん膚ぷなきまで打ち負かされた。なすすべなく完敗する間ま際ぎわに、逆転の一手を思いついた。思いつきの藁わらにすがったと言ったほうが正確かもしれない。ともかくベティはそれに賭けたのだ。自分の全存在をたった一つの方法に賭けて、最善を尽つくし、望みどおりの結果を手に入れた。──このとおり。

　ベティの肩から毛むくじゃらの腕が生える。ベティの腰こし回まわりよりも太くて、長い、逞たくましい腕だ。その腕が正面の悪魔を殴なぐりつける。そしてその腕から脚あしが生える。蜘く蛛ものの脚のような、それにしてはサイズが大きすぎる脚だ。先せん端たんに鉤かぎ爪づめのようなものがついている。鉤爪が別の悪魔を引き裂さいて、蜘蛛の脚から今度は蛇へびのようなものが生える。それはまた別の悪魔に絡からみついて引き倒たおす。蛇から蛇が生える。その蛇は悪魔の首に巻きついて絞しめあげる。蛇から犬の頭のようなものが生えて、悪魔に咬かみつく。肌はだが灰色で爪が真っ黒いことをのぞけば人間のそれと大差ない腕が犬の頭のてっぺんから生えて、悪魔につかみかかる。その腕から大きすぎる赤ん坊ぼうの生首のようなものが生えて、悪魔を貪むさぼり食くらう。

　どれもこれもヴェルドゥレと賭けをして敗れたものたちの末路だ。というよりも敗者そのものだ。ヴェルドゥレは賭けを持ちかける。掛キヤけツシ金ユでも賭け札チツプでもなく、その勝負では互たがいのすべてを賭けることになる。ヴェルドゥレはしがない一いつ介かいの博奕ギヤン打ちブラーを装よそおって近づいてくるかもしれない。もしくは圧あつ倒とう的な力を見せつけ、唯ゆい一いつの逃にげ道としてそれを提示する。いずれにしても相手は断らないか、断れない。最初は指一本。その勝負でヴェルドゥレに負けてしまったら、もう引き返せない。最低でもとられた自分の指を取り返さないといけない。そうして深みにはまる。気がついたらあれもこれもヴェルドゥレに奪うばわれている。最後にはだいたい頭だけになる。ベティもそうだった。あのときヴェルドゥレは地面に転がる生きた生首と成り果てたベティを見おろして、五百ダラー銀貨をもてあそんでいた。その手はヴェルドゥレのそれではなかった。ベティの右手だった。そろそろ終わりにしないか、ベティ、とヴェルドゥレはひどくやさしげな声こわ音ねで言った。おまえは種族が違

ちがうおれから見ても愛らしい。そんなおまえがこれ以上無残な姿をさらすのはおれとしても忍しのびない。いいえ、とベティは答えた。次は右耳でどう？　よかろう、とヴェルドゥレはうれしそうにうなずいた。次は左目。いいとも。次は鼻。いいだろう。ベティは時間を稼かせいだ。どうすればいい？　どうすれば勝てる？　無理だ。勝つことはできない。負ける。それは避さけられない。敗北は受け容いれるしかない。でも、あたしは生き残らないと。

　仲間たちのところに帰らないと。違う。そうじゃない。あたしは帰りたい。みんなのところに戻もどりたい。そのためには━こうするしかなかった。成算はあった、とは言いがたい。正直、一か八ばちかだった。ベティの中には二人のベティがいる。第サー三ドブ脳レイン。脳内のほとんど活性化されることのない部位を開発して組織化して、分ぶん裂れつした精神を統合させてまた分裂して統合させて、どの自分が自分なのかわからなくなって自分で自分を壊こわして殺して、そのあげくに二人のベティが残ったのだ。ヴェルドゥレに敗れたら、何もかもすっかり奪われてしまったら、おそらくベティはのっとられる。ベティはヴェルドゥレのものになる。支配される。しかしベティは一人ではない。もう一人いる。そのことをたぶんヴェルドゥレは知らない。そして人間の魔術士には精神マインド攻撃ハツクという戦い方がある。右目と口しか残っていない穴だらけの頭となったベティは、最後にしましょう、と申し入れた。ヴェルドゥレは、楽しかったよ、ベティ、と言って五百ダラー銀貨を投げた。おれは表だ。じゃあ、あたしは裏。銀貨は表を上にして地面に落ちた。なぜヴェルドゥレは先手をとっても後手に回っても賭けに負けないのか。そのトリックは結局、見み抜ぬけなかった。ベティは銀貨が落ちる寸前に一人のベティの自意エンフ識体ユーラを無意アルド識層ラス・共有コモン集積フイー領域ルドに潜もぐりこませた。ベティがヴェルドゥレのものになってから、自意エンフ識体ユーラがヴェルドゥレの中に入りこんだ。そこからだった。ここからよ、ヴェルドゥレ。あなたには負けたけど、最後に笑うのはあたし。

　ただまっとうに精神マインド攻撃ハツクしたのでは、ベティがヴェルドゥレの中に分け入ることはできなかっただろう。ヴェルドゥレの心理バラン防壁シスは堅けん固ごで一分の隙すきもなかった。異物に対しては。だがヴェルドゥレはすでにベティをとりこんでいた。それゆえにベティは異物とは見なされず、やすやすとヴェルドゥレに侵しん入にゅうすることができた。中に入ってしまうと、おそらく精神マインド攻撃ハツクされたことがないどころか、

その概がい念ねんを持たないせいだろう、ヴェルドゥレは無防備だった。ベティの中に残った一人のベティはヴェルドゥレに圧倒されて消しよう滅めつしていたが、もう一人のベティは数多あまたの魔術士たちが今日まで築き磨みがきあげてきた精神マインド攻撃ハツクのありとあらゆる手法を駆く使ししてヴェルドゥレを攻めたてた。戦いはすぐには終わらなかった。しかも、ヴェルドゥレを屈くつ服ぷくさせはしたが、完全に滅することはできなかった。精神の黒い球状の塊かたまりとなって身を守るヴェルドゥレを、ベティはどうやっても消し去ることができなかったのだ。完勝とは言いがたい。それでも勝利は勝利だ。ベティはヴェルドゥレを手に入れ、自分自身を奪だつ回かいした。ヴェルドゥレがこれまで獲かく得とくしてきたすべてを掌しよう中ちゆうに収めることができた。幾いく千、幾万の生き物を。ベティはそれらを使し役えきできる。まだ自由自在とまではいかないが、ベティの中にいる知能程度が高い生き物たちの頭脳を使って分散処理することにより、魔術を解かい析せきして抽ちゆう象しよう化して新たに解かい釈しやくして図像化してそれを読み解くことにより発動させることも可能だ。現在のベティはそれを一瞬のうちに行ってしまう。

もちろん呪じゆ文もんを詠えい唱しようする必要などない。魔術はベティの脳のう裏りに絵として描えがかれている。感覚的にはその絵を視るだけでいい。ベティはそうした。縛ばく氷ひよう獄ごくを三乗して発動させると、通路内を極ごつ寒かんの白嵐が吹ふき荒あれて悪魔たちを凍いてつかせた。まだだ。間を置かずに三乗の爆ばく雷らい索さくを発動させる。稲いな妻ずまだ。稲妻が通路を席巻して悪魔たちを感電させた。

おれは裏だ、という声が聞こえたような気がした。──ヴェルドゥレ……？

ベティは生き物たちの肉体を引っこめた。自らの身体からだをまさぐる。ヴェルドゥレは滅ほろびていない。まだベティの中にいる。あがいてるだけよ。無駄。あたしはあなたを抑おさえている。あたしはあなたを強ごう奪だつした。あなたはもうあたしのもの。いいかげん聞き分けなさい。ヴェルドゥレは答えない。わざと？ あえて黙だまっている？　そうじゃない。ヴェルドゥレはベティに逆らえない。逆らわせない。この力でベティは皆を守る。誰だれも死なせない。ずいぶん死なせてしまったから、もう一人も失わない。ダリエロが「おい！」と叫さけんだ。

「っ……！」ベティは慌あわてて通路を見み渡わたした。何かい

る。動いた。凍こおりついて感電した悪魔たちの中で、何かが。蜈蚣むかでに似ていると思った。一メーテルかそこらの黒い蜈蚣。でも、蜈蚣なら頭にあたる部分から緑色の肌をした人間の女のような上半身が突つきだしている。身体つきは人間の女だが、その頭部は昆こん虫ちゆうめいていた。魔術が効かなかった？　驚おどろいている場合じゃない。防がないと。あたしが。あれは危険だ。「──ヴェルドゥレ……！」

　ベティの身体から様々な生き物の腕が、脚が、首が生える。それらが蜈蚣女をとらえようとする。──速い。それに、蜈蚣女は絶ぜつ妙みように小さい。すり抜ける。一いつ匹ぴきじゃない。蜈蚣女は大勢いる。悪魔たちの死し骸がいを隠かくれ蓑みのにして、こんなにたくさんの蜈蚣女が押しよせていたなんて。ベティはそのほとんどをつかまえられない。「ぶち殺せ……！」ダリエロが怒ど鳴なる。リキエルが「ＲＹＹＹｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ……！」と大たい剣けんを振ふりおろす。カイが盾たてで蜈蚣女を一匹吹ふっ飛ばして、明けのモーニン明星グスターで一匹粉ふん砕さいする。しかしとても追っつかない。「ッ……！」レイジ兄の脇わき腹ばらに蜈蚣女が食らいついた。「兄ィ……！」レイジ妹が道徳刀で向かってくる蜈蚣女を突き殺して、兄の腸はらわたを食いちぎろうとしている蜈蚣女を兄から引き剥はがそうとする。「いい……！」レイジ兄は妹に肘ひじ鉄てつを食わせて下がらせた。そのときにはもう、レイジ兄の首筋に別の蜈蚣女がかぶりついていた。「──っそぉっ！　アチシの兄を……っ！」レイジ妹は迫せまる蜈蚣女を斬きり払う。一匹斬った瞬間、違う蜈蚣女がレイジ妹の左肘を咬み破った。「──ＧＩＹＡ……！」「二人とも下がって……！」ベティは言いながら、下がるって、この状況でどうやって、と自問する。できっこないじゃない。蜈蚣女たちの一部はもう昼ラン飯チタ時イムの最前列を突破しているのだ。そう思いながらも、ベティは視界の中の蜈蚣女たちを標的に定める。縛氷獄も爆雷索も効果がなかった。だったら、これはどう？　ベティは純白の細い細い光線を発射する。白魔術だ。撃うち抜け。

　狙ねらったのは蜈蚣女の昆虫みたいな頭だ。光線はやつらの頭を貫つらぬいた。やつらはそれで止まったかに見えた。一瞬だ。すぐにまた動きだした。「──質タチが悪い……！」ベティは矢や継つぎ早に光線を放ちながら、次の手を考える。「兄ィィィ……ッ！」レイジ妹が蜈蚣女どもに群がられながらも兄を呼んでいる。レイジ兄は蜈蚣女どもに腹を食い破られ、両腕を引きちぎられながらも、妹に這はいよろうとしている。「うおおお！　うおおおおお！　おお

おおおおおお……！」「この糞がァ……ッ！」ダリエロが蜈蚣女どもを蹴け飛とばし、殴り払ってレイジ兄きよう妹だいを救おうとしている。──狭せまい、とベティは思う。ここは狭すぎる。もっと広ければ。広い空間なら、大きな魔術をぶちかまして一挙に始末できるのに。言い訳だ。いや、言い訳にもならない。「──ヘンドリクゥ……ッ！」あれはアンガルセンの声か。やられたのか。ヘンドリクが。「ナツコちゃん……っ！」ヴィクトリアの声はほとんど悲鳴に近かった。まずい。ナツコが倒れたら、ヴィクトリアも使い物にならなくなる。崩れる。だめ。崩れさせない。でも、どうすれば。ベティは熱線で蜈蚣女を焼き払う。光線で蜈蚣女を射い貫ぬく。昆虫のような頭部と蜈蚣のような胴どう体たいの真ん中あたりに打撃を加えれば、蜈蚣女が動かなくなることはわかった。一匹ずつ潰つぶす。気が遠くなっても潰す。潰す。潰す。潰しながら、ベティは通路の奥に視線を向ける。新手だ。くると思っていた。だからどうしたっていうの。あたしはあきらめない。この胸が張り裂けても退ひいたりしない。

22　表情

「──やれやれ」ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒは右手の人差し指で眼鏡の位置を直してため息をついた。ため息でもつかないと腹の底から何かがあふれてきて、それを堰せき止められなくなりそうだ。怒いかりだろうと彼は思う。彼はひどく憤いきどおっている。「また仲間が死んでしまったじゃないですか。いやだな。死んでしまったらおしまいなんだ。死んだ仲間とは二度と会えないんです。なんてことをするんだ。認められないな。認められませんよ、こんなことは。とうてい認められない。断じて認めない」

「あんたっ！」と、髭ひげを剃そるどころの騒さわぎではないのですっかり髭ひげ面づらが板についていて、ウィッグも痛々しいチェリーに肩かたを小こ突づかれた。「なぁーにさっきからブツブツ呟つぶやいてるんだいっ！　そんなことやってる暇ひまがあったらねえ、少しは──」「そこです」彼はもう一度ため息をついた。ため息をつくたびに胸が狭くなる。「まさしくそこが問題なんですよ。僕は戦闘向きじゃないんです。まいったな」「まいったな、じゃないよっ！」チェリーは丸太のような腕をのばして襲おそいくる蜈蚣女

をわしづかみにした。「──ふんなっ！」「わあ」彼は思わず拍はく手しゆした。チェリーに握にぎり潰された蜈蚣女は、しかしまだ暴れている。

「くそっ！　しぶとい……っ！」チェリーは蜈蚣女を床ゆかに叩たたきつけて踏ふんづけた。その分厚い背中に別の蜈蚣女が飛びかかろうとしている。彼はとっさにチェリーの真ま似ねをしてみた。つまり蜈蚣女をつかんで、思いきり握った。それから床めがけて投げつけて踏みにじった。蜈蚣女はどうやら絶命したようだ。「あれ？　意外と簡単ですね」「……できるんならねえ！　さっさとやれっていう話だよ！　あんた、馬鹿なのかいっ!?　まあ助かったから感謝はするけどもさ！」「いえいえどういたしまして。ところで危ないですよ？」彼はまたチェリーを襲おうとしていた蜈蚣女をつかまえて握って踏み殺した。「──これを両手でやってみたらどうかな」思いつくままに、目にとまった蜈蚣女を右手で、左手で、次々とつかまえては握って踏んで、踏み潰してはつかまえ、つかまえては処分する。

「……あ、あんた……」チェリーは呆ぼう然ぜんとしているようだ。「……やるじゃないか」

「いやあ、僕なんてまだまだです。見み様よう見真似ですからね。もっと効率よくできないかな。これでもいろいろと考えみてはいるのですが、どうにもこうにも。何しろ僕は戦闘向きじゃないので、そっちの方面はからきしだめなんです。想像力が働かないんですよね」

「そう言いながらも、さっきから入れ食い状態じゃないのさっ！　積極的につかまえにいってるわけだから、入れ食いとはやや違うかもしれないけどもっ！　こう言っちゃなんだけどねえ、表情まったく変えずにその動きって、めちゃくちゃ気持ち悪いんだよっ！」

「表情……？」

　長らく人ひ間との中にいるが、いまだによくわからない。表情。こんなとき、彼はどんな表情をすればいいのか。笑うのは得意だ。練習して上手になった。しかし今は違ちがうだろう。笑え顔がおは適さないはずだ。笑いたくもないと彼は思う。笑えない。ちっとも笑えない。

「はっ……」とチェリーが息をのんだ。彼が思うに人ひ間と的な意

味でも悪魔ヒト的な美的感覚からいってもすさまじいと表現するしかないチェリーの顔がん貌ぼうが、さらにものすごいことになっている。どうやらチェリーは驚いているようだ。前のほう、通路方面に顔を向けている。そちらに何かあるのか。何か起こったのか。彼はチェリーの視線の先に目をやって、首を左右に振った。「……いやいやいや。ちょっと待ってください。どういうことですか」

　レイジ兄が立っている。両腕がない。首はちぎれそうで、禿とく頭とうがありえない角度に傾かたむいている。腹に穴があいていて内臓がこぼれているのに、レイジ兄は立っていた。さっきは倒たおれていたのに。もっと言えば、息をしていなかった。しかも、兄だけではない。赤黒金の三色に染めわけられたレイジ妹の毛もう髪はつはもう見る影かげもなかった。頭が半分しか残っていないし、身体も三分の一くらいは欠損している。蜈蚣女に食われたのだ。当然、生きているわけがない。レイジ妹も、レイジ兄も、死んでいるのに起きあがった。そんなわけがないとは思わない。このくらいのことは起こりうる。ただ、起こってほしくはなかった。

　レイジ兄妹の名を呼ぶ仲間たちの声が飛び交かった。悲鳴。どよめき。サイケングレンマイセルヒは眼鏡の位置を直そうとしてやめ、右手の中指と薬指を眉み間けんに強く押しあてた。

「ど、どっ、どどどっ、どうなっちゃってるんだい、あ、あれ……」チェリーが目を白黒させながらレイジ兄妹とサイケングレンマイセルヒを交こう互ごに見た。その問いに対する答えの候補として、彼にはいくつか思いあたるものがないでもない。短い観察の結果、彼はそのうちの一つにしぼりこむことができた。レイジ兄妹の無残に傷ついた肉体のあちこちから、紫色のぬらぬらした管のようなものが突きだし、蠢うごめいているのを目もく撃げきしたからだ。

「Yexxbrorngですか」人ひ間と風に発音すれば、イェクスブロォンッといったふうになるだろうか。悪魔ヒトの中にそう呼ばれる種族がいるのだ。紫色の管の先せん端たんがぱっくり割れて「ウィケケケケケケケケケケケケケケケケ」と笑い声のような音を出した。笑い声のようなというか、笑い声だろう。「ウィケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ」「ウィケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ」「ウィケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ」「ウィケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ」笑い声が連れん鎖さし、重なる。彼は思わず両手で耳を覆おおいそうになった。耳みみ障ざわり

な笑い声だ。きわめて耳障りだ。──やめろ。「なっ……そんっ……ナツコちゃん……⁉」とヴィクトリアが、シャマニが「うっそ、ヘンドリクなわけ⁉」と叫んだ。──よせ。

　ほぼ最前列にいたレイジ兄妹よりもずっと近い位置だ。相次いで立ちあがった小こ柄がらだが豊満なナツコも、痩そう身しんで髪かみが緑色のヘンドリクも、だいぶ蜈蚣女に食い荒らされている。生きているとは思えない。というか二人もレイジ兄妹と同じく死んでいる。サイケングレンマイセルヒは蜈蚣女を三、四匹ひきつかまえては踏み殺しながら、ナツコとヘンドリクの足あし許もとあたりを見まわした。案の定、いた。紫色の管みたいなものが床を伝ってナツコとヘンドリクの足首から体内に入りこんでいる。「いやなことをしますね」彼はそう吐はき捨てて紫色の管をつかみあげ、引きちぎった。すると途と端たんにナツコとヘンドリクが崩くずれ落ちたが、見れば紫色の管はあっちにも、こっちにも、そっちにもいる。また別の管がナツコの中に、ヘンドリクの中に入って操あやつろうとしている。イェクスブロォンッが複数、というか多数いるのか。そうではないだろう。イェクスブロォンッは稀き少しよう種族だ。それに、これくらいのことをやってのけられそうなイェクスブロォンッを、彼は一人だけ知っている。目に入った蜈蚣女を捕ほ獲かくして殺し、ナツコとヘンドリクを狙う紫色の管を踏みつけながら、彼はその名を呼んだ。「──操りパペテイ糸のエル・ヴ公爵エリオンカラミ・モーリタルニ」「ウィケケケケケケケケケケケケケケ」「ウィケケケケケケケケケケケケケケ」「ウィケケケケケケケケケケケケケケケケケケ」「ウィケケケケケケケケケケケケケ」「ウィケケケケケケケケケケケケケケケ」「ウィケケケケケケケケケケケケケケケケケケ」「ウィケケケケケケケケケケケケケケケケケケ」

「悪魔の仕し業わざです……！」サイケングレンマイセルヒは声を張りあげて紫色の管を持ちあげてみせた。「これが亡なき骸がらを操る……！　気をつけて──」と言ったところで、どう気をつければいいというのか。次し第だい次第に床を侵しん食しよくして、埋うめつくそうとさえしているこの紫色の管一本一本が、いや、これらすべてがカラミ・モーリタルニだ。どうやって食い止めればいいのか。ナツコがまた起きあがった。「──もうやめて、ナツコちゃん……！」ヴィクトリアが変わり果てた妹にすがりつこうとする。ああ。ナツコ。あなたは本当に変わり果ててしまった。右腕がない。左腕もぼろぼろだ。左肩かたや右胸部や左の脇腹や右の大だい腿たい部ぶが陥かん没ぼつしている。顔もひどい有様だ。右半面がぐちゃぐちゃになっている。あなたに性せい交こう渉しようを持ち

かけられたことがあった。ねぇ、あんたさぁ、ナツコ今日暇だから、ちょっとやんない？　そう言われて、最初、やんないという言葉の意味がわからず、彼は首をひねったものだった。やがて理解して、なぜ僕を誘さそってくれるのですか、と尋たずねたら、だってあんたって変だしぃ、なんかおもしろいかなぁーと思って。好こう奇き心しん？　興味本位的なぁ？　という答えが返ってきた。彼は拒きょ絶ぜつしたのだが、あのとき断らなければよかった。明確な理由もなくふと彼はそう思った。少なくとも、そのような行こう為いに及およぶ可能性があったということだ。ナツコ、あなたが生きていれば。もうなくなってしまった。サイケングレンマイセルヒはヴィクトリアを力任せに引き倒した。「──あう……！」「ごめんなさい」

　ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。たとえ百万回謝っても足りない。ごめんなさい。サイケングレンマイセルヒはナツコを抱だきしめた。そして身体からだを一度、もとに戻して、ナツコを食べる。僕はね、ナツコ。Axxfflamanddraという種族の悪魔なんです。我々が悪魔と呼ばれていることは我々も知っているし、悪魔という名めい称しように特別な意味がないわけでもないのですが、あなたがたが人ひ間とであるように我々は我々を悪魔ヒトだと認にん識しきしています。僕は悪魔なんです。僕はあなたがたにとってみれば蝶ちように似ているかもしれない。赤と黒、白と緑、黄と橙だいだい、銀色、金色と黒と赤、青の濃のう淡たん、紫むらさきと黒、黄土色と褐かつ色しよく、紫、黄と青、色とりどりの数百数千数万、鱗りん粉ぷんと鱗毛で覆われた葉のような二対ついの翅はねを持つ生き物、蝶の群れに似ているとあなたがたは思うかもしれない。でも別物です。僕はAxxfflamanddraなんです。人ひ間と風に言えば、アッフラマァンドゥラァ、かな。これが僕なんです。僕があなたを食べてあげる。ナツコ、不ふ遜そんにもあなたを操ろうとしているカラミ・モーリタルニの一部、紫色の管ごと、あなたを僕が食べてあげる。もう誰だれも、何ものだろうとあなたを操ることなんかできないように、これ以上あなたの姉が、ヴィクトリアが苦しむことがないように、僕があなたを食べてしまう。そんなに時間はかからない。あっという間にすんでしまう。ナツコ、僕はあなたを食べて、あなたを忘れない。

「ごめんなさい」ともう一度、彼は謝った。彼はもう人ひ間とのふりをしている。一瞬前までかき抱いだいていたナツコはいない。彼

女が身にまとっていた衣類しか残っていない。彼女なりの女性用ナース医術士衣・ユニ。「……ナ……ナツコ……ちゃん……」ヴィクトリアは尻しり餅もちをついて震ふるえている。ああ、できることならヴィクトリアの肩を抱いてあげたい。こんなとき人ひ間とは慰なぐさめを必要としているはずだ。肉親を永遠に失って悲しみに暮れているときは。でも、どうやらそれだけではないようです、と彼は思う。ヴィクトリア、僕はあなたを慰めたい。同時に、僕も慰められたい。胸の内側をくりぬいて、そこに何もなくなってしまって、何もないそこはとても暗い色をしていて、それをどうしていいかわからない、この苦しさを分かちあってほしい。しかし彼はわかっている。ヴィクトリアは慰められるべきだが、彼は違う。なぜなら最終的に、決定的にヴィクトリアから妹を奪うばったのは彼だからだ。どうか僕を責めてほしい。僕をなじってほしい。僕を打ちのめしてくれないだろうか。やむをえずとった非常手段ではあるものの、僕がしたことには相応の報むくいがあってしかるべきだ。それなのに、ヴィクトリアは肩を上下に揺ゆらしてしゃくりあげながら、小さな小さな声で言うのだ。「……ありがとう……サイケングレンマイセルヒさん、ありがとう……」

「ああ……！」と彼は叫さけんで両手で眼鏡をつかんだ。眼鏡はひしゃげた。レンズは割れて砕くだけた。「ああ！　なんてことだ！　なんてことを！　ああ！　くそったれ……！」

23　人

　男が右手に持つ大たい剣けんは男のものではなかった。男が左手に持つ大剣もまた男のものではなかった。男はこれらの剣を戦いの果てに獲かく得とくしたのだ。──〝百フアン本トム・塚オブ・のハンド怨レツド霊グレイヴ〟。

　そう。怨おん霊りようと呼ばれたこともあった。男は部族を失った。どこまでも乾かわいた雄ゆう大だいなる赤い大地グラー。暗黒アルーン大陸ダルモーから海を渡わたってきた黒鳥エルマを名乗る者どもに男の故郷は略りやく奪だつされ、同どう胞ほうは虐ぎやく殺さつされた。生き残りはただ一人。男のみ。男は悲ひ憤ふんして人イダとしての生を捨てることと復ふく讐しゆうを誓ちかい、己おのれの顔の皮を剝はいで仮面をつけた。そして赤い大地グラーと暗

黒アルーン大陸ダルモーとを隔へだてる海を泳いで押し渡り、黒鳥エルマ・王国ルカナムへ。慎しん重ちように狡こう猾かつに男は仇かたきを討った。殺した。兵士を殺した。一人一人殺した。ときに何人も殺した。役人を殺した。幾いく人も殺した。いくらでも殺した。将軍を三人殺した。王族を三十七人殺した。王位を継つぐ者が一人もいなくなるまで殺し尽つくした。男は一人で黒鳥エルマの者を七百十二人殺した。黒鳥エルマ・王国ルカナムは崩ほう壊かいした。だが男は満たされなかった。男は戦いを求めた。赤い大地グラーを汚けがす者を見つけだしては戦いを挑いどんで殺した。暗黒アルーン大陸ダルモーの者は赤い大地グラーの戦士を鬼シグと呼ぶ。男はまさに鬼シグだった。戦い。戦いだけを鬼シグは欲ほつしていた。戦いを、敵を求めて、鬼シグは暗黒アルーン大陸ダルモーからさらに大いなる大陸へと渡った。

　無ぶ頼らいなる強者どもが集つどうとされる地。鬼シグは戦いの果てに戦いを希求してエルデンに流れついた。戦いを挑み、敵を殺した。奪った得物を突つきたてているうちにその数は百本を超こえた。鬼シグはその中から手に馴な染じむものを二振ふり選んで自ら使った。身を守るものは捨て去った。人イダならざる鬼シグの証明である仮面とこの肉体と敵を断たつ二振りの鋼はがねのみ。やがて誰も彼も鬼シグを避さけるようになった。誰も鬼シグには近づこうとしなくなった。鬼シグは百有余の武器が生おい茂しげる林の中にうずくまって夜ごとに吼ほえた。戦いを。戦いを。戦いを。戦いを！　しかし誰も鬼シグの声など聞こうとしなかった。彼らだけだった。男が四人に、女が一人。てめぇら本マ気ジでやるつもりかよ、とゆがんだ顔の男が言った。落ちつきはらった雰ふん囲い気きの男が、いいんじゃないか、なぁに暇ひま潰つぶしさ、と応じた。おれはどっちでも、とやや頭とう髪はつの薄うすい男がどっちつかずな口調で言った。つきあいきれないわ、と女が肩をすくめた。だったら帰りやがれ、とゆがんだ顔の男が言った。で、まず誰がやるんだ？　てめぇらがやらねぇなら、俺がこの化物をぶち殺してやる。やる気満々じゃない、と女が呆あきれたように笑った。ボクがやるヨ、とえらく端たん整せいな顔だちの華きや奢しやな男が進みでた。そして、いいかい？　と男たちや女に向かって尋ねた。戦うというのか。この細身の男が、俺と。よかろう、と鬼シグは思った。鬼シグは戦いに餓うえていた。もはや戦うことだけが鬼シグのすべてだった。他ほかの何もかもを鬼シグは見失っていた。見失うだけではない。実際、失っていた。鬼シグには何もなかった。

　アジアン。俺はお前と戦った。あの夜、お前は俺と戦った。お前

は並外れて敏びん捷しようでとらえがたかった。俺は幻げん影えいと戦っているかのような錯さつ覚かくに襲おそわれた。お前と俺とはまったく違ちがうのに、俺はまるで俺自身の影かげを相手にしているかのようだった。戦っているうちに、とうとう俺は知るに至った。俺は敵ではなく己自身を追い求めていたのだ。俺にとって真の敵は俺自身だった。俺はお前に、そして自分自身に敗れて戦いの何たるかを知った。俺は復讐のために人イダの生をかなぐり捨て鬼シグとなったが、仇を討って俺の手の中に残ったのはただ俺が殺した者たちの血だけだった。俺が鬼シグとなったことに意味があったのだとしたら、俺はもっと何かをえたはずだ。だが何もなかった。それからも俺は戦いを求めた。鬼シグであることに意義を見いだそうとした。しかし何もなかった。百有余の武器が残っただけだった。それでも俺は戦いを求めてやまなかった。俺は何をしたかったのだろう。アジアン、お前と戦い、敗北して、ようやく俺はわかった。俺は生きたかったのだ。俺は鬼シグなどではなかった。鬼シグになどなれない。俺は人イダだった。殺された俺の同胞たちや、俺が殺した者たちと同じだった。俺は人イダでしかなかった。俺は思いだした。俺は戦士で戦いしか教えられなかったが、書物や絵画に興味があり、隠かくれてそれらを眺ながめたものだった。飽あかずに眺めつづけたものだった。俺の戦いとは生きることだった。生きるために戦うことしかできなかった。たしかに生を貫つらぬくことは絶えざる戦いだが、それ以外の生き方もあるのだ。

　鬼シグならざる人イダは、リキエルは、大剣を振ふるう。紫むらさき色いろの管を断ち斬きり、蜈蚣むかで女を斬り払う。周りには仲間たちがいる。窮きゆう屈くつな戦いだ。しかしリキエルは大剣を止めない。ときおり蜈蚣女が大剣をすり抜ぬけてリキエルに咬かみつく。肉が食い破られる前にリキエルは蜈蚣女を叩たたき落とす。傷は負っている。無数に。どうということもない。リキエルは戦いを継けい続ぞくする。仲間が命を落としてもリキエルは揺らがない。リキエルはわかっている。己にできるのは戦うことのみだ。しかしこの戦いは空くう虚きよではない。リキエルは鬼シグではなく人イダだ。もっとも、リキエルを人イダたらしめてくれたのはアジアンとその仲間たちで、彼ら、彼女らがいてくれなければ鬼シグでも人イダでもない、怨霊のようなものでしかない。リキエルが人イダとして生きるためには彼ら、彼女らが必要だ。仲間を、友を守るための戦いに倦うむはずもない。疲つかれなど感じない。リキエルは戦うだろう。戦いつづけるだろう。一いつ片ぺんの肉につ塊かいとなるまで、一いつ滴てきの血となっても、リキエルは戦い抜くだろう。クラニィはいない。ローガンも逝いった。ミスター・毛モ

ウ、寂ジヤク星セイ、リョーヨルカ、アルバート、シュトレーハウゼン、ドルゲイ、オーノ、クルガイス、リー・ブラック、キューレイ、雷ライ切キリ、レイジ兄きよう妹だい、ナツコ、ヘンドリクが死んだ。それでもリキエルは戦うだろう。失った仲間たちは無ではない。彼ら、彼女らは間違いなくそこにいたのだ。死は無ではない。そうだろう、と仮面の奥でリキエルは呟つぶやいた。俺たちはお前を待つ。みんながお前を待っている。「──こい、アジアン」

24　笑うしかない

「ヘッヘヘヘヘァハハハハハァァー……ッ！」なぜだかおかしくてたまらない。ダリエロはレイジ兄のちぎれかけた首を殴なぐり刎はね、右みぎ肘ひじに仕込んだ超硬こう度どブレードでレイジ妹の右みぎ脚あしをぶった斬りながら、笑う。本当なら腹を抱かかえたいところだがあいにく忙いそがしい。レイジ兄を蹴け倒たおして、レイジ妹を突き転がしつつ、大笑いする。「ちょっと、あんた……！」とかなんとかニセチチ女が怒ど鳴なっている。知ったことかよ。聞こえねぇ。ダリエロはレイジ兄妹を踏ふむ。「グヘヘハァヘハァヘハァッ！」兄妹の上でダンスを踊おどる。「グァーハッハッハッハッハッハッハァー……ッ！」どうだ。どうだっつってんだよ。ここまですりゃあ、こんなにも丁てい寧ねいにぶち壊こわしてやりゃあ、さすがに起きあがってこられねぇだろ？　この紫の管だな。こいつだな。ダリエロは合金を嵌はめこんである踵かかとで管を踏んづける。糞くそ生意気にも蜈蚣女が飛びかかってきやがったから、右手の指に仕込んである鋼の爪つめで引き裂さいてやった。レイジ兄は動かないが、レイジ妹はまだ立とうとしている。「クックックックックックックッ……！」まったく笑えるぜ。傑けつ作さくだ。死ね。死ね。死んじまえ。全員死ね。いいかげんにしろ。塵ゴミ屑クズどもめ。死に腐くされ。「──さっさときやがれ、アジアン……！」

25　早く

　あと少しだ。もうちょっとで広間に戻れる。あの角を曲がって、しばらくまっすぐ行けば広間だ。マリアローズはちらりと振り返る。通路は死し屍し累るいゝるいだ。これだけの数の悪魔がどこから入りこんできたのか。いろいろな場所から侵しん入にゅうしてきたのだろう。前に向きなおっても、悪魔、悪魔、悪魔。悪魔だらけだ。悪魔たちが通路にひしめいている。でも、やつらにはマリアローズたちの行く手を遮さえぎることはできない。相手が悪い。悪すぎる。何しろこっちにはトマトクンがいる。サフィニアがいる。ベアトリーチェだってすぐれた剣士だ。ＳＩＸもいる。ピンパーネルがいて、ハニーメリーが援えん護ごする。カタリだってそこそこやるし、アーニャ・クルチバも足手まといにはならない。僕は微び妙みようだけど。てゆうか、役立たずだけど。──それから、あいつがいる。通路はお世辞にも広いとは言えないので、大おお柄がらなトマトクンやＳＩＸが暴れまわるのはちょっと難しいし、サフィニアも大きな魔術は使えないが、あいつにはまるで関係ないみたいだ。あいつはさっきから先頭に立って、ズバズバ敵をやっつけながら突き進んでいる。どうやって倒たおしているのか、マリアローズにはよくわからない。とにかく薙なぎ倒している。突とつ進しんしている。ものすごいペースだ。

　あいつが後ろを向いた。薄うす青あおい瞳ひとみにマリアローズを映した。「──すまない、マリア」

　なんで謝るのかな。意味がわからないんだけど。や、まったくわからないってことはないけどね。想像はできるけど。ようするに、あれでしょ？　僕から離はなれて前にいることを申し訳ないと思ってるみたいな？　知ったこっちゃないんだよね、そんなの。好きにすればいいし。てゆうか、心配なんでしょ。仲間たちのことが。当然のことだと思うし。きみの仲間たちだって、たぶん待ってるだろうし。だからさ。「──早く行って……！」

　あいつは返事もしないで加速した。あんなに速く駆かけていたのに、まだぜんぜん本気じゃなかったんだ。信じられないよね。すごいよ。すれ違いざまにどうやってか悪魔たちを斬り裂きながら、またたく間に向こうの角を曲がってもう見えない。「速いな」とトマトクンが呟いた。ほんとに。まったくだよ。あいつは呆れるほど速くて、ちょっと腹が立った。最初からそうしていればよかったんだ。そうするべきだった。僕のことなんか放ほうっておいてさ。きみなんかいなくたっていいんだから。僕のことはいいんだよ。トマトたちがいるんだし。大丈夫なんだから。もっと自分のことを考え

てよ。あいつの仲間は無事なのかな。気がかりで、頭とか、おなかとか、胸とか、あちこち苦しい。痛いよ。痛くてしょうがない。あいつが悲しむところを見たくないなんて、これっぽっちも思ってやしないけれど、早く、どうか早くたどりついてほしい。一分でも、一秒でも、早く。お願いだから。

26　それでいい

アレか。アレだな。アレだ。有う象ぞう無象の悪魔をただふれるだけで次々と壊しながら疾しつ駆くする彼の目がソレをとらえている。ソレはよくないものだ。悪いものだ。最優先で排はい除じよするべきだ。破壊しなければならない。ソレは紫色の管のこんもりとしたかたまりだ。天てん井じようにへばりついていて、ソレからのびる紫色の管が通路の壁かべや床ゆかに張りめぐらされている。アレはどこかキミと似ているネ、アルカーディア。キミはボクの一部で、ボクはこのとおりの存在で、だからボクにはわかるのかもしれない。アレは害悪だ。駆く除じよしないといけない。殲せん滅めつだ。ただちに殲滅すべき敵だ。ボクはそうするだろう。接近しなくてもいい。立ち止まる。急停止する。アレが気づく。ボクを察知して、こっちを見る。目玉があるわけじゃない。でもボクは感じた。アレは間違いなくこっちを見た。だからといってボクを止められはしない。アレには打つ手がない。ボクは命じる。あくまでボクの意思で使し役えきする。アルカーディア、ジャシュギシュ、タナトゥス、ウルクハンド。解き放て。弾はじけろ。充じゆう満まんしろ。この通路一いつ杯ぱいに。ボクの身体からだからキミたちがあふれて、飛びだしてゆく。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒。黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒。「──〝黒ブラツいクス嵐トーム〟」

アルカーディアが歌いながら荒あれくるい、ジャシュギシュが猛もう威いをふるう。タナトゥスは思うさまに舞まった。ウルクハンドは哮たけり、躍おどりまわる。アルカーディアの黒い管とジャシュギシュの黒こく鱗りんに覆おおわれた首とタナトゥスの黒こく翼よくとウルクハンドの黒い繊せん維いと無数の瞳が通路に充みち満ちて蜈蚣女たちを、紫色の管を、他の悪魔どもを、悪魔どもの屍しかばねを押し潰つぶした。じつに単純だ。シンプルな破壊。生に死をもたらす。彼はそれを行った。絶対者として行使した。そうよそうそのとおりとアルカーディアが賛同している。クンリンシロシハイダコロセコロシツクセとジャシュギシュが嗤わらう。You feel better?　ああ。ああ。そうだネ。そうだ。グ・ゴ・グ・ゴ・グル・ゴル・ゴルル。そのとおりだヨ、ウルクハンド。そうしようか。──ダメだ。その手には乗らない。制せい御ぎよだ。ボクはアルカーディアを、ジャシュギシュを、タナトゥスを、ウルクハンドを、何

よりボク自身を制御する。抑おさえこんで、引っこめ、と命令する。無理やり従わせる。ずるずると、ひたひたと、するすると、ぐねぐねと、しゅるしゅる、うねうねと、アルカーディアは、ジャシュギシュは、タナトゥスは、ウルクハンドは、ボクの中に戻もどってくる。ボクの中にしまわれる。収まるべきところに収まる。それでいい。それでいいんだ。キミらはボクのモノだ。キミらはボクだ。顔を上げる。通路は悪魔たちの体液や残ざん骸がいで塗ぬりつぶされている。ボクだけが立って、息をしている。これくらい何でもない。いくらでもやってやる。何度でも。何回でも。

　彼は駆けだす。広間の出入口周辺にはまだ悪魔が多少残っている。悪魔の死し骸がいも転がっている。果たして悪魔だけなのか。「──アジアン！」ダリエロが色の異なる両目で彼を見た。「遅おせぇんだよ、塵ゴミ屑クズ野や郎ろうが！」「アジアン！」「アジアン！」「アジアンだ！」「アジアン！」「アジアン！」「アジアン！」「アジアン！」「アジアン！」「アジアン……！」

「ああ」と、彼はとっさにはそれしか言えない。ベティが彼と目をあわせて、下した唇くちびるの端はしを軽く嚙かんだ。それから彼女は微かすかに笑った。リキエルは蜈蚣女を大たい剣けんで斬り払いながら、力強くうなずいてくれた。カイがいる。シャマニ。メツェルディ。ラギィもいる。チェリー。サイケングレンマイセルヒ。白しろ妙たえ。ミョーチも。ボダダグとロロ、トト、ボンド、クララ、祝ノリ花カが後ろのほうにいる。リリア。ジョゼ。ユーリィ。ミシーリャもいる。ヴィクトリアがいるのに、ナツコの姿が見えない。ヘンドリクは？　レイジ兄きよう妹だいは？　アジアンは一度、息を止める。吸って、吐はきだす。被ひ害がいは？　そう訊ききたい。確かく認にんしたい。何かの間違いかもしれない。どこかに隠れているんじゃないのか。ヘンドリク。仲間内ではお調子者と目されていた。喧けん嘩かっ早くて、たまにダリエロにさえ突つっかかっていた。こうと決めたら曲げない男だった。レイジ兄妹。キミらは二人そろえば誰だれよりも強かったはずじゃないか。ナツコ。ああ、ナツコが。嘘うそだ。信じない。信じたくない。嘘だろう？　そう言いたい──が、それはダメだ。わかっている。ごめん。謝るのもナシだ。そうじゃない。

「大丈夫」アジアンは胸を張って口くち許もとに微び笑しようすら浮うかべた。ナツコが、そうそう、と言ってくれたような気がする。それでいいんだよ、と。「ボクがきたから、もう大丈夫だ」

「あたりめぇだ」とダリエロがゆがんだ顔をさらにゆがめて床を蹴

けりつけながら言った。

「さあ、掃除をしよう」アジアンは目を見開いて、まだ生き残っている悪魔たちに狙ねらいを定めた。「━ボクに任せてくれればいい。すぐに終わらせるサ。あっという間にネ」

27　変転

「いいぞォ！　いけいけドンドンだッ！　その調子ッ！　その調子だぞォッ！　すンばらしィーッ！　言うことなしッ、最高だァー……ッ！」ファニー・フランクが旗を振ふって皆みなを鼓こ舞ぶしている。何か実のあることを言っているわけではないのだが、あの男が大声を出しつづけているだけで支えになるのだ。昼ラン飯チタ時イムは一時押されたものの、アジアンが戻ってきた。探たん索さく隊の他の面々も引き返してくるだろう。これでまず心配はない。秩ちつ序じよの番人は出入口あたりで敵と揉もみあう展開がつづいている。隊士たちを通路に突入させて一気に押しきるべきか否いなか。ヨハン・サンライズは前線から退いて状況を読んでいる。被害は決して小さくないが、なんとかしのいだか。ただし、しのぎきったと判断するのは早計だ。

「ヨハン・サンライズ……！」ファニー・フランクの傍かたわらで付け髭ひげの女ジャン・スタンバックが声を張りあげた。見れば、ジャン・スタンバックは広間の中ほどの天井を指さしている。あれは何だ。今まで気づかなかったが、天井に網あみ目め状の四角いものが嵌めこまれている。換かん気き口か。それが音を立てて落下した。ヨハンはすかさず「退たい避ひ……！」と叫さけんだが、間に合わないか。換気口直下の一帯には負傷者たちや医術士たち、非戦せん闘とう員らが集まっている。換気口が外れて天井に穴があいた。そこから螳かま螂きりと蛇へびを足して二で割ったような姿の悪魔どもが下りてくる。「━バァーカッ！　このオレがいるっつゥーの！」飛フエイ燕ヤン。ＺＯＯのユリカ・白雪やトワニングの手伝いをしていた飛燕が舌した舐なめずりをして悪魔どもを迎むかえ撃うった。「お願い、飛燕……！」ユリカは他の医術士たちと同じように治ち療りよう中の者を運ぼうとしている。髭の巨きよ漢かんトワニングに至っては一人で四人ほども担かついでいる。「動ける者は戦いなさい……！」琺瑠フオールがカレルを抱だいたまま

愛刀ナァガを振るって悪魔を斬きり倒した。手当てを受けていた隊士たちが次々と医術士の手を振りはらって剣を握にぎる。これでなんとか態勢が整うか。そう思った矢先に別のところから悪魔どもが。天井の換気口は一つではなかった。別の場所にもあったのだ。「──食料庫だ……！」とジャン・スタンバックが言った。広間の壁にはいくつか扉とびらがあって、そのうち二つが通路に繋つながっていた。あとは部屋だ。食料や飲料水のタンクが貯蔵されている大きな部屋もあった。

「羅ラ叉サ！　そちらは頼たのむ……！」ヨハンは一声かけつつ食料庫めがけて駆けた。扉を開け放つ。天井に目をやった。換気口は見あたらない。「──ここだ！　ここに避難しろ！」

　ユリカが、トワニングが、モリー・リップスが、医術士たちが、重傷者たちが、子供や老ろう齢れいの者たちが、食料庫に殺さつ到とうしてくる。「なせばなァーる……ッ！」とファニー・フランクが旗を振っている。「なさねばならぬッ！　しかしッ！　キミタチはやることをキッチリやっているッ！　ゆえにッ！　必ずなんとかなるのだァー……ッ！」「……そうだといいのだがね」ヨハンは思わず苦笑して悪魔どもに突っこむ。そうだといい、ではない。そうなるべく鋭えい意い実行するのだ。「破天一流絶技──」瞑めい目もくし、息を止める。認にん識しきの中で、時を止める。目を開ければ、見える。敵が見える。この上なく明めい瞭りように。斬るのではない。敵の居場所に剣を置いてゆく。「〝覇は界かい〟」息を吐けば、時間が動きだす。ヨハンは二十一匹ぴきの螳螂蛇悪魔を斬り飛ばした。「──ウラァァァァッ……！」飛燕が猛もう烈れつに動きまわっている。いや、あれは動きまわっているなんてものじゃない。飛燕が何人もいる。何人どころか、何十人も。「オラァ！」「ラァッ！」「グァラァ！」「ウラァッ！」「オラララァ！」「ウォラララララァッ！」「ラァ！」「ラァッ！」「グォラグォラグァラァァ……ッ！」飛燕たちが悪魔どもを薙ぎ倒す。まさしく一いつ騎き当とう千せん。砕くだけ散る悪魔どもの肉にく片へん、血ち飛沫しぶきの中で、飛燕は静かに合がつ掌しようした。「──八十四散乱打究極奥おう義ぎ〝我ウオ無ウーシ双ユオン〟。愛してンぜ、ユリィ！」

　いける、とヨハンは思い、すぐさま打ち消す。一瞬たりとも気を抜くことなかれ。だが飛燕だけではない。ＺＯＯの背の高い女性と巨きよ大だいな狼、白い毛に覆われた二足歩行する獣けものも、悪魔どもを着々としとめている。風向きは悪くない。少なくとも今の

ところは。あくまで現時点では、だ。お祭り騒さわぎは陛下に任せておけばいい。ヨハン・サンライズは石橋を隅すみ々ずみまで丹たん念ねんに叩たたいてから渡わたらねばならない。そうはいっても、昼ラン飯チタ時イムが固めている出入口から先代らが広間に駆かけこんでくると、ヨハンといえども確信を深めずにはいられなかった。先代。ＺＯＯの者たち。ＳＩＸ。ベアトリーチェら。増ぞう援えん以上の増援だ。ヨハンは刀を掲かかげて各員にいっそうの奮ふん闘とうをうながそうとした。あと一息だ。もう一踏ふんばりすれば。「――ぬ……っ!?」ヨハンは図らずも本当に踏んばる羽目になった。両足に力をこめていないと体勢が崩くずれる。後方に引っぱられているような感覚。「離り陸りく……!?」と誰かが言った。あれはＺＯＯのマリアローズの声か。ヨハンは目の前で転てん倒とうした少女を助け起こして食料庫のほうへと押しやろうとしたが、これでは歩くのも厳しい。味方だけではなく、敵も混乱している。「奇き貨か居おくべし！　掃そう討とうせよ……！」ヨハンは命じながら蟷螂蛇悪魔を斬り捨てて、少女を抱きあげた。白兵戦は双そう方ほうにとって困難だが、こちらには魔術士もいる。「ウォロロロロロォーン……ッ！」ファニー・フランクが旗を振り振り転がって蟷螂蛇悪魔に激突し、吹ふっ飛ばした。ヨハンはあえて笑った。「陛下につづけ……！」

28　美しき世界

　彼女は黒目も白目もない、絶えず変化しつづける色とりどりの輝かがやきをたたえた瞳ひとみで、艦かん橋きようの全周モニターを見つめるともなく見つめている。九く頭ず竜りゆう型超弩ど級きゆう飛ひ行くう戦せん艦かんマキシマムＡＭドラゴン〝ナ・イン〟はつい先ほど離陸して刻々と高度を上げている。モニターの各所に被ひ害がい状況が表示されている。ナ・インは脚きやく部ぶと腹部の外装が大きく損傷し、内部構造も一部破損しているが、飛行に支障はない模様だ。艦内に入りこんだ悪魔たちは駆く除じよされつつある。ナ・インは問題なく飛ぶだろう。そして目的地まで彼女たちを運ぶのだろう。九頭竜ナ・イン。彼女は瞼まぶたを閉じて往時のナ・インを思いだす。ナ・インとノ・イン。美しい竜の兄弟だった。美しい。竜は美しい生き物だ。美しい生き物であるはずだ。彼女は初めて出会った竜の姿を克こく明めいに記き憶おくしている。正確には竜ではなかった。亜あ竜りゆう。人を貪むさぼるために生

きているかのような恐おそるべき生き物。それを恐きよう竜りゆうと呼ぶ者もいた。ティーレックスとかそういう感じだよな。そんなことを言っていた男は亜竜に食われた。ただただ怯おびえて震ふるえていた女も亜竜は食くらった。彼女の目の前で大勢が食われた。人々を食らう竜に彼女は見入っていた。恐ろしさは微み塵じんも感じなかった。なんて。なんて強い生き物だろう。

　彼女は食われなかった。理由はわからない。とにかく亜竜は彼女を食わずに見み逃のがした。それで彼女は信じるに至った。自分は竜に食われない。他の人々とは違ちがう。人々は竜に追われていた。亜竜たちに。人は亜竜の食しよく糧りようだった。彼女は違った。彼女は亜竜を追い、狩かった。生きるために亜竜を殺した。彼女は亜竜を観察した。亜竜を殺して、亜竜を知った。亜竜のことが手にとるようにわかった。人々は亜竜を恐れていた。彼女は亜竜を恐れなかった。彼女は亜竜を追いかけ、ついには亜竜の巣に足を踏み入れた。そこは深い谷間の裂け目の先にあった。裂け目は竜たちが棲すまう世界へと通じていた。竜ドラ界ガンド。彼女は岩柱が立ちならぶ日照りのマルグレ千本柱トアラスを越こえて、十一個の太陽が輝く広大無辺な大地に立ち入った。そこには亜竜たちより雄ゆう壮そうな竜たちがいた。竜たちは互たがいに争い、勝った竜は敗れた竜を食らった。亜竜とはそうした竜の競争に参加できない、弱い竜たちだった。下等な竜だった。真の竜は遥はるかに偉い大だいだった。竜は共食いをするが、野や蛮ばんではなかった。竜同士の果たしあいはたいていーいつ騎き打ちだった。竜と竜が正々堂々と雌し雄ゆうを決し、敗者は勝者に身を差しだすのだ。竜たちにとって敗北は死を意味するのではなかった。敗者は勝者の中で生きつづけるのだ。彼女は竜たちを仰あおいだ。竜たちに見とれた。彼女は亜竜を狩る者だったが、竜を狩ろうとは思わなかった。竜は亜竜とはあらゆる意味で違っていた。竜たちは美しかった。彼女は亜竜ではなく竜を知りたいと思った。もっともっと知りたい。理解したい。

　彼女は竜の巣穴に忍しのびこんで初めて幼竜と出くわしたときのことを思いだす。竜の生せい殖しよくは一通りではない。竜には性別があり、性器も持っている。竜は交こう尾びすることができる。竜によって胎たい生せいも卵生もありうる。単たん為い生殖を行う場合もある。あの幼竜は卵から孵かえって間もなかった。猫ねこほどの大きさだった。それでもまごうことなき竜だった。彼女はその巣穴に何度も通ったが、親竜は姿を現さなかった。あるいは他の竜に倒たおされたのかもしれない。幼竜は彼女によく懐なついた。彼

女は幼竜を巣穴から連れだすことを決意した。幼竜は他の竜に狙われた。やむなく彼女は竜界をあとにした。裂け目から人界に戻もどって他の竜がいない環かん境きようで幼竜を育てることにしたのだ。幼竜はすくすくと育った。彼女は人々に竜使いと呼ばれて敬遠されたが、頓とん着ちやくしなかった。彼女と幼竜を恐れて襲おそう者たちもいた。皆、返り討ちにした。彼女に接近しようと試みる者もいた。彼女は多くの場合そうした者たちを遠ざけたが、ときに利用することもあった。幼竜はみるみるうちに大きくなっていった。そのぶん食べねばならなかった。彼女一人で食糧を確保するのには限界があった。さりとて幼竜に狩りをさせるわけにもいかない。彼女は知っていた。竜の好物は本来、屍し肉にくではなく生き餌えなのだ。竜は生きたまま竜を食らう。竜は生きたまま食らわれることで竜の中に息づくのだ。竜たちはそう信じているし、それはおそらく正しい。そして、亜竜の時代が終わり、人々がのさばる地上で、竜がもっとも好む食糧はたぶん人だった。

彼女の幼竜は我が慢まんしていた。彼女はそれを知っていた。幼竜は耐たえていたが、彼女にとっては耐えがたかった。彼女は人々の戦争に加担することにした。一方の軍に加わって、幼竜に敵軍を貪り食わせればいい。彼女の許しをえて、幼竜は思うさまに食らった。彼女と幼竜は戦場から戦場へと渡り歩いた。そのうち彼女と幼竜を知らぬ者とていなくなった。幼竜は若く立派な竜となった。成長するに従って聡そう明めいになり、同時に竜特有の衝しよう動どうに悩なやまされるようにもなった。竜は竜を食らう。それはただ栄養を摂せつ取しゆするのではない。竜は竜を己おのがうちにとりこむことによって、より強く賢かしこい竜となるのだ。それは竜の信しん仰こうであるのみならず、竜の本能でもあった。竜が竜であるかぎり、それをなさねばならない。竜は大きくなればなるほど、年ねん齢れいを重ねれば重ねるほど、食事の量も頻ひん度ども減る。竜は植物の光合成よりも遥かに効率のいいエネルギー生成のシステムを持っているが、その機能が若い竜においては未熟なのだ。竜は竜を食らうことでそのシステムを強化できる。ゆえに竜は竜を食らわねばならない。彼女の若い竜は竜を欲ほつしていた。だが彼の周りに竜はいなかった。竜はいなかったが、彼が竜と見なしている存在がいつもそばにいた。彼にとってその存在は竜以外の何ものでもなかった。それほど彼にとってその存在は近しかった。彼はその存在を言わば愛していたが、愛すれば愛するほどその存在を食らいたいという欲求が高まるのだった。彼は彼女を愛していて、それがために彼女を食らいたがっていた。

彼女は彼に身を捧ささげることにした。彼は彼女を食らった。彼女は彼のものとなった。そして彼は単為生殖を行ったのだ。いや、結果から言えば、彼は彼女と生殖したということになるのだろう。彼は彼女を食らうことで深く激しくどうしようもなく他に類例がない性交を彼女となした。それは食事であり、性せい行こう為いであり、融ゆう合ごうだった。そのあげくに子が生まれた。それが彼女だった。人と竜の間に生まれ、彼の鼓こ動どうと彼女の意識を持つ人竜。彼女の望みは果たされた。彼女は亜竜を一目見たときから竜に惹ひかれ、本当は竜になりたかったのだ。そのとおりになった。竜となった彼女は人界を脱だつして竜ドラ界ガンドに舞まい戻った。彼女は竜として生きるつもりだった。竜として竜を食らい、竜としての生をまっとうする。彼女はそうした。多くの竜をひざまずかせて、その肉を食らい、血を飲み、骨を、脳までも食らった。彼女は真実の喜びを知った。竜としての生は歓かん喜きに満ちあふれていた。彼女の認識は広がり、研とぎ澄すまされた。精神が拡大し、深化した。竜と竜のぶつかりあいに魂同士の共鳴があることを知った。荒あら々あらしい闘とう争そうによって知性が磨みがかれた。眠ねむりに落ちると、彼女の魂はマグニデア・プールを泳いだ。それは一つの銀河だった。宇宙だった。彼女は、竜たちは、大宇宙の彗すい星せいであったり、遊星であったり、恒こう星せいであったりした。彼女はその大宇宙を旅した。他の竜たちも一いつ緒しよだった。少しずつ距きよ離りをのばし、どこかに到とう達たつしようとした。すばらしい、驚おどろきと喜びに彩いろどられた旅だった。ついに彼女はたどりついた。

マグニデア・プールの中心にそれはあった。グランコア。いびつさの欠片かけらもない球形の物体。どう見てもそれは人工の構造物だった。人の手によってつくられた星だと彼女は直感した。奇き妙みような話だった。人はここにはこられない。竜だけだ。人より高次の存在によってこの天体は築かれたのかもしれないとも考えた。たとえば神。それは神の遺い跡せきなのではないか。彼女は他の竜たちとともにその遺跡に分け入っていった。遺跡には彼女らを迎むかえ入れるための出入口があり、内部には通路さえあった。彼女らは通路を抜けて開けた場所に出た。そこには古竜より年を経た竜がいた。竜が崇あがめる神竜たち。だが竜の姿はしていなかった。神竜たちはまるで人のような恰かつ好こうをして車座になっていた。しかし彼らは人ではなく竜だった。それは間違いなかった。人竜の彼女にはそれがわかった。神竜たちは彼女たちを静かに歓かん迎げいして、自分たちに手を貸すように求めた。彼女以外の竜たちは嬉き々きとして神竜に従った。彼女は躊ちゆう躇ちよした。これは何

だ？　どういうことだ？　彼女は竜に魅み入いられた。彼女は竜に憧あこがれた。竜に焦こがれた。竜を愛した。竜に食われて竜となった。竜は巨大で強きよう靭じんで聡そう慧けいで美しかった。竜は完かん璧ぺきな生き物だった。竜が誕生して存在していることは奇き跡せきだった。それなのにこれは何だ？　戸と惑まどう彼女に神竜たちは自分たちの役割について、仕事について語り聞かせた。これは崇すう高こうなる使命なのだと神竜たちは誇ほこらしげに言った。自分たちはこの世界を保つための重要で必要で不可欠な仕メカ組ニみズムの一部なのだと。

　その瞬間だった。彼女はようやく思いだした。こんなはずではなかったことを。これは彼女に約束されていた世界ではない。彼女のいるべき場所ではない。竜は奇跡の産物などではない。彼女が愛した竜、彼女を愛した竜の記憶は色いろ褪あせた。長い夢を見ていたかのようだった。こんな世界は幻げん覚かくに等しいのに夢ではないのだ。彼女はここにいる。囚とらわれている。逃にげだすことはできない。そもそも彼女は逃げこんできたのだ。この世界は間違っている。誤りに満ちて誤りだけでできている。正さねばならないと彼女は思った。もしも正しい世界があるとするなら、そこでは竜は奇跡の産物でなければならない。仕メカ組ニみズムの一部としてつくられたものであってはならないのだ。そのような竜は美しくない。そのような竜ならば彼女は愛せないし、そのような竜に愛されたくもない。彼女は瞼を開けた。

「くくくくくっ。にゃひゃひゃひゃひゃ」小さくなったグッダーが主操縦席にちょこんと座って、握にぎりしめた入力コント装置ローラーを何やら操作している。「悪魔め。クソ悪魔ども。所しよ詮せん、貴様らには余を阻はばむことにゃどできんのだ。にゃぜそれがわからんのか。わからんから悪魔にゃのだにゃ。ふしゃしゃしゃしゃ。いーひゃひゃひゃひゃひゃ。ふひょひょひょひょ」

　九頭竜型超弩級飛行戦艦マキシマムＡＭドラゴン〝ナ・イン〟は高度約一万ｍを飛行している。しばらく前から高度はほとんど変化していない。ナ・インはこのまま目的地を目指すのだろう。そこですべてが終わり、始まる。否いな。始まるのではない。始めるのだ。

　彼女はふたたび瞼を閉とざす。ナヴェイア、と彼女を呼ぶ声が蘇よみがえる。ナヴェイア。違う。私はレインドゥラス・ヴィシュクラトー。それは人竜の名。竜の一彼の名前。私は誰だれなのか。私はナヴェイア？　レインドゥラス・ヴィシュクラトー？　ヘラ？

デメテル？　ヘスティア？　アテナ？　アフロディテ？　アルテミス？　フレイヤ？　エポナ？　モリガン？　アリアンロッド？　リアンノン？　サラスヴァティー？　ラクシュミー？　パールヴァティー？　カーリー？　私は誰？　私は私。名前は記号でしかない。私が私を既き定ていする必要はない。私は始める者。正しき世界を始める者。正しき世界では一点の瑕か疵しもなくどの地点からどの角度からどの時間軸じくから眺ながめても美しい竜たちが舞うことだろう。竜。彼女は竜の気配を感じて瞼を押し開ける。完璧ではない。完全からは程ほど遠い。それは不完全な竜だ。醜みにくい竜だ。彼女は振ふり仰いでそれを見つける。「──グッダー。空です」

「あぁぁん？　空ぁ？　ここは空にゃ──」グッダーは上を向くと、目を剝むいた。「うにょょょょょょょょぉぉぉぉぉぉぉわぁぁっ!?　おのれ、あの腐くされ竜め、にゃにを……！」

「え？」ジュジが座席から腰こしを浮うかして片眼鏡モノクルの位置を直した。「──うっわっ……」

「あれは捨て身だ」りりぃが淡たん々たんと呟つぶやいた。「あのままぶつかってくるつもりだろうな」

「ふんっ、無む駄だにゃことを！　回かい避ひしてくれるわ……っ！」グッダーは小さな身体からだを大きく動かしながら入力コント装置ローラーを操あやつった。「余に不可能はにゃいのだぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　醜しゅう悪あくな竜。〝竜ドラゴのニル・大ハイ公ヴエ爵リオン〟ゲルマニオン・ワッヅァール・パプティアン・ブリッケス・フォンドール・グェハブナス。ゲルマニオンが迫せまりくる。ナ・インは急激に減速しつつ右方向に傾かたむいてゆく。その動きにあわせて彼女の身体も強い力で振りまわされているように感じられる。彼女の膝ひざの上には黒い球体がのっている。膨ぼう大だいな数の光点が明めい滅めつする球体。マグニデアグローブ。マグニデア・プールをリアルタイムでモニターする。彼女はマーキングされている光点を目で追いながらゲルマニオンを見ている。あれほどのサイズに達した竜の機動力は途と方ほうもない。捨て身であるならば余計だ。「──余にぃぃぃぃ！　余に不可能はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」とグッダーが叫さけんでいる。「無駄なあがきです」と彼女は呟く。起こるべきことは起こるべくして起こるのだ。これから世界が終わり、始まるのと同じように。

彼女は身構える。「ひっ……」とジュジが悲鳴をもらす。りりぃは腕うで組ぐみをして泰たい然ぜん自じ若じやくとしている。グッダーは入力コント装置ローラーごと跳とびあがる。「にゃあああああああああああああああああああああああああああ
あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　ゲルマニオンはナ・インの左背部に激げき突とつする。その瞬間、ゲルマニオンの肉体の半分以上が砕くだけるように潰つぶれる。大きな、非常に大きな衝しよう撃げきがナ・インを襲う。グッダーが舌でも噛かんだのか「うぎぁゃっ」と声をもらす。彼女も座席の肘ひじ掛かけにつかまってしのがねばならなかったほどだ。
「特とつ攻こうとは」とりりぃが言う。「くだらないことをするものだ」

「いや、そうでもないかもですよ……!?」ジュジは全周モニターを指さす。ナ・インはひどく傾いたまま降下している。ゲルマニオンの体当たりによって羽が一枚折れたようだ。他ほかにも噴ノ射ズロルが多数損そん壊かいしている。グッダーは口から血を流しながら「くそくそくそくそくそくそくそぉぉぉぅ！
にぃぃぃぇぇぇぇぇぇぇい……！」と入力コント装置ローラーを操作しているが、ナ・インの姿勢制せい御ぎよに成功していない。ナ・インは予定していないコースへと突入している。その先に何かがある。あるいは、いる。彼女にもすぐにはそれが何かわからない。黒い。黒いものだ。無数の黒いもの。黒い点。いや、正面を向いているものが点のように見えるだけだ。どうやらそれは、それらは、黒い棒らしい。空にとてつもない数の黒い棒が浮いている。ナ・インの進行方向にものすごい数の黒い棒が配置されている。暗黒の檻おり。彼女の視力は人などとは比ひ較かくにならないほどすぐれている。彼女はおびただしい数の黒い棒、そのうちの一本の上に人ひと影かげを認める。人。それは人の形をしているが、もちろん人ではない。それは所々に切れこみが入っていて素す肌はだがのぞくゆったりした黒と紫の衣ころもを身につけている。人間の少年のようにも、少女のようにも見える。その瞳ひとみはにじむほどに黒々としている。髪かみの毛は漆しつ黒こくだ。闇やみの色をしている。汚お穢わいの象徴。それは笑えみを浮かべている。唇くちびるが動く。この先には行かせないとそれは言っている。行かせはしない。私がここで止めるのだとそれは言っている。彼女はそれの名を呼ぶ。「──悪グラ魔ンヴ大エリ公オンアーマン」

「猪ちよ口こオざいにゃぁぁ……っ！」とグッダーが顔を真っ赤に

して叫ぶ。「ぜんっぶ撃うち落としてくれるわぁぁぁー……っ！」ナ・インの魔ま導どう砲ほう千二百門、魔導誘導ミサイ弾発ルラン射装置チヤー四千八百門が火を噴ふこうとしている。その前に黒い棒は動きだしている。そして黒い棒はナ・インの進行方向に展開している。ナ・インは黒い棒に向かって突つき進んでいる。動きだした黒い棒の速度にナ・インの速度が加わる。間に合わない。ナ・インが魔導光線ビームや魔導誘導弾ミサイルを放つより先に最初の衝しよう突とつが起こる。黒い棒は先せん端たんが尖とがっている。突き刺さささる。魔導砲の砲門や魔導誘導ミサイ弾発ルラン射装置チヤーに突き刺さるケースが続発する。砲門や誘導ミサイ弾発ルラン射装置チヤーが爆ばく発はつすると被ひ害がいは甚じん大だいなものとなる。魔導光線ビームや魔導誘導弾ミサイルが無事に発射されて決して少なくない数の黒い棒を吹ふき飛ばす。しかしまたたく間に数百門の魔導砲、魔導誘導ミサイ弾発ルラン射装置チヤーが使い物にならなくなる。誘ゆう爆ばくして被害は拡大する。ナ・インは揺ゆれる。震ふるえる。警報が鳴る。全周モニターに被害状況が表示される。「──にゅえいっ！　いちいちうざったいのだ、そんにゃの見ればわかるわぁぁ……っ！」グッダーは入力コント装置ローラーを操作して被害状況表示が出るたびに消してゆく。ついには「きにゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」と癇かん癪しやくを起こしてメニューからコンフィグを出して表示設定をオフにしてしまう。黒い棒との攻防はつづいている。ナ・インは黒い棒がつくる防衛陣じんの真っ直中にいる。グッダーの目は血走っている。「アーマンは……!?」

「……いない」ジュジは座席から身を乗りだして全周モニターを確かく認にんしている。「──どこにも見あたりませんね。もしかすると、入りこまれてしまったのかもしれないですよ」

「上等ではにゃいかっ！」グッダーはナ・インを立てなおそうとしているし、立てなおしつつある。黒い棒による打撃ダメージは、総合的には大きいが一本一本がつける傷は小さい。ゲルマニオンの特攻ほどのインパクトはない。全周モニターで見たかぎりでも、ナ・インはハリネズミのような有様になっているし、あちこちで爆発が頻ひん発ぱつしているものの、飛行に支障はないようだ。グッダーは「ぎゅっふふふふふふふふふ……っ！」と笑う。「きゃつが中に入ってきたとしても、艦かんにゃいには害虫駆く除じよ係のクソムシどもがおるっ！　放ほうっておいても、やつらが勝手に相手をするであろう！　余の計画に変へん更こうは一いつ切さいにゃ

いっ！　ゆくのだ、にゃ・イン……！　こんにゃチャチにゃ妨ぼう害がいにゃどものともしにゃいのだということを見せつけてやれぇい……っ！　いっけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……っ！」

　ナ・インの各噴ノ射ズロルから光とも炎ほのおともつかないものがこれまで以上の勢いで噴ふん出しゆつする。加速。加速に次ぐ加速。いや増しに加速。間もなく黒い棒の防衛陣を突破しそうだ。間もなくではない。突破する。今だ。抜けた。グッダーが哄こう笑しようする。「にゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！　にゃーっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっ！　にゃひゅひゃひゅひゃひゅひゃひゅ！　にゃひょひょひょひょひょひょひょひょぉぉぉ……っ！」

　彼女は座席に深く腰を埋うずめて瞼まぶたを閉じる。正しき世界を彼女は思う。竜。美しき竜たちが飛び交かう世界。ナ・インがその世界までの道を切り開こうとしている。進みなさい、虚うつろなるナ・イン。我々をそこへと導くのです。ナ・インはまだ加速している。地じ獄ごくの空を突っきってゆく。紫し空くうの果ては赤々と燃えている。その果ての果ては黄に染まり燦きらめく。ナ・インは飛ひ翔しようする。左側の羽が一枚破は壊かいされたので水平ではない。やや左に傾かしいでいる。全身に黒い棒が突き刺さっている。多くの砲門や誘導ミサイ弾発ルラン射装置チヤーから黒こく煙えんが上がっている。かまわずナ・インは征ゆく。地獄を駆かけ抜ける。「パーティだ……っ！」とグッダーが笑いながら言う。「パーティだ！　パーティだ！　パーティだ！　パーティだぁ……っ！　雌し伏ふくのときがようやく終わる……！　さあ、扉とびらを開くときだぁ！　余らはすでに鍵かぎを手にしておぉーる！　超越執行マスター者の間ルームへの扉を開ける鍵を……！　余らにしか見えぬ印っ！　それがにゃによりの証あかし！　鍵の証明！　扉に刻まれし刻印と同じ印！　にゃがかった！　にゃがく遠い道のりであった！　余らの労苦がやっと報むくわれるのだぁ……っ！　パーティだ！　パーティを催もよおさねばにゃらぬ！　パーティだ！　パーティだ！　パーティをしよう！　このくだらぬ、出来損そこにゃいの紛まがい物どもに別れを告げようではにゃいか、盛せい大だいに！　さよにゃらをしよう！　グッバァーイ！　オウルヴォワー！　アウフヴィーダーゼーエン！　アディオース！　チャオ！　ツァイチェン！　サ！　ヨ！　オ！　ナ！　ラァ……！」

　彼女も胸のうちで誤りに満ちた無様な世界にさよならを告げた。

—さらばですFarewell.。

　瞼を開ける。

　ナ・インが速度を緩ゆるめる。程ほどなく停止して、ゆったりと艦首を下げる。

「〝世界のワールド終わりエンド〟……！」とジュジが声を弾はずませる。

　地に横たわっているというよりも、どこまでも広がっている。黒色の五ご芒ぼう星せい。星型の穴のようにも見える。これが地獄の中ちゆう枢すう。地獄の帝てい王おうの居城。〝世界のワールド終わりエンド〟。

　ナ・インは今、〝世界のワールド終わりエンド〟を眼下に見ている。

　彼女らはかつてこの城とも思えない城に幾いく万それ以上の密みつ偵ていを送りこんだ。探索者explorerたちを。それらは城に侵しん入にゆうして「黒いブラック太陽ホールが七度寝ね入いるまで」歩きつづけ、苦く悩のうするかのように入り組んでいる、ときに狭せま苦くるしく、稀まれには広々としている、広間もあれば部屋もあれば小部屋もあれば広大な大通りもあり、曲がりくねった小道は螺ら旋せんを描えがいて管のごとき通路は打ち砕かれたように散乱し、収束して袋ふくろ小こう路じへと迷いこむ、迷めい路ろ以上の迷路、迷宮よりも迷宮、名をもってそれを表すことすらはばかられるような〝無限ノーター歩廊ミナス〟で迷い、迷いながらも進んだ果てに、とうとう〝終わりオーバーの果てエンド〟まで行きついたのだった。そう。たしかに探索者explorerたちは深しん淵えんの暗くら闇やみに一筋の光明を見いだしたのだが、果たしてその道を彼女らがたどること能あたうだろうか？　道のりを知っていたとしても、踏とう破は可能だろうか？

　否ノー。その否ノーに対して、否ノー。不可能ではないが、リスクが大きい。幾万の犠ぎ牲せいを払はらってもなお勇ゆう往おう邁まい進しんした探索者explorerたちと彼女らを同一視はできない。探索者explorerたちは使い捨てだ。ただ〝世界のワールド終わりエンド〟の〝終わりオーバーの果てエンド〟を目指すためだけに生みだされたものたちだ。彼女らとは異なる。彼女らには目的がある。〝終わりオーバーの果てエンド〟への到とう達たつはその過程でし

かないのだ。〝終わりオーバーの果てエンド〟には最短経路で到着しなければならない。探索者explorerたちのおかげで〝終わりオーバーの果てエンド〟の場所は、座標は特定することができた。彼女らは〝無限ノーター歩廊ミナス〟で時間と労力を費ついやす愚ぐを犯おかさない。帝王が弄ろうする策略には乗らない。彼女らは寄り道をしない。回り道を選ばない。近道をする。〝無限ノーター歩廊ミナス〟を通らず〝終わりオーバーの果てエンド〟へと直接向かう。九頭竜型超弩級飛行戦艦マキシマムＡＭドラゴン〝ナ・イン〟はそのために不可欠な突入兵器なのだ。このためだけに九頭竜ナ・インは砲ガン金色メタルの機械マシンとして蘇ったのだ。

「いよいよ……ですね」ジュジは唾つばを飲みこんだ。「──ついにこのときが、待ちに待った瞬間が訪おとずれようとしているんだ。姉さん。ぼくたちはここまでやってきたんですよ」

「あたしにとってはどうでもいいことだ」りりぃは右腕の先から少しだけブレードをのばした。「ここがどこだろうと、今がいつだろうと、敵すべき敵がいればそれでいい」

「いますよ、姉さん。心配しなくていい。敵は、あそこに──」ジュジは顎あごをしゃくって〝終わりオーバーの果てエンド〟を示した。「ちゃんといます。ぼくらを、姉さんを待ってますよ」

「これよりィィ……最フア終イにや突ルス入トライ段クフ階エーズに移行する……っ！」グッダーが入力コント装置ローラーをコンソールの所定の位置に収納すると、代わりに操そう縦じゅう桿かんがせりあがってきた。グッダーはそれを小さな両手で握にぎりしめた。「ストライク・モードに変形するのだ、にゃ・イン……っ！」

　ナ・インはさらに艦首を下げる。九本の竜首がうねうねと動く。竜頭の上にいた魔術士たちが飛びたつのが見えた。竜首は互たがいに巻きついて絡からみあう。八肢しが、羽が折り畳たたまれる。九首はもはや九首ではない。よじりあわせたように一本になろうとしている。その先端は鋭するどく尖っている。首だけではない。ナ・インの身体からだ全体だ。凹おう凸とつが少なくなって流線型に近づいている。さながら楔くさびだ。ナ・インは全長一㎞を超こえる楔と化そうとしている。

　──しっちゃかめっちゃかのてんやわんやで、やっと落ちついたと思ったらまたゴーンときてグガーンドゴーンズワシャーンとなって、やばくない？　ねえこれやばいよね？　よくわからないけど間ま違ちがいなくやばいってば──なんてゆっくりパニクっている暇ひまもなく今度は広間の照明がーいつ斉せいに落ちて、それからバッ、バババッ、ババババババババッと壁かべや床ゆかに黄色く光る矢印が表示された。何なんだよこれ。そっちに進めってこと……？

　ナ・インがいったん不時着的に着地した際に入りこんできた悪魔たちはあらかた始末した──んじゃないかと思う。負傷者の手当ても終わった。死んでしまった者は生き返らないので、広間に隣りん接せつしている空き部屋に安置した。昼ラン飯チタ時イムの被害がけっこう大きくて、とても整理なんかつくはずもない気持ちを無理やり強ごう引いんに落ちつかせ、これからどうなるのかな、みたいな考えが頭をよぎりはじめた途と端たんにこれだ。どうなるもこうなるもない。どうにかしないといけない。というか、こうなったら基本的に二つに一つだ。矢印の方向に行くか。広間にとどまるか。マリアローズはトマトクンを捜さがした。照明が落ちて矢印の光だけになってしまったので、わりと暗い。「──トマト！」「うむ。気に入らんが、ここは従うしかなさそうだな」「行くなら行くで、急いだほうがいいっぽいよね」「ああ。そうするか。──ヨハン！　俺たちが先行する！　ついてこい！」「承知した！」「よし。隊列はマリアが適当に決めろ。行くぞ！」「……じゃあ、トマトとサフィニアが先頭、ピンプ、ハニーメリー、僕、髭ひげ、ロム・フォウとアルファ、きゅー、ユリカと飛燕の順で！」「魚うおぉぉぉい！　わしが入っとらへんやないかっ！」「あれ。いたんだ。てゆうか、いいの？　クルチバとーいつ緒しよにいなくて」「わしはアーニャちゃんを信じとるさかい！　ちゅうかあれやな、わしらの運命を信じとるわけやな！」と、胸を張ってそんなことを言う半魚人のお気楽ぶりに呆あきれながらも、ちょっとだけうらやましかった。──ちょっとだけ、だよ？

「だったら、カタリはユリカたちの前あたりについて！　ユリカの邪じや魔まにだけはならないように！」マリアローズは昼ラン飯チタ時イムの連中が集まっているあたりに視線を投げた。暗いし、人がたくさんいて、あいつの姿は見えなかった。きみは、さ。仲間と一緒にいたほうがいいんだよ。やっぱりね。離はなれると、ろくな

ことがないだろ。そういうものなんだよ。絶対、後こう悔かいすることになるんだから。「……後悔してほしくないんだよ」呟つぶやきながら、マリアローズはトマトクンとサフィニア、ピンパーネルとハニーメリーを追いかけた。矢印に沿う形で広間を出て、すぐに気づいた。「通路が、変わってる……？」この通路は探索に出たときに通った。だからどっちの方向にどれだけのびているとか、どう折れているとか、おおまかにではあるが覚えている。違う。あまりにも違いすぎる。なんか、通路全体が振しん動どうしてるし。ゴゴゴゴゴゴ……ゴゴゴゴゴ……ゴゴゴゴゴゴゴゴ……みたいな感じで、低い音が鳴り響ひびいてもいる。そのうちマリアローズは決定的な場面をまのあたりにした。突然、通路の行く手に壁が降りてきてふさがれ、左側の壁が開いて道ができたのだ。行く手の壁には左方向を示す矢印が表示されている。トマトクンは迷わず左に進んで、マリアローズたちも追いかけたが──なんだか気持ち悪い。マリアローズたちはいったいどこに連れていかれようとしているのだろう。誘ゆう導どうしているのはやっぱりキング・グッダーなのか。いいように操あやつられているのか。むかついても、結局は逆らえない。なんてやり口だ。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

矢印。

マリアローズたちは矢印を追って、あるいは追われて走る。誰だれも口を開かない。カタリでさえ無む駄だ口ぐちをたたかないなんて、ＺＯＯらしくない。

マリアローズは何か言おうとした。言葉が声にならない。

モリーとリーチェは大丈夫かな。まあもちろん、大丈夫だろうけど。

みんなでゆっくりしたいな。そんな場違いなことを考えた。現実逃とう避ひだ。いつかゆっくりできる日がくるなんて楽観できる要素は一つもない。こんな日々もいつかは終わるなんてとても思えない。

だったら、なぜ進まないといけないのだろう。

まだこの場に立っているのは、石にかじりついてでも生き抜こうとしてきた者たちばかりだ。そこまでする価値があるのかな？　その意味は？　なんでこんなに苦しまないといけないのかな。

大切なものをたくさん失って、どんどんなくして、身を切られるような痛みを味わって、ときには身を切られるようなどころか本当に身を切られて、痛くて、つらくて、悲しくて、せつなくて、にっちもさっちもいかなくて、それでも明あ日すに向かって歩いてゆく。

どうしてなのかな。もうやめちゃえばよくない？　自分一人だったら、ね。とっくにそうしている。でも、違うから。

みんながいる。

毎分、毎秒、繰くりかえし繰りかえし、その事実に励はげまされる。

僕、同じことばっかり考えてるよ。ありがとう。みんながいてくれて、ものすごく助かってる。ありがとう、みんな。とてもとても、ありがとう。どうかみんな、いなくなったりしないで。僕のそばから消えちゃわないで。お願いだから、そばにいて。

クルルが外がい套とうの中から顔を出して、くるるくるると喉のどを鳴らしながらマリアローズの頬ほおに鼻はな面づらをこすりつけた。マリアローズは脚あしを緩ゆるめることなく炒いり豆をとりだして、クルルに与あたえた。

「……どこかに、出ます……！」とサフィニアが言った。

どうやらもう右にも左にも曲がらなくていいらしい。壁や天てん井じよう、床に表示されている矢印は正面方向だけを示している。その先の壁が━暗いのでわからなかったが、扉とびらだったのかもしれない、シュンッと音を立てて開いた。

外、なのか。

トマトクンが、サフィニアが、ピンパーネルが、ハニーメリーが、通路を出てその場所に駆かけこんだ。マリアローズもハニーメリーにつづいた。入ってすぐ、足が勝手に止まった。「━ここは……」

外、だ。

まるで、外。

でも、外なわけがない。あたりまえだ。ナ・インは飛んでいる。ここが外だったら、落ちてしまう。なんで落ちないのか。わりと怖こわい。

だって、前後左右だけじゃない、上も、そして下も、どこを見ても外なのだ。

マリアローズたちは空の上にいる。

それなのに、足はちゃんと床を踏ふみしめている。

硬かたい、しっかりとした感かん触しよくがある。

「へえ……」ハニーメリーが床を踵かかとで蹴けって、首をひねっ

た。「これって、外の景色を映してるのかな？」

「映してル……」ピンパーネルは腑ふに落ちない様子だ。

　トワニングが「ぬう……」と唸うなった。

「すごい眺ながめだね」ロム・フォウは素す直なおに感心しているみたいだ。アルファは警けい戒かいしておっかない声を出しているし、きゅーも「……くう」と足をすくませている。

「魚っほぉぉーっ！」半魚人はお気楽だ。喜ぶというか、はしゃいでいる。「なんやねんコレッ！　ほんまかいな!?　どないなってんねん！」

　そして、馬鹿丸出しの馬鹿が、もう一人。「すっげェーッ！　すっげェーなォいコレ、ユリィ！　すっげェーなァ！　すごくね!?　すっげェーよなァッ!?」

「しょ、しょうね……」ユリカは馬鹿もとい飛燕にしがみついている。無理もない。

「……なんか、変だし」マリアローズはもう一度あたりを見まわした。

　外の景色が映っている。

　ハニーメリーの推測が正しければ、そういうことなのだろう。前面に大写しになっているのは黒々とした━建造物？　なのか？　でかい。五ご芒ぼう星せい。星の形をしている。建物なので当然、地面に建っている。つまり、前方が地表で、後方は紫色の空だ。

　であれば、ナ・インは下を向いている、ということになる。そのはずなのに、マリアローズたちは普ふ通つうに直立しているのだ。

　これっておかしくない？

　ナ・インが真下を向いていたら、マリアローズたちが足をつけている床は垂直になっているはずだ。当然、立っていられるわけがない。前に向かって落ちてしまうはずだ。ところが、とくに踏んばったりすることもなく余よ裕ゆうで立っている。そうとう奇き妙みようだ。

「──てゆうか……」

　それだけじゃない。上だ。



　見上げると、円形の台みたいなものがゆったりと回転しながら浮
ういている。まあ浮いているように見えるだけで、本当は吊つりさ

げられているのかもしれないが、その台はマリアローズたちのちょうど頭上にあって、下から仰あおぎ見ることしかできないから、それが何かはわからない。いったい何なのか。いやな感じしかしない。

「ふむ……」トマトクンが前のほうに進みでてゆく。台の下から出れば、もうちょっと様子がわかるだろう。マリアローズたちもおそるおそるそっちへ行った。「……うわ」

　案の定といえば案の定だ。台は━正直、よくわからない。どうも椅い子すと机がずらっと並んでいて、そこに人が座っているようだ。頭を覆おおうヘルメットを被かぶっているし、腕が二本じゃなくて四本あるように見えるので、人なのかという感じもなきにしもあらずだが。

　彼らはいい。いいのか悪いのか判断がつかないが、とりあえずはいいということにしておけなくもない。

　それより問題は、台の上にやっぱり浮いているかのような座席だ。

　一番高いところにある中央の大きな座席を囲むようにして、六つの座席が配置されているから、ぜんぶで七つ。そのうち三つが空席だ。

「━りりぃ。ジュジ。ヴィシュクラトー」とトマトクンが低い声で言った。りりぃ。

　りりぃがいる。

　それから、髪かみを白しろ黒くろ斑まだらに染めわけて、白黒ストライプのスーツを身につけ、片眼鏡モノクルをかけて灰色の猫ねこを肩かたの上で遊ばせている男、ジュジ。

　そして、とても人間とは思えない、真しん珠じゆ色の肌はだと髪を持つ、一糸まとわぬ女。ヴィシュクラトー？　あれが？　ヴィシュクラトーって人じん竜りゆう━竜なんじゃないの？　人竜というくらいだから、人間っぽい姿に変わることもできるのか。

「……あれ？　でも━」マリアローズは眉まゆをひそめた。

　りりぃ。ジュジ。ヴィシュクラトー。で、やつは？　いなくな

い？　いないよね？

　いない。あれは違ちがうだろう。というか、違うし。

「きよったかァ……」と、それがえらく生意気な口調で言った。

　それが一人前の口をきいてみせたのがまず衝しよう撃げきだった。いやでも、あの大きさだと三歳か四歳くらいかな？　だったら、しゃべるくらいできるか。そうはいっても、どこからどう見たってそれは子供だ。

　というか、幼児だ。

　着ている服はまったくサイズがあっていなくて、ぶっかぶかだし。顔がつるんっとしてるし。頭の上にちょぼちょぼっと金色の髪が生えていて、幼児のくせに目こそ据すわっているが、なかなか整っていて、愛らしい顔だちだ。

「くくくくくっ」と、幼児は幼児なのに、やけに邪じや悪あくな笑い方をした。「にゃ・インは間もにゃく〝世界のワールド終わりエンド〟に突とつ入にゅうする。ディオロット。うぬの出番だ。もはや逃のがれられぬことはわかっておろう。せいぜい余のために働くがいい」

「──や、ちょっと。え？　待って？」マリアローズは何か答えようとしたトマトクンをさえぎった。「……え？　誰、その子？　や、なんとなぁーくこうなのかなあ的な想像っていうか予想っていうか、そういうのはあるんだけど……確信持てないっていうか……」

「ああ。あれか」トマトクンは片眉を上げて視線で幼児を示した。「あれはグッダーだ」

「なんやてーッ!?」と魚目玉を飛びださせたカタリだけじゃなくて、みんなそれぞれ驚おどろいている。そりゃびっくりするって。そうじゃないかとは思ってたけどさ。服があれだし。キング・グッダーが着てたのと同じっぽく見えたし。着てたっていうか今も着てるってことになるわけだけど。なんでこんなにちっちゃくなっちゃうかな？　かわいいし……。

「ヌオオオオオオオオオオオオオオッ!?　ここここここここれはァァ……ッ!?」馬鹿陛下のやかましい馬鹿大声が響ひびき渡わたった。マリアローズたちにつづいて、新生太陽王国やら秩ちつ序

じよの番人やらアサイラム関係者やら昼ラン飯チタ時イムやらの人々も、この部屋とも呼べないような空間に続々となだれこんできている。どんどん人が入ってきても手て狭ぜまにならないので、ここはそうとうな広さがあるようだ。

「聞けいっ！　取るに足らぬカスどもよ……っ！」チビグッダーの声は威い厳げんもへったくれもなくて愛らしい。四歳児のそれなのに傲ごう岸がん不ふ遜そんだから、かえって癪しやくに障さわる。「余の格別のにゃさけと計らいによって、うぬらをこのにゃ・イン艦かん橋きようへと招き入れてつかわしてやった……っ！　終生感謝し、これまでどおり、最後まで余の掌てのひらの上で踊おどれい……っ！」

「……何だ、あの子供は」とか「はあ……？」とか「おい……」とか「嘘うそだろ」とか「まさか……いや……」といった囁ささやき声が方々であがっている。チビグッダーは脚をバタバタさせた。「──ぬぇぇぇぇぇぇぇぇぇい、頭の悪すぎるクズの中のクズどもめ！　余はキング・グッダーである……！　うぬらの王であるぞ……！　見てわからんのか……っ！」

「わかるわけないでしょ……」ざわめきの中で思わず呟つぶやいたマリアローズをチビグッダーがキッとねめつけた。見た目四歳児のわりには迫はく力りよくがあるものの、正直なところ以前の威い圧あつ感かんと比べたら屁へでもない。マリアローズがそれがどうしたとばかりに睨にらみ返すと、チビグッダーはふんぞり返って、ふんっ、と鼻を鳴らした。「──まあ、よかろう。苦しゅうにゃい。余が寛ひろい心をもって許してつかわす。余はすこぶる気分がよいのだ。実際、スキップしたいくらいだ。にゃにせ、余の悲願が完かん遂すいされようとしておるのだからにゃ」

「にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃうるせぇな」あれは昼ラン飯チタ時イムのダリエロか。ダリエロは床ゆかにぺっと唾つばを吐はいた。「てめぇは猫かよ。猫ならかわいらしく鳴いてみやがれ」

「にゃあ」チビグッダーの両眼からピンク色の光線が発射されて──ダリエロの鼻先で静止した。「よいか、下げ郎ろうめ。一度しか言わぬから、覚えておけ。言葉に気をつけるのだ。うぬらは余の厚こう情じようによって生きにゃがらえておるのだということを、ゆめゆめ忘れるにゃ。うぬらの生せい殺さつ与よ奪だつは、すべてこの余が握にぎっておる。うぬらが生きるも死ぬも、余の心持ち次し第

だいにゃのだ。それがわかったら余に屈くつ服ぷくし、服従せよ。誠心誠意、余に尽つくせ。余のご機き嫌げんをとるのだ。さあ、にゃあと鳴いてみせよ。かわいらしく、猫のようににゃ」

「……誰だれが！」チビグッダーに屈服するどころか、挑いどみかかるようにピンク色の光線に突つっこもうとしたダリエロを、アジアンが素早く突き飛ばした。「──っ！　てめぇ、アジアン！　余計な真ま似ねを……！」

「キング・グッダー」アジアンはダリエロを無視してチビグッダーを見すえている。ピンク色の光線は、今にもアジアンの額に突き刺ささりそうだ。「ボクは──ボクらはキミの臣下じゃない。これから臣下になるつもりもない。ボクらがキミの前で膝ひざを折ることは未来永えい劫ごうないし、キミのご機嫌とりもしない。そんなことをする必要がない。まだ子供だからあやしてほしいというのなら、話は別だけどネ。それくらいはしてやってもいいヨ。キミがじゃれついてきたら相手をしてやろう。格別の計らいと厚情にもとづいて、ネ。もし不満なら、ボクを従わせてみたらどうかな。腕ずくで。できるものなら、ネ」

「ふっ……」チビグッダーは肩をすくめてみせた。途と端たんに光線が消えた。「まあよかろう。実際のところ、うぬを屈服させる必要にゃどにゃいのだしにゃ。吠ほえておるがよいわ」

「グッダー」ジュジが両手を広げた。「つまらない余興はそのへんにしておいたらどうですか。準備は万ばん端たん。そろそろ頃ころ合あいです。パーティだ！　パーティを始めましょう！」

「パーティ……」マリアローズは通路への出入口を見た。ヨハン・サンライズと幼子を抱だいた琺瑠フオールがその前で何か話している。おそらく全員がこの空間へ避ひ難なんし終えたかどうか確かく認にんしているのだろう。避難。避難？　どうもしっくりこない言葉だ。果たして避難したことになるのか。

　──と、いきなり出入口が閉まった。とっさに、しまった閉じこめられた、とマリアローズは思った。同じように感じた者は多かったようで、大勢が出入口のほうを見て息をのんだり「おい……」と呟いたりした。パーティ。

　パーティって何なんだよ。パーティって。

　マリアローズはベアトリーチェとモリーを捜さがした。なんだかもう不安で不安でしょうがない。ベアトリーチェは傍かたわらに際きわだって身体からだの大きなＳＩＸがいるせいですぐに見つけられたが、モリーはどこにいるのやらわからなかった。

　アジアンがこっちに顔を向けている。マリアローズは慌あわてててうつむいた。

　感じ悪かったかな、今の。いいんだけど。べつに。感じ悪いとか、思われても。

　どうだっていい。知ったこっちゃないんだよ。でもなんとなく、ちょっとだけ気になって、顔を上げようとしたら──ついにパーティが始まった。

「心配せずともよい、カスどもよ。ストライク・モード時、艦橋は守られておるからにゃ。衝撃は最小限に抑おさえられる──はずだ」チビグッダーが何か手を動かした。
「レェェェェェェェェェェェェェェェェェェーッツ・パーティ。目標〝終わりオーバーの果てエンド〟ォォォォォォ！　突入せよ、にゃ・イィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィーン……！」

「え……」マリアローズは、かくっ、と膝から力が抜ぬけるような感覚に襲おそわれた。あくまで抜けるような、だ。抜けてはいない。マリアローズの膝はしっかりしている。

　黒い星型の建物が近づいてくる──じゃなくて、もしかしてこっちが、ナ・インが星型の建物に接近しているのか。

　大きくなる。

　建物が、ぐんぐんと。

「ぶぶぶッ、ぶつかってしまうんではなかろうかァァァ……イッ!?」と馬鹿陛下がなぜか旗を振ふりながら叫さけんだ。馬鹿陛下だけに馬鹿な懸け念ねんだとは言えない。どこからどう見てもそうなりそうな情勢だった。そうならない理由はどこにもなさそうだった。だったのだ。

　だしぬけに、そうならない理由ができた。

「っ……」マリアローズは目を瞠みはって、ぽかんと口を開けた。

「にゃああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ……!?」とチビグッダーが猫みたいに鳴いて、ジュジが「あはははははははっ」と頭がおかしくなったかのように笑いだした。

「動い、て……!?」とサフィニアが言った。トマトクンが「むう」と唸うなった。

　たしかに、動いている。

　黒い建物が。

　動く──っていうか、や、動いてるんだけど、なんていうか──起きあがろうとしている、みたいな……？

　みたいな、じゃない。

　たぶん、起きあがろうとしている。や、たぶんじゃないって。

「それるぞ、このままでは」とりりぃが落ちつきはらった、冷たいとさえ言ってもいいような声こわ音ねで言った。「──わかっておるわぁ……っ！」チビグッダーが跳はねるように身体を動かすと、ナ・インの針路が変わった──ような気がする。ナ・インはおそらく直上から黒い建物のど真ん中に突っこもうとしていた。チビグッダーの操作によって、ナ・インは艦首を持ちあげて黒い建物から遠ざかろうとしている。

　でも、黒い建物が追いかけてくる。

　起きあがって。

　だけど起きあがる？　建物が？

　まあ、建物じゃないのかもしれないけど。

　とはいえ、おっきいし。

　めちゃくちゃでっかいし。

　ナ・インだってめちゃくちゃ大きいのに、明らかにそれ以上というか、きっと比ひ較かくにならないほど大きい物体が、起きあが

る……？

　そんな、むちゃくちゃな。

「たいしたパーティだ」とトマトクンが吐き捨てるように言った。まったくだよ。同感だけど、そんな冷静に皮肉とか飛ばしてる場合じゃなくない？

　どんな仕組みになっているのか、ナ・インが急旋せん回かいしようと急上昇しようと、艦橋こにいるかぎりは目を回したりあっちこっちに振りまわされたりしなくてすむようだ。それはそれとして、黒い物体は今や完全に起きあがっている。大地の上に立っている。あんなふうに立ってしまうと、あれだよね。五芒星って、人の形に見えなくもないよね。尖とがってるところが頭と両腕と両りよう脚あしみたいな。なんてのんきなことを言っている場合でも当然ない。

　さっき閉じた出入口が、開いたのではない。メリメリギュリギュリメキメキビュキビュキメキリメキリやばい音を立てて、強ごう引いんにこじ開けられた。

「やあ」と、人間の少年にも少女にも見える一人の悪あく魔まがそこから入りこんできた。

　黒々とにじむ瞳ひとみ。漆しつ黒こくの髪かみ。あからさまに異様なのに、ともするとその異様さを見み逃のがしてしまう。でも、目をとめて凝こらせば、戦せん慄りつせずにはいられない。

　穢けがれている。どこまでも際限なく。やつは汚お穢わいそのものだ。

　ジュジが座席から身を乗りだしてその名を呼んだ。「──アーマン……！」

　アーマンは唇くちびるを弓形にゆがめた。「見つけた」

「それはこちらの台詞せりふだ」りりぃ。りりぃだ。りりぃが座席から飛び離はなれて、アーマンの前に降りたった。「──わざわざ捜しに行く手間が省けた。悪グラ魔ンヴ大エリ公オンアーマン。貴様とは戦ってみたかったのでな」

「腐ふ魚うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉう……ッ!?」半魚人が奇き声せ

いを発した。「剣けん聖せいと悪グラ魔ンヴ大エリ公オンのバトルがミラクルスタートしてまうド展開っちゅうことは見所満まん載さいすぎやん!?　そないなことゆうとるバヤイやなさそうやけども……!?」「つゥーかオレもバトりてェーッ！」飛燕がアホなことをぬかしている。だったら好きにすればいいんじゃないのとマリアローズとしては思わないでもないが、二人のバトルはもうミラクルスタートしてしまった。

　りりぃが左右の腕から湾わん曲きよくしたブレードを出してアーマンに斬きりかかる。アーマンはよけない。斬られると、その部分がブワァッとぶれる。それだけだ。もとに戻もどってしまう。

「無む駄だなことをする」

「そうかな」

　りりぃの全身から、正確に言えば彼女の全身を覆おおっている紅くれないの装そう甲こうの隙すき間まから、輝かがやきの粒りゆう子しが放たれる。

　りりぃの身体が、りりぃのブレードが、光をまとった。

「忠告してやる。よけたほうがいい」

　りりぃの斬ざん撃げきが見えるかといったら、マリアローズごときの目ではまったくとらえられない。ただ、ブレードが通ったあとに光の線が残る。幾いく十、幾百、幾千、幾万の軌き跡せきがくっきりと。アーマンは斬り刻まれた。細切れにされたアーマンはそれぞれが黒い淀よどみと化して、りりぃから離れてゆく。

　りりぃは追う。「──つまらないぞ、アーマン。もう少しあたしを楽しませろ」

「グッダー……！」ジュジが叫ぶと、チビグッダーが即そく座ざに「わめくにゃ！」と怒ど鳴なり返した。「わかっておると言っておろうが……っ！　起きあがったから、いったいにゃんだというのだ！　所しよ詮せん、虚こ仮け威おどしにすぎぬわ！　突とつ入にゆうせよ！　にゃ・イィィィーン……！」

　虚仮威し。本当にそうなのか。マリアローズにはわからない。なんかだいぶやばそうではあるけど。とはいえ、チビグッダーを制止するすべはさすがにない。ナ・インは宙返りするようにして、直立

している黒い建物――〝世界のワールド終わりエンド〟に向かってゆく。りりぃに追いかけまわされて、アーマンは逃にげつづけている。めちゃくちゃだ。叫びだしたい。やめてほしい。せめてどれか一つにしぼってよ。ナ・インはすさまじい速度で曲芸めいた飛び方をしているらしいのに、そんなふうに体感できないので、変に余よ裕ゆうがある。おかげであれこれ考えてしまうから始末が悪い。
「トマト……！」マリアローズは意味もなく園長マスターに声をかけた。意味がないってわけでもないんだけど。安心したかったっていうか。

　トマトクンはじっと前を見ている。

〝世界のワールド終わりエンド〟が近づいてくる。

　ナ・インは〝世界のワールド終わりエンド〟のど真ん中を目指しているようだ。

　ああなんかもう見ていられない。見たくない。マリアローズは目をつぶろうとする。できなかった。見ているのも恐おそろしいが、見ないのもそれはそれで怖こわい。怖すぎるってば。どうすればいいんだよ。どうにもできないわけだけど。

　ただその瞬間を待っているしかない。

　いっそのこと、早くすんでしまえばいいのに。

　こういうときにかぎって、時間がやけにゆっくり流れる。嫌いや味みなくらい。

　心臓が破は裂れつしそうだ。

　息ができない。

　くる。

〝世界のワールド終わりエンド〟が。

　きちゃう。

　きてるのに。

　まだか。

　まだみたいだ。

　まだなのか。

「Ｈｉ□Ｈｙａａｈｈ」と誰だれかが奇き矯きような笑い声をあげた。誰かっていうか。ＳＩＸだ。

「嘘うそ……」マリアローズはまばたきをしようとしたが、瞼まぶたが動いてくれなかった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」だの「ひゃあああああああああああああああああ」だの「ぎゃああああああああああああああああああああああああ」だの「ぬああああああああああああああああああああああああああ」だの「きえええええええええええええええええええええええええ」だのといった叫び声がこだまする。そりゃ叫びたくもなるって。

〝世界のワールド終わりエンド〟だ。

　腕を振ろうとしている。

　てゆうか、振れるの？　その図ずう体たいで？　マジで？　無理でしょ？　無理しないほうがよくない？

　まあ起きあがったくらいだから、腕を振るくらいできるのかもしれないけど。そもそも腕なのかっていう問題もあるんだけど。腕を振ったりして、いったいどうするつもりなわけ？　ちなみに、向かって左の腕なので右腕だ。どうでもいいか。右腕だろうと左腕だろうと、どっちだっていい。

〝世界のワールド終わりエンド〟の腕が押しよせる。

　まずいって。

　叩たたき落とすつもりだ。

〝世界のワールド終わりエンド〟が、ナ・インを。

「にゃひゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ！」

　チビグッダーが馬鹿笑いしている。何、笑ってるんだよ。切羽詰つまって頭がイッちゃったとか……？

　いや。

　かわすのか。

　ナ・インは身をよじるようにして〝世界のワールド終わりエンド〟の腕をよけようとしている。

　でも間に合うのか。果たして回かい避ひできるのか。

　正直、いけそうな気がこれっぽっちもしない。ダメだとしか思えない。

「っ――――――――――――――――――――――――………………っ！」

　声が出ない。マリアローズはうずくまるようにして頭を抱かかえた。

　腕。

　近い。

　当たる。

　ぶつか――らない……？

　かいくぐった……？

　そう思った直後、身体からだが浮ういた。「――ぉわ……⁉」「ふぬ……ッ！」トワニングがつかまえてくれなかったら、吹ふっ飛んでいたかもしれない。「どうなっ――」後ろだ。ナ・インの羽から背中から後こう肢しまでがごっそり削けずり落とされている。たぶんナ・インは半分ほどしか残っていない。たとえば船が半分になってしまったらどうなるか。「落ちっ……⁉」

「余のにゃ・インがぁっ！　この程度でぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……っ！」チビグッダーの目から、鼻から、口から、耳の穴から、オレンジ色や赤や黄色の光があふれだしている。「落ちるものかぁぁぁぁぁぁっ！　これが最後の奉ほう公こうだ、にゃ・イン！　ぶちかま

せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ
い……っ！」「ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃいいいいぃぃぃぃぃぃ
いぃぃぃいいいぃぃぃぃぃぃいぃぃぃぃぃぃぃいいいいぃぃぃぃい
いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ……！」なんかひどい声を出しちゃってるなあという自覚はなくもない、いや嘘だ、あるわけがない、それどころじゃない。「オオオオオオオオオオオオオ
オォォォォォォォォォォォオオオオオ
オォォォォォォォォォォォォォォォォォォォオオオオオオオオオ
オォォォォォォォォォ……！」とトワニングがわめいている。黒い。前も右も左も上も下も。黒い。黒いよ。黒い。真っ黒だ。どこもかしこも。

〝世界のワールド終わりエンド〟。

　終わる。

　世界が。

　その瞬間、頭ず蓋がいの中で脳がひっくり返って、内臓ぜんぶが裏返った。誇こ張ちよう抜ぬきで、マリアローズはそう感じた。

　それなのに、どうも自分は生きているらしい。

　助かった、とは思わなかった。変なの。それが実感だった。

　見たところ、どうやらナ・インは、というか九首をよりあわせて錐きり状になったナ・インの艦かん首しゆが、〝世界のワールド終わりエンド〟にぶっ刺さっているようだ。

　これが突入？

　いいの、こんなので……？

　マリアローズはトワニングにしがみついていた。過去最大級のしがみつき方だ。

「……ご、ごめん、髭ひげ」

「いや……」

「てゆうか……ありがと」

　軽く礼を言ってトワニングから離れ、マリアローズはチビグッダーを見上げた。

「──よくやった、にゃ・イン。血肉燃え尽つき骨とにゃり合金のかたまりとにゃっても、うぬは余に仕えた。偉えらいぞ。褒ほめてつかわす」チビグッダーは立ちあがった。「これより余らは〝終わりオーバーの果てエンド〟へと向かう！　堕おちた神、貪どん欲よく傲ごう慢まんにゃる地じ獄ごくの帝てい王おうを討ち果たすのだっ！　開けオープン胡麻セサミ……っ！」

「や、余らって……」

　そのらにはマリアローズたち、この場にいるＺＯＯだとか秩ちつ序じよの番人だとか昼ラン飯チタ時イムだとかその他諸もろ々もろの面々もふくまれているのだろうか。勝手にふくめないでほしいのだが、チビグッダーの合図にあわせて前方に四角い穴が現れて、そこに入ってゆけばナ・インの艦首を通って〝世界のワールド終わりエンド〟の内部に到とう達たつできるのだろうことは容易に想像がつく。そっちへ行かないのならここにとどまるしかないが、それも選せん択たく肢しとしてどうなのか。何しろ、ナ・インは〝世界のワールド終わりエンド〟に突つき刺さっている。〝世界のワールド終わりエンド〟は悪あく魔まの本ほん拠きよ地ちっぽくて、本拠地のわりに自ら動いてナ・インを迎げい撃げきするなんていう離はなれ業わざを演じてみせたわけだが、先方としてはこれからもナ・インを排はい除じよしようとするだろう。〝世界のワールド終わりエンド〟に突き刺さっているというナ・インの状態自体、だいぶ不安定だし、いっそのこと中に入ってしまったほうが、という考え方もできる。それに、りりぃとアーマンの追いかけっこはまだつづいているのだ。ここにいれば安全とはとてもじゃないが思えない。

　トマトクンがＺＯＯの仲間たちを見まわした。「行くぞ。どのみちやらざるをえん」

「それって──」どういう意味なのか聞きたいところだけれど、今はまず行動が先だ。マリアローズはサフィニア、ピンパーネル、ハニーメリー、トワニング、ロム・フォウ、一応アルファも、それからきゅー、カタリ、ユリカ、ついでに飛燕とも視線を交かわしてうなずいた。「──行こう……！」

「秩序の番人は非戦せん闘とう員を護衛しつつ、私につづけ……！」ヨハン・サンライズが刀を掲かかげて声を張りあげた。

「──ボクらも行くヨ！」アジアンも動きだした。「ダリエロは、オトミさんを……！」「なんでこの俺がババァのお守もり役なんぞ……！」「ハッ！　あんたなんざ、こっちから願い下げだよ！」「──あたしたちも行きましょう！」モリーの声を聞いて、マリアローズはちょっとだけほっとした。「──いよォォォォォォしッ！　新生太陽王国もゆくぞゥッ！　余の旗を目印にィッ！　なんちてッ！　いやはや私に余なんて似合うわけもなしッ！　私は私のままでゴーなのだァッ！　ワッハハハハハハハー……ッ！」ファニー・フランクたちもくる。ということは全員か。さすがにここまで生き残った者たちは、老いも若きもぐずぐずしない。チビグッダーが、ヴィシュクラトーが、浮きあがるようにして座席から離れた。ジュジは猫ねこを抱だいて飛び降り、「──うぎゃっ」と無様に着地とも言えないような着地の仕方をしたが、それにしては平然と起きあがってしまうあたり、なんとも薄うす気味が悪い。それを見て──あるいは、感じて、と言うべきか、淀よどんだ闇やみとなってりりぃから逃にげまわっていたアーマンがこっちに向かってくる。ゆぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅかぁぁぁぁぁぁぁぁぁせぇぇぇぇぇぇぇぇぬぅぅぅぅぅぅぅぅぞぉぉぉぉぉぉぉぉ……ちぃぃちぃぃぃぃぃぃのぉぉぉぉぉぉぉ……もぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉとぉぉぉぉぉぉぉぉぉへぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇはぁぁぁぁぁぁぁあああぁぁああぁぁぁあぁぁぁぁ……。

「往生際ぎわが悪いやつだ」トマトクンが聖断罪の剣けんを抜ぬいた。波打つ剣身が七色に輝かがやきだす。アーマンにとってあの虹にじみたいな輝きは天敵のようなものだ。淀んだ闇が止まって、退いてゆく。でも、そっちにはりりぃがいる。「──歯は応ごたえがない……！」りりぃが光をまとった双そう腕わんのブレードで淀んだ闇を斬きる。滅めつ多た斬りにする。あの光をまとったブレードでは聖断罪の剣ほどのダメージは与あたえられないようだが、アーマンは明らかに嫌いやがっている。さらに、アーマンがこじ開けた扉とびらから白色の彗すい星せいが飛びこんできた。「お姉さま……！」とサフィニアが叫さけんだ。魔女。閃せん光こうの魔女マチルダだ。マチルダは淀んだ闇に突っこんで、握にぎり潰つぶした。ＨＹＧＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＸＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧＧ……！

　すべてじゃない。淀んだ闇の一部ではあるものの、間ま違ちがいなくマチルダによって消し去られた。「この先にもっと、わたくしを喜ばせてくれるものがあるといいのだけど。そうでなければ幻げ

ん滅めつなのだわ」「──たしかにね」と、マチルダにつづいて踊り羊が扉の向こうから現れた。「せっかくこんなところまでやってきたんだから、どうせならたくさん楽しみたいよね……？」踊り羊が散歩でもしているかのような足どりで、しかし宙を歩いて、しかもかなりの速度で、逃げ惑まどう淀んだ闇に迫せまる。闇は幾いく筋にも分かれて、踊り羊の脇わきをすり抜けようとした。が、踊り羊はさせなかった。踊り羊は突とつ如じよとして分裂した。何人もの踊り羊が出現して、闇をつかまえる──というか、すぅぅぅっと吸いこんでしまった。何人もの踊り羊がにっこり笑い、腹をぽんっと叩く。「ごちそうさま」（……ふむ）今度は超賢者モーグとその弟で子しだか娘のエヴァンジェリンだ。青白い人ひと影かげのようなモーグがエヴァンジェリンの車くるま椅い子すを押している。押す必要なんてまったくなさそうだけど。（悪グラ魔ンヴ大エリ公オンが剣聖と魔女と羊に平らげられたか）（ですが、お師様と私とでなんとでもなりました）（むろんだ、エヴァンジェリン、我が娘よ。我らに不可能はない）「……あはっ！」とジュジが身体を折って笑った。「すごい。すごいや。グッダー、あなたの実験はやっぱり成功したみたいだ。いや、大成功ですよ。あのころだって、彼らほどの魔術士はそういなかったじゃないですか」「あのころというのは魔導王時代のことを指して言っているのかしら」マチルダは白銀の髪かみを左手でかきあげた。「いずれにしても、そろそろ真の目的を打ち明けてもらいたいものなのだわ。ジュジ。グッダー。人じん竜りゆうに、剣聖まで。あなたたちがわたくしに何か隠かくしていることは先刻お見通しなのよ。それは決して許されないことなのだわ」

　マチルダは純白の光を羽のように背負って宙に浮き、チビグッダーを見おろしている。

　何だろう。この空気の張りつめ方は。とてつもない緊張感だ。一触即発。そして本当に爆発してしまったら、ここにいる者たちは皆みな、ただではすまない。おかげで誰だれも、一歩も動けずにいる。あの……行くんじゃなかったの？　とは、とても言いだせない雰ふん囲い気きだ。

「隠してにゃどおらぬ」チビグッダーは、ふんっ、と鼻先で笑った。「余の目的は地獄の帝王を討ち果たし、その野望を永遠に、完全に打ち砕くだくことだ。よかろう。ついでに全員、聞くがよい」そう言うと、チビグッダーはぐるりと皆を見まわした。「──余はキング・グッダー。魔導王キング・グッダーである。余以外にキン

グ・グッダーはおらず、あとにも先にもキング・グッダーは余ただ一人。余は転生の秘法によって幾千年を生き、世界の変へん遷せんをこの目で見てきた。魔術士として真実を、真理を追究してきた。その結果、判明したのだ。地獄は我々人間の世界と対ついをにゃしておる。それは、我々人間の世界が光であるにゃらば、地獄は影かげであるといったような二元論にゃ意味ではにゃい。ある意味、人間の世界と地獄は一つであり、人間の世界と地獄は大いにゃる空間を分けあう形で成立しておるのだ。もし人間の世界と地獄とが均きん衡こうしておれば、互たがいに安定し、にゃんの問題も生じぬ。しかし、地獄の帝王はそれでは飽あき足らぬようだ。地獄が我々人間の世界を侵おかし、領土を削りとり、我が物としようとしていることに我々が気づいたのは、約千年前━余のごとき魔導王たちが相争い、余らが指一本動かすだけで数千、数万が果てる巨きょ大だいな戦いくさを繰くりひろげていたころのこと。あるとき、突然、地獄の蓋が開いたのだ。そして、悪魔どもが地上に攻せめ入ってきた。余らはただちに人間同士の戦をやめ、地獄の軍勢を防ぐために連合軍を結成し、死力を尽くして我々人間の世界を守った。これが第一次大戦だ」

「知らない歴史ね」ベティは眉まゆをひそめた。「オーメネイジ以前の史料は極きよく端たんに少ないから、何かあったんじゃないかとはどの歴史家も推測してるわ。その何かは遊戯ランプ戦争ウオーだろうって説が一番有力で━ようするに、魔導王たちは過激すぎるお遊びに熱中するあまり、自分たちで制せい御ぎよしきれない超大規模な破壊をもたらして、多くの文物、史し跡せきが失われた」

「違ぁーう。そうではにゃい」チビグッダーはベティに視線を向けた。「真実を教えてつかわそう、若き魔術士よ。文物、史跡は失われたのではにゃい。余らの遊戯ランプ戦争ウオーはあくまで節度をわきまえたものであった。余らは倫りん理りにもとづいてルールを制定し、これを固く遵じゆん守しゆし、破った者は制裁を受けた。余らの魔術と技術は、どこまでも洗練されておった」

「いけしゃあしゃあと」トマトクンが唇くちびるを曲げた。「よくもそんなことが言えたもんだ」

「文物、史跡は失われたのではにゃい」チビグッダーはトマトクンには目をくれずに話をつづけた。「余らが百年かけて消し去ったのだ。余がエルデンで地獄の門に蓋ふたをし、きゃつらの侵しん攻こうを食い止めることに成功したが、当然のことにゃがらきゃつらの動向にはにゃお注意を払はらう必要があった。むろん、ふたたび災

さい禍かを繰りかえしてはにゃらぬ。余らの魔術と技術は危あやういものだと考えざるをえにゃかった。当時はまだ原因が正確に判明していたわけではにゃいが、遊戯ランプ戦争ウオーが地獄の侵攻の引き金ににゃったのではにゃいかという推測はすでにされておったのでにゃ。よって、余らはすべてを封ふうじることにしたのだ」

「そして──」マチルダは億兆の星がまたたく冷え冷えとした瞳ひとみでチビグッダーを見すえている。「あなたがたがぜんぶ管理することにしたわけなのね。いいえ。独どく占せんしたのよ」

「必要な措そ置ちだったんですよ」とジュジが肩をすくめて口を挟はさんだ。「ちなみにぼくは魔導王じゃありませんけど──あ、言うまでもないですか？　でもね、ぼくらがつくった技術は、魔術なんか使えなくたって、それどころか分別がつかない子供でも、ボタンを押すだけでドーンと大勢を殺せちゃうような、そういうものもふくんでいたんです。それでも、すべてを絶大な力を持つ魔導王が管理していたから、みだりに街が消し飛ぶようなことはなかった。魔導王たちには実際、節度があったんですよ。現代を生きるあなたたちがそれを納なつ得とくして受け容いれられるかどうかは別として、彼らなりの節度が、ね。ところが、大戦で魔導王はだいたい死んでしまった。おおかたの国は滅ほろんで、世界の大半が無秩序に近い混こん沌とんとした状態になった。そこに偉い大だいな技術や魔術の知識だけが残されたら、どうなると思います？　人々は必ずそれらを利用しますよ。自分たちの──自分のために、ね。欲ほつする者は手に入れるため、奪うばうために。支配を求める者は、支配するために。身を守ろうとする者ですら、いつしか防衛のために侵しん略りやくするようになるでしょう。べつにこれは皮肉じゃありませんよ。人っていうのはそういうものなんです。ただの平明な事実ですよ。ぼくらは技術を、魔術を、歴史ごと極力封じることにした。そうする以外なかったんです」

「大いに手間をかけて、そなたらの世界を保つために」とヴィシュクラトーが神秘を知らしめるように言った。「我らはそれをそなたらのためにこそ行ったのです、人の子らよ」

　トマトクンが苛いら立だたしげに頭を振ふって、ため息をついた。「……おためごかしはよせ」

「まったくだねえ」ＳＩＸは噴ふきだすように笑った。「お前たちが下々の都合を考えて何かするなんて、冗じよう談だんにしても出来が悪すぎるよ。不出来なだけじゃなくて、質タチが悪い」

「黙だまれ、蝮まむし」チビグッダーの目からピンク色の光線が発せられ、それがＳＩＸの右肩を貫つらぬいた。「──Ｇｕ……！」「ＳＩＸ！」右肩を押さえてしゃがみこんだＳＩＸの背にベアトリーチェが手をあてる。医術式を施ほどこそうとしたのだろうが、ＳＩＸは断った。「……大丈夫だよ。俺は化物さ。あなたの手を煩わずらわさなくても、これくらいすぐに治ってしまう」

「勘かん違ちがいするにゃ」チビグッダーは小さな両腕を広げてみせた。「余らはこの世界全体の行く末を慮おもんぱかり、にゃがい年月をかけてこつこつと環かん境きようを整備し、うぬらをここまで育はぐくんできた。あくまで、世界全体の行く末を考えてのことだ。余らはうぬら個々人の命運にゃどには興味はにゃい。たとえうぬらが無様に死に絶えようとも、世界が正しき方向へと進めばそれでよいのだ。余を冷れい酷こく非情と思わば思え。余は一向に痛つう痒ようを感じぬ。余は数千年の時を生きてきたのだ。うぬらとは物の見方が異にゃる。うぬらとは感情の質が違う。うぬらとは思考の次元が異にゃっておる。うぬらにはわからぬだろう。わかれとも求めぬ」



「言葉足らずですよ、グッダー」ジュジはちょっとだけ慌あわてたように付け足した。「グッダーが言いたいのはね、こういうことです。我々がなしたことは、あるいは大いなる悪のようにあなたたちには思えるかもしれない。あなたたちは非常に大きな犠ぎ牲せいを払うことになったのかもしれないし、この先も何か大事なものを失う羽目になるかもしれない。でもね。しょうがないんです。あなた

たちはきっと割りきれないでしょうが、こうするしかなかった。地じ獄ごくの帝てい王おうとはいつか決着をつけないといけない。なぜなら、我々人間の世界を手中に収めることこそが地獄の帝王の悲願であり、彼は常にその機会を虎こ視し眈たん々たんとうかがっていて、そのときがくれば必ず動き、人間を根絶やしにして、人間の世界をその版図に組みこもうとすることは明白だからです。地獄の軍勢はいずれやってくる。我々は座してそのときを待つのではなく、しっかりと準備が整ったタイミングで、能動的に彼らを誘おびきよせることにした。彼らをあえて地上に招き入れ、戦力が広こう範はん囲いに分散しきったところで、反はん撃げきに転じる。しかも、生半可な反撃じゃありません。乾けん坤こん一いつ擲てきの大だい逆ぎやく襲しゆう！　九頭竜型超弩級飛行戦艦マキシマムＡＭドラゴン〝ナ・イン〟で地獄に逆侵攻をかけ、一気に地獄の中ちゆう枢すうである〝世界のワールド終わりエンド〟を衝つき、その最深部〝終わりオーバーの果てエンド〟にいる帝王を討つ！　あなたたちの活かつ躍やくによって、大ハイ公ヴエ爵リオンもほとんど討ち果たされた。悪グラ魔ンヴ大エリ公オンすらも。帝王さえいなくなれば、地獄の勢力は間違いなく四し分ぶん五ご裂れつします。分裂した悪あく魔またちなんてちっとも怖こわくない。他の異界フリー生物クスたちとの同盟関係だって崩くずれるでしょうしね。我々人間に打つ手はいくらでもある。各個撃破してもいいし、その意思があるものたちとは手を結んだっていい。今、我々人間の世界は地獄をふくめた異界と繫つながっています。その気になれば、どの異界にだって行ける。異界に領土を広げるのもいい。和わ睦ぼくして旅行するのも楽しそうです。異界にはそれぞれ特有の文化がある。交流を持てば、我々の知識は豊かになり、新たな技術も生まれるでしょう。我々はこれまで見られなかったものを目にできる。聞いたこともないような音を聞くことができる。存在すら知らなかったものに手でふれられる。我々の世界は広がります。何倍にも、何十倍にも。そこには発展を超こえた発展がある。ねえ、ぼくはそもそも、異界フリー生物クスと争うなんて馬鹿げたことだと思ってるんですよ。戦う必要なんてない。対話すればいい。どうしても折りがあわないときだけ喧けん嘩かすればいい。喧嘩することで互いを知って仲よくなれるかもしれない。ただし、地獄の帝王だけは別です。残念ながら。彼とだけは決して相容れない。彼は人間との共存を望んでいない。彼だけは討たねばならない。彼だけは滅ぼさないと、ぼくらは未来を築けない。ぼくらはまずそれをやることにしたんですよ。いつかじゃなくて、今やるんだ。面めん倒どうな課題は早く片づけて、さっさと次の段階に進みましょうってことです。あなたたちは納得しないかもしれないけど、これはみんなのためなん

だ。我々全員のためです。どうせやるしかないんですよ」

　立て板に水を流すようとはこのことだ。なんて饒じよう舌ぜつな男なのだろう。そして、甘かん言げんとまでは言わないが、その言葉は口当たりがよく、つい耳を傾かたむけてしまう。

　もちろん、反発は感じる。何を言ってるんだ。勝手なことをぬかすな。そんな理り屈くつで説得されるもんか。そう思うのだが、反論を口にしようとしても声がしぼんでしまう。

　それにジュジは、どうせやるしかない、と言った。

　トマトクンも似たようなことを言わなかったか。

　たしか──どのみちやらざるをえん、と。

　つまり、その点についてはトマトクンもジュジたちと意見を同じくしている、ということなのか。もう避さけようがない。もともと避けられなかった。なるべくしてこうなった。だから仕方ないって？　仲間が、顔見知りが、見知らぬ者たちが死んだ。目の前で死んでいった。それはぜんぶ、しょうがなかった？　大事の前の小事だから？　納得しないかもしれないけど、とジュジは言った。あたりまえだ。納得するわけがない。

　マリアローズはトマトクンを見た。

　トマトクンは歯を食いしばってジュジを睨にらみつけている。違う。

　違う。

　──違う。

　トマトは同意なんかしてない。するわけがない。

　あいつらはトマトを利用しようとしてるんだ。トマトの力を。巻きこもうとしている。トマトを巻きこんだんだ。

　あいつらの計画は遠大で、周しゆう到とうで、トマトには止められなかった。始まってしまったから、もうやるしかない。やりきることでしか活路は見いだせない。どのみちやらざるをえん、というのはきっとそういう意味だ。

　僕はトマトを疑わない。

　当然だ。

　信じている。

　結局、やるしかないのかもしれない。何せ、ここまできてしまった。人間の世界をあとにして、敵の根こん拠きょ地まで。こうなったら敵の親玉をとるしかない。まんまと乗せられたわけだ。

　でも、はいはいわかりました、という具合にはいかない。せめて横っ面つらを一発二発ひっぱたいておかないと気がすまない。

　マリアローズは深呼吸をして気合いを入れ、そうしてやろうとしたら機先を制された。もっとも、相手はジュジやチビグッダーではなかった。「──そう。やらざるをえない」

　突とつ然ぜん、耳みみ許もとで声がして、マリアローズは「ひっ……」と横っ跳とびした。

　見ると、毛玉のような三、四サンチ大の闇やみのかたまりがふわふわと浮ういている。

　闇のかたまりは見る間に小さなアーマンとなった。

「おまえたちがそのつもりなら、私たちは全力をもっておまえたちを除くしかない。そうでなくとも、おまえたちを父の許へとたどりつかせるわけにはいかないのだが」

「貴様……！」トマトクンが聖断罪の剣を突つきだすと、小さなアーマンはその剣風を浴びただけで消失した。踊おどり羊がおどけたように「食べ残しちゃったかな」と言った。

　マリアローズは寒気を覚えた。「……あ」

　扉とびらだ。

　アーマンがこじ開け、マチルダたちが入ってきた扉から、昆こん虫ちゆうのような、蠕ぜん虫ちゆうのような、軟なん体たい生物のような、鳥類のような、様々な悪魔どもがなだれこんでくる。

「ちぃっ！　急げ……！　さっさと突入するのだ……っ！」チビ

グッダーが艦かん首しゅ方向の四角い穴を指さした。「──〝終わりオーバーの果てエンド〟へ……！」

「くそ、こんなの……！」

　ジュジたちの思う壺つぼじゃないか。

　だからって、ここにいるのも。行くしかないのか。

　チビグッダー、ジュジ、ヴィシュクラトー、それからりりぃが先行して、マリアローズたちはそのあとにつづいた。四角い穴に入ると、その先は広いとは言いがたいまっすぐな通路だった。天てん井じように、壁かべにも、床ゆかにも表示されている無数の緑色の矢印が、前へ前へと急がせる。後ろのほうで戦せん闘とうが起こっているようだが、くわしいことはわからない。マリアローズのそばにはＺＯＯの仲間たちがいる。でも、それ以外は誰だれがどこにいるのかも把は握あくできない。

　たくさんの足音が鳴り響ひびく。

　息づかいが。

　遠かったのか。あっという間だったのか。

　出口だ。

　えらく狭せまい。出口自体は人一人が通り抜けられるくらいの大きさしかなかった。

　でも、その向こうは広い。果てが見えないほど、広い。

　地面は凸でこ凹ぼこしている。

　暗い。

　真っ暗ではないけど。

　空気が薄うすい。

　さっきまでは緑色に光る矢印があったからまだマシだったが、今はかろうじて隣となりにいるトワニングやピンパーネルの顔が見えるくらいだ。

拍ひよう子し抜ぬけというか、なんというか。

「……ここが〝終わりオーバーの果てエンド〟？」

「やれやれ」ジュジの声だ。「なかなか、何もかも予定どおりとはいかないものですね」

「どういうことだ」と言ったのはヨハンか。

「ぼくらは〝世界のワールド終わりエンド〟を調べ尽つくして、中がどうなっているか知っていました。そのつもりでした。地図なども作ってあったんですけどね。入り組んでいるだけじゃなくて、交こう錯さくしていたりもするので、一いつ般ぱん的な地図とはだいぶ違いますけど。地図どおりなら、ぼくらは今〝終わりオーバーの果てエンド〟にいるはずなんですが──どうもそうじゃなさそうです」

「っ……」と、閃せん光こうの魔女が真っ白い光を撒まき散らしながら振ふり仰あおいだ。「罠わななのだわ」

「……え？」

　罠？

　──って？

　どんな罠……？

　マリアローズには状況が把握できない。でも何かが起こっている。それは間違いない。

「ちい……っ！」チビグッダーが舌打ちをしながら、ピンク色の光線を頭上めがけて放った。ヴィシュクラトーが飛びあがって、なんと一瞬で竜の姿と化し、真しん珠じゆ色の息吹ブレスをやはり直上方向に吐はきだした。「うおおおぉぉぉぉりゃああああぁぁぁぁぁ……！」トマトクンも大カタ懺スト滅ロフ刀アーを解き放ち、聖断罪の剣の七色の光をぶちかました。魔女が、そしてサフィニアが、ベティが、魔術を発動させた。「小こ癪しやくにゃあ……っ！」チビグッダーが怒ど鳴なった。

　マリアローズはただ呆ぼう然ぜんと見上げていることしかできなかった。

魔術やら息吹ブレスやらが光源となって照らしているおかげで、ようやく何が起こっているのかだいたいわかってきた。いや、だいたい、じゃない。

天井だ。

落ちてくる。

天井全体が落下してくる。

チビグッダーたちは落ちてくる天井を打ち砕くだこうとしているのだ。

だけど砕いたって。すっかり消し去りでもしないと、僕たち助からなくない？

『我の下に……！』と、硝子ガラス容器の中で幾いく重えにも反はん響きようしているような、脳をじかに震ふるわせる声がした。ヴィシュクラトーだ。真珠色の竜がマリアローズたちの上に覆おおいかぶさる。その雄ゆう大だいな身体からだを傘かさにして、マリアローズたちを庇かばうつもりなのか。「──って……」

何、これ。

マリアローズは唐とう突とつに腰こしが砕けたような心許なさに襲おそわれた。え……？

もしかして。

「落ち、て……っ⁉」

「ぬううッ⁉」トワニングがこっちに向かって手をのばした。「マリアローズ……ッ！」

ハニーメリーを抱だきしめているピンパーネルが見えた。

サフィニアは上のほうにいる。飛べるから、落下していない。魔女や踊り羊、モーグやエヴァンジェリンも。でもおそらく、他ほかは軒のき並なみ落ちている。トマトクンでさえ。

まるで地面が一枚の薄い板でできていて、それが割れ、バラバラになってしまったかのようだ。ひょっとすると、これは本当にそう

いう罠だったのかもしれない。

　やばいよね、これ。てゆうか、やばいどころじゃないか。一巻の終わりだったりして？

　なんだかもう、たまげる前に呆あつ気けにとられてしまっている。

　死ぬのかな。

「──ぬぇぇぇいっ！　ここで戦力をうしにゃうわけにはいかぬ……っ！」チビグッダーの全身が赤や黄色、オレンジ色に輝かがやいている。猛もう烈れつに。「──ぐっだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！　めがりぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃふと……っ！」

　チビグッダーが赤、黄、オレンジの光を放散した。光がマリアローズを、トワニング、ピンパーネルを、ハニーメリー、ロム・フォウとアルファを、きゅーを、カタリを、ユリカを、トマトクンを、他のみんなを、次々と、というかどんどんくるんでゆく。途と端たんに落下の速度がゆるんだ。依い然ぜんとして落ちている。それは変わらないが、遅おそい。

　マリアローズは泳ぐように手て脚あしを動かしてみた。ダメか。前後左右に移動できるわけではなさそうだ。

　マリアローズたちはゆっくりと、しかし確実に落ちてゆく。

　どこまで落ちるのだろう。マリアローズはこわごわと下を見た。何もない。

　何も。

　暗いからなのか。光が届かないから、見えないだけなのか。それとも。

　わからない。とにかくマリアローズは落ちる。なすすべなく落ちてゆく。

　いつまで？

　どこまで……？

『薔ば薇らのマリア21 . I love you. [rouge] 』につづく

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

薔ば薇らのマリア

20.I love you.[noir]

十じゆう文もん字じ　青あお



平成26年4月1日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　20.I love you.[noir]』

平成26年4月1日初版発行

発行者　山下直久

発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8745（営業）

編集　角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19

03-3238-8694（編集部）

http://www.kadokawa.co.jp/



BOOK☆WALKER